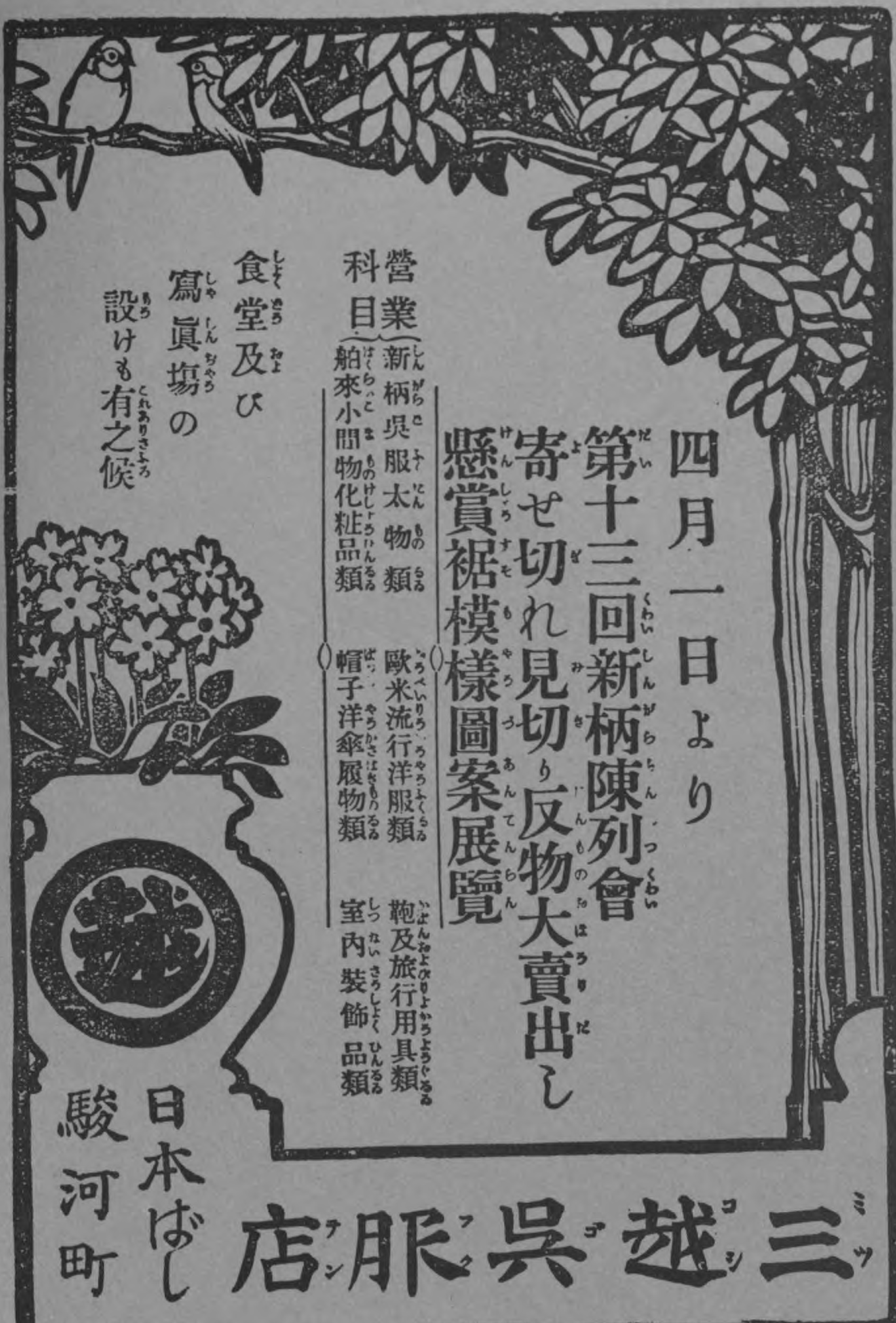
女鑑



第十七年第四號


四月一日より
第十三回新柄陳列會
寄せ切れ見切り反物大賣出し
懸賞裾模樣圖案展覽
營業科目
新柄呉服太物類
舶來小間物化粧品類
歐米流行洋服類
帽子洋傘履物類
鞄及旅行用具類
室内裝飾品類
食堂及び寫眞場の設けも有之候
三越呉服店
日本ばし駿河町

女鑑　第十七年第四號目次

東京高等師範學校教授
文學士松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース
菊版二百頁
定價五拾五錢
郵稅八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次

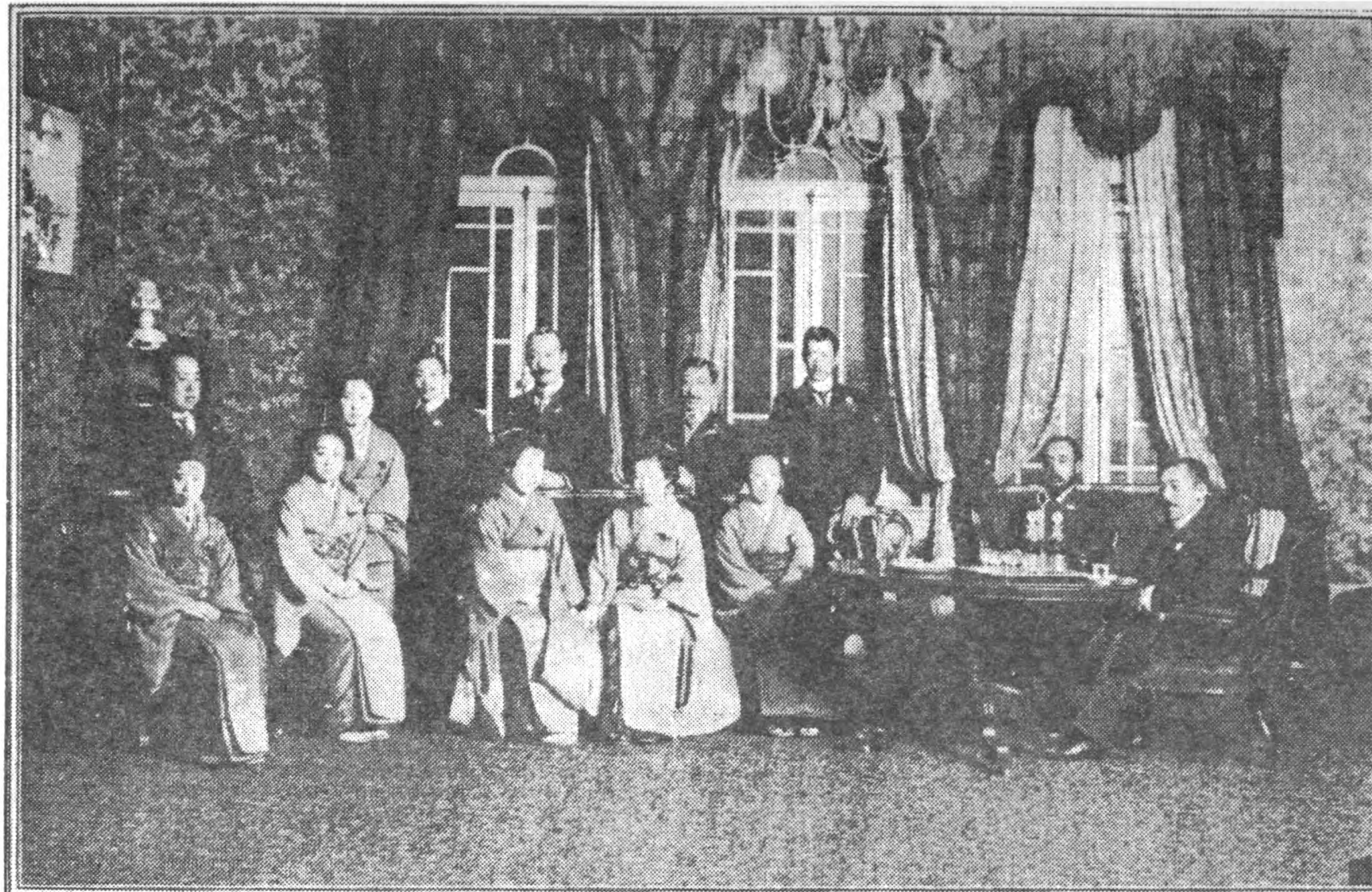
◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戲の價値
◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と言語
◉第十兒童と圖書 ◉第十一青年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社**＝關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**



小林萬吾華

百風倆王



德川伯　溝口伯　德川侯　溝口伯夫人　德川男　溝口伯世嗣夫人　溝口伯世嗣　土屋子夫人　土屋子　德川公夫人　德川伯夫人　德川公　德川男夫人

才媛百佳選





才媛百作選



其の七　日向上院議員令嬢　貞子君

百花爛漫春の如き本月の婦人世界を見よ

妻君必讀

婦人世界

令孃必讀

四月一日發行　毎月一回　二卷第四號　一冊十五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共九十錢　一年分一圓七十五錢

◎口繪◎美麗新案の彩色石版しをり◎米國貴婦人の柔術稽古◎名家令孃寫眞◎名家の新婚寫眞◎東京勸業博覽會眞景恐く本誌獨特の珍品

◎私の感心せる女學生（山脇房子）
◎嚴しく育てたる我が家の子供（泰子）
◎甘やかして育てたる隣の子供（笠峰）
◎憂鬱なる良人を持てる妻の心得べき事
◎茶ばなし（名家の洋行失敗談面白し）
◎小兒痲疹の手當（加藤博士）

◎家庭の重寶（茶ガラの利用、足袋を洗ふ法）
◎名家の結婚年齡と初産年齡調べ……
◎小女欄（弦齋居士執筆、少女界大評判の面白き話）
◎懸賞讀者文藝◎育兒問答◎衛生問答
◎三十四歳にて來學せる支那女學生……
◎妊娠は如何して知る（伊庭學士）

評判の大文字

娘時代の生活法　村井弦齋

△心は如何に進歩するか
△教へは如何に受くべきか
△覺悟は如何に大切なるか
△何故に健康は必要なるか
△友は如何に擇ぶべきか

△婦人は如何に擧動を美しくすべきか
△行儀作法は何故に必要なるか
△言語は如何にすべきか
△談話術は何故に必要なるか

◎米國貴婦人と柔術……
◎櫻を詠じたる古人の名歌評釋（白水）
◎議會に提出したる婦人問題（矢島楫子）
◎議會に提出したる婦人請願（矢島楫子）
◎博覽會紀念の最新流行品…近藤蕉雨
◎活動的婦人の模範鳩山春子女史
◎小說再緣……瀬戸新聲

奥様の御重寶

◎弦齋夫人四月の珍料理
△筍はどんなのが宜いか
△筍はどうしてゆでるか
△筍はどうして煮るか
△筍飯はどうして作るか
△潮干の獲物は如何にするか
△蛤の料理は何ておいしいか
△サワラはどうして料理するか

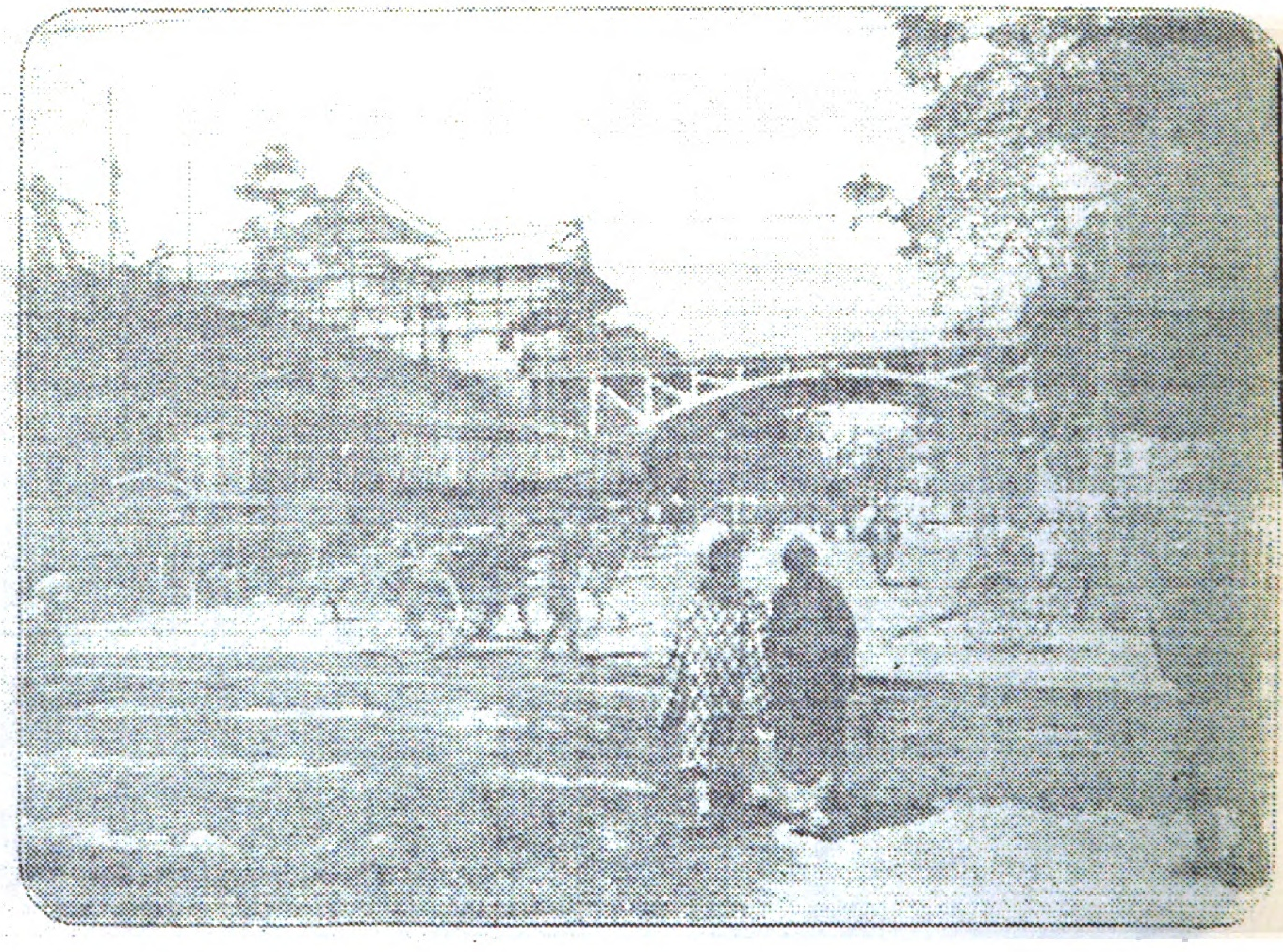
◎我が娘を嫁に遣りたる時の實驗談（嫁の體格檢査△短刀にて娘を勵ます）有島夫人

發行所　東京京橋南紺屋町十二番地　實業之日本社（郵便振替貯金口座三二六番）　賣捌　全國書店

東京博覽會

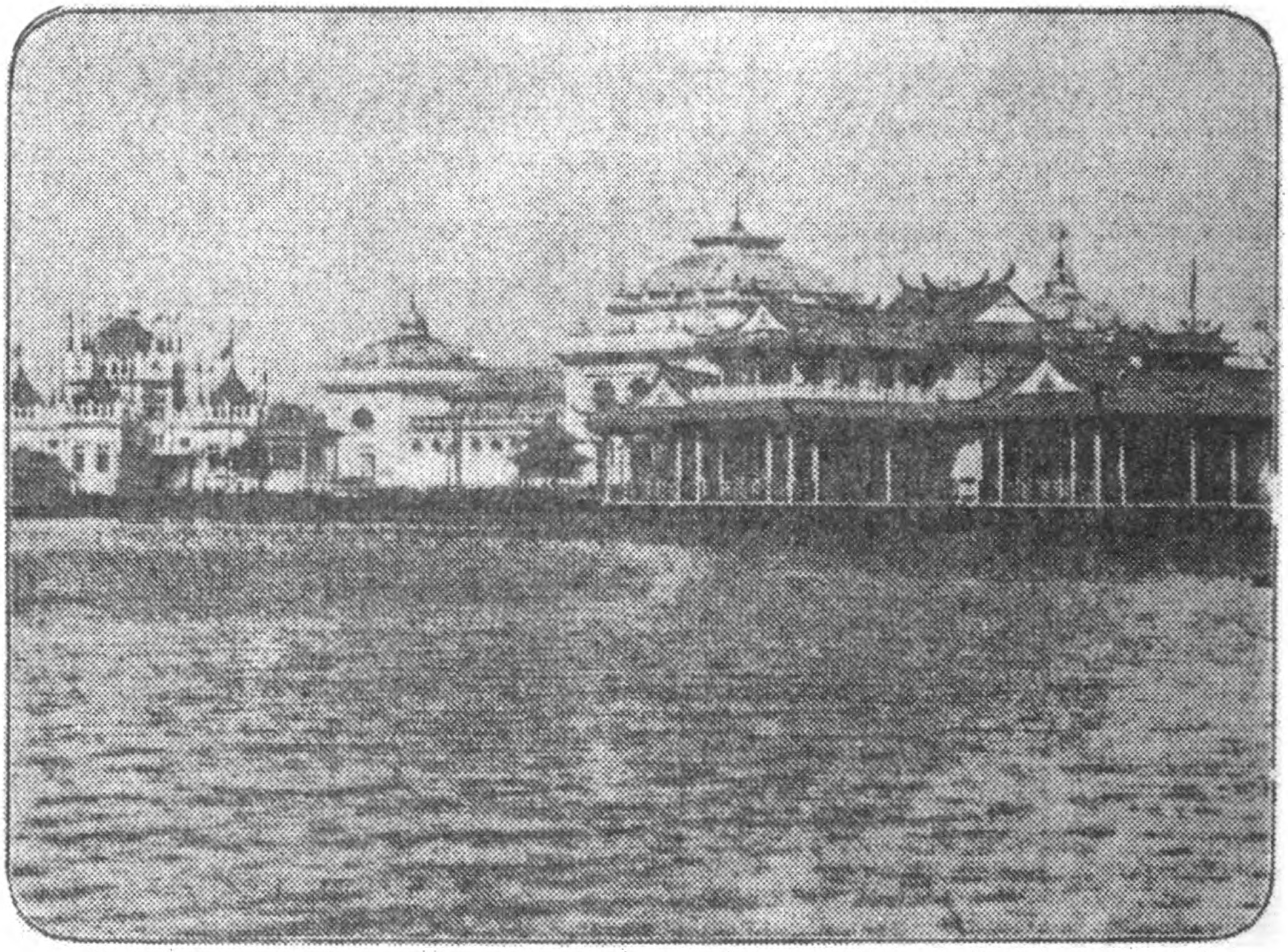


正門

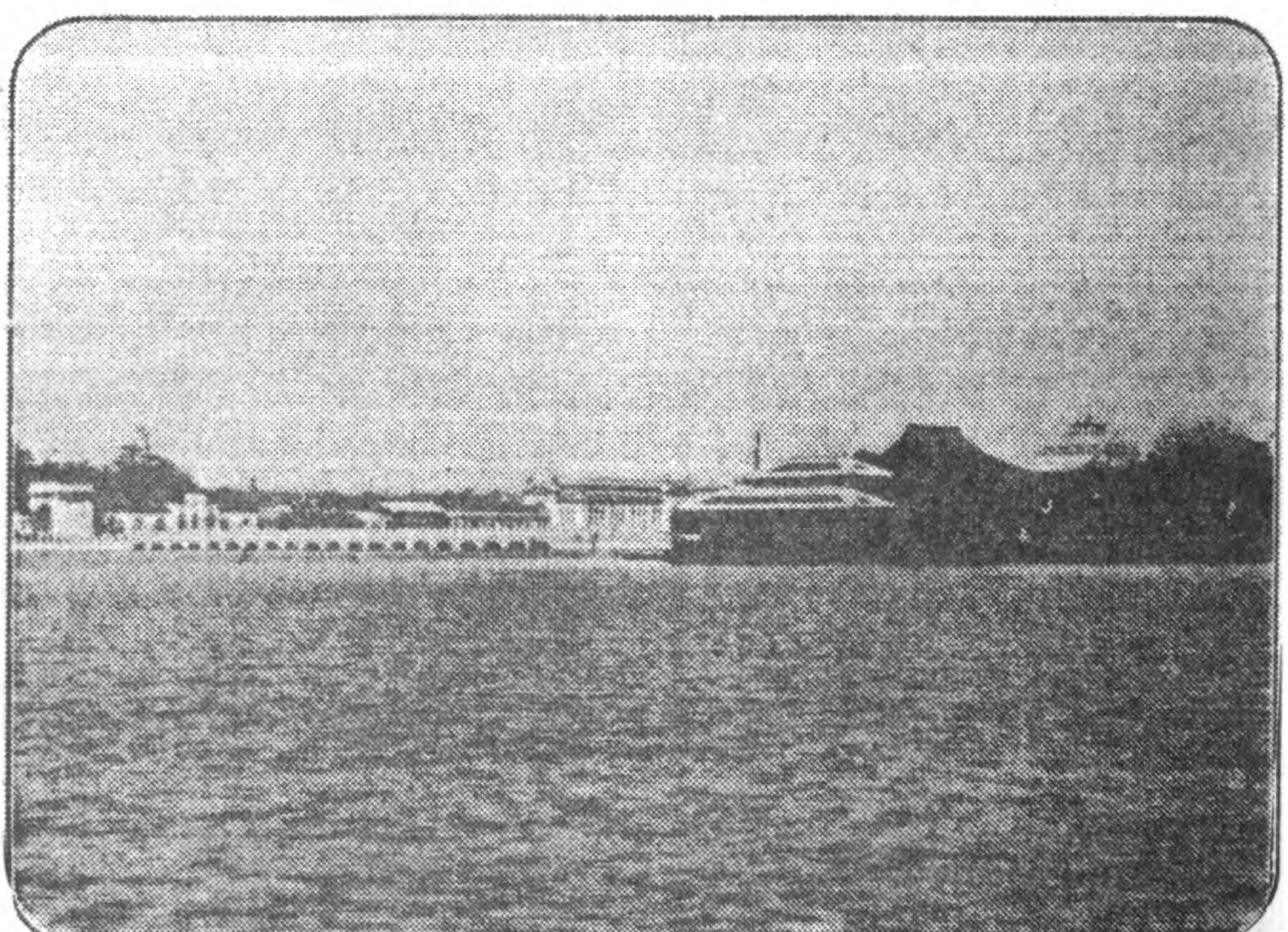


貴賓館と凌雲橋

東京博覽會



臺灣館



觀月橋

花の白雲



上野（一）



上野（二）

花堤十里



向島

花の下道



小金井（一）

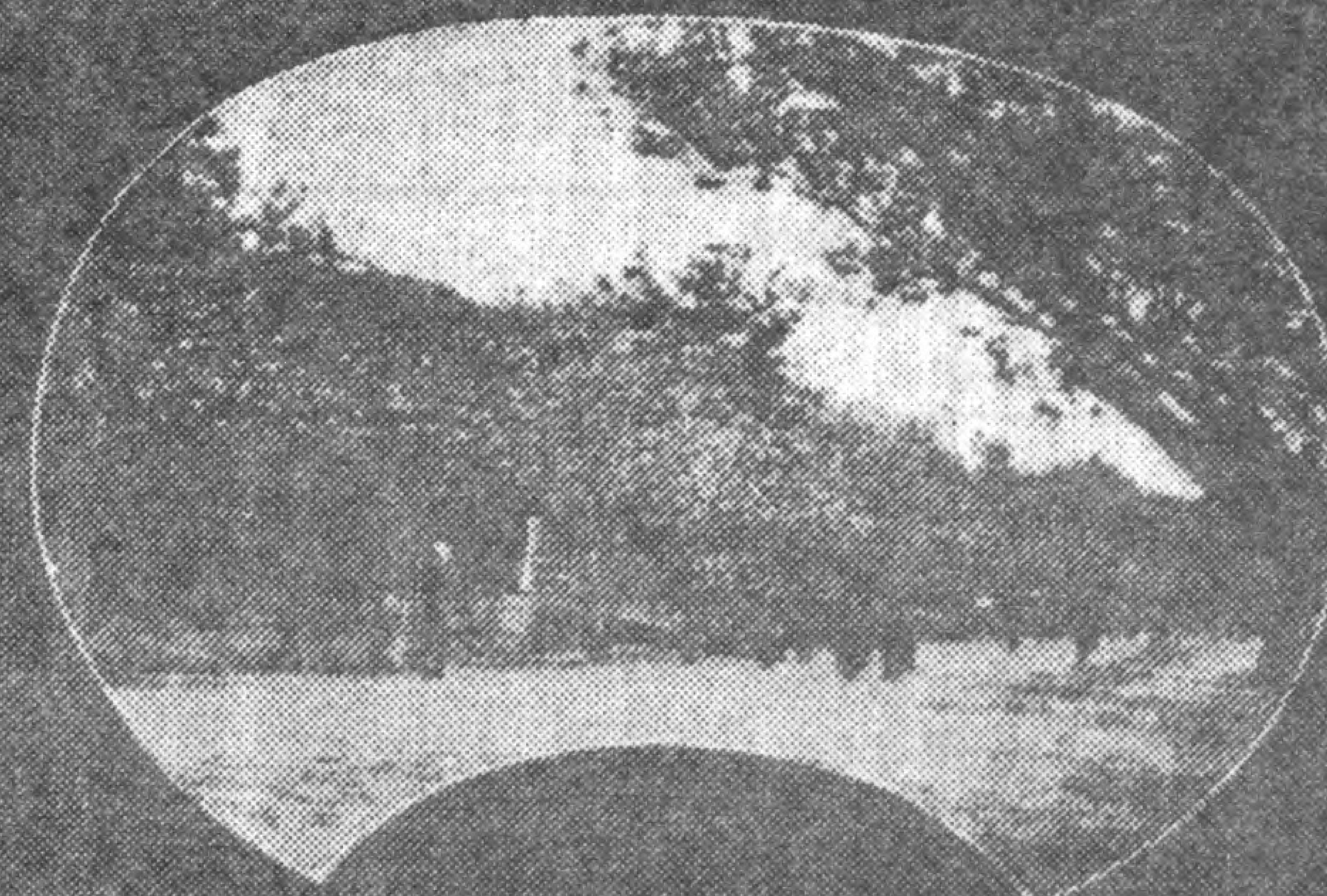


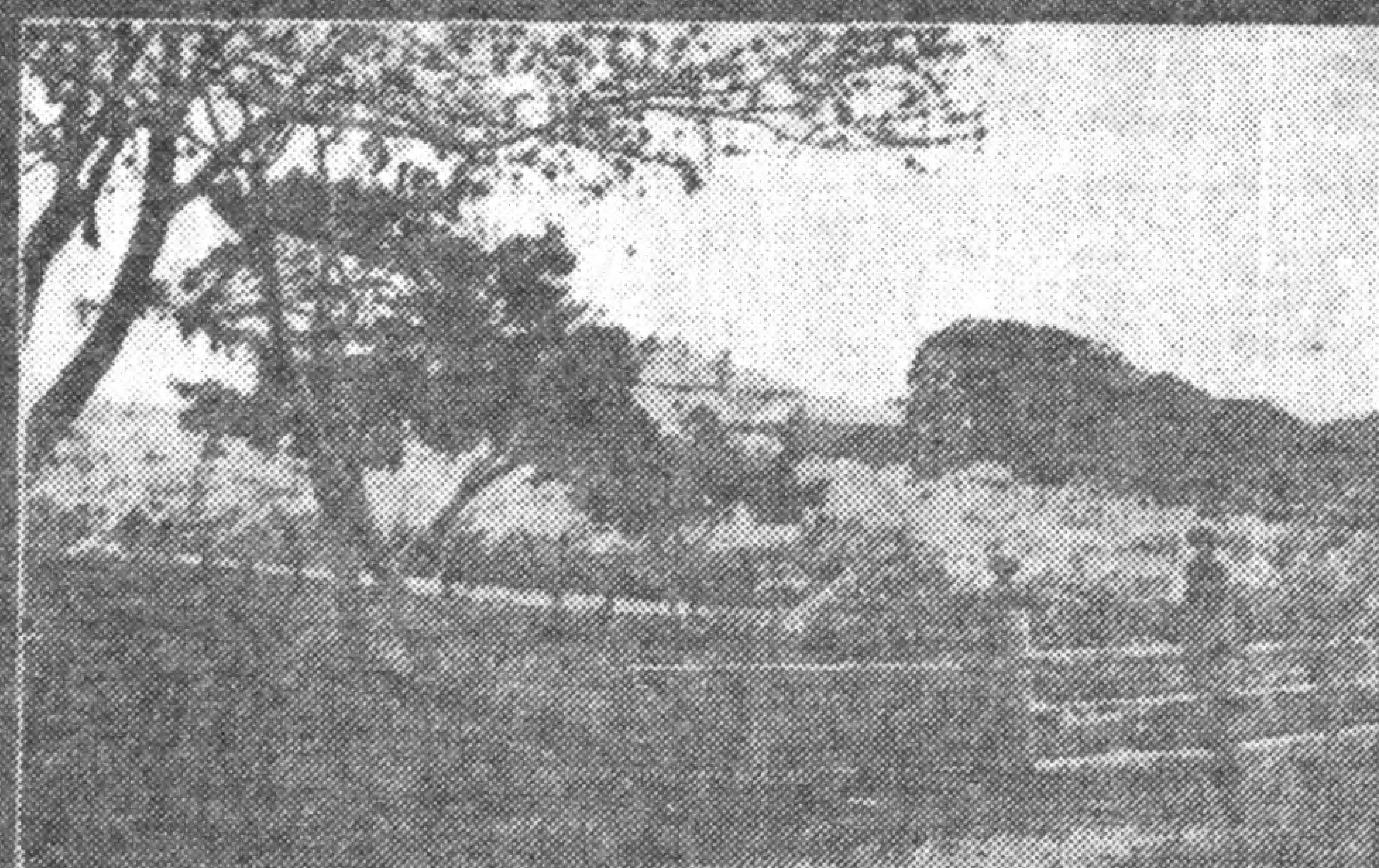
小金井（二）

花ざかり


飛鳥山（一）


飛鳥山（二）


清水谷


辨慶橋

○御婦人方のよみもの○

太田梅子著 ▲新刊▼ 挿畫二十八圖

女子技藝果菜製作法

和裝美製全一冊
正價金四十五錢
▲郵税金四錢

本書は造花術と並んで近來女子技藝界を風靡せる造果術を精密なる數十の挿畫と平易なる文字とを以て着手の順序用語の説明器具材料の使用法色彩の配合仕上げの順序方法等に至るまで少しも洩さず丁寧詳密に記述し恰もその人に就きてこの技を習熟するに異らざれば最も各種技藝學校の參考用に適せると共に獨習者の爲に斯術界唯一の良指導となるべし

女子高等師範學校講師 森本義子著
○家庭編物全書(再版)
和裝全一冊 正價金八十錢 ▲郵税八錢

英國醫學博士チエンバセー著 巖谷小波序 三樹女史譯
○新婦の心得(再版)
和裝全一冊 正價金五十錢 ▲郵税六錢

宇野彌太郎 渡邊鎌吉 共著
○家庭西洋料理(再版)
洋裝全一冊 正價金九十五錢 ▲郵税八錢

赤堀峯翁 赤堀峯吉 赤堀菊子 共著
○家庭十二ケ月料理法(四版)
和裝全二冊 各正價金五十錢 各郵税金八錢

圖書總目錄郵券二錢送附あれば呈す

▲發行所 東京日本橋區通一丁目 大倉書店 振替貯金二三八番 電話本局四一四番▲



女鑑

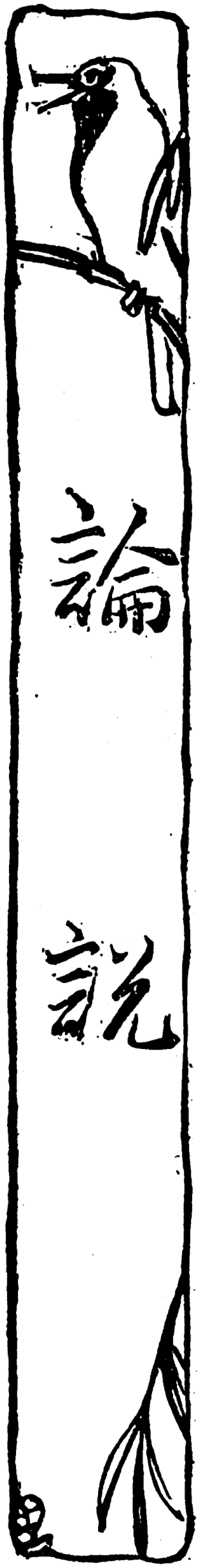
第十七年第四號

花の色

いく百千とせ敷しまの
すまふ軒端に春かぜの
山のおくにも隔てなき
げに此花のありてこそ
雨を含みて咲く見れば
かくあれかしと思ふ迄
風に吹れて散る見れば
斯あれかしと思ふまで

やまと心をもつひとの
通ふかぎりは野の末も
色にぞにほふさくら花
長閑に空もかすむなり
女ごゝろのやさしさも
花のすがたの懐かしく
男ごゝろのをゝしさも
ちり行く末も慕はしゝ

((中川愛氷作))



女子教育に就て

理學博士　男爵　菊池大麓

世間に一時男女同權と云ふ事が甚く流行したが、自分は斯言を忌はしい語であると考へて居る、併ながら男女同等と云ふ言は至當で、男子であるが故に尊く、女子であるから卑いと云ふ事はない筈であるけれども歴史上多くの國々に於ては、男子の地位が甚く高い所があつたが、開化の進むに從つて、漸次女子の地位も高くなつて來る、此故に男女は互に相補助すべき者で、男子には其本分があり、女子には女子の本分があるから、各自に區別を立てゝ自身の本分を守る樣にして行きたいと思ふ、女子にして男子の本分に入るのは、恰も男子が女子の本分に入る樣な者である、乃ち男子の女らしいのは好ましくない如くに、女子の男子らしい事は好ましくない、其れ故女子が獨立して、總ての職業に就き、男子と併行して競走する例へば辯護士の如きものを初め、其他種々の點に於て、男子と同じ地位に立つ事は、自分は本邦の女子に對して望まない所である、

自分は前述の如く考へて居るから、現今の女子に此の如き教育を施す設備は不必要であると思つて居る併ながら又明かに女子に適當なる職務があるので、例へば兒童の教育を掌る教師の如きものは、最も女子の長じて居る所であるから、女子師範學校の如きは盛に奬勵しなければならぬ、その他看護の如きも女子

に最も必要である事で、各病院に於て之に教育を授けるのは甚だ緊要なる設備であると考へる、
尙中流以下の女子になると、多少職を取らなければ、一家の生計に差支へる場合もあるから、それらの爲に女子に適當なる技藝を授けるのは甚宜いことで、女子技藝學校の如きは是亦適切なるものである、されど一般の女子は是等の職業に就いて、獨立して男子と併行し競走するのは、其職分でなく、成長の後は男子と結婚し、一家の主婦となつて、良妻賢母たる事が、即ち女子の天職であると自分は考へるのである其れ故に一般の女子教育は、主として其天職を充す爲に、必要なる教育を授くるのである、其れで今日の學校教育の中で、小學校は男女共に大なる差異はないが、高等女學校になると三年の課程と四年の課程と五年の課程とにすると云ふ事が法令で定めてあるので、先づ多くの女學校は四年乃至五年の課程を卒れば男子の中學校と同樣なる程度の教育を授けた事になる、その上二三年の專攻科もある、それ丈の設備があれば、女子に高等の普通教育を授けるのは充分であらう、故に今の所では國の教育設備としては、更に是れより以上のものを立てることは急務でなからうと信じて居る、
女子は良妻賢母たるのが天職である、而して家庭の主婦たることは頗る大切なる職分である、善良なる國民を造らうと思へば、先づ其源たる家庭が善良でなければならぬ、善良なる家庭の多い國は榮え、不良なる家庭の衆い國は衰ふ、即ち家庭は一家の根本であるから、之を改良することは、實に目下必要なる事である、然るに日本今日の家庭は悲しい哉餘り善良なる有樣とは云へない、故に是は將來ます〱改良を圖らねばならぬのである、
家庭の善良と云ふ事に就ては、勿論男主人も善くなければならないのは當然であるが、又主婦たる人が良くなければならないことは、男主人と同じことで、或ばそれ以上でなければならぬ、即ち家庭は女主人

たるもの丶如何による事が多いのであると考へられる、そこで女子教育には學校の大切なることも勿論であるが、學校にて世話する時間は僅なものであるから、年中女子に關する總ての事を支配する家庭の教育は、學校教育よりも一層大切なるもので、小供も學校に遣れば其れで善くなる、又學問も充分である抔と思ふのは、大なる間違ひである、勿論家庭にて種々なる學科を授ける如きは宜くないが、兒童に對しては朝夕の見聞が總て教育であるから、家庭教育には餘程注意しなければ、善良なる國民は迚も出來ないと考へる、それで自分は爰に善良なる家庭を造るに就き、必要なる要素の二三を述べ、一方に於ては良妻賢母を造るにはドレ丈けの注意を要するかを明かにして、女子の禀生を養成せられん事を希望すると同時に、現時家庭を組織して居る人々に於て、是等の要素の成立つ樣に願いたいと思ふ、

善良なる家庭を造るに就ては、第一衞生に注意しなければならない、特に女子の教育には幼稚園時代から、兎角女は温和にしなければならんと云つて、お轉婆にならないやうにし、女子の衣服は運動に不都合な物を拵へた、併し近年は袴が行はれ、袂のないものを着せる樣になり、或點に於ては充分に運動を奬勵するに至つたが、既に成長したる婦人の運動が足らない樣であるから、何卒之を奬勵する樣にしたい、それに就いて粗食するのを宜いと考へて居る人もある樣であるが、食物は恰度機械を動かすに石炭を焚くのと同じ事で、人間は適當なる滋養物をとらなければ、總ての働きを充分にする事が出來ない其中で最も適當なる働き、即ち精神の働きに至つては、特に食物が充分でないと、忽ち影響を及ぼすから、決して贅澤な物を望むのではないが、滋養物には能く注意しなければならぬ、

次は衣服の事である、どうしても是は活潑なる運動が出來なければならぬ、寒温宜きを得なければならない、故に寒いのが惡いと云うて、餘り温か過ぎたり、又奢つた物を着るのは宜しくないが、時候相當に

溫かにするのは當然である、故に少し風邪を惹いても是は何うしたら宜からうと小供に對して注意するなとなどは、家庭の主婦などが專ら任じなければならぬのであるから、女子を敎育するに就ては、充分に衞生生理等の事も辨へさせるのが必要である、

次に善良なる家庭を造るには、誠實と云ふ事、一家の内に秘密がない事が必要であると思ふ、兎も角世間にては小供を愛する情から、母親が父親に內證で物を食べさせるとか、物品を與へるとかすることがあるのは、是は衞生上害の有無は姑く措き、小供に詐欺を敎へる様なものであるから、斯様な惡いことのない様に注意するのは、最も大切なることである、外國に於ては小供同志の中に於てすら、お前は嘘吐きであると云はれると、是より甚しい恥辱はないとしてあるので、若し一言でも斯様な事を聞く時は堪へられないと云ふ位に、正直を尊んで居るのである、

一體家庭に於て少しの事を秘す位は、極めて些細で、氣に止める程の事でもない様であるが、能く考へると決して然うではない、それで小供の習慣は實に大切であるから、幼時より家庭に於て嘘を吐かない様にしなければならぬ、日本は陸軍も強く海軍も仲々強いが、商業に於て可けないと云ふことである、それは何故かと云ふに、信用がないからである、例へば日本人が或物品を注文しても、其荷物が到着しない時に價格が下落すると、種々なる辭を設けて引取らぬと云ふやうな事も一原因である、故に人間は決して嘘言を吐いてはならん、自分の言を信ずる事が大切である、然るに日本人は嘘も方便とか何とか言つて、嘘を吐くのをそれ程惡いとは思はないから詰り商業上にも影響するのである、夫故自分は家庭にて嘘を吐かない習慣をつけたいと思ふので、之をするには先づ第一に家庭の長者なるものが、子女の模範とならなければならぬ、父母は勝手に嘘を云ひながら、子供に斗り正直を守れと云つてもそれは行れない、故に小女の

教育上言を尊び約を守り、誠實に重きを置く事が必要であると考へる、
次に質素を尊ぶ事、即ち食物や衣服に贅澤を盡す事を愼まなければならんと思ふ、一體生活の度は高まり易いもので、世界各國同一であるから、是には注意しないと、終には良妻賢母たるの本分を盡す事が出來ぬ樣になりはしまいか、生活の程度が高まつて來て、各自贅澤を盡し、裝飾は歐羅巴杯の高い物品を用ゐると云ふ樣な事が盛んになれば、女子が結婚しても中々質素にすることが出來ぬ、と云つて一旦人に嫁しても、世間普通の家では、其婦人が父兄の許に居つた時の樣に生活させる事が出來ないから詰り貧に滿足されないので、結婚が少なくなる、すると女子の本分を盡さないで、種々の職業を求むる樣にならうと思ふ、
其次には家内の和合と云ふ事である、一家團欒快樂を極めて居る狀は、外見も宜しく樂げなものである乃で此の和合に就ては、如何なる性質が必要であるかと云へば忍容即ち自己を責むることに嚴にして、他人を責める事を寛にせなければならぬのである然るに人間は兎角他の惡いのはやかましく云つて己の失は等閑に附する弊がある、故に家庭では、己を嚴にして他を寛にする習慣をつけ、何事も自分が足らぬのであると思へば、自然、他を責むることは出來なくなつてくるから、是は一家和合の主なる原素であらうと思ふ、
それから足る事を知るのも家内和合の一つである兎角他人と自己とを比較して、羨んだり不平を起したりするから、一家の和合が破れるので、世間には往々家内に喧嘩の起ることがある、其因を聽くと多くは足ることを知らない所にある、即ち他を羨んだり妬んだり、意から他の惡を聽くと欣び、噂をするを樂みにするが、其等は實に淺間しい性質であるから、出來得る限り矯正をして行かなければならぬ、此外に思

ひ遣りと云ふことも一家の和合に就いて、大切である、同じ僕婢を使ふにも此思遣りがないと旨く往かない往昔は相應な家庭の娘でも、大名の奥に出して勤めをさせ、自分が使はれて他の苦い事をしらせたので是は他日其娘が一家の主婦となつて、僕婢を使ふ上に實地の教育を授ける爲であつたが、其時代の制度としては至極宜しかつたのである、併し斯樣な事をせずとも、其主婦に思ひ遣りさへあれば、充分人を使ふことが出來るけれども、此心がないと一家の和合は保たれないと考へる、

又小供を叱るにも肝癪を起し、惡む樣な叱り方をする家庭が往々あるが、是は決して小供の爲にならぬ一體小供を叱らずによく敎へて行かなければならぬ、然るに荒々しく叱責する如きは、家内不和合の基となるから、深く注意しなければならぬ、此點に於て自分が難い問題であると考へるのは、英吉利の如きは嫁と云ふのが即ち一家の主婦となる義にて、婚禮をするや直ぐ父母と別居をなし、夫婦一家を成すのが普通の習慣である、日本では嫁を貰つても父母と同居して居るのが先づ一般の制度であるが、是は英國とどちらが宜しいか考へものである、日本現今の有樣では、嫁が酷待られるなどいふ事もあるが、英吉利では夫婦が別に一家の家庭を造るのだから、嫁の酷待られることはない代りに、嫁の母親が聟の方を窘めると云ふ、併し斯ふ云ふ事は實際あるかないか自分は經驗がないから知らないが、よく滑稽とか譃言とかを書いたものを見ると、姑と云ふことが出てある、斯樣な事で別居の制が善いとか惡いとか云ふのも、畢竟は思遣りが足らないからで、若し一家を組織する人が善良ならば、ドチラでも和合して行くのだらうと思ふ併し完全なる人は皆無であるから、現今の所では双方何れが宜いかは社會上の一問題である、

ソコデ不和なる家庭にて育つたる小供は、自然根性が宜くなからうと思はれる、併し之は一般の事を云ふので、善良なる家庭には和合が大切である、尙一言述べたいのは一家の快樂である、一體人間は樂みが

なければならない、始終四角四面六ケ敷顔ばかりして居られないから、快樂の必要が起つて來る、特に男子は家庭が樂しくないと、外に出て種々なる快樂を求める所から、惡事も起つてくる、故に一家に和合が大切であるが、其他にも家庭の樂みがなければならぬから、女子を敎育するには之に必要なる事を敎へるが宜いと考へる、

それで女子には音樂とか、詩歌とか、美術とか、其他種々の遊戲とかを習はせる必要があるので、若し是等の高尙なる樂がないと兎角一家が野卑なる娛樂に陷り易いものであるから、善良なる家庭を造るには良い快樂が必要で最も大切なる原素の一つであらうと考へる、

前述の音樂や美術の外に、女子に讀書の趣味を與へる事が、殊に必要である、而して高等女學校で五年專攻科で三年學ぶと見れば、前後通じて八年である、先づ此位の敎育で濟ませて了うが、併し學問する上から見ると極めて僅少の年月であるから、その間によく注意して、將來自ら種々の書物を讀み、新らしい知識と樂みとを得ることの便宜を與へる樣にするが宜いと思ふ、一體日本人には讀書の趣味が缺けて居るから、此趣味を與へることゝ、理學の趣味を解することを奬めなければなりませはん、日本の人には全體に理學思想が少い所から、一家の主婦が迷信に陷り易いので、是は家庭の爲甚だ忌しい譯である、故に成るべく學校を卒へた後も、理學の書を讀むのを樂みとする樣に、即ち高尙なる讀書趣味を與へることは、快樂中の良い手段であるが、其他如何なる事でも趣味のある者は之を奬勵して家內に快樂を與へる樣にしたいと自分は考へて居る、

婦人に適せる事業

法學博士　小河滋次郎

近來婦人の職業が各方面に擴張されたやうであるが、自分の爲に働くのと、他の爲に働くのとの二樣に分れて居る、他の爲に働く、即ち慈善事業は、外國では上流の婦人社會に盛んに行はれて居る、日本でも愛國婦人會とか、育兒婦人會とか、種々の婦人團體がある、されど婦人に適して、大に成功して居るのは貧兒救助事業である、

一昨年外遊の際視察して最も感じたる、外國の貧兒救助事業は、同じ貧兒を保護するにしても、日本の遣方のやうに雜駁でなく、それ〳〵分業を儲けて、孤兒院とか貧兒院とか云ふやうに、あらゆる種類の子供を集めるのではなく、餘程細かで、年齡の上から、或は男女、或は性情の上から分類して保護する、それが大體三つに區別されて居る、第一は胎兒の保護、次に生後の乳呑兒、進んで學齡に達する時までの保護で、各獨立の機關が出來て居る、

其の一　胎兒の保護と云ふのは、重に勞働社會の姙婦を保護するのである、懷胎當初は普通に勞働し得らるゝが、六月七月となりて、强て勞働せば、母親の身體を損ひ、胎兒の發達を阻害し、折角生れても健康を保つことの出來ない事がある、貧民に兒童の死亡比例の多いのは、胎兒時代の保護が行屆かぬ結果である、この外に慈善の產科病院もあるが、それは子供を產ますだけで、その前後一二週間の保護に過ぎぬ前述の胎兒保護は、必ず大きな建物で、病院のやうな所に收容するであらうと思ふが、決してさうでない自分の家に居つて產をさせる、それは產婦を自分の家庭から放すことは、一家の和合を渺くするものであるから、賃錢が取れなければそれに代ふるものを與へ、その姙婦の代りに、この慈善團體の會員自身が手

傅をし、產褥にある間は、上流社會の婦人が貧窟へ這入つて、勝手元に立働いてやる、その家の主人が他より歸つて來れば、湯も沸いて居る、膳の仕度もしてあると云ふやうに面倒を見てやる、日本の婦人社會では、到底想像にも及ばぬことで、前述の如き世話をして行く人もなければ、受ける方も氣苦しく、兩方で窮屈を感ずるのであらうが、決してさういふやうな事はない、進んで慈善をし、喜んでその厚意を受けて居る、

其の二　生後二歲までの保護、貧民社會で乳呑兒があれば、それが足手まとひになり、他へ出て働くことも思ふに任せず、それが爲自分も困れば、子供も困る、斯ういふものを保護するに、クリッペンアンスタルといふものが設立されて居る、農家などで子供を籠へ入れてあるのを見受けるが、西洋でも秣籠へ子供を入れて傅をして居る、クリッペンは秣籠でその學校の如きものであるが、私はこれを奇麗に譯して搖籃院として居る、この搖籃院も非常に成功して居る、これは朝子供を院に送る、院では衣服を着かへさせ牛乳を與へ、親切に遊ばせ、寢臺の上や、廣い庭でも遊ばせる、而してその傅をする人は上流の奥樣か令孃で、決して給料自的の傭人ではない、夕方になれば親はそれ〲受取に行き、翌日またそれを繰返す、この事業は初め佛國で起つて、墺國ウキンナで發達をし、現時は伯林などでは其處此處に搖籃院を見受けられるのである、子供を親の手許から離すといふは餘儀ない事情の然らしむる所で、晝の時間で休みでもあれば、母親が來て傅をするといふ義務をも負はして居る、元は私生兒は預からぬことにしてあつたが、今はそれをも預かるやうになつた、併しそれには條件がある、私生兒は不品行の結果儲けるのであるからその行狀を改めるとか、賤業婦ならば正業に就くとかいふ保證のあるものに限る、であるから間接に風俗矯正の一手段ともなり、不品行の結果自暴自棄に流れんとするものも、子供の爲に心機一轉して眞人間に

なるといふこともある、

其の三　學齡に達する迄の保護、これは幼稚園である、日本では中流以上の子供の爲につくられた、一種の小學豫備校であるが、これも貧兒の保護目的で、これには重に宗教界の人が働き、敎師、保姆の如きも、舊敎ならば尼、新敎ならばその宗敎々育を受けたる婦人で、監督は上流婦人がして居る、二歲以上親の手を離れては、ひとり遊びも覺束ないのを、親が手許で保護することが出來ず、姉などに傳をされ、それも出來ぬ所では、餘儀なく打捨つて置く、隨つてよい事は覺えぬやうになる、この三ッ兒の根性をよくするやうにせねばならぬ、

要するに前述の如き慈善的に、婦人が働くといふことは、選擧權が何うの、參政權が何うのと騷ぐなどとは違うて、社會の同情も集まり、それが爲に社會を改善することが出來る、私どもは斯う思ふ、婦人は家庭の保護神である、家庭を廣くしたものは社會であるが、婦人の職分は家庭的の仕事であるから、社會に働いても如上の家庭的業事が成功する所以である、

前述の如き慈善事業は、下等社會に對して、現實に其効果を收むることが出來て、多くの貧兒を將來精神及身體を健康にして、生存競爭裡場に働くに堪へるやうにせしむる道である、之を反對にすれば、不良少年が續出して、社會に害毒を流すやうにする、犯罪の重なる原因は兒童敎育の缺くる所より起るので、貧兒の保護さへ行屆かば、犯罪を豫防することも出來、隨つて國富を增進することになる、

ロールドブルーグルム氏は、貧兒保護事業は我々博愛家の、非常な安慰である、而して此事業の結果は貧民の風俗を矯正し、社會の犯罪を防遏するに偉大なる効果がある、と云はれたが、實に至言である、

我國婦人社會の慈善事業を見ると、まるでお祭騷ぎで、衣裳を着飾つて徽章を下げて押出しは立派であ

るが、本當の身の入つた仕事がそんな調子では行かぬ、今少し地味に眞面目になければならぬ、伯林の搖籃院などでは、皇后陛下が突然臨御あらせられて、御自分が貧兒を抱いてやり、誕生後四五日位の兒には名を附ておやりに成つたことがある、この兒が成長すれば、怪我にも惡い事が出來るものではなく、其德の及ぶ所蓋し尠少ではない、我國の上流婦人も、以後かゝる家庭的婦人的慈善事業に、充分力を致されんことを切望するのである、

婦人と交際

三輪田高等女學校　三輪田眞佐子

近來婦人界の傾向は、すべて良妻賢母主義以上を以て、理想とするもの多きが如し、固より良妻賢母主義を全然否定するものあらば、大なる謬見にして、おのれはこれに贊同すること能はざるべし、即ち婦人は如何なる境遇のものにても、母とし　妻として、本務を盡すべきを、原則とせざるべからず、勿論世の中には、終生獨身の婦人も少からずといへども、家庭を以てその本領とすべきことは、をさ〳〵否定せざるならん、

されば良妻賢母主義以上とは、非良妻非賢母主義を唱へんとするにはあらじ、唯時勢の必要上、これまでの如く、狹き意味の良妻賢母にはあらずして、廣き意味の良妻賢母の世に出でんことを望むものと解せば、決して反對のものにはあらざるべし、

先づ今日は男女七歳にして席を同じくせずとし、婦人は位を内に正しくかて、足閨門を出でずとか言ふ如き古訓は、參考の價あらんも、實行すること能はざるものとなれり、如何となれば人は漸次家族關係の範

圍より、社交的關係の範圍を出で、更に四海同胞の理想に向つて進みつゝあればなり、見よ現今は宗教を異にし、人種を異にし、或は職業を異にする等、様々の社會の人々と、交際するにあらざれば、一家の運命を向上せしむること能はず、茲に於て婦人と交際とは、家庭上必要の事件ぞかし、

併し動もすれば、多くの婦人中には、交際の意味を誤りて非常なる弊害を醸すことありとかや、これ大に戒むべきことにこそ、例之はわが位置と實力とを辨へずして、今日は園遊會、明日は慈善會と東奔西走し、或はこれは今日の流行服なり、あれは今日の流行品なりと、奢侈を競ひ、遂に財を散し、家を亡したものも少からず、特に恐るべきは青年男女の交際なり、抑も、男女の交際は、社會の德義進みて、適當の機會と、安全なる方法あらば、固より好みすべしといへども、血氣盛にして定見なきものが、保護者の十分なる監督なくして、恣に交際するは、最も危險なり、然るに彼等はこれを歐米的の風俗なりと信ぜんも歐米に於ける婦人は、單に、思想健全にして、危險なきのみならず、出づるにも父母の監督あり、居るにも父母の保護あり、反りて遙に日本の外人よりも、交際上、嚴重の道德ありとかや

これを以ておのれの婦人と交際とを説かんとするは、奢侈的交際にあらず、亦淫恣的交際にあらず、家庭を中心とする主婦、若しくは家庭に附屬する處女の心得に過ぎざるなり、されどこは今日最も必要の女訓なれば、左に二三の大綱をものせん、

交際の第一要件は、誠と親切なり、人は誠内に充ちて、所謂赤心を人の腹中に置く如きものならば、敢て交際の術を學ばずとも、眞の交際家となるを得べし、彼の世辭に巧なるとか、虚飾をつとむるとかは、俗間の交際術なり、世の中には世辭と知りながら、これを悦ぶものもあれど、苟も高尚なる品位を有する婦人は、これに心を用ひずして、常に、誠を以て人に交るこそ肝要なれ、即ち誠だにあらば、人はその言

行に信頼するのみならず、その他人に對する態度も一切親切なるを得ん、

第二要件は、敬意の發現なり、たとへば如何ばかり親切ならんとも、敬意を缺がんか、勢ひ失禮の形を執り、そがため不和となりける例も少からず、古人は人と交る、久しくしてこれを敬すと言はれたるは、千古の模範なり、特に男女の交際に於て、相互に敬意を失はんか、梨下の冠、瓜田の履の喩にもれず、心に思はぬ浮名を立つることあり、甚しきは一身を亡す原因となることなしとせず、愼まざるべけんや、

第三要件は、公平ならざるべからず、常人の習とて、權門には集り易く、貧者愚者を見れば、嘲り易しされど我より位置低きものも、高きものも、單に個人として、交際するときは、平等に親まざるべからず左に向つて大に腰を屈し右に向つて大に頭を揚ぐる如きは、その心のほど、見透さん心地のするものぞかし、わきて舊知を顧み、舊友を捨てざるは美徳なり、

第四要件は、常識を離るべからず、これ現今の年少婦人にあり勝ちなる弱點なり、如何となれば、新時代の教育を受けたるものは、理想とか改良とかの念盛なるのみならず、舊慣を知らざるため、社會一般の風習に戻り、非難を招くこと少からず、故に普通俗間に行はれて、少しも害なきものは、これに從ふべし凡そ婦人のつとむべき作法の大要はこれを心得て人より笑を招く勿れ、亦人をして非禮を怒らしむる勿れさりとて餘り形式的作法に泥みて、人に嫌惡の情を起さしむるは、反りて非禮の甚しきものとならん、恰も改良と稱して、常識を離れたるものと共に、所謂過ぎたるはなほ及ばざるものとこそ言ふべけれ、

第五要件は、交際上の心得なり、元來交際上の最も尊ぶべき秘術は他にあらず、人に快感を與へ、以て敬慕の念を起さしむると、同時に人に迷惑をかけ、人をして遠慮せざるを得ざる苦境に入らしめざるにぞある、今具體的の例を擧ぐれば、來客あるとき、家族の陰よりこれを窺ひ、或は陰にて笑ふ如きことを禁

ずべし、亦來客に際して、怒聲を發したり暴慢の擧止あるべからず、つねに和氣靄々の態度を以て、これに向ふべし、又は人を訪問しても、食事時とか安息時を避ぐべし、若し止むを得ずして、人の忙しき時刻に訪問せんことあらば、必ず長居すべからず、長居して雜話に時間を浪費するは、文明の敵なりと知るべし、

加之交際上の話柄も愼みて、他の非を數へ、或は身上を評すべからず、唯罪なく、而も興味ある題目を撰ぶべし、或は來客あらんも衞生上の注意を忘れて、濫に飮食を强ゆべからず、或は友人に手紙を書くに當りても、他見を憚る如き言句あるべからず、されど返事を要すべき手紙は遲延すべからず、これ人に迷惑を及ぼす最も甚しきものなり、實にこれ等を逐一論せば、數十頁にても尙足らざれば、讀者は一を聞きて十を知るべし、

要するに交際は直にその人の人格の高下、趣味の品別、思想の淺深等を露はすに足る者なれば、注意の上にも注意を加へ、以て眞面目ならざるべからず、決して形式上の體裁とか、世辭の巧拙とかは言ふに及ばざるべし、專ら誠を以て、人の幸福を謀るやうにせば、期せずして大なる交際家の實を擧ぐるを得ん、これ獨り婦人一身上の交際に止まらず、和氣の掬すべき人となれ、ゆかしくて、敬慕すべく欽仰すべき人となれ、されば、婦人としての家庭的交際は、至れり盡せり、更に何をか求めん、何をか言はん、

女子教育家に望む

女子教育家中の婦人諸君にして、或は學業修習の上に於て或は女權伸張の點に就て、堂々女子獨立の必要を說くに餘り、覺えず自己獨身の地位境遇を辯護し曲庇し、生徒をして之が習に倣はしむる如きことありては或は將來に於ける健全なる良妻賢母を作ること能はず而して終に良妻賢母を養成せんとの最初の目的に背戾するに至らんこと是なり。吾人は固より是等の憂慮を以て眞に學校內の實情を詳知せざる局外者の杞憂に終らんことを望む、然も實際上の傾向は往々此杞憂をして深憂たらしめんとする消息を傳ふるを奈何せんや、高等教育を受くる女生徒の多くは曰く「妾は父母の命なるを以て止むを得ず他家に嫁くものなり、女子獨立の必要上、獨身にて一生を處するを快とすれども、事情の許さゞるものあるを奈何せんや、云々、否な妾はかくの如き薄志弱行の徒にあらず、教師某の如く斷乎たる決心と勇氣とを以て一生を獨身に送り、終始女權擴張を期す然らざれば女子の自由てふもの我國に於ては永久伸張の見込なければなり」云々と、此種の言論は今日の女學界にありて往々仄聞する所なり、而して學識才能優秀にして稍々氣骨ある女生間に多く倡唱せらるゝ所なりと、これ抑々喜ぶべき顯象なりとするか。

次に又今日の普通教育及び特種專門の學藝を修めたる女子の多くは殆んど眼を國富增進てふ點に注がず、たゞ浮華纖巧に心を寄せ、只管權勢威力をのみ慕ひ、滔々世を擧げて不生產者の配偶たらんと希ふ傾あるは、果して國民教育の指示する所に從へる結果なるか、これ大に吾人の疑なき能はざる所なり、一例を以て言はんか、今日父兄よりの學資供給を以て各種の女學校に入り、專ら學藝修習に從事しつゝある女生徒を見よ、彼等は日一日と學問技藝の進むにつれ、皆曰く「妾は一生を學者教師の服に委ねん、否な妾は文武官、議員公吏等に嫁かん、何ぞ復び草深き田舍、狹隘なる地方に歸り、無智無學にして終日勞動に役々たる農工商人の配偶者たらんや、若しかゝる人士の妻たるには、其修習せる學藝餘りに高尙にして、終には之を棄てざるを得ざるなり」と、かゝる言は往々女學生の口より聞知する所なり、此種の言論、目的或は女子として悲憤慷慨的と稱すべからん、然れども國家社會の上より觀れば決して平靜妥當の言論目的にあらざるなり、何となれば畢竟これ偏頗なる女流を續出せしむるにあらずんば相率ゐて不生產的幇助者のみを作らしむる基たればなり

蓋し今世紀は明かに財力時代なり、之を以て國家社會の安寧秩序を保つ爲めに、文武官、議員、公吏等を要すると共に、他方に於て國富を增進し、國力を充實せしむる爲めの直接生產者を多大に要するの秋なり、これ間接に生產を保護し誘掖し指導する其人よりも直接に國產を增殖せしむる其人を多く必要とすればなり、然れば我國民は貴賤貧富に拘はらず又男女に論なく、間接に生產を幇助する地位にある者は其目的の結局國富增進にある所以を了解して事に勉め、又直接に生產に從ふものは孜々奮勵努力して殖產興業の方法を講究實行せざるべからず

（躬行會）

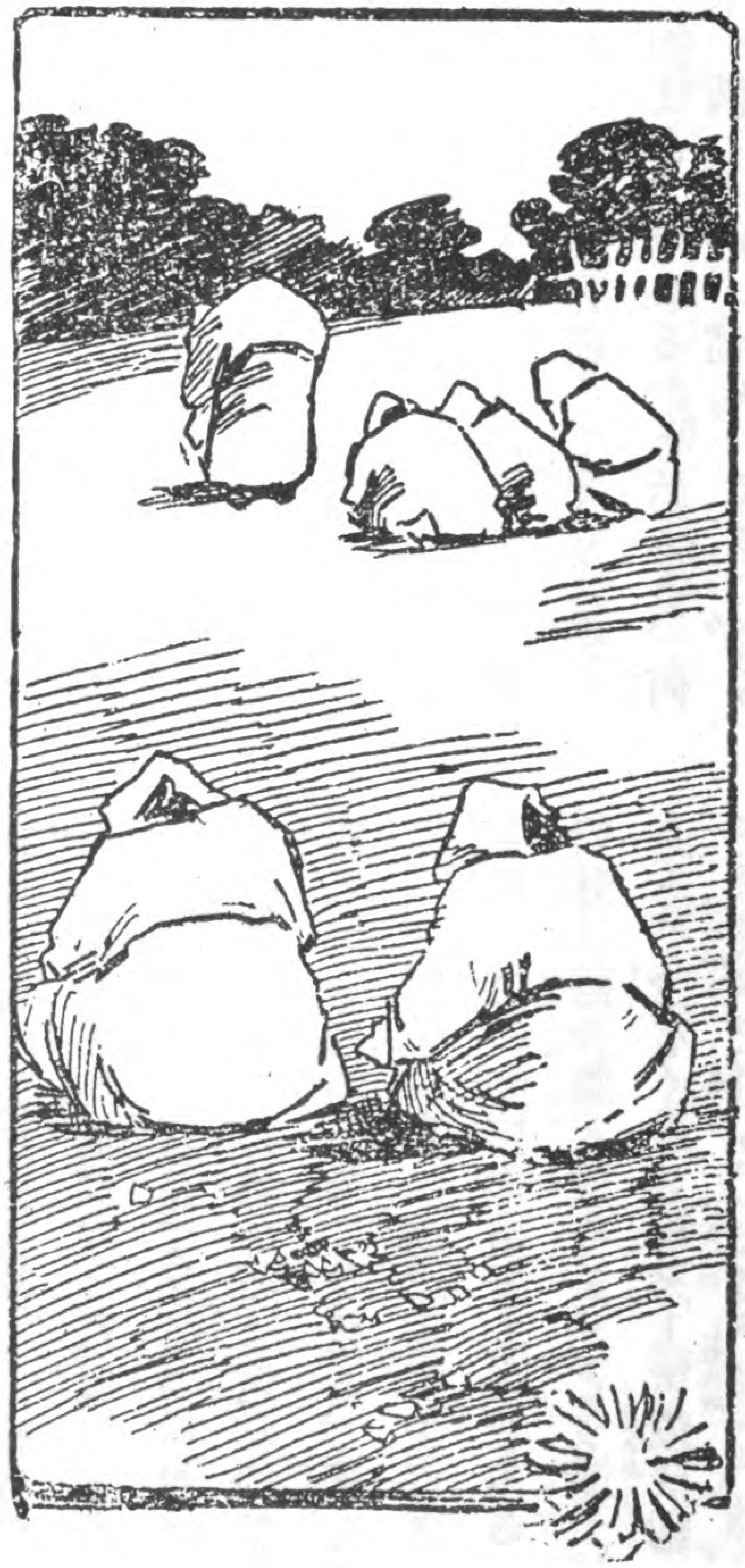
衣食に就て

醫學博士男爵　高木兼寛

衣服と云ふものは何の爲に着るか、寒い時分なら寒さを防ぐ、それに違ひない、何故ならば袷一枚で寒ければ綿入を襲ねて着る、さうかと思ふと暑くなる時がある「何事も時ぞと思へ暑ければ、錦に優る麻の羽衣」と云ふやうな歌がある、冬は錦の着物は都合が好いけれども、夏は工合が惡い、夏の炎天に立派だから、錦の着物を、被ろと言はれても有難くない、私は薄帷子で結構、斯う云はれるであらう、夏は寒さを除けるもので無くても、暑く感じない樣な物を拵へて着るのが宜い、衣服の目的は暑さを除けたり、寒さを防いだりするのにあるので、此外に目的があるとか云ふと、どうも人間が裸體で歩いては外見がわるい、それだから其醜い處を覆うて善くする、即ち身體を飾る、それで一は裝飾、一は寒さを防ぐ、一は暑さを除ける、此三つが主なる目的であらう、此目的を以て我々は衣服を着用するが、着用するに付ては身體を太きくするのと、身體を丈夫にすることゝ、それから命を長うすることに妨げの無いやうにして、始めの三ツの目的を達するやうに衣服と云ふものは裁縫しなければならぬ、今迄の日本服の裁縫は、體の各部即ち手、足、首や胴の運動を妨げるやうに出來て居る、此運動を妨げるから太ることが出來ない、我々の身體は孰れの部分でも運動させなければ太らぬ、使はなければ可けない、使へば太る、使はずに置けば太らぬ、之が所謂原則で

おる、それで今迄の日本の着物は運動を妨げる樣に拵へてある、それ許りではない、寒さを充分に防げぬと云ふ仕組になッて居る、又暑さ除けにも左程宜くない、其形は四角であらうが、圓からうが構はぬ人のすき〴〵である、人の顔でも十人十色で、恐ろしい鼻の高いのが好きな人もあり、恐ろしい頬の赤いのが好きな人もある、されば人々の好みで違ふ、けれども大體から云ふと、どうしても一定のものがあつて、運動を妨げぬやうにして行かなければならぬ、人間の身體は使へば使ふ程善くなると云ふ例を云へば、人が初めて生れた時に盲目である、五日十日を經つと段々に見えて來る、是は小供が眼を使ふからである、段々成長すると、赤いとか黒いとか、白いとかが分るやうになつてくる、或は段々に耳を使つて居ると、非常に高尚な所迄進んで參り、音樂なども能く聽くことが出來る、耳を澤山使へば使ふだけ耳が發達してくる、眼も其通りである、眼を餘り使はぬ人の眼はぼんやりして居る學校の教育を長くした人は山の中の小供の眼と都會の小供の眼とはまるきり違ふと云ふことを言ふて居る、山の中の小供の眼は、犬に譬へて見ると、飯に味噌汁ばかり食はせて置く犬の眼のやうに、ドロンとして居る、運動が不活發極まる、都會の小供の眼は始終肉を食はせて置く犬の眼のやうに鋭い、斯う云ふことになつて居る、眼を多く使ふ人は眼が涼しい、眼を澤山使はぬ人は眼の運動が極めて鈍い、口もさうである、金持の小供を見ると、大體口が利けない、今日はまだしも、昔は尚更である、何故かと云ふと口を利かせないやうにする、乳汁を呑ませるにも、手が足りない所の赤ン坊は、腹が空いた時には乳汁が欲しい〳〵と泣く、然るに金持の所の赤ン坊は、傍で時計を見て居つてモウ二時間經つから乳汁だ、乳汁飲まうとも言はぬのに乳汁を持つて行く有樣であるから泣く必要はない、段々成長するに隨つても、坊にお煎餅頂戴と言はぬ先から八ツ時だと云ふので、お煎餅が出で御茶が這入つて居る、

斯う云ふ風で口を利かせないやうにするから、何を申し上げても、宜しく取計へと言ふだけ、さう云ふ譯であるから口が能く發達しない、口の所が締りが惡い、見物などをして居る時でも、アーンと口を開いて居る、これは使ぬから能く發育しないのであるさう云ふ樣になつて居るから、身體のどこでも使はなければ可かないお孃さん方には餘り手を使ふと指が太くなつて見ッともないから裁縫などしては可けない、ピアノを稽古しても可けない、何にもせずに居ると奇麗な小さな手が出來る、併しそれでは實際困るのであるから太きくしなければ可けない、



第一日本婦人の頸の形はどんなものか、縮緬の紋付を着ると頸を長くする、どうしても前の方に腮を持つて行かなければならぬ、之には大分理由がある一つは白粉を塗るので衣服に付く、それを付かぬやうにするにはイヤでも腮を前に出さなければならぬ、又少さい時から枕の高いのをする、それだから仰向けに寢ると頸が前に出る、日本人の頸は右でも左でも前でもどうでもなるやうな姿になつて、頸が眞つ直ぐになつて、ぐらつかぬのは尠い、それから胸が善く發育して居らぬ、西洋人の胸を見ると肋骨で張つて居る、西洋人の胸が必ずしも良いとは

言はれぬが、西洋人の胸と日本人の胸とはマルで違つて居る日本人は臂も小さい、日本人は大体肋骨が張つて居らぬ、皆斜めになつて居ると云ふことは慥かである日本の人の胸を前から見た時にはつまつて、後ろの方が膨れて居る、

先年日本の婦人が佛蘭西の博覧會の時に行つて、暑い時であつたから羽織を着ないで居つた、後になつて聞いて見ると、歩く所を見ると傴僂に見えるからと云ふことであつた、

それから婦人に付て、日本婦人服と外國の婦人服と二つの問題がある、日本の人はどうかと云ふと、西洋の婦人服はコルセットで腰を締めて非常に害になる、さて日本の着物はどうであるかと云ふと、何も締めないから、胴が樽のやうに大きくなつて居るそれが矢張よいと思ふ、又醫師でもさう云ふ人がイクラでもある、果してコルセットが婦人の身體を害するものならば、西洋人が段々體格が惡くなつて行かねばならぬ、然るに亞米利加か、英吉利等の娘は

親よりも大きく成長して行く、餘り太り過ぎはしないかと思ふ程に發育が宜しい、それで物は用ゐ方に依る、如何に良い物であつても用ゐ方が惡ければ害になる、イクラ米の飯だと云うても三椀ならば身の爲であるが、之を五杯も六杯もつゞけざまに食へば吐き出して仕舞はなければならぬ、其通りにコルセットは近來は用ひて居らぬけれども、西洋の人の腰は少さい、骨の無い所に重みのない袴を始終着けて居るから自然と細く見える、即ち西洋服と云ふものは、決して身體の健康を害するに至るものではない唯用ゐ方の如何にあるものである、日本の人は着物の外に隨分腸を締める、どう云ふ風に締めるかといふと、少なくとも半ダース位は締めて居る、上の方でも分つて居る、先づ下締をする、其上帶をしめる、それから帶上げを締める、

一番餘計締めた時には物も何も食はれない、私は始終其御話をするのであるが、主人は料理人の上手なのを賴み、魚は新鮮なるものを取り寄せ、牛肉も

神戸の上等なるものを買ひ整へ、山海の珍味を集めて御馳走の用意をするお客に行く方はどうかと云ふと、主人公は食ふ積りで行くけれども、奥さんの方は客に行く前に肉汁でも吸うて、先方に行つては成るべく少く食はなければならぬと云ふことになつて居る、それはどう云ふ譯か、客に行く前の支度はどうかと云ふと、奥さんは白襟紋付でチャンとして、片側三百兩もする樣な帶を締める、板の樣なものを肋にかけて締る、其支度の出來上つた所を覧ると、臨月の婦人の如き肩息である、それから先方に往つて席に着く、男子の方は先づ膳が出る、吸物を取つて酒の二三本も傾けると、所謂窮屈袋を御取りになつて御緩つくり遊ばせ、御袴を御取り遊ばせとか云ふ挨拶が主人からあつて、それではお免を蒙りますと言つて袴を取り、帶を締め換へて緩める、洋服なら襟の輪も緩めて腹を大きくすると云ふ趣向であるそれでどつかと座り込んで飲食を縱にする、所が奥さん方はどうであるかと云ふと、不幸なる哉婦人には帶を御緩め遊ばせと云ふ御挨拶を主人は決してしない、そこで召し上れば召上がる程苦しくなる、肩息がはづんでくる、斯う云ふ譯であるから、成るべく食はないやうにする、それは嘘ではない、であるから客に往つて歸ると、漸く歸つて來た、之が濟んで安心をした、帶止、帶上げ、帶を取つて、お終ひになつてアーどうも好い心持だ、着物は汗ビッショリである、日本の帶も着物も決して樂なものではない、帶をチャンと締めた時には迚も窮屈で我慢は出來ぬ、と云ふ位のものである、それだから日本の裁縫方は腹を締めるから宜いと云ふ事ではない、是れも用ゐやう、彼れも用ゐやうであるが、大體から考へて見ると、彼の服は我のよりも利益である、何となれば彼は帶も無い、帶上もなければ帶止もないのである、日本人はそれがなくては可かぬ、全く是は餘計なものを使つて居る譯ではないか、今日本全國二千二百萬の女が一圓宛の帶上を持つて居るとすれば、二千二百萬圓である、若し十圓宛の帶を一人が

一本宛持つて居るとすれば二億二千萬圓である、是は何の爲であるかと云ふに、裁縫の仕方が惡い、我國の裁縫の仕方は無用の帶などを用ゐる樣になつて居るから、我國家は此の如き金を只遣つて居らなければならぬ、全く死金であつて何にもならぬ、又軟い、帶などは自身で締ることも出來るが、硬い立派な帶になると獨りでは締めることは出來ない、二人掛り三人掛りで帶を締めなければならぬ、他人迄煩はして此の如く金を掛けて帶を締めると云ふことは非常な間違ひである、我邦は古きを捨てゝ新らしきを用ゐ、之を以て國家を强くしやうと云ふ時代に到着して居るのであるから、斯の如きことは充分注意しなければならぬ、

それから帶止の代價、殊に帶止などには珊瑚珠とか眞珠、金剛石、金の類杯を附けるので、此節は仲々金がかゝることになつて居る、さうしてさう云ふものは身體を太らせ、身體を丈夫にして命を長くする爲にはならぬのである、それ故に宜しく是等のものは廢さなければならぬ、それから袖である、衣服の目的は寒さを防ぐのも其一つであらうが、果して寒さ防ぎになるか、男子の着物であると袖口が一つしか無いけれども、婦人のになると窓が開いてある袖の入口から風が這入るやうに吹拔になつて居る、夏は涼しいやうに見えるけれども、冬は寒くて可かぬ、此爲に自然と贅澤が起つて他の物が入用になつてくる、そこで筒袖にして、前は日本風にして置かなければならぬと云ふから、前だけは切つて了つて日本服の下に着ても分らぬやうな莫大小と下襦袢を拵へ、今では大抵の奥さんはそれを着て居る、それは吹拔の袖を拵へるからさう云ふ物を着る必要が起る、私は惡口を言ふでは無いが、涼しいのを婦人は好きと見えて、何か知らんが兎も角も開いて居る、血の通ふ途筋と云ふものは圓い管になつて居るけれども、腕を曲げた時は血の通ひが弱くなる、眞つ直ぐに伸びた時のやうには通はない、それが爲に食物が減つて居る、人間の寸法の伸びるのは二十二三才

迄である、それ迄の間に度々腕を曲げると血が通はぬ、若し小供が手を怪我して血が出る時には手を曲げる、さうすると血が出なくなる、醫者の方でも屈曲法に依て血を止めることが能くある、曲げて了ふと血が通はぬ樣になるから、それで手を曲げる、冬六ケ月の間手を曲げる人が澤山あるが、さう云ふ人は手が伸びない、小さい手にするには結構であるけれども、充分に發育しないから丈夫な譯には行かぬ手を短かくすると云ふことは之が爲に起つてくるのである、それで寒いと云ふても努めて手を引込ませぬやうにしなければならぬ、どうしても今日の如き吹拔の寒い袖を拵へずに、暖い爲に裁縫すると云ふ事に方針を向けて貰ひたい、（未完）

紐育の日本料理

西洋料理研究の爲め、或は既に其料理法を習得して、海外に赴きし者は從來尠なからざりしが、純粹の日本料理人として洋行せしは、淺草區小島町七十三番地增成兵藏（三十七）を以て嚆矢とすべきか、同人は代々の料理人にて九歲の頃より斯道に志し、遂に一廉の職人となりて、東京に於ける各割烹店は勿論、宮內省等の御用をも承はり居る中、森村商會主の依頼に應じて、米國紐育の日本倶樂部に聘せられしは、今より三年前即ち三十八年四月の事なりき、同倶樂部は紐育に於る三井物産、正金銀行、森村商會、生糸商新井氏、茶商古屋氏高峯博士等の設立に係り平日は倶樂部員の集會娛樂の場となり、時には日本より米國に赴きし、名士の歡迎送別の會場となるべきものにて小村大使のポウツマウスに赴きし時も、同倶樂部に滯在し高木男、松本君平、鎌倉圓覺寺管長等も亦同倶樂部に滯在して、故國の料理を口にするを樂みとせり、此倶樂部は朝飯のみに、日本料理の間に合はざるより、西洋料理を用ゐ居れるも、晝餐夜食の二回は必ず純粹の日本料理を用ひ居り、料理人と云ふは右の兵藏一人のみにて、其下に働き居るものには、在米日本人もあり、黒人もありと云ふ、而して其收入は如何と云ふに、同人は倶樂部內に住居し、且つ食事も先方持にて月俸七十五弗を受け、其他の祝儀等を合算して、毎月百弗以上の收入あれば、東京に殘る家族も亦不自由を感ぜざりしとぞ、斯くて滿二年間同地に在りしが、此程歸朝し、當時は前記小島町に妻おはる（二十八）長男孝太郎（八ツ）二男新二郎（五ツ）と共に暮しつゝあり、其後も各所の料理方を命ぜられ、紀元節には宮內省の御用仰せ付けられ、雨宮敬二郎氏還曆賀莚の時の如きは、一人前三十五圓といふ料理を請合しと云ふ、同人の談によれば、西洋人は日本料理の如何にも綺麗なるを喜ぶ由なれど、其材料の何たるは一向に知らざる者多く、蒲鉾を指して護謨なりと云ひて、決して口にせざりし等の滑稽談もありとなん

女子の遊學と父兄

新學年が來たので、今回も亦た昨年と同樣、娘を遊學させたいが、如何なる學校に入れたらよからうかと云ふ質問の手紙が參りますが、是等に就て、一二の注意を父兄の許に致さうと思ひます、

一、娘即ち青年女子と一概に申ますが、各性質を異にし、其向きが違つて居ますから、一々斯うと申すことは出來ませぬ、一體斯樣に呆然した質問を發するのは抑々誤つて居ます、眞に自分の娘の將來を思ふたらば、斯樣な單純な考へでは駄目です、試に新聞社に問ふて見樣の、何某は多少事情も知つて居るだらうから、手紙を出して聞き合せようなど云ふ量見では、滿足な教育を施し得ぬ父兄です、照會するからには、充分信用して居る人であつて、「試に」だの「だらう」などの言葉を用ひぬ程でなければなりませぬ、故に余は斯樣な御狀に對しては斷然御答を致しませぬ、

二、成るべくは父兄自ら先づ上京して、實地取調べられんことを切望するのです、思ひ起すと昨年の此頃で御座いました、余は二人の質問者に對し、此の事を申送つたのです、然るに、其一人なる名古屋附近の某は、勸告に應じ態々上京し、五六の女學校に就て取調べ、且つ校長や舍監にも會ふて行き、次で其娘を上京せしめましたが、其女子は適處を得て立派に勉強し、成績も宜いとの事ですが、他の一人は夫程に手數する必要はない、經濟上にも關係することであるから、娘の欲する學校に入るゝことにしやうと云ふ、意味の返事をしましたが、其結果はどうかと申すと、今春は轉校せんかなど云ふて居るとか仄かに聽き込みました、是等は稀にある例かも知れませんが、兎に角斯樣な結果を示したのは事實ですから、之を記して父兄の御參考に供します、

三、知人誰某の娘も入學して居るからとか何處其處の娘が立派に成功して歸つて來からなど云ふて、他人を賴りにし或は標準として上京せしむるなども、亦た間違つて居ります、斯樣な父兄が居るので、娘を精神的に死せしむる樣なことになるので、是等は父兄に於て大に注意せねばならぬ處です、

四、單に「遊學案内」と云ふ樣な書籍をあてにするなどもよくないことです、あれは唯だ其表面上の規則や程度を知るの一參考に止める位でなければなりません、學則や科程表の立派なことは、必ずしも活きた人間を養成する方法ではありませぬ、人は人により眞の教育をせらるべきものです、併しながら器械的人物となるに滿足し、或は結婚の條件として卒業證書を得る目的の爲にするのならば、余は最初から御相手は致しませぬ（松山生）

衣食住と經濟

學習院教授
女學部長　下田歌子

社會の光は家庭の影である、我々の家庭の淸きか濁れるか、正しきか正しからざるかによつて、我々の社會が明るくもなり暗くもなるのである、家々の經濟が豐かであれば、國家の經濟も豐かになり、個人の衞生が行屆けば、公衆の衞生も容易く行はるゝものである、治國の本は齊家に在り、といはれたる先哲の言は、實に道理に叶つて、我々が家政の整理に注意せねばならぬ所以である、

然るに家政といふものは、普通の見聞や習慣だけで、誰にでも執つて行かるゝものであるから、却つて疎かに思ふやうにもなるのであるが、若しも家政と云ふことが、たゞ寒い時には衣を襲ね、饑えぬやうに食を取り、生れたものは大きくし、死したるものは葬るといふ丈ならば、禽獸にでも出來るので、決してそれ丈では行かぬ、進んで私樂圓滿の家庭をつくり、生活の度を昂め、積めるを散じ、集まれるを分ち、他の不給を補ひ、おしひろめては國家公共の事業にも及ぼさなければならぬのである、現在西洋などに比べると、我々の家などは家ではなくして小屋である、

男子は外を理め、女子は家を整ふることは、云ふまでもなく天賦の職責である、もしも完全に家を整へることが出來るなら、男子が國務の上に現はしたる名譽効績と少しも異る所はないのである、故に主婦たるものは、まづ自ら規律を守り、家人の模範となつて、勤むるものは賞め、怠るものは誡め、老人は老人のやうに、召使は召使、皆その所を得せしめ日常飮食起臥の事より、金錢の出納、疾病、災厄に處する道をも豫め思ひ定めて、家務に澁滯なきやうに心がけ、家人の圓滿なる幸福を計るのは、獨り一家の幸福のみならず、社會の幸福である、

西洋人は實に金錢の使用法には妙を得て、子供に向つても、幼き時よりよく躾をし、例へば子供が誰

に手紙を出す爲に、郵劵を下さるやうにと母親に云へば、近き中にその人に遇ふべき機會でもあると、これ〳〵の時に話して上げやうといふやうなことで一枚の郵劵でも無益には使用させない、けれど慈善などの事の爲に、子供達がその小使を寄附したいといへば、母親は喜んでそれに贊成する、そこで西洋の商人の取引の場合などを見ると、實に戰爭のやうな意氣込で、自己に屬する利益をば一錢でも讓らないのであるが、是等の人がその半面に於て、公共事業に喜んで大金を寄附する所など、殆んど別人のやうである、

最も利に敏いといふ商人ですらも、日本のはなか〳〵悠長で、少しの買物を現金で拂ふといふことを面倒だと云うて嫌ひ、そして何うかすると月末になつて容易に取りに來ないことがある、また私どもなどは或人に逢うて、忙がしさの爲に云ふことを忘れ後で思出して手紙を書くといふやうなこともある、面倒と思ひながら、時と金との不經濟といふことには氣がつかぬのである、

金よりも大切な時の經濟に就ては、西洋人はまたよく考へて居る、學校の教師はその生徒に書物や帳面をかばんに入れる順序まで氣をつけるほどで、一番下に大きい本を入れて、次には何々是々と、出入に都合のよいやうに、一度順序を考へて置くと、なか〳〵手早く始末の出來るもので、どういふ場合にも、無駄に拔さしをすることがなくなる、また或主婦は、女中に寢具を片付けさするに、大體〳〵に就ての順序は元より、毛布は幾つたゝいて、幾つ振るといふことまで命令けて置くほどである、

物品の買置は、時に依つて非常に高下のあるもので、日限が經つても品質の變らぬものゝ外は、買置は丸で不經濟であるから、また或品が重寶だと思うても、差當り入用のものでなければ、買はぬ方がよいのである、

貯金と云ふことは至つて大切なことである、諸般の費用に豫算をたてゝ置いて、剰餘は縱へ聊かなり

とも必ず速かに貯蓄銀行などに預けるのである、例令ばあした引出すにしても、今日要らぬ金ならば矢張預けるといふほどに届いたものである、

飲食物の注意は最も大切なものであつて、病は口より入るの古語の如く、いかほど健康の人も、常に悪食暴飲すれば虚弱となり、之に反し適當なる食物を適度にとり、運動を怠らざる時は、虚弱の人も追々健康の人となるのである、然るに自ら虚弱なりとすまして居る如きは、自暴自棄と云うてもよろしい、

一家の衣食住は資産の多寡によつて定むべきものであるから、飲食物は先づ第一に一家の經濟を基として、一ケ月若干づゝを費すべしと豫定し置き、その範圍に於て出來得る限り、衛生に適したるものを撰ぶべきである、また肉類は菜蔬に比して滋養分の多いことは勿論であるが、野菜にはまた野菜の長所があり、且つ人の體質職業により、又調理の仕方によつて廉價淡味のものも、存外營養となるものであるから、主婦たるものは是等の智識に富み、また割烹の技に熟して居るのが大切である、

料理人及奴婢を澤山召使ふ家にして、主婦自ら指揮助言して、一週間または一旬毎に食品の献立をなして帳簿に記し置き、その日になりて豫定の品拂底なるか、または價の格外に貴き等の事ある時は、また適宜に書加へるといふ風にすれば、他日種々の參考ともなり、また已を得ずして他人に任せざるべからざる場合には、大に不馴の者の參考にもなるのである、

衣服の目的は、身體の温熱を保持し、また外物の侵入刺擊するを妨ぎ、兼て容儀風采を助くる爲め用ひる人の品格に適當なるものを撰擇調製すべきものである、この目的によつて、衛生と儀容とに適ひ、且つ經濟に不利ならぬ注意が肝要である、裁縫、保存、洗濯などもそれ〴〵に細かに注意せねばならぬ

目下の風俗は、正しき時の禮服と云へば、大抵黑の紋附にて、年長けたるは、衣服にも裾模樣なきものをさへ用ひることとなにつて居るが、黑縮緬に、模

様のなき女服は、武家時代、主君の葬儀参列の外、大抵喪にこもる者の重なる儀式に着用せし服装である、敢て儀式に泥む譯ではないが、西洋でも喪装に黒色の縮紗を用ゐるなど、黒はいづれに於ても悲しみを現はすことになつて居る、それ故寡婦は格別であるが、有夫の婦人は、吉禮の場合には今少し華やかなる色合を採ばれては何うかと思ふ、また鼠色なども、往昔小喪に用ひられたもので、泰西に於ても樂しい側には考へられて居らぬのである、併しながら一般の習俗に逆ふといふはむつかしければ、せめて黒紋付を凶禮以外に用ゐる時は、是非裾模様をつけたいと思ふ、文明國として吉凶の禮服に區別のないのも變なものであるから、

産後授乳の注意

楠田病院長　楠田謙藏

授乳は獨り小兒の爲に必要なるのみならず、産褥の經過を佳良ならしむることを得るものなり、故に此點よりするも生母の自ら其兒を哺育するは、極めて緊要の事なりと云はざる可らず。

分娩後幾時間かの睡眠によりて、其疲勞を恢復したるところの産婦は、徐に其愛兒の第一の授乳を試むべし、故に分娩後約七八時間を經れば授乳すべし即ち産婦の乳房は溫湯並に石鹼を用ひて、十分に清潔ならしめたる後、側臥位となり、初生兒を近づきて臥さしめ、其面を乳房に向けしめて、下になりたる乳房を哺ましむべし、此際産婦をして、下になりたる方の肘を以て己れの體を支へ、其前膊に小兒をかき抱き、上になりたる方の手を以て、適宜に其乳頭を小兒の口腔に輸り入れ、且つ其鼻孔を塞がぬやうに注意するを要す、但し哺乳に先ちて、小兒の口腔は溫湯に浸したる布片を用ひて、能く拭ひ清め置くべし、第一回の哺乳は、小兒に於ても、何れも十分には吸引し難かるべきを以て、良き程に止め置きて、更に二三時間の後に、第二回の授乳を試み、引

續きて二三時間毎に左右交番に哺乳せしむべし、第一回の哺乳は、便宜上右側の乳房よりするも、左側の乳房よりするも可なれども、若し第一回に右側を哺ませたる時は、第二回は左側を哺ますやうになさゞるべからず、

分娩後十日間は、常に側臥の位置にて授乳し、決して之が爲に坐位をとるやうのことあるべからず、

授乳後は毎回溫湯に浸したる布片にて、乳房、口腔兩ながら能く拭ひ置くべし、

授乳に先ちて、拭ひ清めたる乳房は、授乳を了る迄、不潔なる手もしくは衣服等に觸れざるやうに注意せざるべからず、初生兒は初の程は尙未だ活潑に哺乳することを得ざるものなれば、授乳は十分氣永く徐になさゞる可らず、一回の授乳時間は、半時間もしくは其以上にも及ぶべし、

授乳の時刻を定め置きて、之を習慣せしむるは、産婦の爲にも、小兒の爲めにも甚利益多き事なり、初め數日間勉めて之を實行する時は、容易に其規則を守ることを得るに至るべし、初生兒に在りては、凡そ二時間乃至三時間毎に、一回哺乳せしめ、夜間は初めの中は晝間と略ぼ同樣なれど、日を經るに從ひ、漸く度數を減じて、産婦も成るべく安眠し得るやうになすべし、

授乳を終れば、小兒は別床に移らしめ、決して母と共に臥さしむべからず、然らざれば往々過失によりて危險を惹起すことあるべし、

乳頭の短きもの、或は陷凹せるものは、手指にて摘み、且つ引延ばすべし、乳房の扁平にして緊滿せるものは、小兒の哺乳困難なるべきを以て、吸乳子を以て吸引すべし、生母自ら授乳するは望ましきことなれども、全く乳汁の分泌せざる場合には詮方なかるべく、よし又たとひ乳汁分泌すとも、精神病、結核其他の傳染病及慢性皮膚病に罹れるものは、止むことを得ずして授乳を禁ぜざるべからず、但し榮養不良の爲に乳汁の分泌少きものゝ如きは、勉めて榮養を盛にせしむることを計るべし、

たとひ分娩後乳汁の分泌少くとも、數日間は通常の塲合の如く哺乳を試むべし、こは乳汁の分泌の數日後に至りて、漸く旺盛となる塲合あるのみならず若し乳汁は小兒を哺育するに足るほど分泌せざるも之が爲に身體の復故機能を盛んならしむる利益あるを以てなり、

發熱、下痢、もしくは食物の中毒等の塲合には、一時授乳を中止し、其恢復を待ちて、始めて授乳すべし、

始めより授乳することを得ざる塲合には、乳房はフランネルなどの布片にて壓抵し、產婦の飮食物を少しく減量し、通利を十分にし、若し乳房甚しく緊張したる塲合には、吸乳子を用ひて乳汁を吸取り、尙分泌旺盛なるものには、氷嚢を貼しなどすべし、

產後凡そ一年ばかりにて授乳を廢するを通常とす凡そ此時期に至れば、乳汁の分泌自ら減却するものなり、若し授乳期中に姙娠したる塲合には、直に授乳を廢すべし、

精神上並に榮養上の影響によりて、乳汁の量並に成分に甚だ著しき差異を生ずるものなるを以て授乳中の攝生は獨り母體自身の爲に必要なるのみならず、小兒の爲にも甚だ必要なり、若し生母の不攝生の爲に、小兒の榮養を傷ひ、若くは一時授乳を廢せざるを得ざるが如き事ありて、將來其兒の羸弱を招くことあらんか、實に其婦人は後嗣を養育すべき天職を無視したるものと謂はざる可らず、

精神感動の乳汁分泌に影響を及ぼすこと、實に驚くに堪へたり、或は一時の悲哀、驚怖の爲に、卒然乳汁の分泌全く絕止することは、決して稀ならざる例なり、縱ひ左までならずとも、或は著しく分泌の量を減じ、或は成分に變化を來し、之が爲に小兒をして甚しき影響を蒙らしむべし、故に授乳中は成べく精神を安靜にして、過度の感動を避けざるべからず、

食物も亦乳汁分泌に密接の關係あり、分娩後最初の數日は、重に流動性の食物、即ち牛乳、肉羹汁、

粥等を食し、且つ半熟卵、軟らかき肉、麵包等をも適宜に食すべし、第五日に至りて、既に分娩後第一回の排便を終りたる時は、榮養量稍多き食物を與へ既に第一週を過ぐれば、佳良なる牛肉、魚肉、鳥肉軟かき飯、並に軟かき蔬果類をも採るべし、斯くして身體の榮養を盛ならしめ、體格を强壯ならしめざるべからず、下痢便秘共に乳汁の分泌に影響あるべきを以て、常に適宜に之を調節するを要す日常食膳に上ぼすものに非ざる異種の食物を攝取せざるを可とす、

授乳中の藥用は、醫士の此時期に用ひることを許したる藥物ならざれば猥に用ふべからず、多數の藥物は乳汁中に混じて排泄せらるゝを以て、之を攝取したる小兒は、其藥物の作用の影響を蒙るべし、或は又此事を應用して、小兒の身體に、或藥物を作用せしめんとする時、殊更に生母をして其藥物を服用せしむるが如きことあり、

適當の運動は乳汁の分泌を盛ならしむるに足れども、過度の運動は却つて不可なり、殊に過度の運動の爲に、甚しく發汗する如き場合には、乳汁の分量を減ずべし、乳房を冷却するは、乳汁分泌の障碍を來すべきを以て、常に軟かき布片を以て之を被ひ置くべし、されど決して之に壓迫を加ふべからず、

既に授乳期の終に至れば、漸次に授乳を廢すべし頓に廢するは小兒の爲不利なり、全く授乳を廢するに至らば、軟かき布片を以て輕く乳房を包み置き、若し尚續いて乳房の緊張强き時は、暫らく飲料を減じ、榮養量多き食物を廢し、便通を十分にすべし、

家庭と花の趣味

武内桂舟

美しいものを花のやうなといふ、實に花ほど美しく、且つ淸らかなるものはない、故に婦人は花を培養り、花を愛し、花の趣味を養うて貰ひたいものである、先年我家に置いた下女が、私の花を愛して居

るのを、こんなりのをなど、笑うたことがあつた、

そこで私が、女の癖に花を愛するといふ心のないお前のやうなものは、他へ嫁いても乾度夫に嫌はれて追出されるやうなことになるに違ひない、と云うたことがあつたが、後で聞けば既に追出されて、下女奉公するやうになつたとのことである、極端の例かも知らないが、まんざら當らぬ說でもないやうに思ふ、そこで花を培養つて貰ひたいと云ふのは、培養つて一しほその趣味を感ずるからである、故に宅に庭園でもあつて、花を培養つて居る家の兒供は、公園へ來ても花を眺めて喜んで居るが、さうでない下町の兒供は、すぐに手を出して、一枝折らねば承知しない、その折つた枝はといへば、それもそのまゝで眺めるのではなく、むしるのである、母親に花を愛する趣味があれば、子供もそれに感化され『この花折るべからず、警視廳』など云ふ、不愉快な立札も入らないやうになる、

段々家が建込んで空地が少くなる、都府の中央で庭園をこしらへるといふは、甚だ贅澤なことで、廣くそれを注文することは出來ぬ、併し花をつくるどと云うても、さう億劫にするには及はぬ、物干の下へガラスの破れを搆うて室をつくり、そこに四季折々の花を咲かせることも出來る、そのやうな樂みは外見もよし、自分も樂むことが出來る、主人が一日働いて我家に歸り、心づくしの膳頭に向つた時、これは今日咲いた花であります、と妻君がそこへ持出すといふことになれば、饗應としてはこれ以上のものはあるまじく、今日咲いたといふ花に對した瞬間はいかなる俗念を懷いて居つても、忽ち煙散霧消、心は塵外に超然たるものとなるのであらう、まして一日の骨休をやで、更に翌日の作戰計畫に層一層の勇氣が加はるは、疑ひもなきことである、

また婦人同士の交際の上にも、彼岸の牡丹餅のみでなく、花の交換をもするといふことになれば、交際も美しくなり、花も育てるといふことは、やがて子を育てる上にも參考となり、下らぬ俗話をするよ

り、花の話でもし合ふと云へば、傍から聞いても聞きよく、花の噂をするは、即ち花の美を説くのであつて、人の噂などをするのと違つて、その人柄も奥ゆかしく思はるゝのである、

婦人は生れるとすぐ花の恩をうけて居る、着物でも帶でも、花の模様のないものはない、また知らず識らず花に對して、花の美に感化されて居るのである

近來は外國から花が種々輸入されるので、これ迄のやうに、衣服に於ける花の模様も、櫻や菊といふばかりでなくなつた、然るに自ら花を培養つて見ないと、花の趣味に乏しい所から、折角専門家が意匠した花の圖案も、雲煙過眼視せられるやうなことになる、衣服の色は流行に逆らふことは出來ぬが、模様は各自好む花をつけるなども妙である、



婦人は家事でなか／＼忙がしい職分を持つて居るから、滅多に外出は出來ぬ、故に庭園なり、室を工夫して花を培養り、それを樂むは保養にもなり、前述の如く終日外に出て働ける夫を慰むる手段にもなり、子女を教育する上にも裨益するのである、されどその暇なしなど〻云ふは、家事に働く暇もない人で、遊ぶ方も忙がしき中に算入したのであらう、故に婦人が花を培養るといふて

とは、家事の一科と見ても差支ない、

願くは多くの婦人諸君、花を培養り花を愛する人とならんことを、花を見て邪念を起す人もあるまじく、花を培養る人に、罪を犯した人は少い、成るべく花の美に近づいて、その心を花の如く美しくしたいものである、花は美しくて、しかも富者にも媚びず、谷の峡間にでも變らぬ色に咲くのである、

臺どころ

中島春郊

野菜の酢漬

◎筍のせめ皮　根もとより皮を剝ぎ、終に至りて柔き皮あり、これを細く短冊に斷切り、能く茹で、幾度も水にて洗ひ、其水を切りて酢に漬ければ、一際味の異るものにて最も妙なり、丸唐辛子を鋏にて細かに切り、種を去りて、聊か之に加へなば、味頗る美なり、

◎玉葱　これは上つらより剝し取りて、横に二ツに切り、酢に漬けて唐辛子を加へること、何れも同様なり、最も即席漬に限るものにて、翌日になれば味劣るべし、

筍料理

筍は皮を剝ぎ、又は皮付のまゝ湯煮るもあり、先づ皮のまゝ湯煮る方を一般によしと云へり、皮の儘にて湯煮んとせば、小なるものは石附の固き部分を少しくそぎとり、そのまゝに湯煮てよし、可成大なるものは二切とし、最も大なるものは、更に縱に割るべし、湯煮たるものは、いづれも水に浸し置き、二三度水を取換へ、筍の澁を取り、煮る際に程よく切りて、望み通りのものを調理するなり、

◎筍の餡掛　又は葛煮とも云ふ、湯煮て水に浸したるものを程よく切り、醤油鰹節に砂糖を少し加へ、又砂糖少量にして、味醂を用うれば最も味よし、而して煮揚げたるものに、葛を解いてその鍋の中へおげ、葛の煮えて餡になるを見て鍋を下すなり、それ

より碗にとりて山葵を置くことを忘る可らず、又木の芽は、筍のつきものと知るべし、

◎筍の卵餡　煮方は右に異ることなし、山椒を少しく入れて煮揚げ、葛を掛ける前に煮くづれたる山椒をとり、卵と葛とを解いて鍋の中へわけ、充分餡にかへりたる時鍋をおろし、碗に取りてその上に山葵及び更に山椒を載せて出すべし、併し山椒を嗜まざる人は、上置のものを取除くこと容易なれど、煮る際に入れたるものは、其便利に乏しき故、山椒を上置にするのみを却つてよしとす、

◎筍の酢だき　湯煮たるものを薄く切り、酢と味淋に少し砂糖を加へて味を加減する也、

◎筍鮓　湯煮たるもの丶柔かなる部分を薄く切りて酢に浸し置き、鯛又は鱵、走りなどを三枚におろし、薄鹽をして酢に漬け、これを筍に挾み、鱗鮓の桶に入れて輕く絞るなり、尤も酢漬の生姜及山椒を添へて出すべし、

◎筍の卵綴　湯煮たるものを薄く切り、それに椎茸及び萌し三葉又は糸三葉などを短く切り、薄したじに鰹節の殻を去りたるものに味淋を加へ、又聊か砂糖にて味を加減し、これを煮揚げ、卵のときたるものを掛けて綴ぢるなり、器物に採りて、山椒を付けること例の如し、

◎筍の糸煮　湯煮たるものを縦に薄く切り、是を重ねて、又縦に糸の如く細く切り、三杯酢にて煮揚げ、素燒をして煮たる魚などの添となす時は至極妙なり、

◎筍の摘入　一名操の玉といふ、湯煮したる筍の上部即ち梢の處を薄く細末に切り、魚の摘入の中に交せて煮あげるなり、これは碗の種に用ひてよし、

野菜の辛煮

◎蕗の薹　細くほごし、生醬油を入れて汁氣のなくなる迄煮つけるべし、尤も砂糖を入れる分量は人々の好みによると雖、いづれも充分に煮込置かずば永く蓄へがたし、

◎錢丸　錢丸とは野蕗の出葉のことにて、蕗の薹

の煮込み方と、少しも異ることなし

◎蕗の葉　如何に大蕗の葉にても、柔らかなる新葉なれば、細かに刻みて右の如く煮つけるなり、酒の肴などには最も適せり、

◎牛蒡の葉　新葉と新茎とを細かに刻み、唐辛子を少し入れ、生醤油に砂糖を適宜に入れて能く煮込むこと、いづれも同様なり、

◎山椒芽　芽の少し伸びたるものを湯煮こぼし、葉筋を抜取り、生醤油も砂糖を少し入れて充分に煮込むべし、

◎山椒の實　青き中は種ともに、生醤油に砂糖をいさゝか入れて、黒茶色になるまで煮込むべし、又實の枯れたるものは、種を取りて同様に煮込むなり

◎葉唐辛子　葉の裏、又は茎の虫、及芥塵を能く調べて取捨て、葉實ともに悉く摘取りて湯煮こぼし生醤油にて煮つけ、砂糖少しく加へるをよしとす、數日蓄へるには醤油多量に入れ、充分に煮込み置くべし、

精進の汁種

◎陸海の玉　山芋を山葵卸にて擦おろし、朧昆布又は薄雪昆布にても鋏にて細かによく切り、蓮根のおろしを三分の一と思しき程と共に攪拌せ、これに饂飩粉四分の一を加へ、再度よく練合せ、玉にして汁種となすものなり、

◎又一法　山の芋又はツク芋を擦おろし、是に乾海苔を火に翳してよく揉碎き、適宜に攪交せたるものを玉になし、メリケン粉をつけて汁種となさば、蓮根などのものに競べて遙かに味美なるべし、

◎又一法　これは前の品に比べて、等の下るものなれども、大根おろしをよく絞りて水を去り、朧昆布にても又は乾海苔の下等品にても、よく揉みて細かになし、饂飩粉と共によくかきませて玉となし、汁種としたるも中々によきものなり、

◎玉津島　慈姑の皮を薄く剝取り、茎をその儘に殘し、能く湯煮をなして、柔らかになりたる時、一つ宛布巾につゝみ、茎のとれぬやうに俎の上にのせ

鍋の蓋の如きものにて押潰し、それに饂飩粉をつけて汁種としたるなり、又饂飩粉の上を海苔にて捲けば、格別に味美なるべし、この玉津島とは、その昔より付け來りの名にして、慈姑の身を玉津島の島に見立て、莖を島に渡せる橋に見做したるあり、

◎薬玉　豆腐を潰し、布巾に包みて水をよく絞り椎茸を細くたち、牛蒡を極めて薄くそゝがし、それに饂飩粉をよく潰し、共に搔交せて玉となし、汁種に出來あげるものなり、また時期によりて、秋なれば松茸を入るべし、椎茸よりは遙かに其味をます、

◎鳴戸　豆腐を布巾にてよく水を絞り、これに饂飩粉を摺潰し、粉末にして聊の醤油を加へ、味をつけたるものゝ油皮の水に浸し、柔らかになりたるものと、乾海苔とを重ね、これて卷酢の如くに捲き、その上を乾瓢にて結び、よく湯煮をするなり、煮えあがりたる時、鍋の中より取あげて、小口切にして汁種にすべし、

◎鷺沼　百合根のほごしたると、椎茸の繊打にしたるものを少し入れ、これに突崩したる豆腐を入れて汁種とするもよきものなり、椀にとり、その上に芹を五分切にしてまくをよしとす、芹は鷺沼と云ふ縁にてまくべきものなれども、芹のなき時は萠し三つ葉、又は糸三つ葉にて代用適宜あるべし

輕便支那料理

萩村あき子

◎醬肉　豚のすね肉を、十人前に二百匁の割合にて、湯を澤山入れて一時間ほど茹で、それをすくひ上げ、その汁は外へ取つて置き、その鍋に生醬油を五勺ほどゝ、今取つて置いた汁を匙に二杯ほど入れ葱二本ばかりと、生姜とを丸のまゝ二つ三つ入れ、これは香ひをつける丈で後では用ひない、かくて燒きつく位煮つめ、薄く切つて西洋皿に盛り、胡椒をかけて出す、

◎炸麻花　玉子を三つに、砂糖を茶飲茶碗に三杯

ほど入れて後、メリケン粉をまぜて練る、これは一度に百匁位は練れる、その練つたのを薄くのばし、蕎麥のゝびたやうになつたのを、巾三四分、長さ一寸二三分に切り、二枚かさねて、蒟蒻のたづなのやうに捻り、豚の油で揚げる、

◎溜魚片　比目魚をそぎ身に切つて、筍も椎茸も同じやうに、そぎ身に切り、葱は細かに切つて置く、さて外にうき粉を茶碗に一杯位の水で堅くとき、鹽を少し入れる、その中に前の魚を入れてかきまぜると、魚に衣がつくから、そのまゝ一枚づゝ油が煮立つた所へ入れて揚げる、揚つてしまへば、前の品々を一しよに入れて、スープか湯にうき粉を少し入れ鹽と酢とを少しづゝ加へたるものを入れて煮上げる

◎水餃子　豚の肉をよくたゝいて、その中に生姜と葱とをこまかに刻んで入れて、肉が二百匁なら醤油三勺といふ割合で胡麻油を少し入れ、外にメリケン粉をよくこねて先の肉を包み、形は丸く饅頭のやうにでも、柏餅のやうにでもし、湯の煮えたつた中に入れて茹でる、茹ればあたゝかいうちに、醤油か酢を添へて出す、

◎清湯丸子　豚肉をよくたゝき、生姜をみぢんに切つて入れ、鹽を少しばかり加へて、丸めて煮出しの中へ入れる、そして充分煮えた頃、上のあくを取去つて、鹽胡椒を少し加へ、何か青みに菠薐草などをバラリと入れ、醤油を少し加へておろす、

◎芙蓉糕　メリケン粉百匁の中へ、玉子三つこはし、よくこね交ぜ、薄くのばし、蕎麥のやうに切つて、油にてあげる、あがれば外にすくひあげておき別に鍋に水を一合位と、砂糖四杯ほどゝを入れて、飴のやうに糸を引くやうになれば、水飴を二匙ほど入れ、よく交ぜ、その中へ前にあげて置いたものを入れ、よく交ぜ、俎板かのし板の上に油を引き、その中に手早く上げて、四五分位の厚さにのばし、上に食紅で鴇色に色づけした砂糖をふりかけ、よくたゝきつけて、暫らくすると固まる、その時これを四角形に庖丁で切る、

日々の料理

細君の最も注意すべき事

料理と家庭とは最も趣味ある問題であるが、何うも世間の多くは料理と家庭が別々で困る、西洋などのやうに親み馴むといふことが尠い、之れは今までの習慣も悪いが、根本から言ふと其家の主婦たるものが料理を知らず、又主人公も一向御氣が付かれずに、唯々飲み且つ食ふといふ主義で、濟まして居るからである、

◎家庭の要素　家にあるものは旨い料理をして、外から歸つて來た主人公に薦める……外交に勞れてやれ〳〵と安坐して晩餐を食するときに主人公の口に適するもの而も一家内にも亦旨いと思はせるものを食さしめ面白き話……温き家庭を作る程愉快なるものはあるまい、

◎經濟で滋養　其處で料理は材料に金を費せば旨いものが出來ると思ふのは大間違である、……勿論金を費ければ旨いには違ひないが、……其主眼とする所は經濟的に滋養的に調理するのである、つまり同一の材料を幾通りにも料理し、或は味の調和を考へて何時も異つた料理をして消化と滋養とを適當ならしむるのが肝要です、

◎精神的作用　料理は唯に科學的の考へを以てするばかりでなく、大に精神的作用を以てせればならぬ例へば(甲)刺肉を作るにも鮪をブツ〳〵に切つて之を皿に盛つたのも(乙)料理法に協ふやうに立派に作くたのも、其味は同一であるに…違ひないが、乙の方は一見して彼れは旨さうであると感ぜしむる、其時に已に精神的作用で未だ箸を執らざるに自然に唾液が出て來るのである、唾液は物を消化する力の大なるものであるから、其物を食べても消化が早くて、さうして滋養になるのである、

◎主婦の吩附　夫から料理法を知つて居るといふ事は主婦自から手を下す場合ばかりでなく、女中に命ずるにも何んな材料を買求めて何ういふ料理をせよ、といふ事を命ずること、若くば勝手許の監督の場合もあるのであるから、是非心得て居らればならぬと思ふ、

◎女中一任の弊　隨分世間には女中から『奥様今晩は何んなお料理に致しませう』と云はれて奥様は學校を出たばかりで其んなことは一向知らぬから『お前良いやうに遣つてお呉れ』といふ果ては毎度質問るゝことの苦さに全く女中一任、料理にも何にもならぬ可惜材料を不經濟不衞生に費消して居らるゝ方々が多い、此等は單に勝手許の損得といふばかりでなく、不愉快なる家庭を作つて居らるゝのである、又市街地の習慣として客來の節に直に料理屋に種々の注文をして、不經濟なる料理を馳走するが、此等も西洋のやうに、主婦の指揮に成つたものを振舞ふやうにすれば、交際も益々親密になる譯で、唯に家庭に對する利益ばかりでないと信ずる、(秋穗女子割烹學校長談)

召使の躾け方

醫學博士　三宅　秀

下婢にせよ、僕にせよ、或程度迄の普通教育を受けた後人の召仕となるのが、極く必要な事である、就中下女と申しても飯炊の如き賤しき業をする者は格別教育がなくてもよいが中働以上に使ふものは無論相當の教育がなければならぬ、受取證一つ書けない樣な者には迚も勤まらないから、斯の如き女中を教育する學校も疾くに設けられて居る、其れは單に外國ばかりではなく、內地にも此目的を以て立てた學校がある樣である、

其れから子守學校であるが、是れも子守ばかりをして居つては、學問をする事が出來ぬから、子守をしつゝ讀書を學ぶので、私の申す奴婢教育には適かない樣である、併し奴婢を教育すれば第一其主家の經濟上にも衛生上にも宜いのみならず、教育された婢僕が自分の家に戻つた後迄も使はれた家を一生有難いと思つて忘れぬであらうと考へる、それのみならず、教育を受けた奴婢が漸次自家に歸つて家庭を成す事になれば、詰り日本帝國の幸福であるから現今の所では別段奴婢を教育する學校もない樣ですが、彼等を雇つて居る家が、取りも直さず、即ち學校であると思つて、其教育を受けねばならない、往昔と違つて何故に今日は奴婢の教育が必要になつて來たかと云ふに、是れは日本の社會全體の狀況が革つて來たからである、維新前の頃には奴婢の供給が澤山であつて、加之卑賤の者が糊口の爲に奉公するばかりでなく、充分資產のある中等生活をするものも、田舍に居つては何にも覺えぬと云ふ所から都會に出で丶種々なる行儀作法、交際を初め、其他の事迄も見習ひ覺えて歸つたものである、

斯の如く維新前迄は、全體の學校教育が女子には殆どなかつた爲に、田舍の人は態々都會に出て身を立て、家を持つ事の下地を造らなければ、社會に立つて中以上の人と交際も出來ない有樣であるから、

之が為見習に奉公する者が多かつたのである、然らば田舍の生活と都會の生活とは以前はドウ違つて居つたかと云ふに、往昔は田舍も都會も生活の有樣に於ては、格別違つては居らなかつたので、食物も衣服も屋內で使用する器具も、大抵日本國內何處に往くも先づ同じ樣であつたから、都會の事を見習つて田舍に歸れば、直ぐ其れを自己の社會に應用することが出來た、此處等の點に於ては往昔の方が便利であつた樣に思はれる、

然るに維新後に至り百般の事が皆革つて來たから、少しく資產ある田舍の子女は、從來の如く人の奴僕となりて稽古をするには及ばない、何處でも近く、學校が設けられて、各々容易に學問が出來る、其れに又奉公人となれば、同等の資格を有する人間でも、假りに主從の約束がある以上は、隨分無理を云はれても、其命令には背かれない樣な壓制を受けた往昔とは違ひ今日は民法などの如き法律も出來て、雇主と被傭人との關係が主從でなく、殆ど同等になつて居る、乃で被傭人の進退が自由なる所から、其樣な面倒な事を習つて國に歸つても、自家の用には立ぬとか、或は六ケ敷いとか窮屈だとか思ふのであるが、ドレ程親切に教て遣ら



うとしても、中途で郷里に歸つて了ふから、實に不都合な譯で、奴婢の敎育が一向に行はれない、其れで今日一般の敎育は漸々隆盛になつたか、奴婢に對してのみは、往昔から退歩する有樣であると思ふから、珍ら敷もない事ではあるが、必要に迫られて斯樣な話をするのである、

斯く申しても、或は學校が遍く立つたなら、奴婢も敎育されるのであらうと考へて居るものもあらうが、學校は學校相應の課業があるから、家庭に關する微細な事迄、實地に敎へて遣る譯には行かない、併し學資も充分で完全な學校に入り、學業の課程を蹈んで行かれる者は宜いが、奴婢抔の如きは、尋常小學でも卒れば、無論其上を學ぶ事は出來ないのみならず、家庭の事を實地に習ひて覺ゆる譯にも行かないから、私は然樣な者に汎く敎育を及ぼしたいと思ふ、亞米利加では、人に雇はれて勤めを仕ながら其餘暇は修業する事が大變自由に出來るので、大學の學生でも一年は學校で勉强し、又一年は外に在つて稼ぎ、其翌年は大學に來て大學を續ける、斯樣にして恰度四年の所を八ヶ年かゝつて卒業し得らるゝ樣な仕組になつて居るが、日本では男女とも其樣に自由の出來る學校はない、學校へ這入れば、何でも抑へつけて學ばせ、必ず何年間に一定の課目を卒業しろと云ふ樣になつて居る、男女共家事に關する事には敎育が屆かないのである、吾々の宅に居る學僕などは、半分は學問をして、半分は家事の爲に追使はれる者であるから、眞逆是等の者に對して水を汲ませたり、薪を割らせたりする樣な荒仕事はさせないが、使走りをしたり取次をするが本業とさせてある、然るに、鳥渡來客があつても、取次さへ出來なかつたり、或は其應答風が客に對して甚しく失禮であつたりして、實に主人の面皮を缺ぐ樣な時もある、又他家より到來したる物品に對して、受取を遣る場合には、其れすら滿足に書けなかつたり、其他書狀の半切れをつがせるとか、障子を貼らせるかしても、是も甚だ不器用で出來ない者が多いのであ

る、而して斯く一向に不馴にて家庭の用に足らぬのを以て、書生は是が當然だと心得て居る者がある、又男子は細かな事をせずとも、女子がするから宜いと思つて居る者も世の中には澤山あるが、實に嘆かはしいと思ふ、勿論女子は家を治めるのが本分であるから、それが細い仕事をするのは至當である、故に若い中から他の家へ雇はれて仕事をするのは、全く自分が家を持つた後の爲になる修業だと考へ、婢僕の方でも可成勉强して、實地に就て學ぶべきであるが、主家の方でも召使を使ふには、氣を長く敎へ導いて、一人でも世間の事に通じた良い人を拵へ、一軒でも宜い家庭を造らせる義務があると思ふ、

前述の如く今日は都鄙の生活の差別が非常に違つて來たから、田舍から出て來た者抔は、斯樣な難い事や、西洋流の事は見覺えて國に歸るも全く無益だといふ考へを持つかも知れないが、其れは淺薄な考へである、何となれば西洋流でも金の要る事は經濟が許さないから、田舍迄は行はれないが、輕便にして、金のかゝらない事は西洋流でもズン〳〵開けて行くから、今日の奴婢等が、後になると必ず目が醒めて、東京に居つた時、彼の事も覺えてくれば宜かつたと悔いるに相違ないから、主家に於て奴婢の敎育に親切にしてやらなければならぬ筈の者だらうと思ふ、

其れから此世の中が變つて參つたに就き、種々な事に影響を及ぼしたので元來日本は國が豐饒であつたから、衣服飮食共骨折らずして、天然に産出した者を、田舍で、直ぐ用に供することも出來たが、漸々人口が增殖するに從ひ、天然物が乏しくなつて來るから、是非儉約をしなければ、衣服の用に不足を生ずる樣になつた上に、人智が進むと醜い物が嫌ひになつたり、不潔が厭になつたりする、是は强ち衞生の方からばかり勸めるばかりではないが、醜い物と美い物とを並べれば、奇麗な方を好むのは人間の天質であるから、人が段々美しい品物を好む樣になつて來る、例へば上水にしても今日東京の樣に、

清淨なる多摩川の水を沈澄池で澱めて汚物を沈ましめ、更に濾過池で之を漉して、少しも汚物の混らない樣に之を鐵管に入れて家毎に供給して居るが、斯樣に結構な水と、尋常の堀井戸の汚い水とを比べれば、何人も清潔な水を飲む事を好むに違ひない。

全體水は天產物であるが、斯樣な清潔なものは吾々の口に入る迄に、遠方より引き來る、加之種々な手數を經たる大切な品物であるから、田舍生活をして居て、平日井水を飲み馴れた者が、東京に出て結構なこの價のある水を飲めば、幾らか使ひ方が違はなければならない、往昔斯樣な良い水を供給されなかつた時ですら、下女や下男には、湯水の無駄使ひすることを戒め、可成失費を省く樣に戒めて、これも勿體ない其れも贅澤だと敎へたのであるが、至極結構な敎へ方だと思ふ。

何事も質素儉約であつた昔でさへ、右の樣に奴婢を敎へた、况んや今日は吾々が日々用ゐる品物が精巧を加へ、段々良いものを使ふ樣になつて居るから水と雖も無駄に使はぬ樣に、よく注意して戒めなければならない、米でも薪でも大根胡蘿蔔でも、今日のものと往昔の物と比べて見ると、ドウしても昔の野菜は食べられぬ樣な品である、何となれば之を栽培する農家の仕方が、今よりも餘程下手であつたから、價は廉いが粗末な品であつた、其他肉類でも雞卵でも、都會の食物に供して居る品には多少人工を加へ、精良に造つてあるから、往昔よりも今日は一層無駄を省きて、儉約する事を奴婢に敎へ込まねばならない。

尙此類を申せば燃料でもさうで、往昔は炭杯を燒いて出す地方でも、其土地では決して之を使はないで、各自山に入り、細い木の枝を伐つて薪となして之を自家用に宛て、幹の太い所は炭にして、都會に送つたのである、所が今日は炭燒自身も薪は用ゐず細枝杯を焚くと家中が燻るから厭だと見えて、農家でも何でも大抵炭を使ふ樣になつて、斯く製造元が炭を使ふ樣になつて了つたから、外に出す炭の供給

が減ずると同時に都會では其價が上つて來るから、そこで使用する品物は非常に高くなつてくる、其結構に尊い炭も、下婢が自分の郷里で粗末に焚き習うた炭も同じ樣に思つて使はれては、實に不經濟で堪へられない話である、併し無駄な費用を省く事は、强ち細く數へずとも、天產物が乏しくなると、それにつれて價が高くなるから、自然儉約をする樣になつて來る、例へば薪炭の値が高くなると、風呂を沸すにも飯を炊くにも、石炭又はコークスを使ふ樣になる、尤も此方が經濟になつてよいが、さて之を使ふには、在來の土竈などでは焚けないから、詰り其を改良せなければならん、乃で改良した竈を使ふて居ると、田舎から出た者は、之が使用に馴れぬ爲め滿足に米を炊ぐ事も出來ない、夫故に先づ以て竈の使ひ方から敎へ初めなければならぬ、都會の生活に慣れない奉公人を使ふて家を治める時には、家庭學校の敎師は餘計骨が折れる、さらばと云つて之を抛棄つて置けば、獨り自家の不經濟ばかりでなく、火の用心を怠りて隨分危險な事が生じて、或は生命や財產をも失ふ恐がある、就中恐るべきは彼の電氣燈であつて、今日は東京許りでない、地方の少し都會らしい所に行くと電燈を點けて居るので、瓦斯燈よりも其方が餘計に行はれて居る、所が電氣燈にては隨分危險な事があつて、既に電氣に觸れて奴婢の死んだ例がある、故に電氣燈を使つて居る家では、豫め奴婢に其危險物で恐るべき事を敎へて置かねばならない、吾々の家に其樣な變事があつては、世間に對して申譯がない、それに觸れて死ぬ樣に强い電氣は、家の內に通じない筈であるが、天氣が惡く雷鳴抔ある時には、それが爲に電氣の關係が變化したか或は變壓器と云ふ器械があつて、途中を送る電氣は、何程强くても、家の內に通ずる時分には充分弱くなして、强力な電氣は一切家內には這入らんやうにしてある、然るに其器械が狂つて在つたか何かの故で、即死する樣になつて居るのである、畢竟斯樣な事も、主人や主婦自身丈は知て居らうが、之を點け

たり消したりする婢僕に迄は、悉しく敎へて置かねと見える、電氣の取扱ひを下女下男に任かすときには、能く敎へないと命を捨てる樣な珍事が出來るので、所謂死ぬ者貧乏、實に可愛想な譯である、若し之れが瓦斯燈であつたら大變である、瓦斯は點火した時周圍をしめ、戸締りを嚴重にして置きながら、瓦斯燈の栓を轉じて消火せず、唯口にて吹消しでもすると、室内に瓦斯が籠つて、中に居る人は窒息して了ふやうな事になる、瓦斯燈の扱ひ方を知らぬ者に打任せて置き、下女の部屋か何かに點けて置いたのを吹消して夫がために死ぬ場合には、粗相な事をした罪滅しに其女一人丈窒息して了ふに止まるが、人の死ぬ程澤山に瓦斯が室内に籠つて居る所に、手燭でも携へた儘に這入れば、忽ち室内一面の火になるから、主人の家が皆燒失するに至るのである、實に電氣燈の如き文明の利器を用ふるなら、豫め其怖るべきものなる事を、婢僕に敎へて置かなければならぬことである、

幼兒に對する注意

醫學士　久保杏林

世に病者の看護程其職の貴くして、其責の重きはなかるべし、凡て大人と云はず、小人といはず、之を看護するとなれば、其病者の生命はいはゞ巳が保護の中に托せられたる者なれば、最も謹愼にも謹愼し、注意の上にも注意して、充分其職責を盡すべき事なり、わけて小兒の看護に至りては、啻に病氣の時のみにあらず、云ふまでもなく、平時の看護こそ最も大切にして、親々が保育法の如何によりては、知らず識らずの間に測られざる大患を釀すは間々見る所也、されば先づ小兒平時の注意を述べて、更に病兒の看護法に及ぶべし、

◎浴湯　浴湯は小兒をして清潔に、爽快ならしめ、また其皮膚を强壯にして、感冒を豫防するなど凡て小兒の健康を保つに最も緊要の事なり、故に日々一回位宛温浴せしむるを可とす、但し其温度は大抵

九十七八度とし、入浴の時間は凡そ五分時間にして宜しかるべし、尤も入浴中は其頭部を盥の中に下低て湯を小兒の耳内に流入る杯は最も愼むべく、支體は始終タオルなどにて被包み、猥りに之を露出せしむることなく、浴後暫時の間とても温くして柔かき毛布に包み置きて、幾分の濕氣を吸收せしめたる後、更に柔軟なる毛巾を以て其體の局部より局部と次第に拭ひ去りては之を被ひ、決して赤裸々にして一度に之を拭ふなどの事は爲すべからず、

◎顔貌　小兒顔貌の變常は、また實に疾病の徵候を知るに最も緊要なるものなり、即ち

腦病の徵候あるものは、顔面時として潮紅となりまた蒼白となり、かつ光線或は音響に感動し易くして、常に啼泣煩躁して眠らざるものなり、

腹痛症あるものは屢々其鼻翼をヒク〱と動かし兩脚は必ず屈めて腹部まで擧ぐるを例とせり、

胃病を有せるものは、其口角たゞれて蒼白き輪狀帶を呈し、口唇の皮は幾條となく竪に切るゝもの也

尙何病にかゝはらず、小兒の顔色の潮紅となつたる時は必ず枕を高め、また之に反して蒼白となりたる時は枕を低めるがよし、

◎啼泣　小兒の啼泣するはさま〴〵の因由を含む者なり、或は饑渴を訴へ、或は大小便に衣服の濕りたる、或は帶紐堅くして腹痛むなど、凡て一時の不快を感ぜし所を知らするのみにあらず、また實に自ら其身に病苦あるを發表するの言語たるものなり、故に饑渴の樣子もなきに尙啼泣する時は必ず衣服を解きて之を改むべく、而も尙止まざる時は宜しく靜に其泣聲を觀察して、醫師の診察を受くべきなり、今小兒の啼泣によりて察知し得べき病因の一二を解かんに、

胃病ある小兒の啼泣は、其聲高く長くして且つ怒調を帶び、滾々涙を流して兩脚は之を屈めて胃部まで擧ぐ、而して其痛の緩むに從ひ、再び之を伸して啜泣しつゝ終に眠りに就く者也、

胸部の焮衝病即ち肺焮衝、氣管支炎、肋膜炎等

の徴候あるものは、其聲低調にして屢々泣き、歇みて永くは續けず、其疼痛の甚しきに似ず、涙を流すこと稀なるものなり、

頭部の疾病腦膜炎、其他頭部の疾病に在りては其啼泣急調にして、時々うつ〳〵と假寢るといへども其醒覺るやまた烈しく啼泣するものなり、

◎禁物　小兒啼きて騒がしき時、之を慰めんとて、其身體を震動するは大害あり、これによりて小兒の啼止むは敢て愉快を覺ゆるが爲にあらずして、其などやかなる腦を震動されて、迷矇するが故なり、

小兒稍成長したる時之に食を與へんとて、親自らまづ其食匙を自身の口に入れて之を喫せしめ、或は其食餌を冷さんとて之を吹くはよろしからず、親の呼吸及び唾液は實に不潔にして、新鮮なる食餌を汚すものなれば也、

鼻目の汚垢を掃除しやらんとて、手巾或は最小の切屑を細く卷きたりして之に送入すべからず、決して其目に觸るゝ所の外他部を洗はんとする勿れ。これ等は知らず識らず大害を來すものなれば也

小兒をして其拇指を吸ばしむる勿れ、親は其指そ口中に入るゝ勿れ、決して空虚なる吸乳罎若くは小切の類を持たしむる勿れ、

項背の力いまだ充分ならざる小兒は、其位置を左右に轉ずるのみに止め決して其體を竪にして抱くべからず、搖籃または褥中に於て劇しく彼を動搖すべからず、無暗に彼をあやさんとて、親自ら利聲を發すること勿れ、これらは痛く小兒の腦を刺激する者なれば也、

◎消化不良症　生母の授乳は小兒の健康を保つに最も大切なり、されば母の養生の善惡は只其身の健康に拘はるのみならず、大に小兒の安危に及ぼすものなれば、母は終始精神を安靜にして過激の感動を避くべく、食物はつとめて榮養分に富みたる消化し易きものを選むべし、過激の精神感動は忽ち乳汁に影響して其性質を變じ易く或は其分量を減じて自然に小兒を害することあり、不消化なる食物は忽ち小兒

をして此の消化不良症に陷らしむるものなり。斯る時は生母は宜しく注意に注意して酸果若くは消化し易からざる食物または果物など攝取することなく、最も自分の榮養をはかれば、自然に小兒をも治するを得べきなり、

　小兒の病氣といへば、其原因は大抵腸胃の病に基くものなり、こは畢竟するに小兒の消食器未だ不完全にして腸胃の甚だ軟弱なるが爲に、若し食物の性質及び分量などに些少にても不適當の所あれば忽ち其働きに變動を起して、身體次第に衰弱し遂には死に至らしむることあり、よし幸にして死を免るゝことありとも、終生虛弱多病の人となり了らしめて人間たるの幸福を得べからしめざるに至るべし、されば小兒を健全に養育せんとせば生母自ら榮養を充分にするは勿論ながら、萬一其體に病氣などあるか或は不幸にして乳汁宜しからず、小兒の全身は蒼白となり、何處となく軟緩みて見ゆるときは、速に遺傳などなき、健康なる乳母の乳によるか、もしまた已むを得ざるときは牛乳にて育つがよし、

　牛乳にて養育する小兒にして、消化不良症に罹ること往々にして是あり、こは通例其母及び侍女等の不注意より起るものなれば、牛乳は必ず朝搾りの新鮮なるものを二三十分間之を煮て沸騰せしめ、消化し易からしめたる後之を冷し置きて、食毎に其分量丈少し宛溫めて用ひ、器皿、吸乳罎、匙等は其度每に一々之を洗滌すべし、然らざれば腐敗したる乳分は常に吸乳管內に附着したるが爲め、自然に不潔の分子をも小兒に吸收せしめて、是より大害を起すことあり、また食後小兒の口內は必ず之を洗ふことを怠るべからず、

　消化不良症に下痢を併發すること間々あり、斯るときは醫治を要すべきは勿論ながら、小兒の身體は每夕必らず溫湯にて之を拭き、腹部には幅廣き絨布など纏ひて臥せしむべし、尙蓖麻子油一匙ばかりを飮用せしめて、不良なる分子を下痢さするもまたよしとす、

◎呼吸器病　小兒の時々咳嗽を發する位の事はさしたる事はなけれど、若し能く之に注意して其咳嗽の仰臥せる時よりも側臥せる時に於て、愈益劇しくなりたる時は、實に呼吸器病の徴候と見做すべく決して之を忽にすべからざる也、

咳嗽と喀痰とは大抵相伴ふものにて、喀痰は通例五六歳以下の小兒にありては、其力未だ弱きがため之を喀出すこと能はずして、多くは之を飲みこむが常なり、されど咳嗽を發せし後、能く其舌根を拭ふときは、奥に止まりたる喀痰をも拭き去ることを得べし、尤も強て之を拭き取らんとてあせるは宜しからず、

輕症の呼吸器病に在りては、小兒の顔色さまでに變せずといへども、重症に至りては其顔面は潮紅となり、頭部は温熱を呈し、且つ重症の者ほど呼吸毎にビク／＼と鼻翼を動かし、呼くいきは吸ふ氣よりも一層の力を要するもの丶如く、眼光は常に直視りて、啼聲は自然に細りて、低くまた短かく側に

見るさへ痛々しさいはんばかりなし、而して此等の諸徴候は小兒にとりては尤も危険なる肺炎の前兆なるものにして、これに先だちて多くは氣管支加答兒を起すものなれど、こは餘程注意するに非ざれば、徴知すること難きものなり、

小兒若し以上の病氣に罹りたるときは宜しく一定の氣温を有する室内に閉居せしめ、其胸部及び手足は能く衣服を以て之を被ひ、決して濕りたる涎掛などは着用せしむべからず、食物は粥汁或は乳汁に限り冷水は患兒の要求に應じて之を與ふるは害なし、尚其經過を速かならしむるため、患兒の胸部を濕布せんとするときはまづ大形の布片を微温湯に浸して之を胸部に纏ひ更に油紙を以て其上を覆ひたる後再び綳帶を以て之を確と卷付くべし、斯くの如くにして其濕氣蒸發して皮膚を冷却せしめざる様幾度も濕布を換ゆるを可とす、また室内の大氣は常に熱湯に沸騰せしめ置きて、清淨純潔を期し決して之を汚濁すべからず。

靜子殿下の御逸事

殿下が大阪府三島郡島本村の御生家にありて、同村尋常小學校へお通ひになつて居る頃、お附の女中が一人あつたが、通學の途中雨霽りの泥濘に下駄の穢れた時、女中が拭ひ參らせんとするを、優しくも「私が穢したのです、私が拭きます」とあつて手づからお拭きになつた、總て自分の用に女中の手を借るやうなことをされ無んだ、

島本小學校を御卒業の上、靜君は京都に上り高等小學校に御入學、御幸町三條の別邸に居られたが、其後學校の都合で彼方此方に移られ、第一高等女學校を優等で御卒業になつた頃は新烏丸通太町下る只今の別邸に居られた、

ところが靜君は餘りお行儀がよいので少し御内氣に見えた、父君の忠輔（子爵）氏はこれを氣にして何うか矯正さうとの考へから第一高等女學校長の河原氏を訪れ、いろ〳〵相談の末、河原氏の推薦で京都因幡藥師家政女學校の名譽敎員とした、

こゝの女教師は重に高等女學校出身であるから、靜君には眞に好都合であつた、華族のお姫樣何が出來るものぞと一般に輕んじて居たが、受持の裁縫科の教授法の巧いこと、一寸の裂、一尺の絲屑それすら、徒には捨てぬやうにたえず生徒に注意された、これには敎員一同舌を卷いたとの事である、

靜君は二年間こゝに敎鞭を執られた、最初は京都から通ふて居られたが、一昨年の八月母君宮子が故人となつたのに就き、後に家政を處理する者がないと云ふので、廣瀨の本邸へ歸り、山崎驛を距る半里の街道を風が吹かうが、雨が降らうが、雪であらうが、霙であらうが、車に乘ると云ふやうなことはなく、毎日〳〵徒歩で通はれた、

汽車は何時も三等であつたが、汽車の中では徒然を慰むべく書見をしたり、また編物などをして居られた、斯うして汽車の中で、行儀のよい事と云つたら、チンと腰を掛けられたら掛けられた限り、斯うで無い時は手を膝の上にして京都まで行かれたこんな有樣であるから、學校の生徒間にも靜君の上に就ては陰口一ツ云ふものもなく、水無瀨樣は代々神主の家柄であるから神樣がお移りなさつてあんなにお行儀がよいのぢやと云つて居たさうである、

それから時間を嚴格に守られる御氣質で、毎日の學校通ひに停車場へお越しなさるのが、必ず發車の五分前と極つて居た、さうしてベンチに腰かけて靜肅に發車時刻をお待ちなされ、もし混雜なる時は誰に限らず座を讓つて遣られたといふ、これで御氣質のお優しいのが知れるであらう、

料理及菓子製造の實驗(二)

富田豊春

淡雪鮑

鮑に鹽を付けて摩擦し、貝をへがし、周圍を取除けて正身ばかりを大根おろしにて擦おろし、厚さ三分位、形は適宜、玉子燒鍋か、フライ鍋、又普通の瀬戸引鍋にてもよし、正胡麻油を多く引いて、强火に懸け、油を煮切り、前の鮑を表裏より、いためる、之にて出來上り、わさび醬油にて食す、

菊花あはび

鮑の正身を、五分角に切り、上下より深さ二分位碁盤目に筋を入れ、正胡麻油を平鍋に引て油を煮切り、前の鮑を轉がして炒ると、菊花の如くなる、別の鍋にて、ざつとゆがき、うに味噌にて食す、うに味噌は、うにを鍋にてゆるめ、赤味噌の摺りたるを少量、玉子のきみを入れて煮るべし、

山葵の卸し法

山葵の皮をむぎ、わさびおろしを火にて炙り、山葵を摺り卸し、煎茶々碗に入れ、又同じ茶碗を合せて、氣根に振りて取出だせば、香氣高く、から味極强くなる、

鰹のビステキ

新鮮の鰹の腸を去り、小口より八分位に切り、正胡麻油にて揚げ、別に上等醬油(鰹一本なれば醬油八合の割)にて煮立て、瓶に入れ、冷まし、前の鰹の揚たのを漬け、浮上らぬやう注意し、凡一週間經過したら、金串をうちて、兩面共よく燒き、西洋皿に盛り、藥味は胡椒或は芥子、

豐春式コロッケー

上等の牛肉五十匁をたゝき、玉子の黄味ばかり三個とを、摺鉢にてよく摺り、米の粉、俗に團子の粉大匙二杯、メリケン粉大匙三杯、胡椒少し入れて煉り、大きめの團子位楕圓形になし、パン粉を附け、ヘットか或はバタにてフライにし、ソースを付けて食す、

白魚の味噌漬

白魚の成丈大きく揃ひたるのを五匹、青竹の串にさし（青竹にて鰻の串の如く、少し平身に作る）別に赤味噌を摺り味淋醤油山椒の粉少量とを交ぜ、器へ凡そ三分位、平らにし、美濃紙八ッ切を一枚敷き、前の白魚を置き、紙を敷き味噌を同じく三分、平らに入れ紙を敷き、白魚を置き、紙を敷き、段々重ねて漬込む四五時間經て、白魚が水飴色になればよし、味噌の附着せぬやう出し、玉子の黄味ばかりを片面に付て火に掛け、兩面をざつと燒く、



利久香餅

うどん粉百目、白砂糖八十匁、白胡麻一合、赤味噌少量、山椒粉少々、水猪口に二杯、右煉り交ぜ、蒸籠へ白木綿裂を敷き、前に煉りたるのを入れて、ふかし、冷めたる時庖丁す、但し白胡麻は炒りて入るべし、

野菜せんべい

慈姑、薩摩芋、八ッ頭芋蓮根等何れも皮をむぎ、一分位に切り、普通煎餅を燒く機械にて燒き、別に白砂糖を煮詰て、片面へ敷き、助炭に掛けて乾かす（砂糖を廢し、醤油を敷くもよし）但しさつま芋製のは、現今東京に賣物あれど、地方には見受けず、依りて玆に加へ記す、

簡單でんがく

普通の豆腐を、巾六分、厚さ四分、丈け一寸五分程に切り、竹の平たき串に差し、平鍋にて四本位づヽ入れてゆで、白木綿の裂の上へ乘せ、水氣を取り味噌を付けて燒く、味噌製法は、木の芽（山椒の若芽）を擂鉢にてよく擂り、赤味噌、白砂糖を適宜に交ぜ、裏漉しにして味淋酒にてのばす、

今川でんがく

燒豆腐を小口から三分位に切り、蒟蒻と同じ樣に切り、茹で、別に赤味噌を擂り、裏漉をなし、白砂糖と、味淋酒を入れて煮、前の二品を椀に盛り湯も入れ出す、味噌は小皿に入れ、食する時に一つ宛はさみ出し、露を切り、味噌を附けて食す、

めしのいろ〳〵

▽わかのめし、▽こはめし（赤、白、黃）△櫻めし
▽茶めし、▽さから茶めし、▽菜めし、▽枸杞めし
▽蓮めし、▽五もくめし、△烏賊めし、▽鯛めし、
▽牡蠣めし、▽松茸めし、▽椎茸めし、▽栗めし、
▽竹の子めし、▽芋めし、▽大根めし、▽胡蘿蔔めし、▽鰻めし（大阪にてまむし名古屋にてまんむし）▽肉めし、（牛）
▽親子めし（鷄）▽天ぷらめし（天丼とも云ふ）▽
▽狐めし ▽豚めし（支那）▽カレーライス、▽麥めし（とろ〳〵めし）▽粟めし ▽黍めし ▽稗めし、

右めしと云ふ言葉は、食物の略と云ふ、或は御食の約轉言か如何、

赤のめし

米一升あれば、小豆一合の割、先づ小豆と水一升五合釜にて煮立て、小柄杓にて汲ては、凡一尺五寸程上よりポチャ〳〵〳〵、又汲ては同樣に、凡そ二百遍も操返し、色が蘇枋色に成つたら冷まし、小豆は取出して、別の鍋にて腹の切れぬやう和らかく煮別に米を研ぎ、笊に揚げて水を切り、冷めたる赤水へ米と小豆又鹽少量を入れ、凡二時間も漬け置き、水加減を見て炊くべし、極めて色が美事に出來て甘味あり、

赤こはめし（赤飯）

赤の出し方は前と同じ、餅米を研ぎ笊に上げ、水を切り、赤水へ五時間も漬置き、笊に揚げ、小豆を適宜に交せ、蒸籠にてふかす、湯氣が上りたれば、冷水を手水に打ち、再び湯氣が上りたれば、又手水を打つ事三度

附言　現今菓子屋では、紅の色は藥を用ゆるが外見を美事にするのみ、小豆の赤を用ゆれば、色も小豆にて奥ゆかし、加之に甘味がある、

白こはめし、黄こはめし

餅米を研ぎ、冷水へ五時間も漬置き、別に黒隱元豆を腹の切れぬやうに煮、前の米を笊に揚げ、水氣を取り、豆を程よく交せ、蒸籠にてふかす、

黄色は梔子を煎じ出した色を附ける、現今は黄の色付粉があり、黒豆も入るなり、夏期蓮の葉のある頃は、白こはめしを、蓮葉に包み、再び蒸すと香氣がうつり、黄の色も附て美味なり、

附言　黄白共に法事に用ゐ、黄は五十回忌以上

櫻めし

鹽漬の櫻の葉二十枚ばかり（櫻もちの皮でもよし廢物利用）釜の底へ敷き、洗米一升、鹽少し加へ、普通のめしの如く水加減して炊くべし、

茶めし

番茶或は飛出し抔云ふ最下等の茶を十匁程に、水一升五合を入れ煎じ、鹽少量を加へ、米一升普通の如く水加減して、炊くべし、但し近來の紅茶、或は臺灣茶等を代用するもよし、

さがら茶めし

普通のめしの水加減の際に、米一升なれば酒三勺醤油は適宜に入れ、能くかき交せて炊くべし、茶色になるから普通茶めしといふ

（續出）



紀念すべ小學校と幼稚園

◎麻布幼稚園　麻布區東鳥居坂にある麻布幼稚園は、本月一日より飯倉片町なる德川紀洲侯の邸内に移轉する事となりたり△幼稚園の現狀　同幼稚園は目下麻布東鳥居坂六番地にあり、園長は吉住愛之助氏夫人吉住菊江子にて、百二十五人（内女兒七十四名男兒五十一名）を收容せる、麻布區内唯一の幼稚園なり△移轉の事情　明治廿四年の創立以來適當の場所を得ずして屢々移轉したりしが其後五箇年の契約を以て、現在の場所の基督教會堂附屬の（日曜學校）を借用したり、然るに此期限も去月卅一日にて滿了する事となり、先方よりも謝絶の申出であるのみか、元來狹隘なる建物なるを以て、是非とも他へ移るの必要ありとて、區内の寺院又は相當なる民家、小學校等につき種々取調ぶる所ありたるに、區内には思はしき所なく、區長始め區内有志者一同當惑し居おり△德川賴倫侯の好意　爰に麻布飯倉片町なる德川賴倫侯は、曩に區内の各小學校に一千圓、小學校教員の優良なる人々へ、慰藉料として一千圓都合二千圓を寄贈せし事あり、常に區内教育の事に心を注ぎ、現に工事中の圖書館も、落成の上は公開せんとの趣意に基けるものなるよし、左れば麻布幼稚園移轉問題に就きても、幸ひ邸内には恰好の建物あれば、其所に移轉して然るべし、又出入に不便ならば、塀の何れなりとも取崩して、新に門を設くるも差支へなしと申出でたるより、幼稚園の當事者は今に始めぬ侯の好意を喜び、區民一同衷心より感謝し居れりとなり△壯大なる建物　右の建物と云ふは邸の正門を入りて、右側約半町程行きたる處にあり、明治二十三四年頃迄は同藩子弟の學塾に用ひられて次で都築馨六氏の住宅となり、日清、日露兩役には兵士の宿舍となり、爾來は空屋になり居るものにて、六十坪の二階建なれば、二階の如きも二十四疊敷の座敷が、二間も三間もあるよし、殊に其附近は廣やかなる庭園にて、無邪氣なる百餘の少男少女が嬉遊する場所としては、實に此上なき處なりとぞ。

◎小學校百年祭　深川區富岡門前仲町に金生小學校といへる私立黌あり、其の起源を繹ぬるに、遠く文化五年即ち寺子屋時代に於て、小西東橘なる者の創始に係り、現校主を三世東橘事小西金次郎と稱し、亡祖父東橘氏より正に三世百年に及び、薫陶せる學童亦萬餘人に上れる、實に例稀なる小學校なるが、本月十一日は即ち創立滿一百年に相當するを以て、同校に於て盛大なる紀念祭を擧行することゝなりたり、右に付同區内に於て、現に長老若くは紳商と、稱せらるゝ人々、多くは其昔同校に籍を置き、又は何かと關係を有せしことあれば、今回創立百年祭助成會なる者を設け、一層當日の祭典を盛大にすると共に、同校が既往百年間區内の教育に、盡瘁せし功績を表彰せんが爲、紀念額一面を深川八幡神社へ奉納せんと決し、昨今其準備中なるが、春風駘蕩櫻花爛熳の好時節を以て、斯る歷史ある小學校を紀念する趣味の行はるゝは、教育界の爲賀すべき事なり、



結婚と離婚

文學士　三輪田元道

私は結婚に就ては、世の中に對して希望がある、而して其希望を實現することは困難で、之を解釋するにしても、一篇の文章で、之を完全に説明することは出來ぬが、まづ此問題を解決するには、結婚の要素を見ねばならぬ、この見方に二つある、一は動物單位で、一は社會人單位である。

動物單位は、男女の性慾が中心になる、性慾が雌雄を求むる間に、愛と云ふものが成立する、故に動物界を通じて、その愛が雌雄間の關係をつける聯鎖となつて居る、故に人類の結婚は愛を要素として、相愛するが故に、夫婦間の關係が圓滿になつて行くので、これは他の動物と少しも變つたことはない、

併し社會人といふ關係より考へると、愛に加ふるに、或物を以てせねばならぬ、或物とは結婚の要素は愛が必要であるが、それ以上でなければならぬ、男女間に生ずる關係である、即ち結婚によつて得る社會的事實である、故に之を私にするは不都合である、結婚その物を單に男女二人間の關係とするに止まらず、社會、風俗、習慣等、社會上の影響を慮るの必要がある、故に愛その物から見れば非難する所なきも、これが社會に惡影響を及ぼすとせば、あしき結婚といはねばならぬ、然るにこれを度外視する結婚あらば、社會は之を非難する權利を以て居る、現今の社會に於ける問題を解決すれば、思半に過ぐるものがある、

或人は結婚の要素を愛といひ、或人は父母の許可を得なければならぬ、家名を傷けてはならぬ、社會風俗習慣と一致せねばならぬ、と云うて居る、併しながら私は斯く二つの部分に分けるといふは間違で兩者に通ずる重なる要素を結付けて、初めて結婚の正當なるものとして宜いのであると思ふ、

結婚は一男一女が、終生苦樂を共にする目的を有して相結合する、二人間に起る社會的事業で、決して富の爲、事情の爲、親の爲に結婚するといふ如きものではない、故に一度嫁した以上は、夫たるものが病身の人とならうが、失敗を重ねやうが、喜んでその苦を分たねばならぬ、

往々世間では自分よりよい家庭はないと自惚れて居つて、私の夫は思はしくないの、私の妻は斯うのと、互に不滿足を稱へ、甚しきは外により以上よい人があらうものなど丶、嘆聲をさへ洩らして居るのがある、それ等は結婚の目的に反したもので、精神の上に道德を缺いて居る、肉體の上の不都合は、法

律道德を以て之を非難することが出來る、精神的不都合は之を如何ともすることが出來ぬ、既に結婚した以上は、天上天下最愛のものと信ぜねばならぬ、斯く信じてこそ初めて夫婦間の關係が圓滿なるべきである、然るに以上の如き不滿足の嘆聲を發する如きは、甚だよろしくない事である、

學校の教師がその生徒と結婚するといふ如きも、愛その物から云へば、非難する所はないが、或物から云へば大に非難せねばならぬのである、即ち近親間に於いては、如何なる愛が成立しても、道德上之を許すことは出來ぬ、その影響は單にその二人間に止まらぬのであるから、

要するに結婚は、愛を以て第一要素となし、社會的慣習を以て第二要素となし、個人より見ても、社會より見ても、正當なる結婚と認められるのでなければならぬ、

以上は結婚の要素に於ける注意で、斯く一度結婚した以上は、道理上離婚すべきものでない、併し事

實に於ては、離婚せねばならぬ場合がある、即ち夫婦間の愛が消滅した時、境遇上止むを得ぬ事情の起つた時の如きで、それを絶對に離婚することは出來ぬと云うと、却つて社會に惡しき弊害を流すことになる、

佛國では昔から宗敎との關係で、離婚は絶對に出來ぬと云ふことになつて居る、その結果として、夫婦間の愛のなくなつたものは別居する即ち同じ家庭に生活しないことになる、されど夫は妻たるものに衣食住を供給せねばならぬ義務がある、斯の如くにして、第二の結婚が許されぬ所より兩者共に生涯苦悶に終らねばならぬ、輓近その缺を補はんが爲に、或場合は許すと云ふことになつたが、因襲の久しき、中々その習慣を破ることが出來ぬ、それ故私生兒の數が多くなる、されば表面は道德を唱へても、裏面に反對の事實が現はるれば、寧ろ稱すべきことではないので、絶對に離婚せぬといふことは、策の得るものではない、



過去の世界歷史に照して我國に離婚の多いのは、一は離婚が殆んど自由である、往年の佛國とは正反對であつたからである、斯の如く無造作に離婚さるゝと云ふことは、甚だ忌はしきことで、十目の視る所、十指の指す所、これならば離婚の止

ひを得ぬといふ、社會上の裁判を仰ぐ必要がある、故に結婚といひ、離婚といふことを、たゞ單に男女二人間の自由としてはならぬ、之れが爲に社會の秩序をあやまり、安寧を害することになれば、社會の木鐸たる記者、教育家の如きは、之を監督し、同時に之を批難するの權利がある、故に結婚離婚共に頗る愼重の態度をとらねばならぬ、以上は一場の座談に過ぎないので、他日具體的に、論理的に論述し女鑑の讀者諸君に見えたいと思ふ、

佛國の女子風俗

文學士　齋藤一如

花の巴里とさへ云ひ傳へられ、婦人は驕奢をこれ事とし、年中賑やかな生活をして居るやうに思ひますが、まさか佛蘭西だからと云うて、俗にいふ金の生る木がある譯ではないので、さう婦人に贅澤を盡される筈はないが、大勢人を招く時であるとか、夜會に出るとか、世間へ見得を張らねばならぬ時には人の目につくやうにもするのである、

併しそれは寧ろ例外であつて、日常の生活は、上下を通じて、飽くまで質素の心掛を以て、即ち交際社會に出て、飛んだりはねたりする前に、そのやうな事も出來る土臺を築いて置くのである、

であるから、買物なども決して下女任せにはせず主婦自身が出掛けてしかも價の賣店によつて高下のあるものであれば、四五軒も當つて見て、そのうちの安い家へ舞戻つて買うやうにして居る、殆んど物を買ふといふことを課程のやうにして、決して面倒だからと云うて買溜をするやうなことはない、器の破れ、物のやぶれ、なか／＼丹念に修繕をして、容易にそれを打捨てるやうなことはない、

食事は、朝は大抵咖啡にパンとバタ位で、晝は肉と野菜、夜はスープに魚肉、或時は肉の二皿位の時もある、また晝の殘りとか昨夕の殘りとかで間に合はすこともある、その位の程度で、贅澤の側から云

へば、主婦の所有して居る腕輪と首飾りが、寶石類で、寢臺に一ぱい置並べられる程あると云ふ有様である、京の着倒れ、大阪の食倒れといふ諺があるがその着倒れに屬する方である、

さりながらその着倒れが着倒れにならぬやう、衣服をつくるに、三枚つくる丈の餘裕が出來て、はじめて一枚を新調するといふ有様で、日本の中等社會で、強いて餘裕を見出しても買ふといふのとは、自ら趣を異にして居る、

巴里に一町四方に餘るほどの、ボンマルセーと云ふ勸工場がある、この勸工場の由來が面白い、今より數十年前マダムブーシユーといふ婦人が、夫と共に小さな商賣を初めた、この夫婦は至つて正直な人で、成るべく多くの人の便利を得るやうにと、品物は上等にして價を安く賣るやうにし、勉強を第一の資本として、この店へ來て買へば、何でも安心であると云ふやうにした、その後數年にして夫は病死したが、店の信用は少しも衰へず、ます〱繁昌して食品を除くの外は、何にても得られぬものはないと云ふ、大勸工場となり、唯今では世界一の勸工場となつたのである、この大市場が纎々たる一婦人の力に出來上つたので、佛國婦人のいかに驕奢以外に勞働して居るかゞ分る、

この大勸工場は今もマダムブーシユーの有であるかと云ふに、同夫人は今は世に無き人で、其臨終の際に、此の世界一の大勸工場をあげて、番頭小僧をはじめ、物品の配達などの爲に雇入れた人達にまで身分に應じて分配したから、今ではそれ等の人々の株式會社になつて居る、

このブーシユー夫人に最も感ずべき逸事がある、同夫人が數十年の大苦心を經た大勸工場を弊靴を捨つるが如く、その雇人に與へて、巴里の重寶店として永く信用を繋がしめたるのみならず、一方には貯蓄したる千二百萬フラン即ち我四百八十萬圓の金を出し、巴里の貧者に對する紀念として、一の大病院を造つた、されば今も此病院には學問實地ともに最

新優等の醫師を聘して、貧しき病人、産婦などを叮嚀親切に施療して居る、此の病院にて病室に藥または食物を送るには、皆地の下にトンネルをつくり、レールを敷いて這り込む、これは地の上を車で運んでは音がして、患者に不快を與へるであらうと云ふので、そのやうにしたとの事である、如何に慈悲深き人が、貧者に對する同情の厚きと、飽くまで慈善的なることがわかる、これ等の偉業も、佛國婦人の腦髓の緻密なる土臺の上に築かれたものであらうと思ふ、

斯の如くすべて土臺をつくるには一方ならぬ苦心を經るので、ランプの灯で夜業をする位の人はカンテラを用ひるといふ不自由を忍び、段々何百燭何千燭の電燈をも用ひらるゝ境遇に進まねばやまぬといふ勇氣があつて、カンテラの灯がなか〱希望の光りを放つのである、

プーシユー夫人は遺族のなかつた爲、その遺産を雇人に與へたのであるが、殊更形式的の相續人をつくつて、それに家督を讓ることをせず、自分の志を繼ぐ雇人に安心して與へたとなどは頗る興味ある逸事ではあるまいか、もし子供でもあれば、日本では嫡子のみに與ふるか、さなくとも嫡子にその多くを與ふるのであるが、佛國では幾人あつても同じやうに分配し、兄弟が多ければ、ツマリその一人の所得が少なくる譯である、

◎女子大學の慈善市

日本女子大學校内には、森村豐明會の寄附に成れる豐明圖書館あり、内部の設備未だ整はざる爲め、兼ねて同校卒業生の組織せる櫻楓會は、母校生徒の協力を得て、一大慈善市を開催し、其入場料賣品の純益並に有志の寄附金を併せて、圖書を購入して是を圖書館に寄贈して、世上一般の女子の爲めに公開せしめんと計畫中なりしが、此程漸く其準備整へるを以て、愈々來月二十日頃をトし、三日間雨天順延の大慈善市を開催し、總て卒業生と生徒の手に成れる編物、造花、刺繍、レース、袋物、細工物陶器繪付、經木細工等を賣り、餘興として文藝會を開き、同校生徒の案出に成れる女子演劇を始めとして、音樂、活人畫、英詩諳誦、體操等を催す可く、右の入場は女子に限り入場券を壹圓、並に二圓の二種とし、同校緣故の男子へは、特に招待狀を發する豫定なりと、

故透谷氏夫人の米國土産談

◎インジアナ州の聯合基督大學は風景もよく日本で申すと大學と中學との間にある學校で、食事の時間は朝餐が午前六時三十分、晝餐が十二時三十分、晩餐が午後五時三十分と定まつて居ります、教師の教授中に學生が私語したり、耳こすりをしたりするのは、非常な不德義としてありますから、決して口を動かすやうな事はありません

◎生徒は男女混合 で、元より教場も區劃してはないのです、校長のエルドウヰッチ氏は、頗る親切で、尊大に構へる擧動は少しもなく、生徒が停車場に着する時の如きは、態々迎ひに出られる位ですから、其の餘は押して知るべしです、私は此の學校に四箇年半の歲月を費し、オハヨー州の州立大學に入學しましたが、此學校には

◎若婦人會 と云ふ生徒の有志が組織してゐる會がありまして、毎水曜日に開會しました、勿論先生方の意見も聽くのですが、先生方は役員に撰ばず、會には無關係で、忠告は喜んで受けるが、干渉は受けませんで、悉く生徒中で處理するのですから、實に面白い會でした、此の會の外に文學會が二つありまして、セキスピヤなどを硏究し、或時は詩、歌、音樂の催しもあつて、演舞位は演ずる事もあり、丁度日本から參つて居た書生が劍舞を演じ、私が詩吟をやつたことがありましたが劍を拔く姿勢や其光景の意味が、外國人には判然しませんので、一々說明し、詩吟も同樣詳細に意譯して聞かせました、米國では劍を拔くのは、男子のみと心得て居るからです、それから土曜日は自習したり、部屋の掃除をしたりして、先づ終日遊ぶのですが、日曜は朝夕の二回 教會に行き、後は矢張遊ぶのであります、私は丁度昨年の六月此の學校を卒業したのですが、日本の婦人で卒業したのは私一人でしたから、校長夫人よりピン、生徒中より草花の彫刻のある金時計を贈られ、それには中蓋に年號と私の姓名とが彫つてあります

◎日露戰爭當時 米國の同情は盛んで、日本が正當の戰であるから、勝利は疑ひないと、散歩に出たりすると、新聞には斯うあるが、何うかと種々聞きますし、上流の婦人が組織してゐる教育會、文學會、茶話會等へ招かれて、日本の話をすると、何れも端然として耳を傾け、能く聽きましたし、富豪の家に行くと、日本製の茶器なぞを見せ、或は室內に日本の衣服を飾り、出す布團も縮緬の座布團と云ふ風で、甚だ愉快でしたが、偖こんな風の日本品を見せて、此の品の善惡如何と問はれる時には、氣の毒には思ひますが、遠慮なく劣等品は劣等品として指摘しました

獨逸の女子風俗

木村梅軒

外國へ行けば、一概に女權が擴張されて居るやうに思ふ者があるが、實際はさうではない、成る程伯林大學の或講座には、婦人の出席をも許してありますが、それ等は少數で、學校敎育は大抵我國の高等女學校程度位で終り、重に家政整理法、食物調理法音樂、繪畫等を學び、成るべくそれを他日家庭に活用し得らるゝやう學ぶのであります、

さて人の妻となりますと、多くは未だ收入の少い夫を持ち、これから夫婦して、一家を起さうといふものであるから、一生懸命に夫を助けて家庭に働き儉約を守つて一家を繁昌ならしむるやうにし、夫には滋養多き美味をすゝめ、それを成るべく廉價にて料理し得らるゝやうにし、ひたすら夫が孜々として外にて働ける勞を慰め、そのかよわき手は寸時も休むことなく、靴足袋の新調は云ふに及ばず、襯衣數多き白布の繕ひなどは一つものこす所なく、自ら手を下して少しも倦怠の色を見せず、かくして蓄財に熱心なる、到底他國の婦人の企及ぶところではないその傍來客あれば快くもなてし、自分も興に入り、決して厭な顔などは見せない、

既に母となれば、その子女の哺乳、入浴、換衣その他萬端心を配り、その子女の體育上精神上に深き注意を拂ひ、やゝ成長して學校に通ふやうになれば日々の復習の如き自ら監督者となつて、性質を快活にし而も質朴に導いて居る、かくの如く、家政育兒を一手に引受けて、用意周到、一刻の餘暇もない間に、時間の差操をして、交際場裡に出掛けるを樂しみ、衣服を着飾り、人々の間に立交りて會話談笑して、居るなどは、朝から晩迄家内にすくみ勝の世話女房といふあとはいさゝかも認められない、その起居振舞の、その折々によく適つて居るなどは、たゞ〳〵敬服の外はない、

女子の學校で手藝科の課業の加はつて居るのは少

ないから、母なる人が家庭で八九歳位から種々の手藝を敎へ、菓子の製法なども敎へて、一週一度位は家庭用の菓子をつくるやうにして居る、

日曜日は安息日として、午前は家族揃うて寺院に出掛け、歸途友人を訪ねたり、午後郊外散歩とか、博物館動物園等の見物に出直すこともある、又一週に一度位は、茶の庭に招かれたり、招いたりするがその時は瀟洒した服裝で、平素懇意の間柄では、互に手仕事持參といふ風で、時間の經濟ばかりでなく却つてその中より趣味を感ずることも少なくない、大抵斯の如き有樣で、婦人は婦人の務むべき職分に働いて居る、

主婦が絶えず家事にたづさはつて、寸暇もなく立働いて居るから、大抵の家では下婢を要しない、それが大きな家になると、硝子窓が五六十もあるといふ有樣で、主婦一人では手廻り兼ねる所から、下婢を置く、下婢の傭ひ方は、日本と同じく口入屋があつて、日本ならば三日の目見得といふのが、獨逸では三月位試驗して、主人の氣心、下婢の働き振と、相互に納得して、置かう居ませうとなると、容易に出すの、出るのといふ事が出來ぬ、もし餘儀ない場合があつたら、一ケ月前位から云ひ出して、互に不自由しないやうにするのである、

下婢は義務敎育年限を過ぎた女でなければ、その資格がないので、十四歳以上でなければ法律が許さない、大抵農家の娘で、婦人敎育の第一に數へられて居る料理法の心得などはないものである、それを主婦が敎へる條件で雇入れるであるから、料理法を知つて居る下婢は、給金が多い譯である、

一日の仕事は朝は先づ家中の靴みがき、部屋の掃除、それから珈琲と茶の用意、即ち手の入らない朝飯の仕度、それから市場へ食料品の買出し、間もなく晝飯に取かゝり、跡片付から間食まで手仕事をし客あれば云ふまでもなく、客へ出す物の持運びから給仕もし、八時頃夕食になり、九時から自由の身體になる、右の通り順序が定つて居るから、馴れると

自分の爲の餘裕が出來る、それから二週間に一度位大洗濯をする、彼地では多く白い物を着るから、これは大仕事である、

食事は家族と殆んど違ひはなく、ただ下婢は臺所で匙を取る丈が違うて居る、序に客に對しては、獨逸の國風で、豫約がなければ、食事時分に親戚の來訪を受けても、一切食物をすゝめない、その代り招いた場合には、思切つて御馳走をするのである、

衣服は日曜日用、外出用の外は極めて簡略で、飾りの少しもない、色の濃い袖も裾も極めて短いものを用ひ、その上これも色のじみな丈夫一方の前垂を持つて居る、下婢の休暇は二週間毎に、日曜の午後一時より六時まで休暇を與へられ、心掛のよいものは、此日此等下婢のために開く集會に出席し、知らず識らずよい感化を受ける仕組になつて居る、

下婢の最も樂しみにして居るのは、十二月廿五日のクリスマスで、この日は主家より種々の物を貰ふのである、この祭は子供が重であるが、家庭では下

婢が重なもので、給料の價格の四分の一か五分の一位の物をやる、こゝが主婦の注意すべき所で、常から何が彼の嗜好品であるか、その好みの物は何であるかと心がけて、下婢の喜びを滿たすものを與へるやうにして居る、

家族と下婢との間には確然たる隔があつて、小供等には惡感化を受けさせないやうにし、又主婦は世間談などをして、無駄話をするなどゝいふことは、一家の主婦たるものといふ考がしみ渡つて居るが、前述の通り、食物の事より自由を與へるといふ點からは、家族は注意を怠らぬやうにし、大人は無論小供も自分で手の屆く丈は下婢を煩はさぬやうにし且つ小供が下婢に對して不親切なことでもあれば、主婦は嚴重に叱責し、事を頼んだ時は、子供は誠にかるく有難うといふやうな習慣をつけて居る、

清國女學生の製絲研究

清國學生の續々來朝する中に、府下西ヶ原なる東京蠶業講習所に於ては、是等の學生が養蠶製絲に就いての研究に關し、現に十數名の清國男女學生在學し居れり、

◎現在の學生　同所の養蠶講習所にては、男學生四十五人（內清國人五人）製絲講習科には、四十四人內清國人七人）、女學生二十人、別科同三十人を有し、尙韓國學生二名あり、而して右清國人の內には、潘英（三十三）葉若萱（二十二）の二女學生ありて熱心に製絲の業を究め居れり、

◎最初の韓國女學生、是より先き明治廿九年の頃、韓國の女學生林蕣寗なるもの、同所養蠶科に入學せしが、當時は別に女學生殊に外國人に對する規定なかりしより、同女は隨意研究の末歸國し、今は故國にて貴婦人の設立したる養蠶所の長となり居れり、其夫某も、嘗て我高等工業學校機械科に留學せしものなりと、

◎今の清國女學生　其後外國婦人にして入學せしは、即ち潘英、葉若萱の二女なり、目下は既に留學生に對する規定も設けられ、潘女は一昨年十月、葉女は昨年十月入學し、兩人の夫も皆同所に留學し居るが、彼等は多少日本語を解し（同所は日本語を解せざる者は入學せしめざる規定なり）得るも、講義の筆記等は、矢張他生徒のを借受けて漢譯し居れり、又一般生徒は寄宿舍に入るべき規則なれど、夫婦者とて兩女共通學し居れり、

◎授業の方法　女學生は水木金土の四日を以て實習日と定め、男子は學科を主として敎授し、一週の內月火曜の實習時間を與ふるのみ、而して學科は午前、實習は午後にして絲を紡ぐ事、眞綿を延ばす事、坐繰、足踏、繭生絲の檢査等を實習せしむ又女子は製絲のみにて二ヶ年修了、男學生の本科は三年間を期限とせり尤も女子に限り十ヶ月卒業の別科を設けあり、

◎監督と學費　學生の監督は最も嚴重にして、日曜大祭等に午前七時より午後十時迄（女子は午後五時迄）外出せしむる外、面會者は舍監の許可を得るを要す、學費は授業科を徵收せざる故比較的小額にて辨じ、平均一ヶ月十圓あれば足るといふ、今同所にて調査したる概算を聞くに左の如し、

「男學生」食費一ヶ月凡五圓乃至六圓▲炭油代同凡六十錢▲筆紙墨同凡一圓五十錢▲雜費凡一圓五十錢▲器具費三ヶ年間凡四圓乃至六圓▲制帽費一個凡一圓三十錢▲制服費（冬夏共）凡二十四圓位▲靴費三ヶ年間（三足）凡九圓

「女學生」食費一ヶ月凡五圓乃至六圓▲炭油費同凡六十錢▲筆紙墨同凡四十錢▲雜費同凡五十錢▲器具費本科二年間凡一圓▲制服費本科二年間制袴一着二圓五十錢實習服四揃凡六圓、別科十ヶ月間制袴一着二圓五十錢實習服二揃凡三圓

蒙古の話

鳥居きみ子

私は一年間蒙古に居りましたが、教鞭をとる傍、蒙古語の研究中でありますから王府にばかり引込んで居りまして、一般土人の風俗を詳しく知ることを得ませんでした、

王妃は家政上に就て、直接に心配せられ、金庫の鍵も御自身で持たれ、政事向のことも王より御相談を受けられる、それが午前の課程で、午後は女學堂の總裁でおらつしやるから、學校へ出勤せられ、放課後は日本語に、音樂の御稽古といふ都合で、中々お忙がしい、それで日曜はと云ふと、體操の練習をせられる、

王府の經濟は地租が收入になるのであるが、御充分とは行かないで、お考へによつて、經濟をとらねばならぬといふ有様であります、

貨幣はその地方々々にて通用する紙幣もありますが、多くは銀塊で、それを切つて使ふのであります、銀塊何匁で物品が何程買へるといふ有様で、この銀塊ならば、貨幣として蒙古全體に通用します、哈喇沁より東になりますと、茶で他の雜貨と交易するに尤も好都合であります、

食物は、粟、黍、麵類で、米はありません、私は王府から膳になつて參りますので、それには朝南京米のお粥が出ます、晝と夕は大抵同じでありまして、豚に羊、鳥の肉を三皿、野羊一皿、大椀に汁、それが副食物で、牛肉は一切用ひません、飯の代りにはふかしパンのやうな饅頭を八個ばかり附けます野菜は重に白菜に葱、韮それから大根位であります併し冬は不自由でありますから、鹽漬にしたのを煮て食べます、酒は黍で拵へた酎燒で、なか／＼強うございます、

夏は蚊は居りませんが、寢台の上でありませんと南京虫に襲はれます、冬は煉化を敷つめて、その下をたきますから暖かであります、燃料は柳の木炭が

澤山土地で出來ますから、不自由はありませんが、哈喇沁から奥になるとありません、

王の家庭は御隱居が御三人に、王と王妃でありますが、その御隱居は第一第二第三と稱し、第二は先王の正妻で、第一第三は妾であります、その妾腹から王が生れましたから、第一と稱して居ります、先王の正妻の出は王妹で、これは河原操子さんと、後に私が御敎育をいたし、昨年巴林王に嫁せられたのであります、蒙古も巴林となりますと、テント生活であります、



女學堂は尋常小學校の程度でありますが、技藝に關することは大に發達して、日本の高等女學校位のことは出來ます、生徒は中等以上の家庭から通學致して居りますが、富の程度が低いものでありますから生徒用の敎科書其他皆王府から支給するといふ有樣であります

遊山と申しますと、時候のよい時には山や野一面に馬蓮と申して、薄紫色で、日本の燕子花のやうな花が咲きます大そう美しうございますから、それを見に出掛ます、

まづお話はこの位であります、いづれ遠からず又參りますから、いろ〳〵面白いことを觀察して申上げます。

海軍々人の妻に

海軍大主計 法學士 福田庫文司

然し人の妻としての心得は、誰も變ることはない、併し境遇が少し違つて居るといふのは、妻となる人の先づ念頭に置くのは家庭といふこと、即ち妻は一家の中心となつて、團欒を樂むといふことである、然るに海軍々人は、常に艦中に起臥して、温かき家庭の主人として朝夕を送ることが出來ぬ、この軍人の妻となるには、一朝事ある時は別問題として、多くは留守番役をせねばならぬ、海軍々人の妻、即ち年中留守番役をして居る妻に對して一の注文がある、木村長州夫人の云はれし如く夫婦は影の形に添ふ如きもので、互に相離れて居る間にも、互ひに相逢うて居る如き感がなければならぬ、それには、その夫たる人にも文學趣味があつて、身を高潔に持するといふ事が必要であるが、妻は殊に文學趣味がなければならぬ、と云うて只文學に耽つて、家事を放任する如き極端なる行爲はとらない、

もし夫婦其趣味に缺ぐるとすれば、夫は單調なる海上生活に飽いて、品行自然に放肆になり、妻は淋しき家庭に善事を思はぬやうになる、この常に相離れたる夫婦間には、品行の面白からぬ例は、決して少くないことで、寧ろ或一部の人は當然の事として居る位である、

然るに互に文學趣味があれば、互に家庭に在る如き樂みを得ることが出來る、その手段としては云ふまでもなく互に消息を怠らぬことである、この消息を通ずるに、文學趣味がなければ、その材料に不自由するやうになり、疎遠になり、相互に夫あり妻あることを忘るゝやうになる、さなくとも、或將校夫人が、隣家の夫婦が、鹽煎餅燒きながらも團欒して居るのを、軍人の妻たることを忘れて、羨むといふさむしい心を起し、それを口外さへしたといふ例もある、

その消息を通ずるに、最もよい方法は、夫婦日記

を交換することである、日記をつくるといふことの利益は種々あるが、惡き事は書きたくない、随つて我身を三省する便利ともなるのである、土佐日記、十六夜日記を面白しと讀まぬ人でも、この夫婦間に交換さるゝ日記は、必ず無限の愉快を以て讀まるゝに違ひない、それに繪畫の少しでも出來れば頗る妙である、何月何日には、誰が訪ねてくれた、何ういふ事があつた、そして似顔の一つも書加へると、甚だおもしろく、互ひに安心して、愉快にその日を送ることが出來る、

故に海軍々人の妻たる資格は、日記を綴りつゝその行ひを耻づる事なき、正しき心を持つ人で、日記を面白く綴り得る文學趣味があつて、初めて完全なりとして差支ない、夫を慰め、夫を勵ます手段としてこれに優るものはないのであるから、多くは落寞たる軍人の家庭を見れば、思半に過ぐるであらう、折にふれていさゝか思ふことを、

四萬法の名畫

大阪の豪家住友吉右衛門氏が、嘗て内外の新古美術品を蒐集して、貢献する所鮮少ならざるは、曩に巨金を抛つて購入せる清國有數の古銅器を、博物館に陳列して、鑄金家の注意を惹起さしめ、其後佛國現代の老畫家ロオランス氏の筆になれる、「ルウテル」の大幅を太平洋畫會に出陳して、西洋名家の名作畫を見るの便少なき我畫家に裨益を與へたるは、美術界の佳話として傳ふる所也、

而して住友氏は、今や又ロオランス氏壯年の傑作として、天下に知たる「マルソオ將軍の死」と題する名畫を、四萬法にて購入したり、此畫は十九世紀の美術史にも、其寫眞を掲げられ、又千九百年佛國萬國博覽會の百年回顧紀念美術館にも陳列せられたる程のものなるが、其幅二間許りにてマルソオ將軍部下の諸將が、將軍の遺骸の周圍に集りたる光景を描き、(マルソオ將軍は國難に斃れたる有名の軍人にて、現に巴里に其名を取りて命名せる一街あり、我日本大使館も此町にありと)此圖左方下端の椅子に倚りたる人と、將軍の體とに少しく光線を當てたるのみにて、其外は全面餘程薄暗く、人をして一見凄然の感あらしむと云ふ、(將軍の衣は深紅にして金裝、枕頭の屏風は黃褐色)因に此畫も、又氏の厚意に依り、何れ遠からず公衆の觀覽を許し、斯道の參考に供せしむるの機あるべしと聞く、

歐米片田舍の結婚奇談

◎青物市場の見合　獨逸はザクセン國マグデブルヒの片田舍、此の程階王カムベルランドにて名の高きブランスウイックの國境に程近きアウスレーベンといへる寒村に、これは幾百年來の慣例とも知れぬ珍らしき風俗あり、一年一度十月の中旬に農民等撃壤鼓腹收穫の喜びに、我を忘れて世のさまの只管るに嬉れしく、秋風の何地吹くらん、少しもあはれを覺ゆる氣はひもなき折を期して、村の中央に青物の大市場開かれ、所在十幾里四方より我れも〳〵と先を爭ひ、芋牛蒡豆菜のかず〳〵を揃ひ來りて、一年中の取引に狂するばかりの賑ひを見る習ひなるが、此の青物市を機會として、青春男女の見合場公開せられぬ、會場は舊式のまゝ、緋の幕を眩ゆう飾付け入口には一組の樂隊、これも古代のまゝの服裝して、一しきり〳〵賑かしう祝の曲を奏して、逸興湧くばかりなり、場内には欄干にて廊下を二段に仕切り、前段を一列になりて、娘連のゾロ〳〵と行き過ぐるを、後段に居並びたる男連の、あれも可厭これも面白からずと意指目撃とり〳〵の評判八釜しき中にも、これこそはと己が心に意中の人を選り出してからは、なか〳〵心安からず、容姿美しきものは競爭者も從つて多ければ、中には一人の女に十數名以上の求婚者附纏ひ、鎬を削つて爭ひ折角の嫁選みに血の雨を降らす不吉を見る事さへ少なからず、さなきも斯求婚者多ければ、先に女を選りたるものは、反對に男を選らるゝ身となり、果敢なき落選に悄げ返り、男を下ては第二第三の女を求むるを例とす、第一日第二日續て第七日に至るまで、同樣の見合ひ行はれ、甲を貶し乙を斥けて、思ひもかけぬ緣を結び、六十年の不作を歎たねばならぬ有樣なるが、神の運命には奇しき力あり、大方は相應しき相手を求めて、一年一度の此の機會を空しうせざるなり、青春男女が夢心地の一週間に、父老は青物市場に店を張りて收入少しも多かれと餘念なく、斯くて一切の取引を了せば、こゝにも限りなき平和の歡喜あり、かゝる折しも天下一の貢い嫁御寮を選り當てたる若もの、われながら其目利を誇りがほに相携へて、老父母の許可を求むるなり、老父母は一年の勞力豊かに酬ゐられ、若ものは世にも美しき人を得て、坐ろ天にも昇らん思あり、ほく〳〵相共に天の恩寵長へに盡きせぬを喜びつゝ、其郷里に歸るなりとか、

◎奇精なる妻選び　米國アトランタ市の附近に、クレートンといふ一小村落あり、此村にヘーンスと呼べる一人の男ありて、家富み榮え何不自由なき身なりしが、未だ定まれる妻なきものから、あれにせんこれにせんと、兎や角思案を廻らせる後、遂に競爭試驗を行ひて、成績優等なるものを我生涯の妻に選び受くる事に決し、先づ圖書館の監守人と、某新聞の編輯人とを試驗委員に賴み、試驗場を學校と定めたり、かくて委員はヘーンスの作りたる試驗問題を筆記若くは口頭にて解答し、成績最高點を得たるものは勝利者たるべしと觸

れ出したるに募に應ずるもの十五人の多數に及びたり、抑も此ヘーンスは、豫て世人より相應はしき花嫁と目せられしも、彼の理想を滿す婦人なかりしより、未だ配遇を得ざりしものにて、彼は常に當今の娘の、一家の妻として十分の資格なきを歎じ、これ其娘が其母や祖母の如き男子の愛と獻身とを受くる能はざるものなりとの結論を爲せり、彼の理想を問へば、婦人は巧みに一家の處理を爲さゞるべからず、巧みに下男下女を追ひ使はざるべからず、寛大の心を以て相當に物の施與を怠るべからず、世の義理を缺ぐべからず、要するにこれを克く爲し得るものは完全なる一家の主婦として耻ぢざるの婦人なれば、男子の愛を受くべきものなり、故に余は斯る完全の婦人を發見せば、直ちに其婦人と結婚して渾身の愛を傾注すべしといふにあり、

この宣言は故意か無心か知らざれども、兎に角文字通りに解釋せられ、いよ／＼競爭試驗を實行することゝなりしが、應募婦人十五人の中には、四人の後家も交りたり、さて筆記にて答ふべき問題中には、左の質問を含みたり

一、饅頭の種類を擧げ、最も美味にこれを調製するの方法を說明すべし、
一、正餐は晝にすべきか、晩にすべきか、
一、齒の生えかゝりの子供におしやぶりを持たせる可否如何、
一、手製パンとイーストパンとの區別并に其製法如何、
一、夫が不意に三人の客を伴ひ歸りたる時、早速の御馳走は何を以てするや、
一、結婚の時花嫁の正裝に適當と思ふ衣服百點を擧げよ、
一、子供生れたる時男女に就て命名するに適當と思ふ名六ヶを擧げよ、

ヘーンスは十五人の中誰が及第するも其人物の如何に關せず、最高點の者を娶るべしと斷言せり、而かも彼に十五人の婦人が試驗を受くる前、豫じめ誰が試驗に及第するも、彼の結婚申込を拒絕すべしと固く約束したるを心附かざりしこそ笑止なれ、

試驗の結果によればメー、テータム孃は最高點の勝利を得たり、孃とはいへ此婦人に年齡既に四十三歲にして肩幅いやに張り背低くまで高く美人にはあらざりき、去れどヘーンスは前言を食むことなく結婚の約束を履行せんとて、手紙にて同孃に會見を求め、正式に婚儀を申込みたるに孃は同人間の約束を守りて、其申込に應ぜざりき、依てヘーンスは第二の成績優等者たるコース孃に約束の履行を求めたり、孃は年齡二十三歲可成肥りたる女なり、此女こそ結婚に應ずるは確かなるべしと信じしに、孃も亦同人間の約束を守て手強く其申込を拒絕し去れり

ヘーンスも玆に至りて始めて婦人連のなぶりものとなりたるを知ると同時に世間の物笑ひの種たらんことを恐れ、競爭試驗に加はらざりし若後家ベル、ブランドといへる可憐の婦人と急に約婚を整へ、其趣を試驗委員に通知したりと、

オーラ、ブリッヂマン（下）

（二官能を失ひたる少女の半生）

英國　ダルトン作

佐藤　溪底譯

時はオーラにも容赦なく見舞ひて、彼女は今や十四となりぬ。此間彼女の進歩は全く天才的なりき。

恰かもある日曜のことなりき、オーラの顏が見えざりければ、博士はその室に到り見しに彼女は獨りぽつねんと坐し居たり。

「何處か躰工合でも惡い？」

博士はオーラの樣子の鬱々たるを見てかく問ひぬ

頭が少し……」と答へて彼女が、昨夜妙な本を見て意味が解らず、遂に一睡だにせざりしことを語りぬ。博士は「その本を」とて見れば同じ浮び文字のラテン語の讀本なりしを知りぬ。

「これなら苦しむも無理がない」とて博士は大笑せしが、オーラが精力の如何に強きかに驚嘆したりき。またある日のこと、博士とオーラとの間に面白き會話は始りぬ。そはオーラと同じ仲間のオリンと云ふ十二ばかりの男の子が、烈しき熱病の末、遂に死せしことより端緒を開きたるなりき。

「オリンが病氣なことを知つてお在か」

博士は鐵筆をもて、先づかくオーラの掌に問ひぬ。

「ハイ」オーラは眉根に皺を寄せて、

「昨日の午後は非常に苦しがつて居たさうです」と答へぬ。

「そのオリンが昨夕死にました」

「えつ？」

「死んだのです」

「わかりません」

オーラには「死」なる言葉が如何にしても判じ得ざるなり。見よ彼女の顏には唯不審らしき色の見ゆるのみ。

「死ぬとはどんなもの？」

「あなたが眠つて居るときと同じです。眠つて居る

ときは何も躰に感じないでせう。然し眠つて居るときでも呼吸は通つて居ります。死ぬと此の呼吸は通ひません」

「何故でせう」

オーラはいまだ抽象的の智識に乏しきなり。

「あなたは自分に心と云ふものがあることを知りませんか」

「心とは何なもの？」

飽くまでも不審顔なり。

「あなたは本を見たいと思ふこと、本に觸ること、そしてその本に就て考へること、またはお友達をなつかしいとは思ひませんか」

「ハイ思ひます」

「それが皆な心の働です」

「その心がどうしたのですか」

「オリンの躰から離れて往きました。ですから呼吸も止つて了つたのです」

「オリンの心は何處へ往きましたか」

オーラは何處までも窮追せざれざ已ざるなり。

「天國」

「雲の在る處へ？」

「さうです」

博士は之には説明の仕方なく、餘程窮してかく答へたるなり。

「また歸つて來ませうか」

「いえ二度と還るものではありません」

「何故？」

「心と云ふものは死んだ躰に止つて居らぬものです」オーラは何か頻りに考へ居たりしが。

「呼吸は死にますか、血は死にますか」と妙な問を發しぬ。

「呼吸も出來ませんし、血も冷つこくなります」

「死ぬことは惡いことでせう」

「善いも惡いもありません、生きて居る者は何時か必ず死にます」

「だつて私が死んだら、お父さん母さんが悲しむで

「蠅は心を持つて居りますか」と問ひぬ
「いゝえ」
「何所神様は獸や虫に心を持せないのでせう」
博士は嗟吁と嘆聲を漏しゝのみ、遂に之には答へざりき。
「神様は見ることが出來ますか」
オーラは猶ほ質問を休めず。
「あなたはハノーヴワーのお母さんを見ることが出來ますか」
こたびは博士も問ひ反しぬ。
「いゝえ」
「然しあなたは心でお母さんを見てお在でせう、あなたはお母さんのことを考へたり戀しくは思ひませんか」
「思ひます」
「神様もその通りで、私等の眼には見えなくとも私等の心の中に在るのです、ですから人は善いことを爲すと、神様は心の中で喜び惡いことを爲ると責

せう」
「どうも此悲みだけは仕方がありません」
オーラは益々考へぬ。
「心が體から離れなければ生きて居るんですね」
「さうです」
「そんなら心を體から離さないやうにする工夫はありませんか」
オーラの質問は千變萬化なり。
「生ある者は必ず何時か離れなければなりません」
「先生のお馬には心がありますか」
尙ほ鋒先を變へ來る。
「獸は心を持つて居らぬものです」
「何故猫は鼠を食ひ殺すでせう、心があるからではありませんか」
愈々肉薄し來れり。
「でも猫は私等のやうに考へることを知りません」
此時恰かもオーラの手に一疋の蠅飛び來りぬ。彼女は直ちに

めます」
「神様は怒りますか」
「いゝえ、神様はどんな人でも可愛がつてくれますから、若し人が惡いことを爲ても憫れみはするが、決して怒りはしません」
「神様は泣きますか」
「いゝえ、人間は泣きますけれども、神様には肉躰がありませんから泣くことはありません」

オーラは其後深き冥想に耽り勝なりき。今や彼女の指先は驚ろくべき魔物となりぬ。げに余は魔物と云はんより外、適切の言葉を見出し得ざるなり。僅か十四か十五の少女子が、しかも盲、聾、唖なる少女子が、過去、現在、未來てふ時の不可思議なることに思ひ到りては、そも何の與へし力なるや、唯白魚の如き一個の指先のみ。實に此指先こそ、或は私語き、或は聽き、或は愛するなれ。

オーラが十八の時は既に一廉の學者なりき。眼も口も耳も滿足なる娘子は、唯外界にのみ心奪はれ、虚飾、虚榮にのみ心を走せて、些も身の修養に顧慮せざるが常なるにオーラは、專心靈の修練に思を碎きぬ。吾等オーラに對して耻かしとせずや。

歷史、殊に神代史などは彼女の得手物なりき。されどオーラは今や外に對する智識の渴望よりも、內に向つてある大なる自覺を求めんと努むるに至りぬ風靜かなる一夜、オーラはその更くるまで眠に入らざりき。

思へば吾や世にも憐れむべき不幸の女なるかな、兩親には徒らに悲歎の的となり、女子の道のせめてをも盡すこと叶はず、世の情には何の答ふるなく、暗黑と寂莫と無意義の間に、吾やさても何を得んとて何を爲しつゝ來りしか、吁、吁、眞に生れて來ずもがなの身なるかな。

オーラは過去の緬想と未來の歸趣のため、堪へ難きまで心を千々に碎きぬ。

さはれ己も人と生れ、とまれ精神の糧も得て、唯このまゝに止みなんはあまりに腑甲斐なき業ならず

やと、茲にオーラはにはかに光と望の心に燃ゆるを覺えて、吾にも天の惠あり。吾にも天の使命ありとの神感に打れぬ。

かくて後、オーラの天地は小兒の世界に於て見出されぬ。貧困なる盲兒、聾の孤兒、殘酷なる家庭の啞兒などを集めたるなり。

今や彼女はホウ博士より受けし自己の經驗を、まのあたり應用し得るの機に會しぬ。茲に彼女は哀れなる小兒等の師として、はた慈悲の權化として、渾身の熱血を濺ぎぬ。

實にオーラの熱心は、心ある人をしてその健康を憂ひしめぬ。博士も時々その健康を先にして、効果を長日月に期すべく注意しぬ。

されどオーラは常に頸を打ちふりぬ、

「私は何時死んでも厭はぬ體ですから、呼吸のある間は自分の滿足する丈け働けば、これ程嬉しいことはありません」とて毫もその熱心の度を減じざりき

中にもオーラは、オリヴァー、カスウエルと呼ぶ男の子の教導に最も意を注ぎぬ。此の子もオーラと同じく、烈しき熱病の果は、明、聲、響を失ひしなり

オーラの事業は凡て成功しぬ。その至誠に敵するもの無かりしがために外ならず。

また愛蘭土に飢饉のありし時の如きは、彼女はその固く閉ぢたる兩の眼より潸々と熱き涙を滾して、僅か數週の間に一本の針をもて一冊の書を著はし、その原稿料は悉く血の氣なき愛蘭土の小兒の前に數萬斤の麥粉となりて送られしも、途中奸惡なる委員のために盜まれて、この尊とき天使の贈物は何等の記錄にも登らざりしと云ふ。噫、人の心のなどてかばかり黑白はあるぞ。

オーラは眞に天使なり。その清く美くしき心は、此世のものにはあらざりき。余は面を赤らめつゝ、此少女を敢て世の眼あり口あり、耳ある人々に紹介せんとす。感激の少なきあらば、それ筆の罪と知れ。

何事も見ざる聞ざる云はざるは
唯佛にもまさるなりけり。　一休和尚

文藝

春の旅 (去年の紀行)

伯爵 柳原華山

今年四月の四日、親しき友數人打つれて、沼津より程近き牛臥に往復三日の旅をなさんとの約成る、さらぬだに、花笑ひ鳥嬉しげに囀る頃なるを、眞の兄弟も啻ならぬ友垣と共に、風光佳絶なる海濱に赴く樂しさ譬ふるに物無し、

春眠曉を覺えずといひならはせども、胸に溢れんばかりの樂しみある身は、例より早く起きいづれば、空麗かに晴渡りて、輕く吹き來る風さへ肌に心地よし、庭に櫻のまだ咲出ぬを打眺めつゝ、新橋停車場に車を急がせぬ、いたりつけば、小石川なる增山老兄まづ着てまちゐられたり、程なく德川達孝君は從者一人をつれて來られ、松平忠威君は昨夜より俄の不快にて不參なりと語らる、もと此の旅行は松平乘承君、仙石政敬君も同行の約なりしを、えざらぬ事にて不參なるに、今亦一人少なくなりては、唯此三人に過ぎずと、いたく失望せしかど、詮方なければ、忠威君には少しにても快くなり給はゞ、あとより來ませかしと電話にていひ置き、七時二十五分の汽車に打のりけり、

品川の海を見て、今しも舊曆の雛の節句なれば、潮干狩に出づる船多からむなど、種々の物語りしけるうち、こゝかしこを過ぐるに、藤澤のわたり松原の中の桃の花眞盛にて、いひしらぬ眺めなり、いつしか國府津に着きぬ、此處よりは一等客車の設けなしとて、二等に乘り代へむと、その客車を見れば、

乗客満ち〳〵て、更に餘地なきに、機關車に隣れる三等客車の稍すきたるに、辛くも乗移りぬ、

今まで緩かなりしに引かへ、いと所せきまきに、昨日は榮華にほこりしも、今日は忽ち零落の域に沈淪すといふが如き、人世の頼むべからざるも、實にかくてこそと兩君に物語れば、誠にさなりと答へらる、些々たる物にても觀察の如何にて面白き眞理の一端を見出しうるものぞかしと、それよりわが胸は限知られぬ種々の想像に驅られて、其想像は芽をふき葉を生じ、花咲き果を結べる間に、滊車は、幾度か隧道を出入して、早や御殿塲につきぬ、此あたりの富士のながめはいつ見ても麗はしければ、つく〴〵と眺めしに、隣に腰かけ居たる四十才ばかりの女の、幼き兒を抱きたるが、とはずがたりにいへるやう、此子はさき頃まで激しき麻疹にかゝりて、命さへ危ふかりしが、豊川稲荷に祈願をこめたるに、其靈驗いやちこにして、忽ち癒えつれば今日しも其御禮參りに詣づるなりといふ、開け行く世の風、未だ潤はざる片山里の人ならばともおれ、都の人の猶迷信の深きに、かつ驚き且歎するほど、汽車は正午を過ぐること三十分に沼津に着きぬ、

汽車より降りて、牛臥なる三島舘にゆく、道幅せまき沼津の市街を離れ、狩野川に架せる湊橋を渡りて麥畑菜畑の中を少し行けば、左にさして高からぬ山のうち續きたるが見ゆ、此の邊は嘗て六年ばかり前、柳澤保惠、細川立興兩君と共に、靜岡に旅行せる時、此地に御滞在あらせられたる　東宮殿下の御機嫌伺として、御用邸に赴きたる折過し道なれど、今はしかと記憶にとゞまらず、初めて見る景色と異ならねば、もの皆注意をひきて心目を娯ましめざるはなし、

空はぬぐふが如く晴れて、遠近の山の端はうち霞み、馬に荷をつけて靜に細道を辿りゆく馬士の謡の節ねぶたげなるに、蝶はひら〳〵と黄金の如き色を爲す菜の花を彼方此方に飛び狂ひ、春まだ若き此頃なれば、力さへ弱き其翼を、折々花の上にやすめ、

葉の蔭に憩ふは、彼ウォーヅオースのうたひたる一節も思ひあはされていとゆかし、細き流の岸に咲ける蓮華嫁菜を摘み採らむとて、小さき籠を手に持ちて群れ遊ぶ里の子の、時々空高く啼きわたる雲雀の聲に、その所在を尋ねんと見めぐるもをかしく見るものいづれも長閑けからぬはなし、又此あたりの百姓家はいづれも茅屋ながら、桃の節句なれば、室の一隅に雛段をしつらひ、紅の色あせたる毛氈を敷きて、其上に形ばかりの内裏雛五人囃子などをならべ、例の菱の餅に白酒を備へ、中には雛段の上に高く國旗を交叉したるなど何となく奥ゆかしき限なるに、わざと障子をあけ、外よりよく見ゆる樣になせるが多し、二三丁ばかり續きたる松原を過ぎ、石の柱の建てる門を越ゆれば、蒼々たる海を眺め、風景の俄に一變したるを覺ゆるうち、小高き所に石段をつみて、上に稲荷の祠のたちたるを見て、右に牛臥の山につきて曲れば程もなく山の麓なる三島館に着きぬ、



坐につきてまづ海の方を眺むれば、内海の波靜かにして鏡の如く、幾多の小島は其の中に木の葉を浮べたるが如く點綴し、伊豆の大瀬崎と駿河の三保が崎とは、左右より恰も手を握らんばかりに細く長く

斗出して此海を包み、宛然湖の如く思はしめぬ、餘念も無く此景色を眺め居るうち、節面白き笛太鼓の音の松原のほとりより海を渉りて聞えくれば、はしためを顧みて彼祭あると覺しき祠はいづこにて如何なる神におはするぞと問へば、神武天皇樣のお祭なりと答ふ、東京の神武天皇祭は、昨四月三日なれど、此地は一日遲れてけふ催すは、さるは東京にて受けさせ給ふべき祭を了りて、昨夜の夜行汽車に召し給ひ、此地にはるばる來給ひて、今朝よりかく祭を受けさせ給ふならむといへば、明日もまだ其お祭なりといふ、そは必ず此地の風光の餘りに麗はしければ、明日まで滯在ましますならんと云へば、皆人えあらで笑みくつかへりぬ、

二時すぐる頃、靜浦の保養館に滯留せらるゝ德川賴倫君を音づれむと、連立ちて旅舍を出づ、先に通りし石の門をすぎ短き橋を越ゆれば、見渡す限松の林なり、林の中の松はいづれの海邊にもあるならひにて、皆海にそむきて折曲りたり、海を後にすれば

眺矚更に趣をかへ、芙蓉の峯は巍然として雲の上に聳え、山の頂にはまだ雪多けれど薄絹をかけたるが如き霞は、うちひろがりたる裾野を罩めて恰も山の麓の樣に見ゆる沼津の市街を半とざせるを見る、林の中程にて途を轉じ、海岸を歩めば、岸に打よする波靜にして砂いと淸し、彼祭のためにや、はた雛の節句なればにや、此あたりの子女、皆着飾りて濱邊を樂しげにつれだちて歩み、色黑き漁夫の仕立おろしと見ゆる綿服と着代へて、帶さへ行儀よくしめたるは、常とはあらたまりし心地すべし、かく漁村のものども皆一日のなりはひを休みて、終日遊びあるくに、これらをよき華客として、濱邊に形ばかりの屋臺店を出し、駄菓子鬻ぐものあまたあり、濱邊よりまた松林の中に入り、林もやがて盡き人家の建ち並ぶ村の途を數丁行けば、早や保養館なり、館の左に海濱院と云ふ病院ありて、白衣の看護服纏ひたるが、たちさまよふも見ゆ、門の兩側に植ゑたる桃櫻の早や盛過ぎたるを見て、賴倫君を訪へば、今

しも自轉車にて近傍へ行かれたりといふ、しばし待つほど庭内を歩むに、緑なす芝生滑かにして、所々に小松を植ゑしはわざとならずしてよし、客舍の屋根の概ねかやぶきなるも、かゝる所にふさはしく覺ゆ、程なく頼倫君は予等の來りし事を聞き、自轉車急がせ歸り來られぬ、海に向ひて建ちたる四阿に入りて種々の物語す、この左隣に石垣をつみて圍ひたる二階は西郷氏の別莊なり、その正面に潮の干たらん時は船なくして渡らるべきほど近き距りの海の中に小島あり、此處にも離れ家ありて、傍らに石燈籠のあるなど、誠に繪の如き風情にて、此島亦西郷氏の所有なりとぞ、他の一方は眺望廣々として趣更に深し、弦の如くゆるやかに曲れる岸にそひて松の林つゞき漁船をあまた濱にならべて、網をほしたるなど、波の白きと相映じて、さながら舞子の濱の面影あり、打續く海岸の端は、牛臥の山にて、三島館と此保養館とは遙に相對して、指顧の間にあり、談はいよ〳〵佳境に入り興うた〳〵盡くべくもあらねど明日を約し頼倫君に送られて旅舍に歸りぬ、

茲に予等をしていたく喜ばしめたるは、此の夕松平忠威君の、夜來の病全く癒えたればとて、ふりはへ來られし事なりけり、皆打よりて晩餐の小宴を催す、酒の運れるほどに、興大にわかり、舌戰雲の如く湧く、あとよりはしためのいへるには、笑ふ聲、語る聲、屋外までもよく聞えしとぞ、しかも皆一笑に附し去るべき座談にはあらで、概ね道德風教に關する問題ならざるなきは、われら躬行會々員の面目に、毫もそむかざりけり、やがて頼倫君も歸られ、宴も了りしかば、達孝君と共に松原の邊まで行き、颯々たる松籟と、吹來る潮風とに醉ひたる顏をさまして、さてふしどにつきぬ、

海の方にあたりて船頭のわめく聲囂しきに、眠をさまされ、窓の戶開けば、數多き漁船は遙に沖よりかけて、碁石をまきし樣に此海一面に浮ひろがり吹く朝風に舷に建てたる紅白の旗を飜し、互にのゝしりあふは、曉よりの大漁を喜ぶにやあらむ、見る

から勇ましげなる有様に、濱邊にいづれば今日も亦よき日和にて、對岸に打つゞく山の佛の寢たる姿に似たる故に名けしといふ、寢釋迦山のあたりはまだ朝霞深くとざしたるに、日の光斜に浪に映じてさながら黄金の線のうね〳〵と奔るやうなり、朝餉はつる頃、鈴の鳴る音連りに、外の方に聞えたれば、早や賴倫君の來られしならむといふほど、同君は自轉車にて予等が迎として來らる、皆つれだちて旅舍を出づ、途に景色のよき所を撰びて、忠威君の携へられたる寫眞機にて撮影せられぬ、桃の名勝なる桃鄕といふを過ぎしかど、花の盛の既におくれたるはいと口をし、保養館に着き、昨日憩ひし搖月亭にいこひしに、忠威君例の撮影せられたり、

午後一時江の浦の勝を探らんと立ち出づ、屛風を立てしが如く屈折せる海岸をつたひ行けば、沖の方より次第に曲り入り込みて、風景やう〳〵狹くなりゆく心地す、やがて短き隧道を越ゆれば、箱庭の山水畱ならぬばかりに、小さきながらよく整ひし風景の所に出でぬ、これぞ江の浦なる、隧道を出でし所に、岩石を切り拓きて、山の半腹に建てたる成川氏の別莊あり、此海は次第に沖よりして入り込み來し海の果にして、實は入江なれど、如何に考ふるもしか思はれず、波も更になければ、海の周圍にある小さき山、海の中にある小さき島など、そのまゝ水に映じて影全く動かず、又此海底深きをもて、軍艦などの碇泊するによろしく、しかも奥深き入江なればたやすく所在を敵に知らるゝ憂なく、防禦上には此上なき地なりと聞きぬ、

さて小舟を艤して、海の中なる小島に渡りしに、一面の岩石にて、海草蠣など附着し、登るにいたくなやみしかど、漸くにして這ひあがり、四方を眺めたれど、さしたる風景なく、たゞ忠威君の帽子の風に飛ばされて、海に漂ひたるが、時に取りての笑ひ草なりしのみ、歸さは一歩ごとに風景廣くなりゆく樣に思はれ、富士の眺も傳ひゆく海岸の樣になりて幾度となく變りたれば、忠威君は道すがら例の撮影

を試みられぬ、保養館に暫時いこひ頼倫君と別れ、夕つ方牛臥に戻りぬ、夜半のまどゐは、昨夜の如く賑はしかりき、

明くれば四月六日にて、此風光麗はしき地をあとにして、都に歸るべき日なり、けふも空よく晴れたれば、一人立出でし旅舍より、眞向ふに低き竹垣を結び繞らしたる運動場を歩みぬ、一隅に淸げなる白木造りの家あり、屋内の半ばたゝきにして、椅子寢臺の類を据ゑ、他の半ば小高き階級を造り、硝子の扉あり、開き見れば十疊ばかりの廣さにて、其建築かなたの旅舍に比すれば、雲泥の差あり、こはやんごとなき方々の御用邸に御滯在の折駕を枉げさせらるゝ際、御休憩の爲にもと旅舍の主人の心をこめて造り成しゝものなりとぞ、

右の方のすぐ前に、海に面して烏帽子を立てたる如き岩あり、石をつたひて此岩まで辿りゆけば、小さき蟹の足音に驚きて、おのが穴に逃げ隱るゝもをかしく、寄せ來る浪も例の穩かなれど渺茫たる太洋の横ざまに一文字の翠黛を畫くを認む、もし莚の如く靜なる海上に、東海の龍神誤つて襲ひ來り、烈風狂瀾を捲き、激浪岸を打つ物凄き光景と變じ、碎けては雪の如く、散じては珠の如き觀を呈せば、更に大なる壯觀を添ふべからむと暫し想像を描きしかどさて眼のあたり見るよしなければ、此所を去りて、更に牛臥山の頂なる望岳臺の景を眺むべく攀ぢ登りぬ、

或は急峭なる段を跨ぎ、或は道覺束なき山徑を辿る事四丁餘、曲折十數段、漸くにして頂に達すれば小亭あり、豆州の諸山を右に見渡し、麓の海濱の砂白く松靑き間に、御用邸を始め西鄕大木氏の別莊點綴し、他の一方は藍色を爲せる海の中に蜿蜒として長蛇の驅するが如き三保の松原を霞のうちに認め、興津岩淵の邊より田子の浦千本松原の海に眞帆片帆のゆるやかに風を孕みたるが見ゆるなど、名人の手に成りし繪の心地す、蒼海は迂曲して眼下の懸崖に至り、寄せては返す波に水陸を境して、近く大山氏

の別荘に連なる、更に身を背後に轉ずれば、富士の靈峯は高く雲表に聳え、山麓の諸山を愛撫して、恰も君臨するが如き姿なり、うち連れる裾野はひろひろとして、近く眼下に奔る所、壁瓦白碧人煙簇るは沼津の市街にて、町を横貫する狩野川、遠く見ゆる久能、箱根、足柄の諸山皆眼底に映じ來り、招けば將に應せんばかりなり、脚下に開くる平野は、麥の青々としたると、菜の花の黄きと相混りたるに、何處ともなく鷄犬の聲長閑に聞え來るなど、此雄偉なる風光に恍惚として、造化の手腕の靈妙なるに撲たれぬ、

富士の眺は此邊いづこより見るも麗はしけれど、此山より見たるにまされるはなく、望岳臺といふは眞に其名に背かざりけり、凡そ自然の人事と渉るもの一にして止まざれども、殊に我國民の精髓を成せる一大標的として尊崇し、特色を表するもの此靈峯に若くはあらじ、予は常に此山の邦人の品性を陶冶するに有力なるを信じたれど、今眼のあたり此美觀に接して、いよ／＼其眞なるに感じぬ、あはれ此峯よ拂曉嶺の一端なる劍が峯に立てばさし登る旭は暗に鎖されたる太洋の一角を破りて、麓の方は未だ夜深く、萬戸の眠覺めざるに、早くも燃るが如き曙光を此靈峯に放つべく、日暮に到れば又曠野と巨海とをあげて、茫々蒼々たる裡に葬り、全く辨ずるを得ざらしむ、

我が國人は昔より常に景慕の念を以て此山を望みたるは、歌に詩に文に又歷史に之を證して餘あり、さるを顧みて、現時の世態を考ふれば人皆利の爲に働らき毫も節義の如何を問はず、道徳を守るの念殆んど絕無なるに、此敬慕すべき富嶽の麗はしき風姿は、千古不易、澆季の世に當りて、却て其美を加へたるを覺ゆ、嗚呼腐敗したる今の世の人、此靈峰に對して、一片のやましき所あらざるかと、予は深き嘆に沈みたれど、富嶽は予の心に偉大なる一種の慰藉を與へしと共に、又濁澆せる世にあるも心ある人士をして、必ずや高潔なる心情を養はしむる如き便

りとなるべしと、いとゞ尊崇の念を高めぬ、
獨さま〲の思にふけりて時のすぐるを忘れつゝ旅舍に歸れば賴倫君は早や靜浦より來られたるに、又鎌倉に滯在の松平直亮君も來り會せられければ何くれと談らひし後車を並べて立出でぬ、
道すがら賤がやの内を見るに彼の雛の人形も大方片づけられ、彼方此方の田の中に蛙の啼く聲しげく處々に野馬たち騰りぬ、沼津の停車塲にて送り來られし賴倫君に別を告げ一時五十分の滊車に乘り大船にて直亮君に別れ夕べ七時新橋に着き、かくて三日の面白き旅を終へたり、
此夜富嶽の神靈は端なくも予の枕がみに天降り給ひぬ、つとめて起いで庭の櫻を見れば半咲いでゝ花の露に混ひたる風情いと多し、旅に出立つ前眺めし折は未だ蕾も堅かりしを僅か三日ばかりにかくまで咲たるよとあかず打眺めつゝ、此花の雫を硯に受け又こむ春の紀念にと三日の旅の記を此も櫻に因ある麻布の櫻田町の邸にてかくなん綴りなしつる、

春の歌

侯爵　鍋島直大

河上春月

鴨川のきよき流れにうつれども
なほおぼろなる春のよの月

月夜歸雁

故郷へ歸るかりがね聲すなり
おぼろ月夜にかげは見えねど

雨中雉

春雨のふる野の道の夕まぐれ
ともよぶ雉のこゑぞきこゆる

行路花

さくら花見つゝ越えずは一人ゆく
山路はいかにさびしからまし

水邊落花

すみ田川堤のさくら風ふけば
水のうへこそさかりなりけれ

新體詩に就て

文學士　上田　敏

今日日本に於て文學を談ずる者の中に二つの派がある、一つは新聞雜誌、或は講壇に於て文學の重んずべきを論じ、或は日本文學の發達を促して、盛に議論をする人々であります、もう一つは文學其ものを愛する人であつて、其一部分は創作家の製作物をしみ〳〵と味ふもの、他の一部分は、自ら進んで製作を試みる人であります、然るに世人は前に擧げた二種の人を一概に文學家或は文壇の士と言つて居るので、甚だ見易い此區別も、宜く解つて居ないやうに思はれる、即ち世の中の學者とか所謂識者とか云ふ者は、勿論文學の貴ぶべきことを、理論の上から辨へて居るから、平生文學の人生に必要なること、或は高尚なることを云々するのであります、併ながら由來文學を非常に愛して、所謂之が爲に憂身を窶つすと云ふ程の熱心がないから、文學に正當の待遇を捧げない今日の社會に立つて、どこまでも猛進して之が發達を圖り、之が進歩を經畫する人ではない直に教育とか道德とか云ふ方に遠慮して、右を見、左を顧み、逡巡して居る體裁が見える、われらが所謂教育ある人士の議論は大概斯う云ふ類であります幸にして近頃青春の徒の一部には眞に文藝の尊貴を知り、藝術の重んずべきを考へる人が追々殖えてきて、おのが理想に向つて猛進しやうと云ふ人もあるやうになつて來たのは、兎に角社會の一進歩でありませう

さて第二種に屬する眞に文學を愛すると云ふ人々の側にもいろ〳〵種類がある、それで、今日製作を試みやうとする人は重に小說家を目的とする人でありませう、即ち明治文學中最も發達した小說の先進を見て之に倣ひ、或は其成功の更に上に出やうと望んで居る、併ながら小說と云ふものは唯だ消閑の具に供する類もあり、或は一時の際物として書く所の作もありますから、强ちに此の小說家志願者が、皆

眞に文學の愛を有つて居ると云ふ譯にもいかない
それでは何が眞の文學家であるかと云ふのに、私は兎に角、廣い意味の詩と云ふものを愛して、之が發達を圖らうとする人を、最も文學を愛する人と言て差支なからうと思ふ、只不幸なことには日本の新體詩はまだ發達して居ない第一其詩形が定まらないのである、七五と云ひ五七と云ふ是までの體裁では、今の世の人の思想感情を細かに憾みなく歌ふことは仕難いのであります、それ故に眞に文學を愛する心がありても、少し思想の緻密な人々は、稍々新體詩を敬して遠ざけるやうな傾がある、即ち自分では國詩の發達を望んで居ながら、到底今の狀態では十分に自己の思ふ所を行へないと云ふので、散文の形式を以て新らしい思想を歌はうとする、今日世の中で美文と謂ふのは此人々の重に作る所であります、



美文と云ふ名は私の考では小しく穩でない語と思ひますが、是は一面西洋の『ベル、レットル』といふ語の譯ではありませうが、實の所それより、ずつと廣い意味があるので或は散文詩と云ふやうな意も含まれて居ます、抑々日本文學には和歌を除いてほかに、一つの規則立つた詩形が今まで無かつた故、詩想を現はすのに勢ひ散文の助

けを藉らなければならぬ、そこで散文とも付かず詩とも付かない一種の文體が古來多く行はれた、それ故に平家物語も、謠曲の文も、或は徒然草等の一部も、又は徳川時代の所謂和文も馬琴の文章等も此散文と詩との中間を行つて居るものである、今日の人も其系統を承け、此重寳な文體を用ゐて風雅の想を述べやうとして居ます、此事は今日新體詩の振はない一原因であらうと思ふ、即ち不十分ながら所謂七五、五七の調よりも更に都合好く詩想を現はす文體があるので何を苦しんでか自分が餘り滿足して居ない窮屈な古來の詩形に依らうと云ふ考が誰しも念頭に浮ぶのである、外國にも勿論散文中に調子の整つた殆ど音樂を聽くやうな文章もありますけれども、日本の如く、詩形に近づいた句調は少ない、然るを日本の文章は直に流暢と云ひ、或は句の切り方が旨いとか、始終詩形に近づかうとして居るのは、詩に於て求め難き味を、強いて散文の中に得やうとする爲であります、併しながら、此狀態は勿論賀すべきことではない、若し此の明治に非常に都合の好い詩形があつたらば、どうしても散文より調子が整つて、節奏の美がある律語を我々は有ちたいのである、

それで此新律語、即ち從來の七五、五七等に滿足せず清新の詩形を求める人が二十年來多く居ましたが、どうも未だ成功しないから、大概の人は先づ今日の所では不滿足でありながらしやうこと無しに七五等を以て我慢して居るので、專門の新體詩家も、已むを得ず詩形の問題を放擲して居るやうな觀がある、現今の狀ではせめて造語の奇警、內容の豐富を以て讀者を感服させやうとして、律語に缺くべからざる音樂上の約束を顧みないやうであります、此詩形問題は勿論非常にむづかしいから、今の人が之を放擲するのも無理もありますまいが、併し此宿題を何とか解決しなくては、遂に新體詩と云ふものは極く少數の人の樂しむ所となつて、明治文學に跡を遺さないやうになるかも知れません、

然らば此詩形は如何にして工夫し出すかと云ふに

是は勿論天才の士が出で丶、殆ど無意識に新時代の新思想を歌ふに適する形式を不圖發明するのでありませうが、同時に天才ならぬ人が幾分か之に向つて助力することも出來やうと私は考へる、それには從來吾邦に行はれた律語めいたものを研究して、其外形を分拆し解剖して、日本語に特有なる一種の節奏を發見するのである、又此一方には今日の歐洲文學のみならず、希臘羅馬の詩形にも研究を及ぼし、又は東洋の波斯、亞剌比亞等の律語を分拆して、之に似たものが日本にあるや否やを能く探ね、他國の詩形の發達の徑路を追究してわが國詩の過去と參照し、更に進んで其現今將來につき、一定の方針を定めることが出來やうかと思ひます、先づ和歌と云へば、古事記或は日本記に遺つて居る古代の歌よりして、代々の集に依るより外に仕方がないが、之にも旋頭歌其他の變形がありませう、又記紀萬葉等には種々の變形があるから、之に注目して其研究の端緒を開くのであります、

併し尚ほ此外に最も注意すべきのは、神樂、催馬樂を始めとし、謠曲或は德川三絃樂の歌の中には文學上非常に價値の有るものが往々あるやうである例へば一中節の粟の段の『ほうやれほ』と云ふ節のある歌などは、思想と云ひ口調と云ひ實に間然すべき所がない、斯う云ふのを能く研究して見たら宜からうと思ふ、又研究の方法にも今日までは七五と云ひ或は五七と云ふ簡單な分け方を以て論じて居りますが、私は此の日本詩形の單位を更に小さい數に取らうと思ふ、即ち七と言はずに四三と云ふか、五と言はずに三二として、其組合せを能く考へたならば意外の結果が出來るかも知れない、尤も此の四三と或は三二と分ける方法に付ては、確か十數年前の哲學雜誌に或人の論を見たが、其後續いて其方向を以て研究する人が無いやうであります、之をどうか學問の側の人が十分研究なさることを望む、殊に國語國文の專門家に精密の調査を望むのであります、

もう一つ述べたいことは朗讀法の事であります、

朗讀法と云ふと直に芝居がゝりで、假聲でも遣ふやうに考へられますが、成程所謂世間の朗讀法と云ふのは、殆ど演劇の假聲に近い所があつて、甚だ滑稽なものでありませうが、私の所謂朗讀法とは、何も大聲を發して大勢の聽衆を一時に感動させることが俳優や講釋師の如あれと望むのではない、寧ろ少數の聽衆或は自分一己に向つて詩の句の意味を、明瞭に强弱を分けて、翫味會得されるやうに讀むことを謂ふのであります、さう云ふ種類の朗讀法が行はれて來たならば、日本詩形の發達も、或は之に助を得るやうになるかも知れぬ、そして韻でなくとも頭韻或は類音又は音の長短等の飾が日本の詩に出來るかも知れない、或は今の詩形の基礎である音の數關係の外に、何か他の分子が或は得られぬこともなからうかと思ふ、是は唯紙上の議論ではいけないので勿論創作家の制作を待たなければならぬが、學者も亦既往の作品に付て十分精密な研究を積むべきのである、之が先づ詩形に對するざつとした意見であります、

次は內容の問題でありますが、此內容は勿論千變萬化であつて、或る意味から言へば天地間のもの總て詩である、人生は皆詩である、併しながら文學の趣味の幼稚な人々は俗に言ふ大味なものばかり分るので、小肴の旨い味は解しにくいのである、それで徒らに問題の大きいもの、或は時局に關係したもの、一寸人を悲しませるもの、涙を流させるものを非常に好む傾があつて、或は餘りに世と懸離れた理想風のもの、或は夢幻の如きもの、之を專ら詩に謳ひたがるのであります、立派な詩趣も籠つて居りますが、今日の新體詩に於て殊に注意して缺く可からざるものは『誠』と云ふことであります、即ち氣取つて居ない感情を歌へと云ふことである、卑近と見えても其中に一種の掬すべき眞情のある歌が欲しいのであります、此の『誠』を言現はした歌は、血氣既に定まつた大人君子が見て、非常に感激しないまでも、自からほゝゑまれるやうな味が出て來る、即ち人生

の深い『誠』が籠つて居るものであります、此種類の歌が今日本にわつたならばと始終思つて居りますが近頃『ゆめみるひと』と云ふ號で文壇の某大家がをり〳〵短詩を出されますが、其中稍斯う云ふ趣があるかと思ふ、他の新體詩に至つては、まだ其處へ氣が注かないやうであります、外國の文學で申すと、總て文藝に於て最も嗤ふべき幼稚な作品と云ふものは、所謂『シング、サング』の類に落ちるもので、さう云ふ種類の詩は縦令どの位發達しても、單に『レトリック』に過ぎない、華やかな修辭に過ぎないのであります、今の新體詩中に此弊が無くはありませんかしら、併し修辭も發達の一階段としては免れないことで、今清新奇抜の造語を工夫して、國語を豊富にする材料を供するのも一策でありませう、

唯我々は誠であれ、眞に感じた事を歌へ、歌ふ事の大小を擇ばず、自分でしみ〴〵と思つた事も詩にせよと云ふのである『アルフレッド、ミユッセ』の詩に、『我が盃は小なり、されどわが盃なり』と云ふ句があります、私は今の新體詩家に向つて盃の大小を問ふのではない、唯其盃の借物であるか、無理強いされた盃であるか、迷つた盃であるかを尋ねたいので、若しそれが自ら樂しんで傾ける盃、或は親しき友より受けた盃であれば、それで安心するのである、其方向を以て各自の志す所、思想の傾く所に向つたならば、其成功は略々見えて居るのであります但し不幸な事には前に言つた詩形の不備といふ點がありますから、新體詩の創作家は、勿論之に向つて倦まず怠らず新研究を積まれ、學者も亦作家の爲にせめて一臂の力を盡さうとして、詩形を解剖したり或は綜合して、明治の清新體を工夫せられむことを望むのであります

竹柏漫吟

佐々木信綱

とこやみの闇の底より何ならば

われを呼ぶらむ聲のきこゆる

はやり唄うたひて過ぐる若人の
若きこゝろになるよしもがな

さかしげに昨日は人をなぐさめつ
今日の憂ひをわれいかにせむ

いかでわれ生れかはりてそのかみの
清きわが身となるよしもかな

人みなの心つめたき世なりとも
つめたき心もたじとぞおもふ

おろかなるわがまことより人も皆
まことあるものと賴みつる哉

朝ゆふに見まはる吾田吾はたけ
何のさちをかさらにもとめむ

小さなる森の歌人おのがじし
ねぐらに入りぬ月いでにけり

いくとせを田のもに老しやせ馬の
いなゝきさむしゆふぐれの風

幼な子に追ひ立てられてとぼ〳〵と

あひるのむれの水に入るかな

うたけはてゝ花のともし火皆消て
をぐらき庭のこほろぎの聲

堤ゆく人かげ一人また一人
狹霧晴れゆく川ぞひのみち

わが父も母もねむれる松かげの
こゝにわが身のいつか來らむ

女子と繪畫

東京美術學校教授　黑田清輝

女子の繪畫を學ぶやうになつたのは、將來我國の美術工藝發達に就て、大に歡ぶべきことで、たとひ女子が專門の美術家にならずとも、美術の教育を受けることは必要である、而して女子の繪畫が專門として學ぶ價値ありや否やに就て考ふるに、女子も男子も專門に學んでよいかわるいかと云ふについては同じことで、男子に出來ることは、女子にも出來ね

ばならぬ譯である、

併し男子と女子とは先づ身體の構造が根本的に違うて居る、それから家庭を形造る上に於ても、内の人となると、外の人となるとの差があり、習慣の上からも、實際上女子が専門家になるには、その種類が限られてあるかの如く思はれる、それで美術を以て専門とする、美術の中の繪畫を専門とするに就ては左までむつかしいことではない、併し現今では専門の畵家になつて、一家を成して居るものがいくらもある、併しながら一般に言へば、専門にはして居るとも、男子ほど進んで居ない、それは何ういふ理由であるか、

元來女子は男子ほど健全なる腦力を有つて居らないのであるか、社會の習慣或は周圍の物が邪魔をして居るのか、教育がそれほど進んで居らないのかそれ等のことも研究して見たいと思ふ、腦力は男子ほどでないと云ふ事は、或はさうかもしれない、男と同じ考を以て、同じ鑄型に男と競走は出來ないが男以外に特殊の腦力がないとも云へぬ、その點が發達すれば男子が女子に及ばぬことあるかも知れぬ、さすれば差引同じことである、習慣教育等に就ては何うであるかと云ふに、習慣は無論男子と並んで行くことを許さない、男子は専門事業をやつて、それを貫かねばならぬ事になつて居るが、女子はさうでなく、おのれ自身も男子に賴つて、その部下に屬して行けば足るものと思うて居る、男子と専門の學術を並行して研究して行くことは出來ぬものと考へて居る、故に今日の有樣では男子の次、或は一部分になつて居る、又社會の周圍の事情が女子の専門として繪畫を研究するに邪魔をして居ることは確であるが、昔ほど女子は家を守つて居ればよいと云ふて居るものばかりはない、半分は女子も専門家として、それを名譽として吹聴するやうになつて來た、教育は少しづゝ専門を女子に許す方に向つて居るが、まだ専門で立つて行くほどの専門事業に這入ることを許さない、それで私は平素斯う考へて居る、

脳力としては女子は男子と同じ方向に發達はしないが、女子特殊のものがあるから、それを助成するやうにしたい、そのまゝ捨てゝ置くのはつまらぬことである、社會は既に女子が專門の學術によつて立つて行くやうに進んで居るが、習慣があまり喜ばない、女子はまだ或點まで普通教育をして、あとはよい妻となればよいとしてある、女子はそれで申分のないのかも知れぬ、併し專門といふ方から考へて、女子にも專門の藝術を修めさせるは、極めて面白い事であらうと思ふ、男子が專門の藝術を修めたからといふて、思ふ存分に發達するものではない、男女兩方に修業させて居る間に、どちらから傑物が出るかも知れぬ、何うしても女子は依頼心が多いから、その依頼心を去りて獨立心を起す、獨立をする考が發達すると、あらゆる忍耐も出來て、女子といへども相當の働が出來る、男子ほどに行かぬと云ふのは女子自ら男子に及ばぬとして、男子ほど身にしみて勉强しないからである、故に教育は今以上大に骨を

折つて貰ひたいものである、例へば女子が油繪を學ばうとしても、專門學校の設備が、政府の手には一つもない、僅に私立一二校位、それもほんの初歩である、それでは學びたくても出來ない相談になるから、それらの遺憾のないやうにしたいものと思ふ、

さて女子が繪畫の專門になれば、何ういふ生活をするか、假りに女畫師が出來たとする、男の繪師ならば、妻を娶つて一家の主人となり濟ますが、その趣味を感じない夫を持つては、寶の持ぐさりとなる併し女子が一藝術の專門家となるほどであれば、唯父母の命止むを得ず、結婚を諾せねばならぬといふこともあるまい、その技術を妨げない範圍で、相當の夫が得られるであらうと思ふ、專門家に家政をやらせる趣味を有つて居る夫もあらうと思ふ、無理に技術を沒却してまでも夫を有たねばならぬと云ふこともあるまい、外國などでは、夫が畫師で妻が彫刻師、夫が辯護士で妻が專門の畫家、といふ樣なのが澤山あり、夫婦とも畫家抔と云ふものあつて、さう

いふなのは話もよく合ひ、其生活狀態も實に羨ましいほどである、右の如き譯であるから、專門家として人の妻たるに適せぬといふことはないのである

家庭の樂園

佛國　スーペストル　作
淺岡　一　譯

（上）

四月十五日の朝の八時のことで御座いましたが、自分が書架の上に書籍を陳列して居ります所へ、メールゼチピエーブと申す近所の水菓子屋の女房が、林檎抔を入れた一ツの籠を持つて參つて、室内へ置いて歸りました。これは久しい前から買ひ馴の水菓子屋で御座いますので、毎日曜日には屹度何か持つて參ることに成つて居りました。此水菓子屋の爲には自分は好い御客樣の方でしたらうと思つて居ました、併し此の店は商買に掛けては不手際で仕入抔も不充分には相違無い。けれども、歳久しく買つて居ましたから、僅かばかりの金錢の爲に、また僅かばかりの品の相違の爲に、他の店から買ひますのも氣の毒、且は此店も困るで有らう抔と思ひまして、何時も此店からばかり水菓子を取つて居りました。畢竟默つて居る間に約束が出來て居る樣なもので御座いました、自分の慈愛心は彼が爲には一ツの不動產でした。

此日自分の書籍を書架の上に陳列しながら、書架の不足を感じて居りますときに、彼女房が參りましたので、丁度好い機會に來て呉れた、御前の良人ミッシエルさんは指物師で有るから、書架を拵へる爲に來て貰ひたいものじやと斯う申したので、彼の女房は直に、宿の人を上げますといつて梯子を下りて行つた、其折には心付かなかつたが書物を陳列して仕舞つてから一寸胸に浮んだ、彼の女房の容貌音節抔が例の快活な調子とは違つて居つた、屹度何か心配なことが有つたらしい、彼は可愛想じや女盛りの年

から長い間辛苦はかりして、殘酷な試驗に遇つて居る、辛苦も彼位したら充分じやらう、思ひ出してもぞつとする程じやが、自分は百年立つても彼の時のことは忘れられまい、自分が彼を尊敬する樣に成つたのは畢竟あれからじや。

そも自分が此區內に引き越して來た時にみすぼらしい新店で、誰も買ひに行く人も無い水菓子屋を見付けた。却て買ひ手の無い店が目に付いて、僅かの物を買つた。元來自分は物を買ふのに極て寂しい店を撰ぶが、寂しい店は好い物が少ない、其上價が安くない。それに自分が何時でも寂しい店を撰んで物を買ふのは、同胞中の貧困者に同情を表するからで別に自分の利益を圖るのではない。サテ此水菓子屋抔といふものは、兎角に不幸なる孤兒やら寡婦抔が人の憐愍を乞ふ爲ばかりでもないが、其商法で金滿家に成らうといふ人は先づ無い方で、大體は命繋ぎのみの商であるやうじや。であるから、金錢と品物との交換といふよりも、客の多數は寧ろ金錢を施して遣る樣な譯じや。

彼のメールゼネビエーブといふは、其當時に在つては年の若い美しい女だつたが、其花盛りと見える時は、早や辛苦する樣に成つた時で、忽ちに萎れて仕舞つた。其良人の指物師は手は利いた人だが、惜いことに酒の神樣を信仰する爲に、丸で性質が變化して仕舞つた。それが爲に活計抔も不如意らしかつた、例へば一週間の內仕事をするのは二日位のもので、其他の時間は先づ酒神の信者仲間と共に御籠りをして家に寄り附かぬといふ風で、一家の暮しは都て女房の働に依賴するといふ次第と思はれた、自分は或日のこと僅かばかりの買物をする爲に、彼水菓子屋まで出掛けた、すると其店の後の方で女の爭つて居る聲を聞付けた、其聲の內に淚に曇つたといふ樣な女房の聲がした、果してゼネビエーブで有て彼が赤ん坊を抱いて居つた、其前にも一人の田舍者らしい女房が居つた、其樣子から察すると、其赤ん坊を里子に取つて育てた婦人で、其婦人が頻りに赤

ん坊の養育料を出せと言つて居るに相違ないと認定することが出來た、店の女房は辯解の言葉にも申譯の口實にも最早種切れといふ樣な次第で、只泣き居るばかりで有つた、隣の家からも、女房が出掛けて來て頻りに其田舍の里親をなだめすかして居るらしいが、其里親が中々一酷で承知しない、却て腹を立て〻脅し文句やら、惡口やら、益々鋭く言い募つて來た、自分は此憐れな爭を聞いたもの〻、また仲裁にも立ち兼ね、歸るにも歸られず、双方の言ふ所を聞き居つた、其處へ丁度水菓子屋の主人公ミッシエルアロー即ち指物師が歸つて來た、



彼は仕事場から歸つて來た風で有つたが、確に歸り掛けに酒屋に入り込んで飮んで來たに相違ない、其の財布は頸に掛けられて有るが、その口は開いたなり、閉ぢもせず、中には物の有りさうにも見えない彼は帽子を手に持ち居つたが、其髮の毛の蓬々として居る樣は、佛蘭西人の祖先のゴール人らしく且つ久しく櫛の齒の觸つたことも無い樣な風で、其眼球を眼元の方に据ゑて、青白い樣な顏色をして居る樣が、何となく物凄く見えた、其内に迷ふた樣な眼付で方々を見廻したが、其足も確とは踏み止らず、蹣跚として躓きながら、店に入つた

女房のゼネビエーブを呼んだ、

女房のゼチビエーブは困つて居つた所へ、良人が歸て來たから嬉しくて堪らない、喜びの聲と共に赤ん坊を抱いた儘で店へ飛び出して來た、然るに其良人の有樣は、蹈む足さへも定まらぬといふ樣な次第だから、がつかりして其頭を赤ん坊の頭の上に垂れて、其涙を赤ん坊の頭の上に灑ぎ懸けつゝ泣くより外に仕方が無かつた、此時隣の女房と里親とがゼチビエーブの後に續いて店へ現はれて、おかみさんあなた矢張養育料は下さるので御座いませうねと、先づ里親が聲を懸けた、隣の女房は兼て此夫婦の平生のことを知つて居るから、ゼネビエーブには同情を表すぞが、此のミツシエルアローを寧ろ惡いと思つて居る、それに今此醉つて歸つて來た有樣が癪に觸るから、ミツシエルを眦に懸けて睨まへながら、ツンとして愚弄する樣な風で、里親に向ひ御前さんおかみさんを苦めるよりも、お金をば旦那から御貰ひなさい、丁度好い所へ歸つて來たからと、ミツシエルを指さし示した、里親は屹度した風で、ミツシエルの方を見向いて、アゝこれが御親父かへ、マア呆れた大變えらい人ねー、自分の子の養育料さへ拂はぬ癖に、御酒をば浴る程飲むなんて、

御酒との一言丈けはミツシエルの耳へも響いたのと見え、ナゝナントといふた、誰れが酒といつたか此方樣は酒は飲まぬが燒酎をば飲んだ、酒と聞いては此儘には濟まされぬ、コリヤ山の神、錢を出せ、イヤ近所の酒店で此方樣を待ち居る有樣で有る、早く行かずばならぬ早く出さぬか、

此亂暴なる言葉はゼチビエーブの耳にも聞こえたには相違ないが、彼は何とも答へず默して居つた、するとミツシエルは蹣跚ながら賣り溜の側にいつて引出しを開け、頻りに錢を搜がす風で有つた、

此時隣家の女房が里親に對して、御前さん彼を御覽なさい、此家の御錢は何處へ出て行きますか、御前さんは御氣の毒な方だが彼の通りの譯ですから、可愛さうに此家の内君さんも御前さんに、どうして

御錢をあげられませう、
里親は隣の女房の言ふことを聞きながら、さればとて私に誤りの有るではなし、何の道養育料だけは貰はにやならぬ、是非とも拂ふて貰ひますは、
といひつゝ暫し思案顔をして居つたが、田舍女の本性を現はして、これまで赤ん坊に對して厚く注意したことやら、それが爲には思はぬ費用がどれ丈け懸つた抔と、如何にもくど〳〵しく述べ立てゝ、相手に對しては如何にも尤もと思はせ、且つこれを聞き入れずば、如何なることをするか分らぬと恐がらせやうとしたらしい、
そこで女房のゼネビエーブは若し今金を出さずば赤ん坊の身の上にどんな非常なことをされるか分らぬと心配して、其子を抱いたまゝ店の後の一間へ行き、自分等の寢る床の内に寢かした樣子で有つた、
そこで里親はゼネビエーブの素振を見て、これは赤ん坊を匿して養育料を出さぬ積りだなと、一圖に邪推して火の樣に怒つて、部屋の内に躍り込んだ、間も無く女同志の爭ふ聲と、赤坊の泣き聲とが混同して聞えた、
此時まで賣り溜の引出しを搜して居つた、ミッシエルが電氣に感じた樣な鹽梅に、ぶる〳〵ッと震ひて耳を傾けた、同時に赤ん坊を抱いた女房と其赤ん坊を奪ひ取らうとして、後から追ひ懸けて來た里親とが店に出かけて來たと思ふ間に、女房は賣溜の側に來てミッシエルに身を寄せかけた、
ミッシエルは驚かされて、眠りを覺ました人の樣な風で勃りと起つた、
おれの子ッ、ど、どんな子かと吃りつゝ叫んだ、叫びながら其眼は赤ん坊の方に向いた、
ミッシエルの良智良能の活動は顏の上に現はれた
むゝロベール、これがおれの子のロベールか、
と抱かんとしたが足が蹣跚けた、里親はヤッキとなつて、赤ん坊を自分の手に取らうとして、
お錢だ、此子は私の、お錢だから私が持つて行きます、此子は私が育てたのだ、此子を育てた物入を

お前さん方が私に拂はないとすれば、此子はお前さん方の手に入る筈はない、死んだ子も同様じや、お錢でもよし、此子でもよし、何ちか一ッは是非貰はにや私は此を動きましねー、

ゼネビエーブは子を抱きしめて、此子を持つていんで如何する積りか知らんと口の中でいつた、

其聲を聞いたか聞かぬか、里親は育兒院は棄兒を拾ひ取つて育てたものに、其物入りを拂ふ育兒院の方が眞の親よりも餘程ましじや、オーさうじやさうしやうかとこれもまた小聲でいつた、

此言葉を聞いたゼネビエーブは一層恐れて、赤ん坊を抱きしめて、壁の方を向いて、里親の方を後にして、丁度牝獅が其兒を保護し居る樣に似て居つた自分と隣家の女房とは、如何にして仲裁仕樣かと考へつゝ默つて見て居つた、此時ミッシエルは此に居合せた四人を見廻はして、何が誰やらそれを見分けやうとして居るらしく見えた、其内に女房と小兒とを見定めて莞爾と笑み、また自分と隣の女房とを見て迷ふたらしく見えた、

する内に何事をか思ひ付いたらしく、待て待てッと叫んだ、

叫ぶや否や庭に出で、水の一ぱい滿ちて居つた、バケッの中へ突然頭を浸し、再三再四浸しては出し出しては浸し、殆ど十回餘も同じことを繰り返へした、

此に居合せた人々の眼は、何れもミッシエルの方にのみ向つた、此水浴が彼の醉の幾分を醒ましたか彼は自分等を一と目見て、直にゼネビエーブの方に向ひ喜ばしさうな顔をした、そして、其小兒を抱かうとして、女房の方に近寄りつゝ、ロベールおゝロベール、こりやゼネビエーブ、おれにも其兒を貸して呉れ、

ゼネビエーブはイヤ〳〵ながら、其子を良人の手に渡しは渡したが、若しや取り落しはせぬかと危ふんで、上から落るものを受け留る樣な樣子で、掌を上に向けて兩の手を小兒の下に出して居つた、里親

は此時また養育料を渡せと迫り、若し出さぬに於ては裁判所に訴へるといふ最後の手段を宣告した、

ミッシエルは注意して聞き居つたが其言葉の終ると同時に、小兒をば女房の手にもどして御金は何程でよいのですかと問うた、

里親はまたくど〳〵と種々の入費を數へて、僅に三十フランですといつた、

ミッシエルは直に衣嚢に手を指した、併じ何も有つた樣子では無つた、すると彼は顏を顰めた、其內に何か口の中で呪咀でもする人の樣に、何事かいひ居つたが、急に懷の中へ手を入れて、チョッキの裏の邊を探つて、忽ち大形の銀時計を出し、これを頭の上に高く指し擧げて、これッこれがお前さんのお金じやと、喜ばしさうに叫んで、私は平生これが渴いた時の用心の梨じやといつて居つた、イヤこれを懷の中に呑んで居つたのは、私じや無い、これは此赤ん坊が呑んで居つた樣なものじや、隣の內君さん、何卒これを賣つてください、これで不足ならば此外に金の耳輪が有る、こりや女房お前の耳輪を外づして呉れ、それも可愛い子の爲じや、異存も有るまい肉を質に入れる樣な苦しい場合には、時計も耳輪も家財道具も何もかも賣るより外に道は無い、マア世話に成つた里親には、奇麗に勘定を濟まして其赤ん坊を寬り寢せるがよからう、女房一寸其子を私に抱かせよ、私が床の中に寢せて見たいといひながらサモ可愛といふ樣な風をして、女房の手から小兒を抱き取つて、以前とは丸で別の人に成つて無器用な抱き方をして、そろ〳〵と次の間へ行つて、床の中に小兒を寢かした、サテ此以來といふものはミッシエルの行狀が全く別人の樣に變化して仕舞つた、酒神信仰の仲間とは交際を絕つて、每日規則正しく朝から晩まで夫婦共稼といふ譯に成つて、相互に助け合ひ、良人の方は更に其隣りに細工所を設けて此處に働き居つた、實に二十餘年一日の如くで有つた其家內の空氣は實に淸く實に和らかく、實に暖かく非難すべき所は無つた、殊に夫婦共に其兒の敎育に

骨を折つて彼等の社會に在ては珍らしい位で有つた。其兒は學齢以來引續いて學校に通ひ居つた、數學を修め圖畫を修め、猶父の業を學んで餘程前から其業を始めた樣にも聞いたが、イヤまだかも知れない、何れ其子が工業を始める爲に、其道具やら其他の準備やらで、尠からぬ金を費したらしい、併し幾ら費しても無益の費ではない、蒔いた種に實がついて、收獲時期といふ都合に成つて來たのじや、何にせよ其子のロベールは今内には居らぬと見える、自分の彼れに逢はぬのも久しいものじや、一年餘にもなるか知らぬで、

自分は二十餘年前のことから、彼等夫婦のこと其子のことを思ひ出して、心の中に世の中の有樣を味はつて居つた、其間にミッシエルが書架を拵へて呉れやうとて、道具を持つて出掛けて來た、そして注文通りの仕事に取り懸つた、自分は此時日記の目錄を書きながら、ミッシエルの容貌に眼を注いだ、若い時に人並外れて酒色を貪つたり、また老年に成つてからでも日々心を勞し、骨を折つたからでもあらう、顏に現はれた皺が、他人よりも多い樣に思はれ、また髮の毛は殆んど無く、其僅ばかり殘つた毛も眞白だ、背も弓形にまがり、膝も痩せ、これもまた幾分か曲つて見えた、隨て丈の高さが餘程減じた其上全體の上から考へて見ると、何でも落膽して居るらしい、自分が物を問へば、言葉短に答へる其鹽梅が人と談話することを避ける樣に思はれた、自分の推測では彼は今望を遂んとする愉快の塲合で有るに、何故に落膽の樣が見えるか分らなかつた、兎角する内にミッシエルは鐵槌を忘れたから、それを持て來る、といつて歸り掛た、自分はミッシエルを引き留めて彼及其女房の心配するのは、其子のロベールの身の上に關係して居るといふことを聞いた、

女子と水彩畫

東京美術學校教授　小林萬吾

近頃女子に水彩畫を敎へて居るが、なか〳〵色の配合がむつかしい、これ迄は女子が畫を學ぶと云ふても、四君子とか簡單な景色、水墨の山水位を遊藝的に習ふたので、實用にならぬはもとより、色彩の研究などは少しも出來ぬ、故に畫を習ふたといふ人が、色の調和を缺いた模樣の衣服を看て、それですまして居るのもある、ところが色彩の研究を經たものは、此着物に此帶はうつりがよいと云ふ風に、同じ價を投じて不調和な衣服を着るやうなことはない既に私の敎授したる女生徒で、他へ嫁したものも少しはあるが、それ等の拔目がないやうである、それは一事が萬事で、女子の畫でも學んだといふのであれば、室內を整頓する場合に於ても、程度相當に秩序よく小奇麗にし、同じ物を壁にかけても、丸いものと四角なものとの配合をよくするとか、一寸人を遣ふても多少趣が違つてくる、

そこで女子に畫を學ばせるといふについて、果して立派な作物が出來るか否やは疑問としても、學べば利益する所は少くないので、强ち大家になる必要もあるまい、極端にいへば、嫁入仕度のつもりで、簞笥の代り、池の坊の花を學んだなど云ふ代りに習ふて置いても差支あるまい、何と云うても畫を學べば物の趣味をも深く感じ、すべての擧動が閑雅になるであらうと思ふ、

これからは水彩畫を學ぶといふとは、おひ〳〵流行にもなつたやうであり、修業するにも便宜がよくなつたが、文晁とか雪舟とかの畫であるとか、錦繪のやうな雜駁な模樣風の畫を見た眼には、これが描けるかと思ふた、それで私どもの學び始めた時は師匠を得るにも、手本を求めるにも容易でなかつた、さて習つて見ると、規則は正しく、日本畫にはない物の厚さ、正側各方面を光線で現すなど、その他那染の薄い技術であるから、それを學ぶ困難は一方でなかつた、然るにこれから學ぶ人は、敎へる機關も不充分ながら容易に得られ、その作品も多く目に觸れ、敎師も自ら苦心した結果、敎授の手ごゝろも分

つて來たので、これを學ぶ困難の度が非常に減じたであるから女子がこれを學ぶ上にも、左ほどの困難はない、唯所謂大作が出來ぬかといふ話である、それで女子が水彩畫を學ぶ上の効果は、專門家にならずとも、女子の德性を涵養する一助ともなり、女子の多く關係する事物に廣く應用し得られ、これを遊藝としても、生花茶の湯を學ぶよりは、數等立優つた趣味を有つべきは云ふまでもないことであらうと思ふ(五分間の茶話)

それ矢

石榑千亦

かひぐしく振の袂を手襁に束ねあげ、裾短かにふきあつき衣服をからげて、山におくる酒米の帳合より荷造の末まで心くばりて、夜に入れば、父上母樣お草臥ならむにまづお休みなされませ、明日も亦おはさんにあなたもとくくと夫をも進めて臥床に

入らせ、さて其日の出入と帳簿とを引合せ、あやまりなきを見ては、針箱引よせて餘念もなう裁縫ものする嫁を見ては、父もさすがにねられぬなりき、氏もいやしからず育ちもよくて、いかに見くびりても大家の孃樣奥樣、とつぎの折に簞笥長持それもわれらが家にとりては少なしといふにあらねど、琴よ姿見よといはゞあだの物多さに、日髮日風呂をし琴をかなで花をいけて遊びくらすことゝのみ思へりしに、二月ともたゝぬ今日此頃よく我家のことのみこみて迚も迚も及びもつかぬいそしみやう、あの器量もちて氣立もちて智慧といひ學問といひ、よくも我等の家に來りしもの、塵溜に鶴が下りたと村人の陰言いふも理やと心拜みて、我無教育なれどそれに上荷うちたる妻や子には何もはからんとはせず、日頃我をたて徹す父も、この嫁こそ賴みなれと、はやく家の秘密より我心の奥底たゝきて何くれとはからへば、いやがるべきことも笑みてうけつゝ、それはさうしたまへこれはかうせばとよく考へての答、悉

くわが脇に落ちて夜のくだつをも知らぬ事度かさなりぬ、

° ° ° ° ° ° ° °

十三の時學校は嫌なり、百姓の家に生て學問などしたりとて何かせむ、土をほじり木を樵りて一生を終ふればそれにて足れり、讀書で飯を食はうとはふつに思はれば今年限學校を下してと乞ふに、父は頭打ふりいたく腹立ちて、わが家を顧よ、今こそかく落ぶれたれこれにても元は大庄屋と少しは人にも立てられし物、お前が心一つにて飽まで土ほじりをしてすむか、元の大庄屋のごとくなれるか、進んでは代議士にもえらばれ大臣にもならるゝ世ではないか、さるを今の年若い身空で學校にゆかぬとは心得ちがひも程こそあれとたしなめ怒れば、土ほじりしても一生、代議士になるも大臣になるも亦一生、そんなら御父様なぜそれにならぬぞと、こましやくれて理らしくいひあらがひば母も傍よりさう／＼いつそ土ほじりが氣楽ではないかとうちあはせて、たゞ一時の思ひなしとげしめぬ父は争ふよしもなく、然らばせんかたなし、その代り夜遊はもとより義太夫習ひたし、大弓ならひたしなどいふとも、あらゆる遊藝などには決して近よせず、晝も夜も骨を粉にして働かせるぞといひわたしたるに、よくその言を用ゐて、折々の田畑を耕す外には、雲かゝる山まで木をきりてあらん限の力を盡すことこゝに八年、あたりの人はその堅き心にむしろ舌をまけど、父はなほ心におかぬことあるなりき、

元の大庄屋にしたし、大庄屋より一層盛なるものにせまほしとの希望を、たゞ一人子の行末にかけたりしに、生れつきの土ほじりがすきにて、遂にそれさへ頼まれず成にたれば、たゞおぼほしく面しろからずくらしつ、されど何がな他の物によりて其希望を成さまほしといさゝかも心に攪みあらず。

元は名だゝる士族なりしを今は商人となりて、廢藩の折共に共にはじめし友垣の多くは敗を取りし中に、たゞひとりその間口をひろげ、土藏を建て去年は漁船さへつくりて日にけに榮えゆく某家の女を、もとはさるゆかりもあれど、いさゝかの程に其釣合いたく異なりたれば、乞ひたりとて迚もならぬことなるべし、されど何ばかり彼がりは貰はぬがましなり、それよいひ出てゝ成るも縁、成らぬも縁、いでや我運のよしあしをためさん、媒酌たてゝ成らずば耻を公けにするもの、われ自ら當りて見むと家族にもはからず、日を擇みて某家を音づれ打かたらへば、思ひきや、御子息は堅造の評判ものお望に任せんと安す／＼うべなはれむとは、わが事成りぬと外に出でて、心の中に手を拍ちぬ、

今は殘り少なになりし田畑いさゝかを賣しろしてもたりし山林につゞく、杉 檜 槻天をつきてこもり

にこめれるを、此わたりには不入の山と稱へて怪げによびなされ、斧入るゝ人もなかりしがあるを、貰ふばかりに買求め、大に伐出さんの心がまへ、子のとゞむるをもきかず、妻のいさめも容れず、早杣人やとひて杣小屋つくるべく或は山に入り或は千代の契結ばん其式の備に夜を日につぎ、身を二つにもわかたまほし、

鄙にはめづらしくはでやかなる式、その手傳にとて新しく雇入れし杣人の幾人も集ひて、廣からぬ家鼎の湧くが如く、かりそめにつくりしかけ出しの料理部屋、柱も傾かむ斗ゆるむばかり、

一家をきりまはし傍人なきが如きは、我らを踏つけにするなり、里のよきを誇るなり、持參金を鼻にかくるなり、世のなべては姑といふものに對し、つゝしみ畏みて仕う奉るが常なり、馬車に乘りても汽船に乘りても、いさゝか前に入りたるにさへ頭あがらぬはおしなべての習ひなり、さるを來しばかりの身をもて、家と共にふりたるわれ等をなきものゝやうにするを見れば、われらのなき後は定めて夫も尻にすべし、家風にあはず、釣合はず、それを何とてさばかりお父様の可愛がり給ふ事ぞ、否々あれは必嫁がふきこみてあんなにさするなれ、又お父様があんなにすればこそ一入つけあがるなれ、これといふも、不入の山をきり出す祟なるべし、お前も覺悟をせねば後々いかなる罰のあたらうやもしられずとある夜邊に其子にさゝやきたるがはじめにて、鬼などの如く忌きらひ、むかいあひても物もいはねば嫁は何事かお氣に召さぬ事ありつるよとさとりて、一しほ形をつくろひ言葉をやさしくしてよく仕ふれば、つかふる程なほはげしく、そんな事でごまかさるゝものかと後むきて、やにまみれの眞鍮煙管つぶるゝまで灰吹打たゝきぬ、

父と婦と近よることいよ〳〵深くなるにつれて、母と子との間もいよ〳〵遠よりぬ、さてこの二つの心々は二方にそむき去りふたゝび反らず、每日々につゞきて又施さん術もあらずなりぬ、こゝに

鏡は背に破れざるを得ず、破れしくて父の望もむなしくなりて、新妻の心づくしの跡もとゞめず、家名再興の外に何の思もなき父は一度ならずその望を失ひしにじれて怒りてほけたるが如きもの數日、ある日人しれず盛に手をつけたりし山をも賣り田畑をも賣りて、家も今はかまはす名もかまはず、母子のものいかにともならばなれとあらむ程の金子かいあつめてゆく所を知らず、もとよりそのいかになりしやも知るによしなし、さるにても家庭は同化せねばならぬ者なり、むつかしき世を、むつかしく渡らぬ心掛にてほしきものなれ

春宵畫談

野口小蘋

窓前の若竹風に戰ぎて、影おぼろなる春月をもてあそび、紅梅の殘香なほ室に薫じて、靜かにねむる孤燈の下、綸卷をとつて徐ろにくれば、古名手を追慕し、念津々としてわく、この時翻つて、我を思へばその技のなほ遠く及ばざるを恥づ、それ勤めんかなされど妾永く畫道にたづさはりて、夢に蓬萊に遊び、醒めて名勝を國内に探る、春は花雲をわけて詩神の宿りを尋ね、夏は白波よする海邊に出で丶、夕立にぬる丶歸帆を眺め、草露しげき秋草、虫に耳をかして月光を仰げば、想天外に馳す、松のみ青き雪の夕暮、炭釜の煙細う風に靡くに、僅に山麓の一つ家をみとむ、この時この折情せまり、感極まりて興おのづから至る、即ち筆を採つて思を紙面に走せ濃淡塗抹すれば、無聲の詩立どころに成る、これ我が筆を繪に染むる所以のもの、他に深意あるにあらざるなり、

然りといへども、古來名匠は想をねり思をこらし心中に大畫幅を畫いて、而して後筆を下す、一點一線もゆるかせにせざるもの、蓋し故あるなり、そもく今時丹青の道にたづさはるもの、畫風の好不好によりてその師を求む、四條、土佐、狩野、その他諸流に至るまで、嗜好に從ふは可なりと雖、たゞ師筆をのみ摸倣して、その神髓を得ずば、何の益かあらん、たゞ師を迷信して、他流を酌見せずは、誤謬を來すの恐あらん、故に諸派、諸流、を斟酌し、兩

々相待つて後その良きを取るべし、されど初心の徒多見の餘暇なく、從つて良否識別の眼肥えず、さりとて寫實その骨を得ざれば、蘊奥に達するや難からん、これ大に苦心焦思の點なり、かゝる時こそ師教を仰ぐの要はあれ、

我輩に筆を染めてより以來、幾多の星霜を經たり然りといへども、別に發明する處なく、新機軸を出したるものなしと雖、古になづまず、今にかたよらず、自ら信ずる處に向つて筆を馳す、樂その中にあり、つら〳〵今世の畫風を見るに古にのみ拘泥するものは、開け行く世の今日、道理上多少の誤を發見せられ、寫實を主とする者は、いさゝか沒風流のきらひなきにあらず虚實相待つて而して後、始めて無聲の詩は謠はれん、これ名手にあらざれば、能はざる處のもの、我常にこの意をもつてみづから試み、子弟に敎ふ、

彼の能因が『都をば霞とゝもにたちしかど、秋風ぞ吹く白川の關』の歌を見よ、破窓顔を日に晒して遠く白川の關に至り、秋風衣を吹いて落葉地に敷き旅情たへ難きが如く作意し、以て人に示して同情を求め、感を惹起さしめたりしにはあらずや、霞深き橋上騎馬の人を畫き、花底の美人を畫く、もとよりこの注意なかるべからず、筆者騎馬の人となり、花底の美人たらざるべからず、さらずば主人を畫きてその情うつらざれば、客の景物死するに至らん、我常にこの意をもつてみづから試み、子弟に敎ふ、深く我信ずる處なればなり、

飾るに材を選み、塗るに白砂を以てし、時好の插花常に室内に薫じて、塵も据ゑざる床間の畫幅を見よ、淡妝濃抹、妙極まつて思はず稱嘆拍手するとあらん、熟見忽ち眉を顰むるものあるならん、そは多くは畫題、落款に於て往々見る處なり、漢籍を讀まざるものは字を顛倒し、虚字を交ふ、百笑嘲罵を受くるもの、その不學をのみいふにあらず、折角の名畫を損し、床間を汚すを恐れてなり、故に我常にこの意をもつて自ら學び、子弟に敎ふ、

文學の素養なきものは、たゞにこの笑を受くるのみならず、書道の參考を在來の書にのみとりて、史上の考案を要するの力なし、書手本たるもの、えて誤謬を生じ易きもの、

漢籍の修養なきものは、ひとり書道の誤謬に笑を存するのみならず、高雅品位を失し、卑俗のそしりは免れず、ことに人の囑托によりて姓名を記入し、賀筵祝賀の詞を書載せんとするに當り、句ならず文ならざらんには、いかに恥辱なるべし、さりとて誤謬を記載したらんには、後世不滅の汚名を殘さん、故に嘲笑をさけ、繪畫俗に陷らざらんが爲常に子弟に向つて、漢字を兼習せしむるに力めたり、

『手などつたなからずはしり書して』と兼好法師のいへるは、强ちに假字のみにはあらざるべし、漢字なればとて、美しく書きたらんには、その人の心の程も奥ゆかしく思はるゝものなり、

和歌にても然るべし、たとひ名吟なりとも、手跡拙からんには、その歌も見劣りせらるべし、繪に於ける落款もまた同じからん、たとひその繪は巧妙なりとも、手跡拙き落款はその妙趣を損し、世の笑はれものとやならん、

この他貴人の囑托を受けし時落款によりて、敬意を表することなど、思ひつゞくれば濱の眞砂の數あるべし、されど春とはいへど風ぬるからず、夜ふくるまゝに氣しめりて室内寒し、油や盡きたりけん燈火の一きは薄暗くなりて、さはらば消ゆることもやあらんと、繪卷を卷かへして床間におけば、殘花一ひら散つて馨ばしく、佇立久しうして足の冷ゆるを覺ゆ、即ち坐に戻つて爐火を探れば、螢火一點、暖をとるに足らず、やがて寢に就けば睡魔忽ち襲うてまた思を馳するの勇なし、獨語こゝに止まる、口に風邪をせかせまじとて、

▽正誤　前々號に掲載せる野口小蘋女史の繪畫談中初めより六行目、三四年前までは、とあるは三四十年前の誤である、

花のうた

中山幸子

あすか山あすとも云はず花を見む
けふをさかりの花と思へば

春さめのふるやの軒の山ざくら
ちりをはらひて咲そめにけり

ふる雨もいとはでけふも山ざとに
さくらがりする人も見えけり

一とせの春のさかりをひとみなの
こゝろして見よ山さくら花

さくら花見はやすうちに乙女子が
いとおもしろき歌をよみつゝ

山里はたゞしら雲のしづけさに
こゝろも散らぬ花は咲きけり

みよし野の千本のさくら來て見れば
むかしながらの花は咲きけり

朝日さすよし野の山に來て見れば
まばゆきまでにさくら花咲へく

あらし山松のはやしのさくら花
ひかりをそへし春の夜の月

さほひめの霞わけつゝ來て見れば
わがころも手もにほふ花の香

すみ田川つゝみのさくら咲そろひ
水の底まで花ぞ見えける

人か花かわかたざりけり隅田川
つゝみのさくら咲初めしより

○

山かげの青葉がくれにのこりたる
さくらはいとゞ匂ひける哉

さくら花わらしに散りていとをしく
となせの川の雪と見るまで

花ゆゑに人はつとへど山さくら
ちりての後はとふ人もなし

さくら花散りしに後もかぐはしき
青葉のうへを風わたるなり

理學博士　坪井正五郎先生講述

人類學講義

總クロース製　菊判
全一冊　正價金壹圓拾錢
送料拾錢

坪井博士が人類學の泰斗たるは普く世人の知る所本書は同先生が極めて平易なる言文一致にて講述せられたるものにして創世紀の人類説、人類一種論と人類多種論諸種族系統探り方、人類の大別小別、日本種族論等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたれば歴史及人類を研究する人には勿論普通人士も之れを一讀せば無限の趣味を感ずべき座右必須の良書たるを疑はず


御用諸學校
TRADE S.A. MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimbo-cho KANDA TOKYO
S.A.
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用 體操器械
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
電 本 484
体育用品
確實 製造販賣
ピンポン改良室内テニス(旅行用)
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺拾參圓四拾錢 並等一臺十二圓
テニス用ラケット一組
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同(小學用) 四、七〇〇
縮人用(一號) 七圓
同二號 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾錢
テニス組一張一、八八〇ヨリ三、一一五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

電話の談

工學博士　淺野應輔

電話器は一千八百七十六年に、グラハム、ベルと云ふ人が米國に於て發明したのである、此人は元と英國蘇格蘭に生れ、後米國に移住したのであるが、同氏は初め啞者に言語を發せしむることを研究し、それが爲に啞者と結婚したほどの熱心家である、その結果啞者に言語を發せしむることを發明せしのみならず、無心の器械をも發音させることを發明したのである、

電話器の構造は極めて簡單なもので、同氏が之を發明せられた後、何うして斯る簡單な機械が早く發明せられなかつたかと疑はれた位である、電話器を說明するには、音響のことを大略說明することが必要である、抑も音は何であるかと云ふに、物體の振動である、物體が振動すれば、それが爲に空氣が振動し、其振動が耳に入り、音響として聽かれるのである、例へば琴を彈じると、琴の糸が振動し、其振動が空氣に傳はり耳に入りて音を感ずるのである、

音に三つの性がある、其一は音强、其二は音調、其三は音色である、音强とは振動の幅の大なることを意味するので、例へば琴の糸を酷く彈けば、振幅が大きくなる、從つて大きな音がするやうなものである、又音調とは振動の速度のことで、振動の速度が高ければ調子が高く、速度が低ければ調子が低くなるのである、又音色とは振動の形狀である、例令ばいろはのいを發音するに、音强、音調を同一にし

ても、人により聲が種々になる、之は發音の狀態が各人異るからである、電話にて此話は何のなにがしであるといふ事の分るのは、その人の話に特別の音色がある故である、又人間の聽感は非常な鋭敏なもので、一狀態の空氣の振動を耳に受けると、其振動を分配することが出來る、譬へば甲が琴の音、乙が胡弓の音、丙が三絃の音とすれば、其甲乙丙の合奏に依つて生ずる合成振動がもしも耳に入れば、耳は忽ち之を分解し、三曲合奏の音であるといふことを知覺することが出來る、

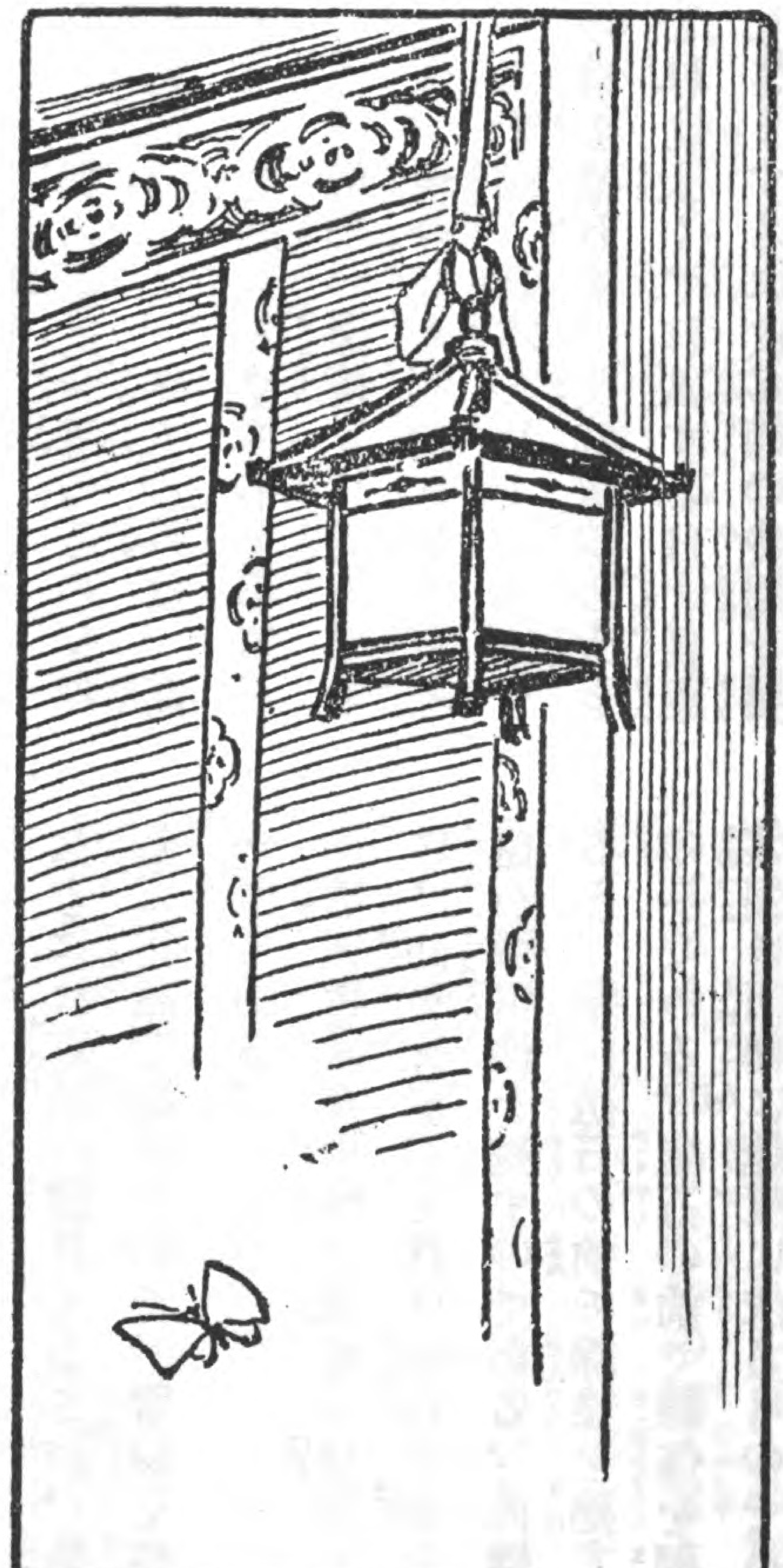
電話器には鋼鐵磁石があつて、其前に鐵板が装置してある、もしも此鐵板に向つて話をすれば、聲に應じて空氣が振動する、又空氣の振動と共に鐵板も振動の爲に前に壓せらるれば、甲種の電流が起り、後に引かるれば乙種の電流が起る、故に鐵板の一振動毎に甲乙二種の電流が一度づヽ起つて、電流の強さに應ずるのである、又電氣に面白き性質がある、甲種電流が磁石を回流すればその磁石が強くなり、

乙種電流が磁石を回流すればその磁石は弱くなる、而してその強弱になる程度は電流の強弱に應ずるものである、

ベル氏の始めて發明したる時は、送話器も受話器も同じ構造であつて、磁石の一端に小鐵片を付け、之に電線が卷いてある、若しも人が送話器の前で話をすると、甲乙丙種の電流が起り、受話器に傳はり其磁石を強くし又弱くする、而して受話器の鐵板は磁石が強くなれば多く吸引せらる　弱くなれば少く吸引せられる、故に送話器の鐵板が一回振動すれば受話器の鐵板も一回振動する、又送話器の鐵板が強く振動すれば、受話器の鐵板も強く振動する、又送話受話の兩鐵板振動の狀態が稍一樣になるから、音強(比較的)音調、音色の三性を傳へ、通話することが出來るのである、電話器はベル氏が之を發明した時は、唯一個の學問上の玩弄物と考へられて居つたのであるが、漸次其構造其他に改良が加はつたのと電話交換なる事業が始まつたので、今日では全世界

に使用せられて居るものは、何百萬といふ數である日本のみにても、現今使用しつゝある數は凡そ三萬である、

電話器改良の重なるものは、炭素板送話器で、其發明以來高聲に通話することが出來、實用に適するやうになつたのである、之はベル氏が電話器を發明したる翌年、即ち一千八百七十七年に米國のエジソンと云ふ人が發明したのである、其構造は一個の炭素の小箱があつて其中に炭素粒が入れてあり、其前に炭素板が受話器の鐵板の如く裝置してある、而して炭素箱、炭素粒炭素板を經て、電流が通じてあるが故に、話の振動



炭素板に傳はり、炭素粒との接觸を或は密に、或は疎にする、其接觸密なるときは、電流多く通じ、疎なるときは少く通ずる、此電流增減の變化は、誘導線輪と稱する機械を經て、甲乙兩種の電流に變じ、受話器に傳はるが故に、前述の理に依つて通話することが出來るのである、

炭素粒と炭素板は不完全なる接觸が必要であるが、永く一定の位置に置くと密に接觸し、電流增減の變化を不完全にし、通話の發音を低減するから、斯る場合には指頭を以て、輕く送話器の外部を打つと、再び不完全の接觸を起して、通話を善良にするのである、

日本にて現今使用して居るのは、デルビル送話器とソリツトバツク送話器の二種である、デルビルは音聲は高く聞ゆれども明瞭を缺ぎ、又ソリツトバツクは明瞭なれども、音聲が低き故に長距離にはソリツトバツクを使用し、市内通信には重にデルベルを使用するのである、そこで加入者は音聲のものゝのみを望んで居るが、電話通信には、老人の外は、高聲よりも寧ろ明瞭なるものを必要とするのである、

扨て此送話器を使用して、何程の距離まで話をすることが出來るかと云ふに、現今亞米利加に於て實際使用して居るのが凡そ二千哩、日本の地でいへば、北海道の端から九州の端迄位ある、又其電線の大さは如何といふに、これは太くすればするほど長距離に話が出來る、然しさうするには多額の費用を要し、從つて通話料金を増加するとになるから、成るべく電線の經濟をせねばならぬ、我國で課して居る長距離電話料金は五分間一里、凡そ一錢の割合である、即ち東京より大阪までは一圓六十五錢、東京より長崎迄通話するには五分間三四圓の料金を拂ふことになるから、容易に使用することは出來ぬ、近頃では電信電話同時通話法が所々に利用せられて電話で話をして居る間に、電信も送ることが出來るやうになつた、日光、宇都宮、大磯、鎌倉、宮の下などには電話が設けてあるが、是等は電信線を利用して電話を設けたので、電線を經濟に使用して居る一例である、

次に電話交換法に就て一言せんに、電話をかけるには釦を押す、これは俗語で釦を押すのではなく、磁石發電機を廻すのである、此機械の内をわけて見ると、單に磁石の前で線條を廻す裝置になつて居るのみである、磁石の前で線條を廻すと電氣が起り、其强さ回轉に速度に依るものであるから、若し交換局を强く呼ばんと欲する時は、長く緩くよりも、强く短かく、急に回轉することが必要である、さて斯くして起つた電氣は交換局に傳はつて番號札を落すこれに依つて交換手は何番から呼來たかを知る、假

に之を三番とする、各加入者の電線は交換局に達すると、各交換機の接續口と稱する小札に接續せられてあるから、交換手は自分の受持つて居る若干の接續線の內一線を取りて、其兩端にある接續線の內應答栓を三番の接續口に入れ、自分の電話機をも接續して、何番に接續するかを聞く、假に之を七十番とすれば、交換手は其呼出線を七十番の接續口に押入し釦を押し、電鈴を鳴らし、七十番を呼出し接續を完了する、若し加入者の通話が終つて、加入者が釦を押すと、此度は接續線の番號札が落ちて、その線の終話を交換手に知らしめ、交換手は接續線を拔いてしまふ、

交換手は何時でも對話を聽くことが出來るやうになつてあるから、秘密の事は話せない、且何時如何なることで、他の線と混しるかも知れないから、漏洩は免がれ難いものと承知した方が安全である、但し交換局では、可成通話の秘密を守る爲に、交換手が不必要に永く自分の電話器を接續して居ると、その事が交換手取締に分る樣に裝置してあるから、直に注意を受けるやうになつて居る

交換器一臺に三百人內外の加入者線が取付けてある、之を三人の交換手が受持つことになつて居るから、交換手一人は、凡そ百人の加入者を分擔することになる、而して受持の加入者より接續を求むる番號は、直に接續することが必要であるから、其局の加入者は凡て交換器の各臺に取付けることが必要である、例令ば三千人の加入者があるとすれば、交換器が十臺要る、而して各臺に總ての加入者を取付けるのであるから、加入者の線は、各々十個づゝの接續口を持つて居る譯である、もし甲交換手が或番號假令ば七十番を接續せんと欲すれば、他の交換手が他の接續口により、已に其番號に接續し居るや否やを試驗することが必要である、之は交換手がいづれの接續口にても接續すると、他の總ての接續口に電氣を送ることになるから、他の交換手が接續せんとする前に、栓頭を以て接續口に觸れると、一種の音

響を自分の電話に聴かるゝから、其番號は他の交換手によつて接續せられてあるといふことを認識し、御話中と云うて加入者に斷るのである、此方法は最も簡便であるが、事に依ると間違へて、隣接の接續口を試驗したり、又他の間違から話中でないものを話中と斷り、交換手が怠けるかの如く嫌疑を受けて迷惑することもある、交換手の職務は誠に忙がしいものである、受話器は頭に掛け、送話器は前に置き兩手で接續線を取扱ふやうになつて居るが、餘程敏活に働かないと、百人の加入者から呼んで來るのであるから、小言を頂戴するやうになる、

加入者の方でも成るべく交換手に手數を掛けぬやう、早う番號を判明に答へるやう心掛けねばならぬ或加入者の手數をかけると云ふことは、他の加入者の接續の遲れるといふことになる、又談話を終了したり、釦を押すことを忘れてはならぬ、さうでないと交換手が接續栓を拔去らないから、いつまでも話中の信號が出る、

なほ電話線に装置してある避雷器のことを話さう避雷針と云ふと雷のみを避ける器械のやうに聞えるが、實は雷のみならず、電燈とか電氣鐵道とかの如き、電壓の強い、又電流の強い電氣が、電話線に浸入すると、或は火災を起し、或は危害を起すから之を防ぐ爲に装置してある器械である、此器械の構造も極めて簡單なもので、鉛の線と二炭素片の中間に雲母片が挿入してある丈で、電話に起る電氣は甚だ微弱なものである、故に鉛線を溶かすことも出來ず、雲母片を飛越して大地に遁れ入ることも出來ないものであるが、強電壓の電氣は、雲母を飛越して地に入り、強電流は鉛線を溶解して線を切斷するから、いづれにても安全なる筈である、併しながら如何なる間違で強電流、又強電壓の電氣が侵入するかも知れぬから、受話器を握つた時、異樣の感じがすれば、使用せぬことが必要である、

我のみと思ひて入りし山かげに笑みてぞ花の我を待たる
あしたゆき夜ゆき今日は咲しより七日になりぬ花の上野に

慈善の涙より建ちし長屋

これは男子の慈善行爲にて、こゝに取立てゝ揭載せるは、慈悲の心に富むべき婦人の、その平素云ふ所に反して、此の慈善家に乏しきより、その慈善の爲に致せる意思の鞏固にして、その目的を達したるを手本にせまほしければとて也、さて東京市十五區の中、一番細民の多く住んで居ると共に、又一番人氣の惡い地は、先づ淺草區なるべし、其の淺草區も公園の背後、日本堤を北に下りた新開の田中町附近の裏長屋といへば、就中其の不潔太だしき場所なるが、同町四十二番地かの飯屋と、鹽煎餅屋との細き路次口に、先頃より揭げられたる不思議の看版あり、綠色の地に白くペンキにて「共同屋敷」と記し、勞働者を平和に且つ愉快に住居せしむべき旨を認めあるこそ訝かしけれと、某新聞社員は一種の好奇心に驅られつゝ、其の共同屋敷なるものを取調べし結果、あはれ此の一廓が、世にも嬉れしき人の眞情に成りし、細民救濟の最も尊き樂園なるを認め得たり、さて事の順序としては、抑々如何なる人が如何にして此の共同屋敷なるものを作くるに至りしかを記さんに、今を去る事十四年前富山縣婦負郡八尾町より志を立てゝ上京したる川倉恒太郎(四十)といへる人あり、素より資産とても有らざる身の悲しさ、下谷萬年町の貧民窟に入り、人力車夫となりて稼ぎつゝ、熱々界限の爲勞働して辛く其日の生活を爲さゞるを得ざる所から、下谷萬年町の貧民窟に入り、人力車夫となりて稼ぎつゝ、熱々界限の爲體といふを見るに、其の生活狀態の穢なさ、醜くさ、是が日本帝國の首都に住居せる陛下の赤子かと大に憂ひ歎き、何卒して恁る陋せきものを、帝都より除きたく、其方法としては彼等の爲に、先づ完全なる共同長屋を建つるに若かずと考へしが何を云ふにも先立ものは金なるに、當時の川倉は己れ自身の生活さへ困り居る折柄とて、他人の爲に家を作らんなどゝは思も寄らず然れど、一旦恁と決めしからには、假令如何なる困難を排しても爲し遂げん、又恐らくは天の我に命ずる所なるべしと爰に大勇猛心を起し、如何にしても資金を得んものと、資本家に近く捷徑として、何人かの抱へ車夫にならんと考へ、種々奔走の末、遂に去三十年より淺草區南淸島町五番地桐油及びズック商長岡助七と云へる資産家に住込み、爾來十年か間主人を載せて外出するに際し、特に急がぬ折には、態々迂回道して下谷の萬年町、本所の横網、四谷の鮫ヶ橋など有ゆる貧民窟を見物させ、彼等が如何に爲て生活し居れるかにつき、その同情を購はんと力め、何卒して恁る境遇より免れ得るやう、彼等の爲に完全なる共同長屋を建てられたしと、折を見ては掻口說きしにぞ、初めの程は取合はざりし主人も、川倉が不撓不屈の精神に、終には意を動され然らば、お前の言に從ひ、相當の資本を支出すべければ、萬事好き樣に計ふべしと、漸く承諾せしは、昨三十九年九月なりしが、此の一言を聞きし川倉が喜びや如何なりけん茲に川倉が十幾年苦心經營したる共同家屋の建築は、初めて其の確平たる基礎を作り得たるなりき、

昆虫の話

深井龍蝿

蚤　双翅目

蚤の種類が世界に一萬種もあると申したら、誰も驚くでありませうが、實際英國の富豪ロスチャイルド氏は、それだけ標本を持つて居ると云ふ事です、同氏の蚤道樂なのは、先年米國セントルイス萬國博覽會で、一シベリヤ人から白狐とかの蚤二匹を五千弗とかで、讓受けたいと交渉したと云ふ事であつたのでも知れる、日本では弦齋居士は道樂を書くに妙であると聞く、序に蚤道樂は如何？

昔から蚤の夫婦と申しますが、蚤は全く雌と雄の體格に相違がありまして、雌(一分六厘)は雄(一分)よりも大きく、且つ色が鮮かなのであります、蚤には翅がないから、双翅目へ入れるのは不都合だとの事で、近頃は微翅目と云ふ、蚤類ばかりの目ができたのです、シカシ蚤には全く翅がないのではなく、

僅かの翅は二ヶあるのです、此は以前には完全な翅があつたのですが、遂に生活上必要がないので退化したのであります、

蚤は年中何時でも居るのですが、特に人間を攻擊するのは、初夏からであります、ですから初夏蚤が突然我々を攻擊すると、世間では蚤が「ワク」と申しますが、それが大きな誤なのです、先づ蚤について研究して見度いと云ふならば、袖垢をガラス罎に入れまして、その内へ大小二つの蚤を入れるのです、さすれば數日中には必ず白色の小卵を、其の芥の中に生みます、其の數は十四五位です、此の卵は數日中に孵化と、頭は褐色で足はありませんが、體の白い毛の生いた蛆となるのです、(此の蛆は普通の疊や床下に生活して居る)此の蛆は芥の中から食物を取りまして成長します、丁度二週間許經過しますと、芥を集めまして繭を作り、蛹となるので、猶二週間ばかり過ぎますと、此度は蚤となつて「切られたる夢はまことか蚤の跡」每夜我々を攻擊する、世間で蚤

がワクと申しますは、畢竟此の蚤の幼蟲(蛆)を知らぬからでせう、左様にしまして、蚤は卵から蚤となるまでに、三十餘日を費すに過ぎぬのですから、蚤の繁殖の速いのは尤な次第です、

近頃ペストが流行するので、蚤とペストの關係も醫學者間に研究せられて居る由、兎に角何でなくても蚤は衛生上の害虫でありますから、驅除せねばなりません、下等社會では虱が居ると申されると赤面しますが蚤が居たと云はれた位では平氣なのは、チト間違ではないかと思ふ、蚤は如何にして驅除すべきやと申す事は、清潔法や除虫菊粉の使用され施行されて居る今日、既に無用な事かも知れませんが「汝の杖をのべ、塵を打ち、埃及全國をして蚤たらしめよ」と云ふ舊約全書の一句は、不潔物から蚤が發生すると云ふ事實で、實に千古の眞理であります、でありますから、清潔法施行は、蚤驅除に對する唯一の方法で、疊の日乾や、床下の掃除、などは勉めてやらねばなりませず、疊の下には胡桃の乾葉などを敷き新聞紙などを敷くも宜しい、また除虫菊粉は乾燥した黄色な雜物のないのを用いねばなりません、近來隨分如何はしいのを販賣して居ますが、あれは却て身體に害があります、勿論上等の粉なら、蚤ばかりに毒なので、人類には害はないのです、然るに世間では蚤を殺す位なら、人間にも害があるだらうと云ふ妄信をして居る方もありますが、蚤と人間とは動物學上の位置の違ふと同じく其生理作用も違ふので、かゝる心配は毫もありません、

蚊　双翅目

『孑孑や蚊になるまでの浮き沈み』、孑孑から蚊になるのは、誰も知つて居る處で、支那の博物書にも明記してあるのですが、支那にはまた蚊は夏の夜葦蘆の間で、蚊母鳥が鳴くと、其口から蚊が出ると云ひ、また、蚊子樹の果實が熟すと、裂れて内から蚊が出るなど、云ふ迷信から出た妄說がありますが、之は取るに足らぬのは申すまでもないのであります、

蚊は双翅目の昆虫でありますから、翅は二ケです、

觸角は多くの關節からなり立ちまして、長く脚も亦長いので、腹部は細長いのです、種類は約五百種ですが、漸次發見され増加する事と思ひますから、某新聞に蚊の種類三千と書いてあつたのも、近き將來に於て事實となるでせう、

蚊は古い溜り水などに卵を産みます、卵塊は枕狀で、三分大少くも七八十粒からの黑き少卵からなつて居ます、多き場合には、二、三百粒もあります、二、三日も過ぎますと、暗色となり孵化する、孵化すれば孑孑となるので、常に水中で運動して居る、そして水中の有機物を食ふて生長致しまして、二週間ほど過ぎると、頭胸部の膨大した蛹（カミナリとか俗に云ふ）となりまして、運動はするのですが、食物は取りません、此の蛹は二日ばかりで蚊となりまして、人畜を襲ふのであります、

蚊の一種のマラリヤ蚊と云ふのがありますが、之はマラリヤ病の媒介をするのです、今簡單に普通蚊との差を表示して見ませう、

成虫（蚊の時代）

▽普通蚊　翅は透明、靜止の時尾端を上げぬ、飛ぶ時鳴聲を發す、

▽マラリヤ蚊　翅に黑斑ありて靜止する時、尾端を上げ、飛ぶ時鳴聲を發せす、

卵及幼虫

▽普通蚊　卵は塊をなし、孑孑は休息時くの字形

▽マラリヤ蚊　卵は一粒づゝ産み、孑孑は休息時水平に體をなす、

蚊は人間の血液を吸ふて生活するが、雄は決して之をしない、たゞ雌のみするのです、雄は野外で花蜜や熟した果物などを吸つて生活するから、家屋内には殆ど居らないのです、また蚊の雄は鳴き聲を出さす、鳴くのは雌のみですから、「蚊は鳴く、女性よく泣く」と言つたのは誰でしたか忘れましたが、實際を穿つた言であります、雄と雌との區別は、蚊に於て最もよく判明します、雌の觸角は羽狀ですが、雄は總狀であります、此の一點よく蚊の雌雄を鑑別

する事ができるのであります、

蚊柱と云ふは、俳句の題などによくありますが、あれは蚊の雌雄の交尾の爲の爭なので決して目出度もなければ、珍らしくもない、生物界普通の現象なのです、また慶雲など云ふ事もありますが、あれも蚊の類のなす事であると申されます、

蚊の驅除豫防法

一、溝渠池沼等の排水を完全にし、汚水を停溜せぬ樣にする事、

一、孑孑の發生した時は、石油を滴下して殺す事、

一、濕地には向日草などを植へ、乾燥を計る事、

一、蚊の發生した時には、榧除虫菊などを燻す事、

土筆の話

今西桃里

●つくし、(土筆)　隱花植物、木賊科

つく〳〵し爪紅殘る袴かな　支考

●つくしとは「突出」と云ふところから名づけられたのである。ポカポカと暖い春の野に、我が脚もと近う數知れぬ、この小法師が行儀よく並み居るを見ては誰れも春の惠を歌はぬはなからう。

さてこの土筆はどうして、又何んの用あつて生れたのであらう、さては花であらうか、實であらうか—と、試にその側に咲いて居る。すみれ、たんぽ〳〵の花と較べて見るに、彼れと是れとは、よほど違つて居る、それなれば實かと思へども其種子らしきものは見出されぬ、僅に筆の穗と思はれる處に小さな〳〵粉が數知れぬほどあるばかり、さても妙な草であるよ。左樣、土筆はすみれやたんぽ〳〵の花とは違ふ。實とは違ふ。さりながら他の植物の花や實と同じやうな役目があるのである。何故なれば、彼の數知れぬ粉こそ實は胞子といふて、之れが地上に落ちると其後少しの變化を經、夏の頃になると、すぎな又の名つぎ〳〵草と云ふ草が生れるのである、して見れば土筆は、このすぎなの種と見て可い、詳しく謂へば土筆は胞子を造るためで、胞子はすぎなの種

である。さてこの胞子について面白いことがある。諸孃よ、試に土筆の穗のチョットゆるみそめたものを摘みとりて、之れを黑い半紙のばた〳〵と振ると、少し青みを帶びた粉が澤山に紙上にこぼれる此れ即ち胞子なので、この胞子の群れにソット息氣を吹きかくれば、忽ち其容積が小さくなる。して又しばらくすると今度は虫でも動くがやうに、チョッ〳〵と跳ねながら元の容積に膨れるを見るであらう若し此の現象を百倍ほどの顯微鏡で見ると、胞子に四つの絲のついたものが、息をかけられては、絲が粒をキリ〳〵と巻きしめ、しばらくしてポン〳〵と彈きながら絲が延びる。と云ふ樣を觀察することが出來る、之れは若し胞子が雨など濕氣に遇ふと胞子を害せられるの憂があるから、其絲もて包み保護するためで、また日が暖で空氣の乾いて居る時だと其絲を彈いて其力で胞子自身が土筆の穗から飛び出すためである。つまり種子散布と同じ役をなすのである。天はかゝる微小なものにまで其造化の妙をくれて居る。實に「天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉」とはこのことであらう。

つまり土筆はすぎなの地下の莖から出來たもので、その用は子孫蕃殖のためである。

いそがしや菫を摘めばつく〴〵し　（園女）

君いくら我はや土筆五十本　（李東）

いづれも春の野遊びのさま見るやうな句である。さて、諸孃が春の野に出で、若菜摘むことは體育智育の上にもよろしく又次でやさしき心得とも見るべく我れらは之れを勸めたいのである。

筆たてゝ何〳〵待つぞ土筆　（千代女）

（完）

◎◎◎◎◎

●婦人博覽會　永らく噂のみ高かりし婦人博覽會は、愈よ此程芝山内の勸業場を會場として開設する事に定まり、第一回は東京博覽會をあてこみ、四月一日より六月卅日迄都合九十日間にて教育部、衞生部、服裝部、化粧部、割烹部、家室及室内裝飾部、美術工藝部技術部、音樂部、遊戲部、發明意匠部參考部の十二部に分ち、婦人に關する内外の事物を蒐集觀覽せしむると同時に、各種の藝術技能を實演し婦人の處世方法を自覺せしむるが目的なり、此第一回の結果が良好ならば、第二回第三回を相次いで開設するは勿論時宜に依ては、博覽會場或は倶樂部を常設して永久に存續さする見込なりと

世界の奇聞

◎蓄音器と鸚鵡　外國語や音曲を吹込んで、人間の教師となるは近頃の蓄音器なれども今又鸚鵡に口眞似を仕込んで、好結果を得たり、米國費府の一富豪ホープ氏の令嬢某は、此程蓄音器を利用して、鸚鵡に人語唱歌等を敎ふる事を思ひ付きたり先づ蓄音器の平圓盤に之を吹込み、喇叭形の管を鳥の方に向け、其發聲を聞かしめたるに、最初は鸚鵡も不思議さうに耳を傾け、或は籠の中を飛廻りて、物に驚ける態なりしが、終には慣て其眞似をなし、最も速かに且つ完全に暗誦せしめ得たれば、嬢は大に得意となりて其成績を誇りしより、忽ち評判を高め、利に敏き小鳥商は、早くも嬢の新案に倣ひて、鸚鵡を教育し、又優等なる鶯、金絲雀等の美音を該器に寫して、劣等の鳥を仕立つるに、從來一ヶ月以上を要したるものも、一週間若くば一ヶ月以内にて仕立て得るに至りしとは、めでたき考案といふべし、

◎和蘭の結婚申込みの奇法　和蘭の若紳士は、結婚申込みの手段として、葉卷煙草を利用する其方法は紳士の結婚を申込まんとする娘の家へ、葉卷煙草を持つて往つて、火を貸して下さいと云ふ、是れが二度續くと娘の家では家族會議を開いて返答を決定して置く、三度目に紳士が火を借りに往つた時、火は借りたが直ぐに戸が閉まれば、結婚謝絶で、火を借りた上に何卒奥へと案内されると家内には娘が居て紳士をもてなし茲に結婚承諾の返事が與へらる、

◎十萬圓のオルガン　幸田女史のヴァイオリンが千五百圓の價格ありとて驚ける人ありしが、ユンケル敎授のは三千圓の價格あり、又近く來朝せしヘンレーツト、マーキンス嬢のは五千圓にして、アンナ、シエーフアル嬢のは六千圓なりとか、惣く同じ樂器にても雲泥の相違ある中に、別けても珍らしきは、今度米國セント、ジョージ教會がボストンの樂器會社に注文し半歳餘を閲して、此程出來せしパイプ、オルガンなるべし、其價格は五萬弗即ち我が凡そ十萬圓にして空氣を送入するに電力を以てし、一度之を奏すれば、里餘の遠きに樂聲を傳ふるてふ、稀代の裝置なりと云ふ、

◎世界最少の時計器械　米國オンタリオの時計製造者は、金と鋼の時計器械を製造したが、其重量は僅々四グレインで、一オンスの百二十分の一であるから、世界最小の時計器械である、

◎世界一の高塔建築計畫　紐育にては世界一の高塔を建築する計畫あり、同塔は四十八階にして地上より六百五十七呎の高さにて、七千五百萬法にて建造する豫算にして、場所を同市のメヂソンアヴニユーの角を選ぶ筈なりと云ふ、

兩性の比較

文學士　伊藤南陽

男女の優劣を斷ずるといふことは困難なことで、亦要もなきことである、或意味からいふと、男女には互に優劣のないもので、又或る意味からいふと孰れも優點を具へて居る、即ち男の地位に於ては男が優者、女の地位に於ては女が優者である。

乃で我等は斯樣思ふ、男が別段女に優つて居るでもない、女が別段男に優つて居るでもない、男と女とは一全體の半分づゝである、一圓形を分けた兩半圓である、之を全きもの、團圓のものたらしめんとすれば自ら之を一致させる必要がある、一致即ち幸福の結婚によりて、男の優點は女の劣點を補ひ、女の優點は男の劣點を滿たすことが出來る、是れは、以下男女の相違を論ずる積りであるから、之を研究すれば自から合點が行くだらうと思ふ、

先づ體格の上から言て見ると、女はとても男には

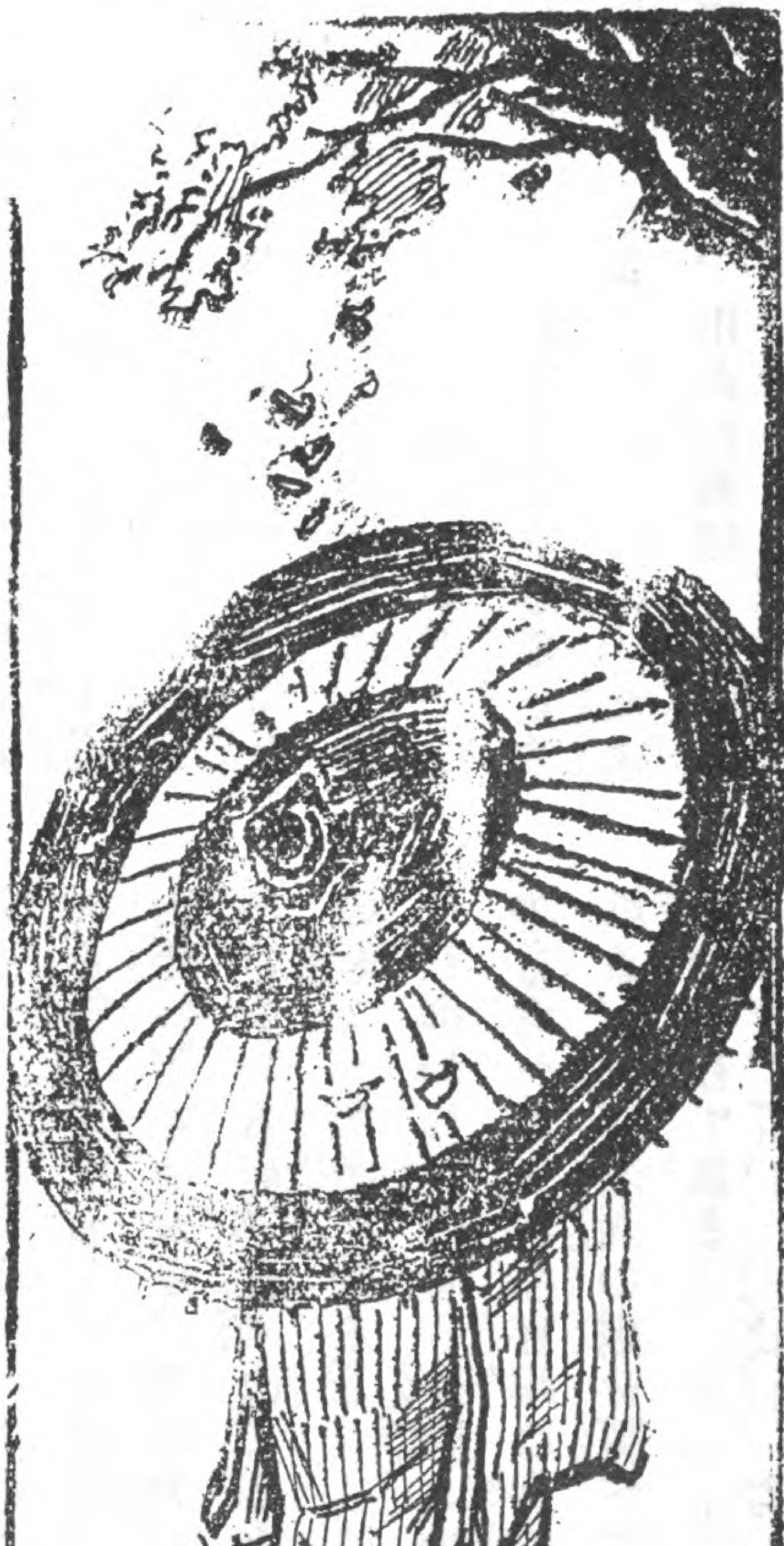
敵はない、男は丈が高くて、體量が重い、女は丈が低くて、體量が輕い、男は肩が廣くて、腰が狹いが女は肩が狹くて腰が張つて居る、男は筋骨逞しくて力のあることを顯して居るが、女はたとひ筋骨の能く發達したものであつても、之を白い脂肪のついた肉で包んで居るから優美で、逞しいとは見えぬ、女の骨は、小柄で、花車である、又その聲は柔かで、細い、その毛は男の樣にベタ一面ではない、たゞ其發生だけは、確かに男よりも盛んである。

さて體格上、男女の相違に就て最も注意すべき一點は、その骨盤である、男子にありては、此の骨盤は、只力と運動とを助けるだけのものに過ぎぬ、けれども女にありては、之が一種大切なる特別の目的を、更に其上に具へて居る、即ち是れは胎兒を支ふべきためのもので、それから亦胎兒の生命を保護すべきためのものである。

此の通り、女は特別の任務を持つて居る、そして、その體格の花車な所は、男の強い、逞しい體格で補

はるべき筈のものだ、言を換へていへば、男は女の楯となり、保護者となるべき筈のものである、その強さうな顔、その幅の廣い肩、その逞しい筋肉は、何れも此の消息を語らざるはないのである。

體格の上から言つても、右の通り銘々相應の本領があるが、知力の上から言つても、男女双方、何れも其の特別なる義務と特別なる責任とを行ふに適したものである、男は物を考へるに、一歩々々筋途を立て丶、順序を追ふて、遂に結論に達するを常とす、けれども女は直覚によりて、結論に達するのが多い。



左様かと言つて、別段女は論理を推究する能力がないといふのでは更々ない、男は歩々着々足を踏み堅めて、遂に目的點に達するに反し、女は捷徑からして直ぐ様、結論に達することをするといふだけのことである。

此點から考へて見ても、體格上、男と女と相補なふものであると等しく、知力上に於ても、やはり男と女は相補なふものである、即ち途は違つても、その到達する目的點が同一であるなら、双方とも、その結論が確實のものであると云ふことを、知るの便宜がある、そして此點に就ても、男と女との優劣を決める譯には往

かね。

脳髄の組織に就ていふと、女の方が男よりも上品で、亦鋭敏である、女は何事にても感動しやすい、そして上品なるものを男よりも一層好むの傾向あり粗野で下等なものを男よりも一層嫌ふの傾向がある、又男の快樂とするところは、必ずしも女の快樂とするところとは同一ではない、家庭を愛することや、小供を愛することや、文學、美術、音樂、宗教などを愛することを相比較すると、例外はあるにしても、女は一體男よりも優つて居る樣である。

女は感動が鋭敏であるから、苦痛を感ずることも男よりは鋭敏である、そこで其の塡め合せに、女には男よりも強い忍耐力がある、出產の苦痛、危險に堪ふることなどを見ると、その忍耐、その大膽は、誰にも分かることだらうと思はれる、出產の苦痛は、男には想像の出來ぬほどのものと言ふではないか、

醫者の言ふ所によると、出產の時男兒の脈搏は、女兒の脈搏に比し、一分間に二三倍も早いとのことである、又男の網膜は、活潑で、變化が早いが、女のは靜かであると云ふ、是は人間に限つたことではなくて、凡ての動物、皆然うであるといふ。

男は活潑なもので、且つ筋肉の逞しいものであるとするならば、その生存率は、女よりも男の方が多かる筈に思はるゝけれども、實際は然うではない、出產の率といふと、男の方が、五ポルセントほど多いのであるが、五歲になると、女の方が、遙かに男の數よりも多くなる。

それから女には、分娩といふ危險などがあることから考へると、生存率は男の方が多かりさうに思はれる、併し老人の數を調べて見ると、何時も女が多數を占めて居る。

女は家族といふ上から言ても、社會といふ上から言ても、求心力であつて、何事をも自分に引寄せ、中心を離れた結果、萬事が混沌の樣に陷いるのを防ぎ守つて居る、之に反して男は遠心力である、その性急果斷の天性は、事物をして中心を離れさせやう

とする、中心に行つて、靜狀に歸して了ふのを防がうとする、此の二つの力が互に相遇うて、玆に調和と云ふものが出來るのである、平衡といふことが起つて來るのである、そこで、此の二つの力は、その傾向に於ては互ひに反對のものであるが一致しなくては、何方も不完全、不圓滿の不具者だ。

男と女が互ひに相感化を及ぼすことは、三四十年間も仲善く暮した夫婦を見れば能く分る、彼等は年々歲々互ひに相感化を及ぼすので、姿も形も樣子までも自から似寄て來る、其說、其意見も互ひに相近づいて、玆に心の類似が起る、それも其筈である、同じ境遇に居て、同じ空氣を吸ひ、同じ食物を味ひ同じ事を喜び、同じ事を悲み、同じ事を笑ひ、同じ事情に感化されたるのだもの、そこで追々兩方の特色が無くなつて、益々相一致する樣になる。

さて男と女の智性、德性は共に相違して居て、互ひに補遺するものであるが、是れが最良、最高の人性を發達せしむるために、必ずなくてならぬ相違である、丁度小供の出來るのには、男と女の體質上の相違がなくてならぬのと、畢竟同一だ、委しくいへば、男の性質と、女の性質が能く調和したものが、即ち高等の男、また高等の女である。

文明の人種を見ればよく分る、智力上、感情上よりいへば、男と女の間に甚しい相違はない、成程男には、利己的の點やら、變り易い點やら、活潑な點など、その特性といふべきもの丶目立たぬではない、けれども此の男子的特性は、大に減じ、甚だしく角が取れて、申さば女に化して居る、即ち高等なる男は、最良最高の男子的特性に混ずるに、最良最高の女子的特性を以てしたものである、例へば、喧嘩好きの本能は、化して道德的勇氣となつて居る、變化好きの傾向は、化して智力的進步となつて居る、是までは有形上、體質上の變化好きであつたものが、無形上、智力上の變化好きとなり、之からして、發明も起り、發見も起る。

次に高等なる女といふは、最良最高の女子的特性

に混ずるに、最良最高の男子的特性を以てしたものである、例へば、その愛他心は、推理力のために餘程支配される樣になつて居る、その不動性即ち惰性は、大いに衰へて、甚しく進歩を害するやうなことはない、却て變化好きの傾向が增して、その消極的性質は、次第に積極的性質に進化する、約めていへば、文ばの婦人には、勇氣もあれば、發明力もあり知見も亦甚だ高い。

されぱといつて、之れが男と女との區別がなくなるといふ意味ではない、男と女が無差別になつて、双方の間に、引力がなくなつて了ふと云ふことではない、男はその男子的特性の發達し得る方向へ充分之れを發達させ、それに添ふるに新しい愛嬌、微妙なる美點を以てしたのである、女は女子的特性の發達し得る方向へ充分それを發達させ、それに添ふるに新らしい力、深遠なる同情、何とも名狀の出來ぬ氣高い美點を以てしたのである。

心は實に强大なる溶解劑である、心によつて男女の兩性は智的に相一致し、此一致からして、立派に發達した男子的特性に添ふるに、女子的特性を以てしたる新男子が起る、又此一致からして、前には曾て男子特有の智識、男子特有の活動であつたものに促されて、立派に發達したる女子的特性を具へたる新女子が起つて來る。

德川時代の女子

日本女子大學教授　戸川殘花

今題して德川時代の女子と云ふも、只其梗概を記すのみ、記するに當り勢ひ之れに直接間接の關係ある德川二百五十餘年間の時代精神と其推移とを述べざるべからず、さらば玆に便宜上德川時代を四期に分つ、第一期は慶長より元祿、第二期は元祿より享保、第三期は享保より文化文政、第四期は文化文政より幕末に至るまでとす、而して第一期間中は戰國創業の遺風も存したれど第二期に至りては、士風頗

る儒弱に陷れり、享保中興に於て再び朴質謹嚴の風を養成せしと雖も、天明年間に至りて又更に墮落せり後寛政の改革に由りて士風も再び改まれるも、世運時に衰頽を來しければ大勢の向ふ所又如何ともする能はざりき、文化文政の物質的開化は日々隆盛に趣きたれど士風の腐敗はそが反對に日に甚だしく遂に延ひて幕末に及びしなり。

以上の大勢を以て稽ふるに女子も亦之と同じく、第一期の元祿年間に至るまでは例令一方に於て人道地に落ちて輕浮驕奢に流れ、彼の太宰駿臺の獨言にて人の知る如き衣食住の變遷――換言すれば奢侈の歩を進めしと雖も、亦一方には士風と共に豪氣貞操の風も存せしなり、殊に慶長年間に徳川家康が儒(藤原)の惺窩、林道春(羅山)を登庸して儒教を奬勵し、就中忠孝貞節の義には最も心を用ゐて教へたりしかば、武士の家庭は平安朝時代或は鎌倉時代に比較し却つて謹嚴貞淑の婦人を見るに及べり、併し儒教は間接に婦人を教へしものなれば(後に貝原益軒の女大學、中村惕齋の姫鏡ありとは云へ)士人の如く直接の感化を缺げりき、而して日本の歷史上に於て忠孝貞操の如き文學が道徳の標準となりしは、徳川氏の時代より起りしと云ふも恐らくは誤りなかるべし之に依ても儒教が如何に徳川時代に勢力を有せしかは知るに足らん、從つて婦女子も亦如何に其感化を受けたるやは推知し得るに餘りあるべし、試みに此時代に於て此教の下に人となりし女子を釋ぬるに彼の所謂元祿武士……は一口に元祿武士と云はゞ儒弱者の代表の如く感ぜらるゝも……その元祿武士には今日世界に其名を轟かせし四十七士の如きあり、而して此浪人中の大石良雄の妻、或は小野寺十内の妻の如き、武士的摸範の婦人の出でたるあり、是れ以前には彼の春日の局の如きあり、若し又詳細に其の名を舉ぐれば數十の良妻賢母あらんも、其等の人は要するに皆此の儒教訓の權化とも稱すべきものなりし。

茲に注意を要するは江戸と京都大阪との比較にし

て大阪は當時文學隆盛の地にして僧契沖、西山宗因井原西鶴、近松門左衛門、等の文學者輩出して、大に思想界を賑はしたりと雖も、政治、教育、學藝の中心となるべき武士の一社會が勢力を占めて思想界を壓倒せしかば風俗の淫靡なること江戸の比にあらざりしなり、今一方より觀察すれば社會的の發達は江戸より進歩せるも、道德教育等即ち理想的人物を缺ぎ徒らに肉慾的の快樂を貪りしが如し、京都は又所謂舊都の觀を存して文學は公家、僧侶の間にのみ行はれ、大阪の如き變化に富みし文學思想なく彼の東丸が皇學を主張せざる以前は誠に世の耳目を引くべきもの尠なく、而して江戸は當時京都の如き古代的の美術文學に乏しく、又大阪の如き趣味ある軟文學の大家も出でず、只戰勝者の集合地にして文華の見るに足るもの甚だ少なかりき、然りと雖も寧ろ家庭に於ける女子の貞節なる點に於ては、恐らくは三都中第一位を占めしなるべし、當時武士の家に生れたる女子にして受けたる家庭教訓なるもの丶大要は次の如きものなりし。

第一神佛を尊む事、第二祖先の名を重んずる事第三萬事其夫に服從すべき事、第四喜怒哀樂の情を猥りに顯はすべからず、第五起居動作の嚴正なるを尊む、第六衣服は粗略に食物は美味を求めず住居庭園は裝飾せざる事、第七薙刀の一手或は自害の方法を辨へ置く事、第八忠孝の教を遵奉すべき事、第九上は舅姑に仕へ下は僕婢を慈愛の情を以て使ふべし、第十遊戲は和歌彈琴にして三味線の如き淫猥の如きものは用ひざる事、第十一門外に出づるは佛參宮詣或は已が實家を訪ふ位にしてそれも一ケ年に四五回に留むべき事等なり。

　如斯習慣を以て當時理想的婦人とは謂ひて之を教へしなり、是固より所謂スパルタ的教育に髣髴として批難すべき點多しと雖も、其道德の高尚なることは兎に角讃稱すべき事多し、之れ元祿以前の女子と云ふのみにあらず德川時代二百五十餘年を一貫してかゝる女子を武士的理想の婦人とは稱せしなり、

今日に至ても若し諸氏が東北の會津庄内(今の鶴岡)西海に至りては熊本鹿兒島等の六十歳以上の老媼に就て糺さば余の言誤りなきを知るべし、かゝる理想が最も重せられし武士社會の風俗習慣なりしかば、從て農商にても其家名高く其產堅固なるものは美風として之れに倣ひしものなり、諸氏若し大阪の鴻の池平野屋(今はなし)の家風を聞かば此例を知る事を得ん、元祿以後に及びては斯る美風は江戸の或家に行はれしも或家庭は平民的社會の發達と共に餘り堅苦しきは野暮の至りとして家庭の風を軟らげしかば年を追ふに從つて浮薄懦弱を極めたり、其一例を擧ぐれば表に綿服を着け裏には絹布を着し、腰刀は細身の金銀造を横たへ、頭髪の結び方に意匠をこらし輕薄なる江戸辯を弄し、所謂粋なお武士となりしなり、男子にして既に如斯き狀態となりければ其妻たり娘たる女子も亦滔々として流俗に諂ひて藝娼妓の風俗を學びたれば家庭頗る亂れ、從つて財政の必迫を極め時の政府より屢々仁惠的の借金をなせしと雖も收支相償はず爲に地行の農民に計り出入の商人に借金する等其內實に於ては農工商との異なる處なきに至れり、



然れども文學は元祿以後江戸に於て益々隆盛を極

め眞淵翁ありて國學を鼓吹しければ士と謂はず商と謂はず少しく財産の餘裕あるものは、和歌俳諧に指を染め國文を書き國書を繙きしものも尠からず、從つて又女子にも斯の方面に心を注ぎしものも數多く唯文學史のみに依つて稽ふるも著明の女子ありしを知るべし、併し由來武士は文學を讀み或は書籍に耽けるものは之を僧侶醫士の輩と同一視して卑みしものなり、男子に於て既に然り、ましてや女子に於ては高尚なる文學を修むること能はざりしは勿論なりされば今日の高等女學校の敎育の如き完全なる敎育を受けしものは固より一人もあるなし、たま〳〵國學に通じ和歌俳諧に達し書畫に名あるものは漢學者の妻書家醫者富商尼杯の下流の人々にして上流の地位を占めたるものには其名を成せしものなし、而して茲に注意すべきは所謂御殿女中にして此社會には和歌乃至小說杯に力ありしもの尠からざるも、只如何にせん其地位を憚かりて世に公にせしものはあらず、幕末の事なれど余が知る一老女に娘節用の面白きに感し、一小說を創作せしも公にせざりき、其他にも斯る人は多くありしなるべし、今元祿より寛政及び文化文政より幕末に至る間の女子にして其名を顯せし者を擧ぐれば秋色、千代、園、智月、玉瀾、祇園の梶、梁川の紅蘭、蓮月、眞葛の嫗、高畠式部等の才媛輩出して其名を天下に轟かせり其他幕末に際しては近衞家の老女村岡、福岡の望東尼の如き政治界の運動に關したる烈婦も尠からず、然りと雖も武士の妻としては文學にも政治にも、殊に名を顯はせしもの尠し、畢竟德川時代の女子は其夫及父が今日の陸軍兵士的の規律に服從したる者にして、忠孝の二字を上に戴き貞節の二字を下に服し一意服從的の美德を顯はすに勉めし故、此點を基として詳論すれば二百五十餘年間理想とすべき婦人は決して乏しからず、併し文學政治は勿論社交等に名を世に顯はしたる者は、武家以外の女子と云ふべし、若し之を今日の敎育界に比較せば、武士の社會は官立學校の生徒にして他は私立學校の生徒たるべきか、一以餘

り規律的の爲天才を發揮せられず、一は不規律の爲に却て自由に天才を發揮せしものも尠なからざるなり。

兒童心理　觸覺と動覺

殘月庵主人

諸感覺の中で、一番に單純な　程度の底い感覺は觸覺である、他の五感は各々感覺の局部が定つて、眼とか鼻とかいふ樣に處が極つて居るから、耳目鼻口の四感覺を稱して特種感覺といひ、觸覺と動覺の二感覺を稱して一般感覺と名附けてある、この觸覺ゝ動覺とは、その性質の上から云ふと、性質が單純であるから、心意作用の材料となる可き智識を供給する程度は至つて底い、然し感覺の發達といふ方から、即ち時間の上から見ると、諸感覺の中で、一番に最初に發達する感覺である、其身體の局部の上から、即ち空間（場所）の上から見ても、身體の凡ての部分に觸覺を感ずる管能があるから、最も廣い感覺である。

初生兒に感覺が發達する順序をいふなれば、最も早く開發する感覺は觸覺で（動覺も）、その次に味覺嗅覺で耳目の感覺は一番に遲く開發する、初生兒の感覺は、最初はどの感覺でも、みな無意識な感覺で、感覺の作用が現はれて、感覺の機關が働いても、その感覺を自ら意識（かんがふる）わけではない、然し感覺があるから、無識にそれに對する初生兒の動作が現はれるが、この動作は、心あつての働きではない、即ち反射作用といふて、無我無心で働く作用である、觸覺は、嬰兒の身體に何時から働き始むるかといふに、觸覺は未だ生れる前に、母の胎内に在る時から、この觸覺の作用が現はるゝに相違ない、一切の下等動物の感覺は、みなこの觸覺ばかりであるが、胎兒の生活といふものは、即ち寄生の生活で、下等動物と殆んど同樣な生活である、然し生活がいかに下等でも、他の動物とは異りて、身體の

全周圍の皮膚に鋭敏なる觸覺機關を有して居るから母の胎内に在りても、この觸覺は中々に鋭いなのと視做さなければならぬ。

胎兒が、觸覺を有する見易い證據は、姙婦が過度の勢力をするか、又長時間の入浴をなして、血液の循環に變動を與ふるならば、五ケ月以上の胎兒になると強い動きを感ずる、胎兒が動くのは、即ち母の身體を通じて、胎兒の身體の觸覺に及ぼした感覺に原因するのである、胎兒が造化の法によりて、なるべく母の感覺から影響を受けないやうな、胎嚢内の液體中に在るも、素より一身一體の生活である、どうしても影響を免れないのである。

胎兒の觸覺は無論、無我夢中の感覺であるけれども、兎に角に感覺があるのである、既に多少なりとも、感覺があるとすれば、無心ながらも、その觸覺の感じが、心意の上には影響すべきは當然である、姙婦の非常なる恐怖の悲嘆などが、胎兒の死を來す原因となることは、多くある事なるが、これ皆（恐

怖悲嘆より生ずる母の血液及び榮養成分の變化にも原因すれど）理學的作用といふて、恐怖悲嘆などのために、胎兒の感覺に感動を波及して、胎兒の心臟痲痺、あるひは腦溢血などを來すのが原因である、母の感情の狀態が、胎兒の感覺の上に、このやうな影響があるとすれば、この胎兒の無心の感じは、胎兒の未開の腦髓と心意の上にも、必ず著しい影響があるに相違ない、古來このやうな事實は、充分に認められてあつたけれども、また學理の上からは、少しも說明せられてなかつたのである、それで、今日の心理學と生理學との研究に基く、學理の上から考ふれば、姙婦の心身の狀態は、胎兒の觸覺神經の傳達を經て、胎兒の身心の上に、尠からざる感化を波及するといふ事は、明瞭なる事理である。

それで、遺傳といふ事も、この點から考ふると、一層明瞭になるのである、遺傳の根原は、元よりこの胎兒の觸覺の前に在るのであるが、それは、遺傳の根本で、それから後に胎兒が發育して觸覺機關が完

備するに從つて、母より受くる多くの遺傳がある、これは多く、觸覺神覺を經て生ずる遺傳である。偖て、胎兒が生るゝや否、嬰兒が始めての感覺はいふまでもなく此の觸覺である、初生兒は多く、身體手足を收縮するの狀態があるが、これは嬰兒が觸覺で、外氣の寒冷（夏中でも）を感ずるより來る反射作用である、故に嬰兒を溫浴せしむるなれば必ず手足を開展し、特に足の指を運動さして、快感の狀を示すのである。

前述の如く、この觸覺は甚だ單純な感覺なれど、この感覺は全身の上にひろがつて居る管能であるから、その範圍は中々に廣いのである、かつ初生兒が、生れて始めて感ずる感覺であるから、矢張大切な感覺である、そればかりではない、この觸覺も、人々の注意次第で、これを練磨すると爲ないは、利鈍も一様でない、これは生長後の思想や、感情の上にも餘程の關係を有つて居るのである。

この觸覺の宰る所は、いふまでもなく、冷、溫、痛その他、ある種の輕き壓迫の感覺である、然し、冷、溫、痛などの感覺は、これ際立つた刺激がある場合に起る感覺なれば、これらの感覺に對しては、何人も充分に氣がついて、敎育の心掛けをする人もないではない、これらの感覺よりも幼兒の保育者が最初に注意せんければならぬのは、物體の平面上硬、軟、滑、粗などの感覺である、手特に指頭を感別する、最も銳敏な部分である、これは觸覺の中心ともいふ可き程の部分である、故に、兒童には、常に物體に指頭を觸れしめて、その物體の性質を、指頭でさぐり見る事の練磨を與へなければならぬ、身體全部の皮膚で、このやうな練磨をする事は無論出來ない、又必要もないが、身體全部の事に關しても、多少注意せんければならぬ事がある、衞生に注意する者は、誰でも皮膚の抵抗力を發達せしめんければならぬと云ふ事を知つて居るであらう、然るに、皮膚の抵抗力といふものは、寒い熱いの外氣でばかり養はるゝものでなく、これは皮膚の摩擦でもつて養

ふ可きものであるが、全身を斷えず摩擦して皮膚の抵抗力を發達せしむるものは、實に衣服である、初生兒に着せる衣服は、たゞ寒暖の度を保たしめて置くばかりのものでなく、皮膚の抵抗力を發達せしむるため、一の摩擦道具見たやうなものである、この衣服で、皮膚を絶えず摩擦するから、初生兒の皮膚は、それに抵抗して、皮膚の外面に血液の循環を迅速ならしめ、從つて皮膚を粗成する細胞の發育を助成するから、皮膚が充分に發育するのである、この道理から推して考ふるならば、初生兒の襦袢には、どんな衣類が、適當であるかといふ事もわかる。

注意ふかい母親は、絹物を嬰兒の襦袢にすればひやく／＼して温度を保たぬ故、絹布類は不適當であるといふ事を知つて居る、然し、たゞ温度の上からばかりいふ事なら、絹布だからといふて決して温度を保たないわけではない、襦袢の上に着せる衣類のいかんによりては、絹布でも温くさせる事も出來る、然るに、絹布が襦袢に不適當なのは、そんな事でなく、前に述べた通り絹布では、少しも皮膚を摩擦するの効力がないから、この摩擦によりて皮膚に生ずる體温も尠いのである、嬰兒（大人でも同樣）の襦袢に最も適當なものは、晒木綿である、木綿は目で見れば平なやうであるが、其實無數の凹凸面を有し、（即ち織目）綿糸の間には細微の綿毛が縦横に綾どつて、その間に空氣を含んで居るから凹凸面で皮膚を摩擦すると同時に適當の温熱を保つて居るのである

斯の如く論じたならば、綿布の代りに『ネル』の類を用ひて襦袢にしても、摩擦の効能があるだらう、又木綿縮でも同樣であらうといふ人もあらう『ネル』の類が、襦袢に不適な事は、皮膚の性質を研究すれば自らわかる、然しそれは、生理、解剖などの理窟になるから、玆には論せぬ、たゞ極わかり易い事をいふならば、『フランネル』類は、嬰兒の皮膚の外面を刺激するばかりでなく、ネルの毛（獸毛は柔いやうでも綿毛よりは硬い）で皮膚の氣孔を刺激することが甚だしい、又木綿縮は粗雜に過ぎて、刺激が過

度で、且つ殆んど温熱を保たないから、刺激で温みを生じないで却つて、皮膚に寒慄を生ずる、それであるから「ネル」や縮緬類は嬰兒には勿論、大人にも襦袢としては至極不適當である、
少しく理窟にわたるやうだが、念のために一言して置く、前にも論じた通り、初生兒の無意識の感覺は、心理上に至大なる感化力を有つて居る、それで、皮膚に受くる感覺は、なんでもないやうであるが、矢張この皮膚の感覺が心意の傾向を作り、傾向は個人の性質を作り、このやうに至極微細な諸種の感覺が、生れると間もなくから、生長するまで、多く集つて、一個人の心意の傾向や性質を形成するのである、それであるから、道德心でも美術心でも、深く探究すれば、初生兒時代の感覺に、必ず密接な關係を有つて居るに相違ない。
粗雜な感覺、はげしい刺激、この種の感覺は、無論これ不愉快な感覺で、このやうな感覺がある度每に、心意の上には、不快な心情が動き、この感覺に對する不滿不平の心情が起るのである、故に不愉快な感覺を初生兒に長時期間、繼續するならば、嬰兒の心意に、不快不滿の傾向を形成して、この幼兒をして、生れながらの、厭世家とならしむるのである、且、常にその皮膚に不愉快なる感覺を與へ（假令ば過度の寒冷を繼續せしめ、もしくは皮膚を不潔ならしめて、温暖、柔軟等適度の感覺を與へざれば、幼兒の精神は退縮して、心が意氣地なくなりて、有爲の才氣を發達さする事が出來ないのである。

訪外日記　（中止に就て一言）

中川愛水

犬打つ童の言葉でも、耳を傾くれば、聞捨にならぬ名句がある、まして一流の大家を、每月門戶を違へて訪問するに、話の種の盡きやう筈もなく、われら我のみの智惠嚢ヶ肥さんより、讀者諸君の前にも披露せばやと思立ち、兎てものことに、一日一人話

錄とでも云ふものにしたいと、本年の一月號より之を實行し來りたるが、年ごろ稿を續けたりし著述に付て、今回の東京博覽會を利用すべく、機會の逸すべからざる所より、開會中は思ふまゝに訪問も出來ねば、さてこそ續かぬ話と笑ひし友もあるべけれど、止むを得ぬことゝて暫らく、この日記の掲載を中止する次第となつたのである。

眞の献身的慈善婦人

自己の財産は勿論、其身體をも慈善事業に投じ、これが爲に仆れたる横山好子(三十五)と云ふは、山口縣山口町の人にて、今より二十餘年前、京都なる同志社女學校を卒業し、明治二十二年即ち十七歳の時、單身上京して築地の傳道學校に入學し、傍ら啓蒙小學校の英語の授業を受け持ちつゝありしが、幼より基督教の信仰厚く、常に孤兒救濟に志し、其れが爲め育兒法を研究せんと、傳道學校卒業後慈惠醫院に就きて、育兒法及び看護學を修め、二ヶ年を以つて同院を卒業し、去る三十四年に神田區表神保町に矯正看護婦會と云ふを組織し、其の後日本體育會に入り、日露戰爭起りて後は、小石川區中富坂町十一番地和田留子(二十八)と共に、軍人遺兒遺族保護會を組織し、本郷元町二丁目に一家を借り受け、一時は殆んど軍人の遺兒七十餘人を收容せしが、これが爲好子は自己の財産を費しつくし、また昨年の東北飢饉には親しく、凶作地の實況を見て十五名の病兒、及び乳呑兒を連れ來りて養育したり、然るに其の元町の家には常に頑是無き小兒の遊戯し居ることゝて、近隣より騷がしくて困るとの苦情起り、家主より立退きを命ぜられしかば、好子は東京全市を奔走して、適當の借家を探せしも、小兒の多き爲め、何處にても斷られしが、漸く小石川原町にニコライの信者ありて、其家を貸し呉れしかば、好子は大に喜び、早速引移りしに、二三ヶ月過ぎて、又も近隣より喧ましとの苦情起り、再び其處も立退を命ぜられしにぞ、最早市内には適當の處なく、若しありとするも、又々右樣の次第となるべきを以つて、此際一層市外に赴くに若かずと、府下上練馬村(板橋より二里餘)に引移り、相變らず熱心に孤兒養育等の慈善事業に盡しつゝありしが、何分にも財政が立行かざるより、八方に奔走して慈善家の寄附金を募らんとせしも、意の如くならず、彼是する中、歩行過度の爲世に類例尠き奇病に罹り、昨年十二月大學病院に入院し、二度迄も手術を受けしも、其甲斐なく、遂に去四日午前二時骨盤結締組織炎なる病名にて死去したるが、發病より死に至る迄、患部の苦痛の爲、殆んど一睡をもなし得ず、輾轉呻吟して、遂に三十五歳を以つて世を捨てたるなり、實に悲慘なる臨終ならずや、葬儀は去六日築地メソヂスト教會の牧師タムソン氏により青山墓地にて行はれたりと云ふ、因に記す、好子の養育せし兒童は神田猿樂町及び築地、小石川小日向臺町の天主教寄宿舍等に入れ其の他は下駄職見習の爲に、一人洋服裁縫見習の爲め、一人を某所に托したりと云ふ。

蔣氏教訓の抄譯

橘　終子

蔣智由先生は、支那現時に於ける詩界の泰斗なり、今や國憂を抱きて、遠く我國にあり、其賢明の才と溫厚の德とを以て、常に多く書を著して、自國民の覺醒に力む、今其領可を得て最も卑近なる修身書より其數節を譯す。

言語

凡そ言語は我が心情を他人に傳ふるに、缺ぐべからざる用具たり、されば往々一言の言ひ方によりて、榮辱禍福の分るゝことあり、故に君子は言を愼むをもて戒とはするなり。

言を愼むとは、之を言に現はさゞるにはあらず、若し只緘默して言はざらんには、豈よく言語の道を盡すといはんや。

蓋言語は人間至大の有用物たるを、人往々之を濫用するに因りて過あり、今其戒むべきものを擧ぐれば、

一虛妄の言を弄ぶこと勿れ、これなくんば言必信實なり、
一誇大の言を吐くこと勿れ、これなくんば言必眞切なり、
一阿諛の言を用ること勿れ、これなくんば言必忠諒なり、
一尖酷の言をいふこと勿れ、これなくんば言必醇厚なり、
一浮薄の言を操ること勿れ、これなくんば言必靜肅なり、
一鄙陋の言を喜ぶこと勿れ、これなくんば言必雅正なり、

これのみならず、總て人を誘ひ、陷れ、誹り、嘲るは、皆德に缺けたる言つかひなれば、人々宜しく之を謹むべし、されどこは固より其大略を擧げたるのみ、其細目に至りては、必ず時と場所とに應じて各人の意を留むべき事なり。

言語中の惡しきこと甚だしきものは、一言にて國家の大事を敗るもの、人の德行を毀ふ、人の名節を毀ひ、或は其人を吾が計略に陷れんとて、不利益なる言を捏造し、或は彼を奸佞者として告げ知らせんが爲に、不利益なる言を鈎索するが如きは、一言にてよく國を亡し、家を覆し、人を殺し、血を流す大事に至ることあり、發言者の罪もしかくの如くんば、豈亦深く責めずして可ならんや。諺にも禍は口より出づといはずや、一度口を啓く間も、決して忽にすべからざるを思へ。

容儀



人の心のよしあしは、人見てあらはには知り難けれども、猶其幾分は未だ言語に上せざる先に先づ容儀の上にこそはいとよく顯はるれ。顏貌より擧止衣服に至るまで皆容儀なり、されば一たび人に遇ふ時、未だ其姓名里居を知らずと雖も、其君子なるか小人なるかは略推し量らるべき一種相人の術は誰にもあるべし、これ他ならず、其顏貌と擧止衣服の上に就きて自ら知らるゝが故なり。

衣服はもと質素を旨となすべし、さりとて垢づき破れたるは、疾く洗ひ繕ひて不潔の跡を留めざるや

うなすべし、はた長く、はた短く、はた大小調はずして身の丈に合はぬは皆衣服の正しきものには非ざるなり。

また殊に戒むべきは、容貌擧止衣服の上に均しく過ぎたる修飾を加へざること是なり、顔貌艶やかに擧止婀娜として、其衣服は常に流行を追ふ如きものは、一見して浮薄下流の人たるを知らる、豈心あるもの丶倣ふべき事かは。

昔楚の屈瑕羅を伐たんとする時、鬪伯比之を送りていへらく、か丶必ず敗れん哉、歩むこと高く心固からねばなりといひしが、後果して敗れたりき、鄭の子臧は好みて鷸鳥の羽もて造りたる冠をかうむりたるに、盜人之を奪はんとして、其生命をも奪ひき眞なる哉、服の適はざるは身の災なりとは、詩に曰く、彼已之子不稱其服と、子臧の服其身に適はざりければ、遂に不慮の難をば免れざりき、然らば容止衣服は人の禍福に關ること極めて大なるものなり、豈深く恐れて愼まざるべけんや。

大度

今若し一杯の水、之を攪せば忽ち波立ちぬべし、これその量の小さければなり、夫の大海を見ずや、何物もてこれを攪すとも、其淵々たる姿を改めざるに非ずや、人も亦かくこそあらまほしけれ、さても淺墓なる人の世のならはし、何とて一錢のさ丶やかなる物の爲に、しか心なやますぞや、わきても心穢き女たちの、淺ましう嘲りあひて、心にもあらぬ爭を構ふるは、偏に智慧淺く、道理に暗ければなり、われこそは大人物たらめと思ふ人は、よろしく目を轉じて、天下古今の大業を見よかし、いかでさる屑ばかりの事の爲に、心煩はす事やはある。

抑も胸量小さき者は、人の心なくいひし一言をも懷に抱き、わざとならで爲したる一事をも心に蓄へて、其眉を顰む、げに打とけぬ其心柄、側目にも安からねば、誰かさる人と事を共にすることを願はんや、あはれか丶る人は一生ひとり惱みて、自ら人生の快樂を失ふに非ずや。

忿怒と嫉妬ばかり心を傷ふはあらじ、されば生を養はんと願ふものは、先づ此のことを愼むに若かず、只憾むらくは心小さきもの丶習ひ、動もすれば怒り、ともなれば妬むを免れずとはいへ、其怒を厭ひて、常に心廣やかにと勉めんには、いつしか此の邪しまなる念も消えて、精神健かに、心朗に、天地も廣く、歳月ものどやかになるべし、いかで心盡さでやはあるべき。

女の身

石榑わか子

誰やらにてありけるよ、われ生れてうれしき事三つあり、大名に生れざりしこと、物持に生れざりしこと、女に生れざりしこと丶いへりき、大名とか物持とかいふ際はわれあづかりしらず、たゞいかなるえにしいかなるすくせかや、かく女と生れてこゝに幾春秋を過しぬ。

さるにても女といふものは、かの某のいひしやうに幸なく嬉からざるものか、われ我身をしらず。

羽子の遊びにつとめて隣の中よしをさそひ、一二三よの中の憂さも苦しさもわかず、春風に裳裾ふかせて寒しともおもはず、飽けば鞠つかむと、乳子のよりあひ、かのこそろひのはでやかなる衣を着あひ、身のほども忘れて、粉物やら紅やらと顔にぬらる丶が、くるしき中の面白きものなりし折、天の川うき瀬の波は過ぎゆかむ、わが世の中にありとしも、かいの雫のつゆほどもしらで罪なきたなばたの、ねがひの糸の末長く、何の祈をかけむとか、さ丶ぐる歌のおもしろさ、紅葉の錦をかざし、落葉をひろひて書に挿み机に向ひ、ひもとかむとしたるに、ふれ〳〵小雪など、外の方にきこゆるに、はやあくがれてたちいづれば、めづらしう綿のやうにふりくるたのしさ、暫らくしていたくつもれるに、男の兒等に打父りて、ともに〳〵かきまろめて、達磨をつくれるに、女らしからずと父上にたしなめられて、俄に手の先

のつめたきをおぼえし時、あはれおもへば神の如きわが身なりしを。

乞はれて人の家に入り、天を仰ぐわが夫はいふもさらなり、舅姑の君たちに仕うまつるに、あらむ限の心を盡してはあれど、おろかなる身には、お氣にめさぬ事のみ多からむ、もしさることもありて、夫の君はいかにいとしとゆるし給ふとも、家風にあはねばと逐はるゝ事もあらば、われは何としていひときまゐらせむ、さりとてかくまで盡せる誠心のほどをしり給はゞ、鬼もあはれとおもふべきを、まして常の人にあらず、わがためにはたゞ一人のみなる夫の君の、うみの父母にますものを、百千の罪も見ゆるし聞ゆるし給ひて、敎へ導き給ふべからむ、まして僞なき心をば、人のわざには限りありと、みそなはします天地の神たち、相うづなひたすけ給はむ、されど悲しきつらき恨めしき目は、おほく思はぬ方より起るときく、ゆくりなきこと湧出でゝ、もしもの事のありもせば、われは何とせむと、いつも思ひなやむ取越苦勞も、夫の君大切お二人大切、さりとては名も身もすてがたきわが身をも大切と思ひでぞかし。

心地すぐれず、いつも胸につかえたる如く、吐きたきおもひになやみし、つはり病の比より、十月の末にいたるまで、片時安き日も夜もなく、人に知られぬ苦しみも、くるしとはいへ、かつはうれしく、惡しきことは見ず聞かず、英雄豪傑の談、志をたてしますらをの物がたりをはじめ、貞女烈婦のありし事柄を、きゝもし見もして、いかで男にてあれかし、男兒と生れたらば、女々しかるな愚なるな、女ならばみさを正しかれ、同じくはみめかたちもうるはしかれなど、この世にいでぬ前より望月の影の東の空にさしそめたるに、雲霧のさえぎりせなむことを、いのるが如くなるも、闇ならなくも親心の常なりかし、こゝにとつぐ前に、母上の膝元にて、くれ〳〵いましめ給ひしが、産月の心地げにこれにはしくものぞなきそれよりも生れむとする折を思へば、身もち

ゞむばかり——、神にも佛にもわりなき願をかけて、いかでこの身二つになさせ給へ、事なく喪なくてと、胸の中にはおもひたえたるひまきなし、されどそはまだしもの事、いよ〳〵時を經るにしたがひ、今にもと云ふ際になりて、子の事なきことをも、身の喪なきことをも、もはや打忘れ、祈らんことをも忘れて、たゞ夢路をたどる如し、さても母上のさとし給ひしことは、わすかれず、あたりはおほろげになりぬとも、疊の目の見えぬやうにならでは、生れいでむらむと、あまりの待ちどほさに、いかに〳〵幾回となく、かぞへもしたりき、されど女と生む



ものは、十人は十人、百人は百人しかあるべきつとめなれば、われ一人苦しとは思ふな、うめかむ聲のもるゝことのありもせば、女と生れての耻、此上なかるべし、ゆめ〳〵忘るべからずとのことの葉、われは片時も忘れずして、心にしかと思ひしのびゐたりき、かくて用意の布のきれ、口にふくみ、齒もくひ入らむまでかたくかみて、かけまくはかしこかれども、かの某の姫の命の、海邊のふきあへぬ茅の御殿に、鰐となりてもこよひ給ひしも、おろかならざりし事と、ある時はおほえもして、いはむすべせんすべしらず、骨もくだけ肉

もさけなむずるに、身は苦しみか、苦しみが身か、人かわれかをも打忘れたるに、冷やかなる汗はながれて、體をもうかせむとす。

かゝ看護とゞき、大かたは人の力に産せられて、やれうれしやと思へば、與へらるゝ水こそ、まことに月よみのもたる越水、あはれ幾千世經たるよりもうれしく感じぬ、さてもわが子はいかにしけむと、わが身のいかなるかをも忘れて、泣かぬ子を見れば、いかにしけむ、あやまちはせざりしか、もしくは啞にてはなきやと思ふ刹那、わつと泣いだしたるに、まづよし、さても男か女かと、おもひ煩ふも、なほ夢ごゝちなり、さるにても死なむ斗りの苦も、たゞこの泣聲ぞ命なる。

さても千萬無量の憂苦、これ憂苦とするに足らず、夫の君の父母なる、舅姑に仕ふるはもとより、夫に對して、よく內助の道をつくすにつけては、いかなる憂苦もしのばざるべからず、夫に對するのみにはあらで、そはまことに神のなせる道、いひも及ばぬ無上の快樂あればなり、もとより身を苦しめ、心をいたむるは、この極みなく果なき、大きなることにおひて、何かあらむ、堂々五尺の男兒だに、なほ小さき一事業のために、身命をもなげうつめり、いはゞ未來の天地の、造りなさむ上につけては、身も心も惜むべしやは、さては前途きはめて遠し、よくもあしくも、わが身の一言一行、みなしき及びてひろごりて、天地にも及ぶなれ、榮えゆかむも、おとろへゆかむも、皆われ等が心一つ、かくては女の責いかに、大きくさかりならずや、あはれ吾ながら思へば、女は尊し、さても女子をば、一も二もなくいひけちて、人のきはとも思ひたらぬぞ、あさましき、うれしからずとすてられし、女子の技倆によりて、男兒も男兒らしかるなれ、知らずや、人物をつくるはじめは、敎育なるを、敎育をなさむもとは家庭なるを、さて家庭をおこさむ王は女子ならずや、われはおもふ、天地の中にすぐれてうれしきものは、女の身と生れいでしこと。

女子高等師範本年の入學者

お茶の水の女子高等師範學校にて、本年度に入學せしむ可き、文、理、技の三科總員七十五名に對し、文科に二百三十二名、理科に三百五十三名、技藝科に百廿五名合計七百十名の受驗者あり、此の中選拔試驗に及第合格したるものは、僅に七十九名なるが、同校は此の合格者に對し、來る四月二日體格試驗を擧行し、夫れ〳〵入學の許可を定むる筈なり、今合格者七十九名を府縣別にすれば左の如し

東京七人、京都一人、大阪三人、兵庫四人、新潟三人、埼玉一人、栃木一人　三重二人、愛知五人、宮城一人、岩手一人、靜岡六人、山梨四人、岐阜三人、長野十二人、山形三人、秋田二人、福井一人、富山二人、石川三人、熊本三人、鳥取、德島、愛媛各二人、岡山、廣島、高知、宮城各一人、

この中にて、長野縣が十二人を出せるは注意す可き價あり、また師範學校卒業生が僅に二十七名に止まり、他は悉く高等女學校の出身者なるは、女子師範學校の數の少き爲めなるべく、尚年齡は十八歲より二十三歲までなり、

模範女生 大木みつ子

難波津淺香山の道をのみたどりたる、古の敎へは知ず、今は萬づ學びの開け行きて、女子の業も多岐にわたりぬれば、丌を修むる女子達は、何れも螢雪を勵むやうになりたる何よりも嬉しき事なり、丌が中に今年東京府第一高等女學校を卒業せし大木みつ子といふあり、下谷區竹町一番地大木武光氏の長女にて、是まで其校に通へるものゝうちにても、別きて勉強の聞え高く、此校に高等なる學びの道たどり初めてより、雨風霜野分木枯の吹きすさべるをも厭はず、一日だも休みし事なく、又定めたる授業の時刻にも後れし事なく、長き年月を、たゞ一日のやうにいそしみ勵みて、終に良き成績もて卒業するに至りたれば、同校にては同女こそ、女生中の模範なりとて、特に之を賞揚せしとぞ、此みつ子は幼なき頃より、書讀む事を好み母なる人の膝の上にある頃より、小き指先もてじろまろまど指さして喜び、六ツ七ツの頃となりては、淺草の柳北小學校に通ひ、傍ら祖母より難波津のほとり、筆の歩みの道を學び、三十五年の春高等二年を卒業したる時は、是非とも府の高等女學校へ入り度しとて、切に請ひ求めたるより、父の武光氏も其望みもだし難く、轉じて同校に通はせけるに、みつ子は痛く喜び、毎日誰よりも早起きして、自ら飯を炊ぎ、丌を辨當に詰め、朝の八時半にはきつと家を出で〳〵學校に行き、其歸りには琴花の師の許に立寄り、稽古を終りて歸宅するを常とし、歸宅の後は二人の弟一人の妹を對手に、編物刺繡などをなし居る由にて、近傍の人も我娘を戒むるに、毎時みつ子さんを倣へといふを常とすといへり、同女の父武光氏は、下谷玉寶堂の顧問役、目下は金屬品製造會社の創立事務の爲に奔走し居るとなり



小夜あらし

相模　小田原峰子

さりとては夢の樣なる浮世哉、昨日までは小夜子々〳〵々と筆舐り乍らソレ水持て來よ、繪絹張りてよと暫時も傍離させ給はず、母親無き子の一入いぢらしうその十八歲にも成りし身を、花園にたはむるゝ胡蝶の樣に思して、何の彼のと抱き上げんばかり慈しみ給ひし父君の、一度び吹きすさぶ夜半の嵐に誘はれて、果なく成り給ひし後は、今更に泣けど、叫べど、答ふるものは窓に音なふ風ばかり、いとゞ淋びしく成りける事よ。

佛間に手向し線香の烟、ユラ〳〵〳〵と立ち迷ひて哀を誘ふ蟲の音、袖垣の邊に繁き夕暮をたゞ一人緣先に立ち出でゝ、雲の行方見るともなく眺め入りては、つく〳〵と物思ひに沈める小夜子、今更に父上生存の折りの事ども思ひ出でゝ、物悲しく、眞珠の如き瞼を洩れて散り來る涙止め敢ず、紫矢絣の被布の袖も色あするばかりなり。

逝に行く道とは兼て知れど、餘りにあはたゞしき父君が上、さても悲しく、黒塗仕立の煌めく二頭立の馬車、ガラ〳〵と過ぎ去るを見ては、あたら世の名利にあくがるゝ人心を呵々と笑ひて、光風霽月に、思はず筆を走らせては、忽ち畫面に躍る龍の影、生けるが如く、湧き立つ黒雲人をのまんばかり、會々權門より席上揮毫の所望も、氣に向ずば、さッぱりとはねつけて、振向きもせられざりし俤まだ目前

に見る樣、いまにも小夜子と仰せらる丶ならんと書齋の邊ふり向けど、たゞ香煙の心なげに立ち登りて行くのみ。●

小夜子、つく〴〵悲しく、あ丶我れ程世に仕合わしきものはわらじ、母上には我れ三歲の頃、歸らぬ旅におもむき給ひしとか、宵々每の枕に、乳々と母戀ひて泣く我れを、宥めつ賺しつ、父君の手一とつに今日迄育て給はりし御恩の萬分の一だに報じもせずこの年頃を仇に過し丶我が身、さても愚かや、あ丶許し給はれ、せめて是よりは、女子ながらも丹青の道に心込めて、天晴れ父がなき跡を繼がん、さなりさなり、とは云へ今は筆取りて玆は斯く、彼所は斯く〳〵と、何時も丸桐の火鉢に御手かざしつ丶、我ばかりには、もの優しう導き賜はりし父上の世になきを思へば、只悲しくて〳〵空行く雁の鳴き連れて行くさへ哀れに悲しく、我が身一つを置き所もなく月影大空に澄めるにつけ、萩が花庭にこぼる丶につけ、只在りし頃を忍ぶよすがとなるのみ、心憂き身を誰に語らん由もなくて、獨り物思ひに沈み勝ちなる小夜子が今日此頃。

ハヲ〳〵と扉打つ落葉の音もの寂びしく、秋の色は滿庭にたゞよひて、常よりは置く露しげき傍の柴折戸開けて、

「小夜子さん………又泣いて居るのですか身體にさはると不可ませんぞ」と

靜に入り來るは、父が存生の頃より、此の人のみは末の見込みもあり、且つは世に、、、たよりなき孤兒と聞くからに、わけて慈しみ給ひし人にて、過ぎし頃より離れの一室にありて、諸共に丹青の道に志す瀧澤文雄と云ふ青年也、今暮れ行く空を恍惚と、夢の樣なる彼方の森を眺めつ丶イめる小夜子、我が名呼ぶ聲に、ハッと驚かされて、

「ア、文雄さんでしたか、御免なさりませ、又つい考へて居りましたので」と

やをら立ちて此方へと誘ひ入れつ。

さらばと文雄も共に部屋に入りしが、生憎に思ひ出

すは先生が事、常に、「瀧澤さん、畫をかくには、眞に精神から、潔白にしてかゝらねば、勢の無い死んで居る繪よりは出來ませんぞ」と仰せられし慕はしの先生今は逝きて歸らずうたゝ思ひ出多きは、この書齋なりけり。

親にもまして御恩深き先生、嗚呼今こそ、小夜子樣が行く末守りて一かどの畫家と成し參らするは我が責任にして、萬分の一の報恩にもならんかと思ひ定めつ。

夫より後は、文雄、ともすれば沈み勝ちなる小夜子を勵まして 或る時は、音もせで、小笹に降り積む雪の日の徒然を、例の吾妻琴取り出でゝ彈ずる小夜子が「江の島」の一曲「水は山の影をうつし」と唄へば、「山は水の心にまかす」と吹きあはす尺八の音色床しく、又或る時は、春月淡き上野の山に櫻を賞して、地上に長く〳〵引く我が影可笑しと、さすがに憂忘れてホヽと笑ふ小夜子が面をいとしと文雄我れを忘れて眺むる事も屢々なりけり。



憂が中にも慰められて、青葉のかげの時鳥も夢ときゝ流し、何時しか、風の音に驚かるゝ秋の初とは成りぬ。

板屋を廻る點滴の音わびしき或る夜半、「アッ」と云ふ文雄が悲鳴、唯事ならずと小夜子、あはたゞしく走せ行きて見れば、秀でし眉の邊色青ざめて、

「小夜子さん…………」と
力なき文雄の聲、見れば雪より白きベッドに亂れたるは、見るさえ凄き唐紅…………小夜子膽だに添はず、ブル／＼と戰慄して
「おとみ／＼、乳母や」と聲を限りに呼び立て、急ぎ醫師を迎へて手當するに、やゝ靜まりし文雄が樣子、醫師は御氣の毒ながら、手後れにて肺結核とのこと、小夜子が小さき胸はかきむしらるゝ樣、心の限り、身の限り、悶えて泣きて、泣きて悶えつ。
少しおこたらば、海邊にて養生せられよとの、醫師が言葉に、越えて十月の初旬、文雄は、やるせなき胸の亂れを、黒煙にまぎらせて、何くれとなくまめやかに世話しくるゝ小夜子と共に、鎌倉は由井ケ濱のほとり、松原でしに海見やらるゝ宿に行きぬ。

・・・・・・

文雄こゝに來てより早や一ケ月餘りになれど、はか／＼しからぬ病のいとゞやるせなく、恩師が跡を讃

り參らする大任のある我が身が、此度の病魔、實に口惜しとあたら細りし腕を叩きて、終夜斷腸の思ひを枕の下なるこほろぎに合す事もあり
淋びしさは其色としもなかりけり、浦の苫屋より立ち登る烟、松を縫ふて薄う棚引き、折りふしは海士が歌ほのかに、夢より淡き上總房州の島山、水彩畫の樣なる玆由井ケ濱邊を辿り行くは、小夜子と文雄なり。
今日は珍らしくも心地よしとて、宿は老婆に賴みて諸共の濱傳ひに、やゝ勢を得て文雄、常にもあらぬ高笑ひ、
昨日慰められし身が、今日は人の上、アノお瘦せ遊ばした事、御いたはしの文雄樣よと、心優しき小夜子、我にもあらずほろりとなるを、つと顏そむけて
「アレ御覽遊ばせ、海士の子が面白き樣子を」とまぎらはすに文雄も
「ほんとにドングリの樣な眼して居る、アレこそ先天的に鮑拾ふ爲に出來たのでせう」

など丶、らちなき事笑ひさゞめきて、三日月の影鎌倉山の邊にほのめく頃家に歸りぬ、

この兩三日は、常にも無き文雄が元氣のよきを、宿の老婆も珍らしと喜びしに、何事ぞ、こは風前に消ゆる燈火のパッと輝くそれか、松の嵐もの凄き夜半俄に急性と變じたり、すはこそ、怪しき文雄樣が御樣子よと、小さき胸もおどろ〳〵、醫師の迎へられし頃は、はや細り行く呼吸の微に微に

「あゝ……小夜子さん……もう……とても」

…………………

わるゝ斗りの胸をさへて水ふくますれば

「何卒……立派に……御父樣の跡を……」

糸より細る聲に、小夜子が掌しかと握りて、わたら惜しき二十三歲を、此世の終りとして秀でし眉は、ねむるが如く…………

逝きぬ、逝きぬ、噫、文雄樣も逝きましぬ、世は何處まで無情ぞ、今は天にも地にも只我れ獨り、松の調も樂しからず、海士が歌も、嬉しからず、只殘るは淋びしき〳〵胸中に、悲しくつらき憂世のみ。

小夜子夫よりは家にこもりて又出でず、只何事か考へては、さめ〳〵と泣き暮し淚の泉も枯れんばかりなりしが、何と思ひ定めてか、一日、老婆を用事にと出しやりし後、細々と書面認めしを机にのせ、小やかなる包一とつ手に持ちて、家を出でぬ。

思へば、身に餘る憂き數々をさゝへかねて、足の運びも辿々と、兼て聞きし蓮生院を目ざして、路邊の露に我が淚を爭ひつゝ、少し坂道を登り行くに、落葉を誘ふ青嵐もの凄く、まだ宵ながら、心細き振鈴の響、遙にきこえ來りぬ。

今はなか〳〵思ひ定めし身の心易く、倚辿り行けば半朽ちし門の、幾春秋の雨風に、さらされけん、廂には虫ばみたる古額一面、蓮生院と危うげに讀まれたり。

小夜子は、つと內に入りて、主が尼に斯く〳〵然々と、一絲亂れず語り終りて、是非に頭削りてぼち給はれと云ふを、まだうら若き御身の御心や迷ひぬる

と、左右なうは受けひかぬ尼が言葉も、なか〳〵常なしと見つる此の世に樂しむべき春もなく、悲しむ可き秋もなしと思ひ入りたる心、翻すべくもあらず「幾度び仰せられても同じ事、如何しても思ひ定めた事はかへませぬ」の一點ばりに、主が尼も今はと後へ廻れば、潔よく切りほどす緑の黒髪さとゆれて自若たる美しの小夜子が顏面つく〴〵と眺め入りて藤色友染の袖に剃刀持つ尼が涙、ほろりと散りぬ。

（終り）

散る花

越後　松永しげ子

戀しつゝ、戀にもたえて晉しなば、花ぢかつくれやまさくら花と、誦したりしが、わが事ならで、姉君の身の上にならむとは、血をわけし一人の姉、春より病つきたまひて、五體ふくれ、呼吸も自由ならでありしが、藥石の効なくて、廿一日を限りにかへらぬ旅へ出でましぬ、

桃の花赤う、竹むらそよく、北窓の下にて吟呻して今を限り、脉の絶えなん折は、いかに苦しかりしよ、母上は泣きたまひ、いとし子もなきしならむ、あはれわが名をも呼ばりしならむ、如何せむ旅に在りけろこの身いかでか知らむ、彌生の末つ方訪づれてあひたる折は、かくまで早うこの世を去るべしとも思はざりしを、顏色いかに蒼白なりとはいへ、姙娠の身たりとはいへ、

明日旅へ行くこの身なればとて、一夜とまりてよとすゝむるをも聞かで、立ち出でたるなり、かの時は旣に旣に今世の別れならむとは、かくとだにしらばせめて姉の心をなさぐむべう、一泊せしものを、あはれあゝ

姉は死したり、卯月の廿一日、呼べと應せず、只北郊一片の烟と消えつゝ、見むとしても白骨の殘るのみ、實にはかなきはこの世なろかな、

春雨軒をめぐりて靜かなる夕べ初めてしりぬ、熱き涙ながらに、古里を望めば、霞八重に立ちて、庭の八重櫻こぼれ行く、その行くへや何處、あはれわが姉のみたまも迷ひけるか、

あはれ散るもの は露と花のみと思ひしに思ひきや一人の最愛なる姉さへこぼれ行かむとは。………。

晴雨三十分の眺め

播磨 横田春枝子

乳母にあたへんとて、あみかけし袋、若草色の絹糸、指にもつれて、しどろなるに、ほつと倦き、椽の柱に身をよせて眺むれば、庭の青苔に陽炎たちて、日は眞白に窓ふかく差し込みつゝ、今迄蓮花の花輪に戯れゐし、小猫の玉、紫の座ぶとんの上に靜に眠りて、バラ色のリボンの首輪一入花やかなり、軒の吳竹に一羽の雀止りて、猫の寢顔覗くやうなる樣して、遙の空にとび行きぬ、垣ごしに一聲鳴きて、鷄の一群柴折戸くゞりて入り來り、椿の根元の土堀りて、休める樣、繪のやうなり、近き家に機織るおさの響、隣に鍋の蓋かく音と和して、忙しく聞え、塀の外には、午餉終りて田に行く人ならん、俗謠のふし面白く牛の啼聲ものうげに、後音永く引いてもれぬ。

今日で二日降りつゞく春雨に、心もめいり、齒痛さへおこりて、得あられば、好める書も机の下に重ねて、手箱さぐり、友の寫繪あれこれと眺むる折しも、雨は一きり降り增り、敷石をパチ／＼と叩く音しきりなるに、障子細目に開けば、七分ふくらめる櫻の蕾、水晶もて包めるやうなる、いと艷にて、雨蛙の背靑く小さきが、其くろき木に止れるもかわゆきに、かたへの燈籠の內より、大きなる鼠の、首差し延べて、降る雨を、かこち顔に見まはすもおかし、屋根の瓦を洗うて流るゝ雨の、ハランの葉先にかゝる度に、しきりにうなづけば、はじきてとぶ水の、玉と散るも見事なり、門の戸にもたれて、カタ／＼と下駄の土を落しては、眠げに唄ふ子守の聲やめば、とび石をふむ足音して玄關に郵便となげ込む一誌待ちつる女鑑の着きしなり。

上毛竹葉子に

越後 大石ます子

本誌前々號新體詩天賞に入撰の拙作露と花と題するは、中學世界六卷三號遠江國和泉仁一様の作を剽窃したものと、皮肉に御攻擊でありますが、決して妾は一時の小名譽小功名を得んが爲に、他人が苦心した作を盜んで投書し、恬として快を貪るやうな卑劣な女ではありませんよ、若しも妾の言葉が強いて辯解に出づるものと思召すなら、少國民一卷二號を御覽下さいませ、既に同誌にて◎◎點を得てあるのですよ、(これは記者様にもお願申します)で和泉様とやらの作と、一字一句の相違がないと御仰せなら、何卒時日を合して下さい、和泉様のお作が遙かに三

ヶ年を經て拜見したと知れたら、全く妾のが剽竊でなくて獨創であるといふことが御了解になると同時に、三ヶ年を經て後和泉樣のお作が期せずして妾の作と暗合するとは……？、何んと不思議ではありませんか、

さて話は少々餘事に亘りますが、この頃往々言論の自由を利し、而して匿名は責任の所歸を明らかにせざるに乘じて、たま／＼おのが文筆の才を挾み、充分事實を取調べずに、徒らに他人を中傷誹謗するを以て快とする方のあるは、之れ全く德敎頽廢の現象として實に悲むべきことで、殊に苟も美の靈界に悠遊し、崇高偉大なる天職を標榜する誌友の君達に、かゝる方を見るのは誠に痛嘆すべきことでありますと言つてこれは敢て竹葉子樣を復讐的に申し上げるのではありませんが、斯かる心得違ひの方があつたとすれば、妾は誌友の義務として、苦言を忍んで反省を促したいのであります、こんなことを申し上げたら、皆樣が屹度、生意氣などゝお下卑なさるでしようが、聊か所感を記して、妾のやうに寃罪を蒙つた或る他の（今後もしもありますれば）誌友を慰めたいのです、竹葉子樣の惡言なる御攻擊は、透明なる妾の心には寧ろ美妙の天樂として聽き、毫も意に介して居りませんが、どーぞ誌友の君達の疑を解くと共に、竹葉子樣が將來に於てもう少し沈着ならんことを、終りに臨んで希望いたしておきます、

越後ニテ　大石ます子

記者曰く　かゝる辯解を得て、本誌にて當選したる作品が、不正のものならざりしを知るを得たるは、大に滿足する所なり、竹葉子の名によつて君を攻擊したるは何雜誌なるかは知らざれども、君の寃にかゝりたるに同情を表して、こゝに五號活字にて全文を掲載することゝせり、されどこれは無理ならぬ間違にて、君も小國民に出したるものを、また女鑑に投稿せられしより、かゝる事も起りたるにて、この文を君の創作とすれば、中學世界に掲載されたる作者が怪しくなれり油斷のならぬ世なれば、この後ともに心したまへ、

貴族院議員 文學士 男爵 千秋季隆君選

和歌懸賞 山花

天

やまの奥もおなじさくらの花なれど
うき世には似ぬ匂ひなりけり
山口 村上操子

地

春風のかよふすきまもなきまでに
はなにつゝめるみよし野の山
常陸 北垣くは子

人

まさかりに咲つゞきたる山ざくら
いづれを雲のさかひとや見ん
東京 碓井のぶ子

選外秀逸

◎
柴人のわけ入るやまのかたへまで
けふはさくらの盛りなりけり
大和 栗山たか子

○○
のぼりきてやすらふ山の花陰は
くもとおもひしところなるらむ
東京 原三幸子

○○
春のやま旅するひとのこゝろをば
ひきてとゞむる糸ざくらかな
東京 土田壽惠子

、、○
見わたせば山皆花になりにけり
おくれさきだつかたもなくして
東京 益子逸子

○
佐保山にひくやかすみの幕の面に模様と見てしさきにほふはな
静岡 吉田静子

、、、
このごろは霞もうごかずなりにけり花のさかりよ嵯峨あらし山
埼玉 横田すま子

、、、
さくら花けさのみなみに咲ぬらむしろたへならぬ山なかりけり
東京 吉岡龜子

、、、
ほのぼのとあけゆく山のみねに尾に雲と見るまで咲ける花かな
薩摩 松原岑子

、、
山ふかみ尾なる人をたづね行きてまだ世にしらぬ花を見にける
土佐 廣江子

○
わけのぼる道もなきまでさき匂ふさくらにうつむ春のやまやま
東京 戸塚ともゑ子

、、、
まく花にうづもれはてゞ遠方のやまのなのみぞあらはれにける
陸前 大槻初音子

○
柎人のゆきゝまれなるみ山べもおのづからなるはなのしたみち
陸前 末永喜鳳子

○
しつのめにみ山の花もたをられてみやこ乙女のかさしとぞなる
秋田 細矢はる子

詞友

春風に雲もかすみもたちはれてやまみなはなにうつもれにけり ○
東京　河合清子

のぼりゆく袖ににほひのうらうらすずば雲たなびくと花や見ゆらむ ○
越後　松永しげ子

春がすみたなびきそめしあしたよりまちにし山の花さきにけり ○
岩代　齋藤巴子

ふみわけて見る人もなき山のはににほふ花こそあはれなりけれ ○
北海道　佐藤央子

春くれは山またやまのはなくもりはれてくもりてかすむ空かな ゝゝゝ
埼玉　横田やな子

山たかみかすみがくれのさくらはなゆきてさだめむ雲かあらぬか ○
駿河　森つな子

朝風のそよふくたにもいとふらんけふをさかりの山さくらはな ゝゝ○
大和　栗山しゆん子

よしの山風にうごかぬしらくもはさくらの花の咲けるなりけり ゝ○
常陸　岡田萬子

家つとに手折らんとしも思ふかなたとるやまちのおそさくら花 ゝゝ○
千葉　瀧口まつ子

佐保姫のかすみの袖のひまにみゆる高嶺の雲はさくらなるらん ゝゝ
佐賀　尾方綾子

旅せずばいかでみるべきみ山路のかすみにあくる花のひとむら ゝ○
岩代　岸野常子

山のはにかゝるを見れは月さへも花にこゝろやひかれつるらん ゝゝ
佐賀　藤松りか子

わけいりて思びしりけり野邊よりも山はさくらの花のおほきを ○
松山　田村多豆子

やすらひてたゝへぬ人はなかりけり我山さとのはなのさかりを ○
東京　高橋珍子

佐賀　尾方やゑ子

ときはやま松の木の間に咲きいてゝかの子またらの山さくら花 ○
東京　土田八重子

こゝもまた浮世なりけりましらなくみやまの奥も花さかりして ゝゝゝ
東京　高野元子

山は皆しらゆきとのみ見ゆるまでかすみをもれて花そにほへる ゝ○
山梨　風間千代子

果もなく花のしらくもたなびきてたくひあらしの山ざくらかな ○
東京　島村作子

ありあけの月かたふきし山の端のかすみににほふ花のしらくも ○
下野　井上爾子

人しらぬかた山かけに咲きいでゝにほふ花こそゆかしかりけれ ゝゝゝ
京都　高丘はる子

たきゝとる乙女はかさして歸りけりこゝのやまにも櫻あるめり ○
岩代　菅野和子

わらびとるかへりに見たるさくら花里におくれしいろぞ優なる ゝゝ○
新潟　岩本芳子

たき木こるたつき忘れてそま人もながめやすらむみ山路のはな ○
宮城　黒木信子

おく山も花も咲くらんかへり來るそまが小舟のかほるを見れば ○
北海道　牧君子

あらし山花のさかりはくれなゐの雲立ちまよふはるのゆふくれ ○
讃岐　安藤光代子

うらやまのひともとさくら名のみきく吉野の山の花とながめむ ゝ○
兵庫　田淵ふじ子

里とほみたづぬる人も無き山にあはれさかりにはなの咲きける ○
大阪　木村春江子

吹きおくる風をしるべに分け入りてしづけき山の花を見しかな ○
松山　上原のふ子

松すきもうつめてさけはおくやまのさくらを人は雲と見るらむ

ヽヽヽ　　　　熊本　吉住艶子

はる／＼と仰くたかれの花なからうき世の春にもれてさくらん
ヽ○　　　　甲府　名取正代子

咲きつゝく花の山路をたどる日はにしき着よそふ心地こそすれ
ヽヽヽ　　　　神戸　足立ゑい子

時もときところもところはるの夜の月と花とをみよし野のやま
ヽヽヽ　　　　伊豫　西田操子

八重ひとへ大内やまのさくら花くものはてまでにほひぬるかな
○　　　　陸前　前田河みさを子

春風ののとけきまゝにさそはれておもはずみ以い花をみるかな
○　　　　日向　岸上はる子

やま姫の花のころもの裳なかくかすみのひまに見えつかくれつ
ヽヽヽ　　　　東京　牧淑子

峰つゝき咲くや吉野のさくら花なかきはる日もあかずながむる
○　　　　陸前　前田河千年子

峰高くかすむとみしはさくら花いまをさかりとさきしなるらん
○　　　　東京　松本まつ子

山見れは皆しらくもにうつもれて花よりほかのめうつしもなし
○　　　　東京　林艶子

よしの山たなひきわたるしら雲も近つき見れはさくらなりけり
ヽ○　　　　濟國　宮成梓子

ちるまでの日かずかぞへて山はみな花みよしのゝ春めでんかな
ヽヽヽ　　　　岩代　吉田ちさと子

さなきたにけたかきものをさくら花山の上こそゆかしかりけれ
ヽヽヽ　　　　東京　林環子

うきたちて山もさくらのひとときにほゝえむ春となりにける哉
○　　　　三重　米奥とめ子

さくら花さきそめしより小山田の里にぎはしくなりにけるかな
ヽヽヽ　　　　伊賀　佐々木まさ子

たづれ來る人こそなけれ年ごとにはるをたがへぬやまかけの花
ヽヽヽ　　　　神奈川　鈴木まつ子

朝がすみかゝらずなりて山のはに匂ふさくらのゆかしかりけり
ヽヽヽ　　　　神戸　足立あさ子

ひがし山花より花にうかれ來てみやこにあまるはなを見しかな
○　　　　名古屋　木下鶴子

白くもの八重たつ山に來てみれはきゝしにまさるやまざくら花
ヽヽヽ　　　　神奈川　中島茂子

いり合のかれのれかすむ山てらの花はいましもちるやちらすや
○　　　　神奈川　岩谷濃子

山たかみかすみのをちにさくはなは心のゆきて折るへかりける
○　　　　奈良　菅とし子

いづこよりまづ眺めんとまよひけり花にうもるゝみよしのゝ山
ヽヽヽ　　　　東京　青木たま子

うら／＼と霞のきぬにうつくしきさくらかされのみよしのゝ山
ヽヽヽ　　　　長野　北澤千枝子

大みよの春のひかりにさきにほふたかれの花をあふぐかしこさ
ヽヽ　　　　宮城　大槻慶子

世のはるに遠きみやまのさくら花あたなる色をたれに見すらん
ヽヽヽ　　　　埼玉　横田秋子

春なれやいつこの山も花咲きて身ふたつほしきときは來にけり
ヽヽヽ　　　　福井　牧かれ子

よし野山みねもふもともおしなへてにほふ櫻のはなのろいかな
○　　　　福井　岩橋花子

眞柴かる里のをとめがゆきかへりながめてすぐるみやまぢの花
○　　　　靜岡　内山たけ子

やまはすみ谷の小かはのせゝらぎや神の御やしろ花ちりかゝる

和歌兼題

落花

天

東京 土田壽恵子

花ふゝき袖につむともはらはじな
春をわかれの形見と
おもへば

地

和歌山 植木撫子

吹く風に散りゆく庭の
さくら花
こゝろそらなる今日
にもある哉

人

東京 益子逸子

あゆぐくむさでにかゝ
れる白波は
此みなかみのさくらなるらむ



選外秀逸

◎

下野 井上向子

岸のへの舟に灯ともすおほろよや
みつうみ白くさくらちるなり

○○

神奈川 中島茂子

のるこまもあがきをやめて櫻ばな、ちりしく
道をふみぞわづらふ

○○

東京 白井岑子

かすみたつ野邊の細道
今朝くれば、蝶とまが
ひてちるさくらかな

○○

東京 碓井のぶ子

春風のふきくるまゝに
ちれやちれ
ちるこそ花のながめなりけれ

○○　岩代　岸野常子

けさみれば垣根のさくらちりにけり
よのまや春の別れなりけむ

○○　岩代　齋藤巴子

幔幕の段々染に風見えて
鼓うつ子に花ちりかゝる

ヽヽ○　甲府　名取正代子
日ごと〳〵雪とまがひしさくら花いまはた雪と散らむとすらむ

ヽ○　山梨　風間千代子
今朝見れは嶺のしら雪うすれけりよへのあらしに花やちりけん

○　松山　上原のふ子
見る人の夢のはるをもふく風のうき世にはしてちるさくらかな

○　東京　林艶子
むれたちし小蝶かと思ふ吹く風にひと際しけく散れるさくらは

ヽ○　大阪　木村春江子
移り香を袖に止めんとたちよれは右にひだりにちるさくらかな

ヽヽ　山口　村上操子
はかなさはわか世の春とさくら花ちるを風にはまかせそめけむ

ヽヽ　松山　田村多豆子
はかなさは物みなかくと世の中をちる花にしもよそへてそ見る

ヽ○　越後　山田涙子
月おほろ木陰に笛のおときえてふりのたもとにはなのこほるゝ

○　北洲道　牧君子
行く水にさくら散りぬとたよわせむ花まつ里のともがきのもと

○　日向　岸上はる子
つはものゝみ墓のほとりはら〳〵と心ありけにさくらちるなり

ヽヽヽ　陸前　前田河千年子
きのふまて色めづらしく見し花をあしたをまたてちりにける哉

ヽヽ　神戸　足立ゐい子
雪ならばをしまぬ物をさくら花散り行くけふをいかにせましや

○　日向　江夏りか子
おくやまに心ゆかしき山さくら見るひともなくちるぞかなしき

ヽヽヽ　熊本　吉住艶子
ちる花ををしむこゝろはつゝまれしさかりときゝてとひし秋に

ヽヽ○　神戸　足立あさ子
よし野山散る花までは見せぬこそおぼろ月夜のなさけなるらめ

ヽヽヽ　神奈川　鈴木まつ子
をしく思ふ人もすくなき山里のはなはほろ〳〵ちりて來にけり

ヽ○　岩代　吉田ちさと子
おしめなほ春はながくもあらし山名にさそはれて花のちり行く

ヽヽヽ　濟國　富成梓子
ちる花のあたりはきよし朝きよめすむひとがらのおもほゆる哉

ヽヽヽ　東京　林環子
旅出して歸れは口惜しおほかたの庭のさくらは散り果てにけり

○　佐賀　藤松りか子
春のよのつきもおほろの庭のもにつもりて匂ふはなのしらゆき

ヽヽヽ　神戸　今西操子
神代より止めと止まらぬ花なからこゝろして吹け須磨の浦かせ

ヽヽ○　千葉　瀧口まつ子
さくら花ちりてながるゝさと川のつゝみにまよふ蝶のひとむれ

○　伊豫　西田操子
うかれ〳〵こゝよかしことみし花もくれゆく春とをしむ今日哉

○　埼玉　横田すま子

のろ駒もふみわけかたく成にけりよし野の花のゆきそつもりて
〇　常陸　岡田萬子
みな人にをしまれてこそいさきよくちる甲斐はあれ山さくら花
ゝゝゝ　讃岐　安藤光代子
はてもなく浮かるゝひとの花衣にさくら花ちるはるのゆふくれ
ゝ〇　佐賀　尾方八重子
春風のふくとしもなき庭の面にまなくちりしくやまさくらはな
ゝ〇　東京　青木たま子
うき世にはとゝめおかしと春風のこゝろつよくも花にふくかな
〇　東京　土田八重子
惜しと思ふこゝろ知りてや水の面にふたゝひ見する花さかり哉
〇　東京　高橋珍子
ほろ／＼となくやきゝすの聲すなり花のふゝきにたとる山みち
ゝゝゝ　佐賀　尾方綾子
くもりなき池のかゝみにかげとめてちるもはかなし山さくら花
ゝゝゝ　名古屋　木下鶴子
ちからなく風にふかれてわか袖にとまる小蝶はさくらなりけり
〇　東京　河合清子
をしむらん人なき宿と花さくらちらしてわたるにはのはるかぜ
ゝゝゝ　神奈川　岩谷淺子
こゝの寺かしこのやしろにほはせて雲とちりゆく山さくらかな
ゝゝ〇　奈良　菅とし子
とふ蝶とともにまひつゝあさ風に庭おもしろくちるさくらかな
〇　相摸　大谷津みれ子
小つゝみのおとしきりなる高どのに花のふゝきの春のゆふぐれ
ゝゝゝ　埼玉　横田秋子
春かせに御室さか野の小松はらみる／＼つもるはなのしらゆき
ゝゝゝ　播磨　横田春枝子
春かせにこてふのゆめとちる花のにほひこもりぬ草のはすゑに

ゝゝゝ　大和　栗山俊子
此ゆふへにはのあらしの音たかしあたらさかりの花はちるらん
〇　駿河　森つな子
ちれはこそめてたきものを我はなとふる春雨のこゝろやましき
〇　肥後　友永常子
ふるまゝにちりくる花は春さめの雲になりゆくこゝちこそすれ
ゝゝゝ　東京　松本まつ子
雨はれし夜半のあらしやわたりけむ花のゆきふむをかこえの道
ゝゝゝ　埼玉　横田やな子
吉野川くたすふな人こゝろせよたか根のゆきのさくらなりけり
ゝゝ　北海道　佐藤央子
あかさりし色かをあたにちる花のこすゑにゝほふはるのよの月
〇　越後　松永しげ子
舞ふ蝶の羽風にいたく散る花のかをりやそてにとゝめおかまし
〇　東京　吉岡鶴子
ありてよの業はうしとや山さくらきそふあらしに散てゆくらむ
ゝゝ　大和　栗山たか子
春雨に月はくもりてさくらはなちりゆくさまもみわかさりけり
ゝゝゝ　秋田　細矢はる子
池の面にちりしく花のうきくもはうつれる月のかげかすむらむ
ゝ〇　東京　戸塚とも子
時ならぬ雪もやふるとうちあふくそてにちりくる山さくらはな
〇　陸前　大槻初音子
雲となりゆきとまかひてちる花のあはれを風のさそひゆくらん
〇　薩摩　松原岑子
春のよの夢かとはかりさくら花咲く と見しまに散るそはかなき
ゝゝゝ　土佐　秋月廣江子
のそみおほき春のよろこひ乗せて行く花の 行衛のさても悲しき
ゝゝゝ　東京　牧淑子

ふきおろすあらしの山の春風にちり行く花のをしくもあるかな
ヽヽヽ
陸前　末永喜惠子

ちりかゝるそてなつかしく匂ふかなはなの雪ふむみよしのゝ山
○
東京　高野元子

春風のみにさむからて雪そふるうへのゝなかのはなのしたみち
ヽヽヽ
埼玉　安部とみ子

敷しまの大和こゝろとうたはれしさくら花こそちりそめにけれ
ヽヽヽ
東京　原三幸子

ものゝふのこゝろとや見ん吹風に散ををしまぬやまさくらかな
○
東京　島村作子

乙女子のかさしにとてかくろ髮にみたれてかゝる花のしらゆき
○
京都　松村よれ子

わかまとのつくえの上に散る花のこゝろを問はゝいかに答へむ
ヽヽヽ
越後　大石ます子

ひとしきり軒のさくらのふゝきしてとほそは花になりにける哉
ヽヽ
岩代　菅野和子

大そらはかすみにくもり風なくてしのつくごとく花のちるかな
○
新潟　岩本芳子

何ことものとけきはるにあひながらなと花のみや散いそくらむ
○
長野　木下小苗子

ちりつもる花に行手はうつもれてたゝづむ袖にまた散りかゝる
ヽヽ
下總　高木あほう子

春さめのあとはあらしの山さくら花もにほひもとまらさりけり
ヽヽヽ
常陸　北垣くは子

みよしのゝふもとの里はやま風のさそふさくらを雪と見るらむ
○
常陸　堀光子

さくら花おとなき風に散るさまはかほれる雪のふるかとそ見る
○
宮城　大槻慶子

樵人もふみまよふらんたに川のはしにかゝれるはなのしらなみ
ヽヽヽ
信濃　足立てる子

さら〳〵とあらしのおとに庭見れは落花舞ふなり蝶のことくに
ヽヽヽ
神戸　高橋町子

さと川に花ひらうかひながるなりみやまのさくら今やちるらし
ヽヽヽ
和歌山　村田久子

去年まではめてしあるしのありけるを思出てよく散るさくら花

短文

天賞

春雨

東京　神田けい子

軒端より霞み渡りて降るとも見えねは、胡蝶の翼にも障らざるべし。かたへの小川を裁さて下す筏士にそれと知られて、汀の柳緑いよ〳〵濃やかに椿の花のほと水に落ちて波輪を畫けは、折しも彼方の岸行く蛇目傘に落花點々たり。

地賞

博覽會所感

大阪　小野はつ枝子

東臺の春色漸く綻びそめんとするの時、全國の精を拔き華を蒐めたる、博覽會は開かれつ、山あり

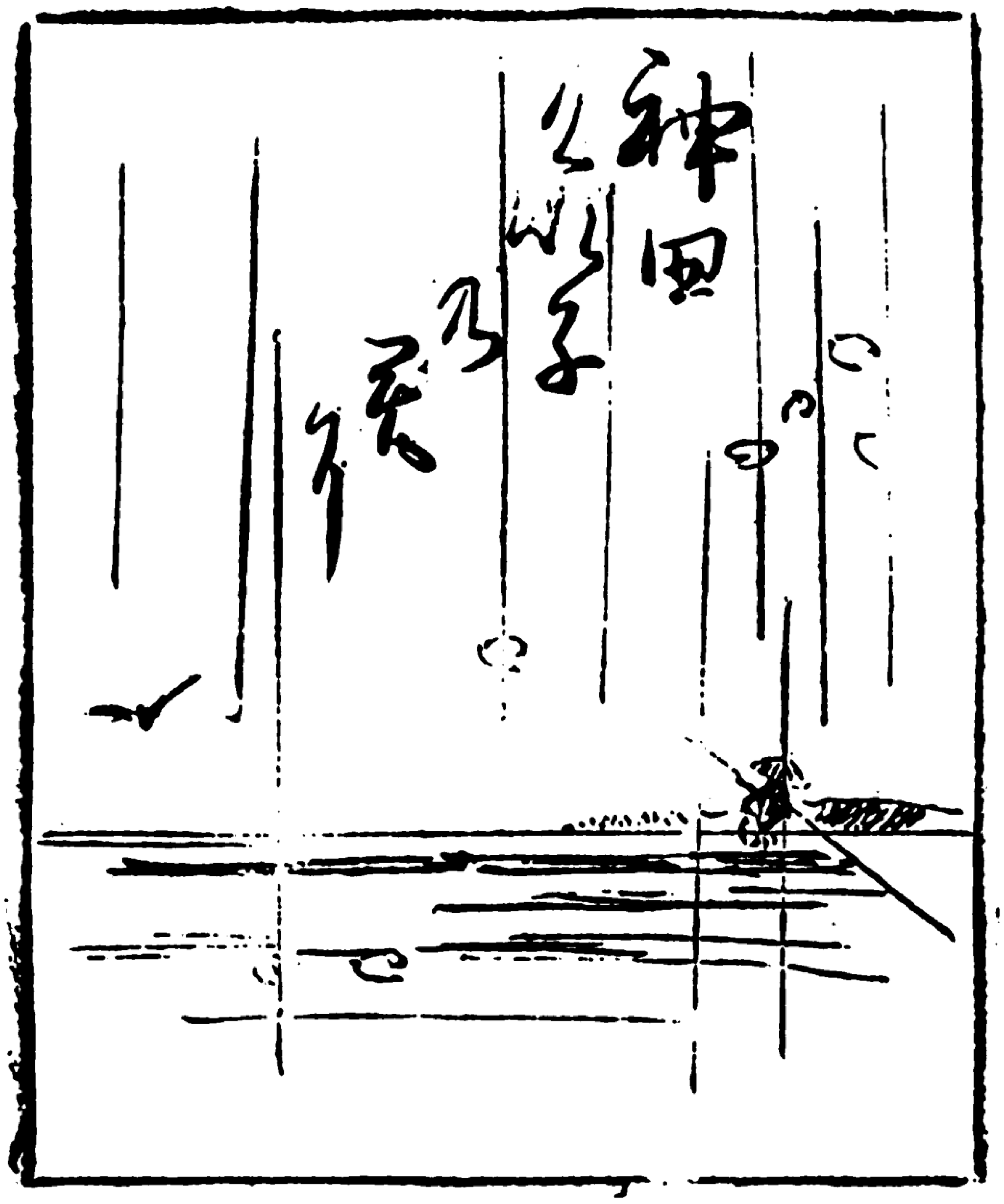
川あり池あり噴水ありて長蛇の如き橋幾條之れを周りて、諸々の人工を加へたる幾多の大厦高樓は巍然として、輪奐の美を競ひつ、都下幽邃閑雅の地と稱せられし公園も文明の力には敵し難く、あはれ其の舊體は刻々に失はれて、進歩と活動の氣全天地に充ち滿てるを、別けて今年は咲く櫻花の一ひらも、何となう事々しう覺えつ。

人　賞

漁　火

肥後　友永常子

空は一面に黑雲掩ひ。磯邊の松に風さわがしく波の音たかき夜半。沖もいかばり荒るゝか。二つ三つ見えかくれするいさり火のかげ。あゝ思へばあやふきや。もし其舟を待妻あらば。此一夜枕にもつき得ず芦の屋を出でゝ沖の方やまもりぬべし。げに海士の小舟こそからき世渡る業なりけれ。



◎花　塚

越後　松永しげ子

昨日まで小をどりして歌ひ居し鶯、はかなくも今朝息絶えけるを、あはれよとかきいたく妹、梅の花堆く積りし庭に、こを埋めたる花塚・殘の花はこぼれて塚にふり積むを胡蝶一つ花塚を守るけはひに。

○○炭　燒

下野　井上尚子

楢、樫、楢釜に入れて火を點ずるは父、谷間に篠切り俵をおふは母、馬につみて町に行くは弟清淵

一升、菓子一袋、花かざし二本、鹽一鮭尾求めて猶餘あり、上を望まぬ吾等の一生、歸れば母は厨に夕餉の仕度、父は小川に足洗ひ、炭燒く煙は細く一すじ黒髪のふもとに立なびく、

〇〇田圃道　播磨　横田春枝子

友を訪ふべく、蓮花蒲英公咲きみち、菜の花つゝく、田圃道をたどれば、緑の色もゆる麥畠に、頰被りの人鍬を杖にして立ち、衾の如き草原には、牛食にあきて眠り、水淺黄に晴れたる空より、雲雀は聲を潜めて落ちぬ、草笛吹きて歸る童に、桃咲きて塀高き家はと尋へば、指して、ほゝ笑みぬ

、、〇月島の夕ぐれ　東京　高橋たか子

見渡せば、遙か水、空と相連なるあたり、夕霧は悠々たる房總の山々を裹みて、夕暉は靜かに沈むなり、漁舟三つ四つ節面白き欵乃歌ひて、佃の島陰に消えて行く、打寄する一波一波は、自然の神の囁くごと、身は此大なる天地間に在りて、草間にすだく虫の如、いと小さく果敢なきを覺えつ、

、、〇逍遙　和歌山　島田千代子

春の日のいと麗なるに、遊び心のいできにければ枝折戸の外にと、そゞろあるきせしに、若草はみどり深く萌え、氣も心もいとゞひろやかに、そよ吹く風に袖うち拂はれ、あたりの梅のひら〳〵と散りくるもうれしく、もつるゝ胸の有耶無耶も晴れにき、

、、〇睦月　松山　田村多豆子

新らしき暦も、古きならはしも、睦月ばかりをかしき月はあらじ、一二三日は言ふも更なり、五日七日は新年宴會とか、七くさとか、昔と今の儀式をおこなへるもをかし、又此里にては、大かた陰暦をものする慣ひなれば、月の始には柳社詣り、椿まゐり、又後れては谷上の觀音、履脱天神など社頭寺域、いはゆる錐を立る地もなく、人々の集へる樣も又をかし、實に睦月ばかりをかしき月はあらしかし、

、〇七年前　東京　土田八重子

磯菜つむで居た從妹の玉ちやん、引く浪に足を掬はれ、吁つと云ふ間に、巖を離れぬ、私は急いで帶をといて投げた、玉ちやんはヒシと其の端を、せつなに第二の浪は玉ちやんの姿を消して、帶

は空しく手に殘つた私は只泣きに泣いたのである…………、昨日圖許なる玉ちやんの家より七回忌との報を得た私の心、

〇母と子　　岩代　菅野和子

幼子が覺束なき歩みに蹣跚ゆけば、後より眞帶携へて、成長を祈りつゝ、喜び追ふは親の心なり。今しも四歲ばかりなるが、思案に俛首て急ぐ母の後を喘ぐあり。朝まだきなるに草鞋穿てり。家をいでたるにや、將家をさしてゆくにや」

〇靈光（越後柿崎に於ける親鸞上人謫居中の訓話）　　越後　大石ます子

屢消し、只見る美しい坊樣、金襴の袈裟、緋の衣、裳に氷う眞白き下着、さら〳〵と珠數がいくり、小聲ながらの經一卷、呀！呀!!はらりと落ちた肉付の面、アツと驚く嫁、驚く姑、鬼の眼に涙はらく〳〵、

「よいゝゝ嫁女、堪忍してくれやれつ。」

〇鐘の音　　岩代　岸野常子

靜かな夕暮の大氣を振はして、遠く、遠く、此世の外に消え行く鐘の音！

あゝわたしは、慕はしい姉さんが冥路の旅にゆかれてから、汗がまことの味を知つた。

〇健ちやん　　伊豫　芝さだ子

今年三ツの健ちやんは、御座敷の暖かい處に御母さんと、横になつて乳を呑んで居りましたが、其まゝ寢入つて仕舞ました。白の胸あてをして揃へて付た樣な手足をなげ出して。と其無心な可愛いらじい顏を蹙めて、泣き出さうとしたが、暫くすると此度は笑をうかべました此時に御母さんの顏にも美しい笑が浮びました。

〇春の遊び　　和歌山　植木操子

今日ひとひ、おもふどち、袖をつられて、或る山里に花を尋ねぬ、櫻は、今盛にて、老も若きも花の下に群り、いと興ありげなり、我等は人げうとき小山に登り、こは如何に、そはよし、など語り合ひ、春の日も短き思ひのして、心を殘して、歸らんとするに、はや遠山は、暮色を帶びぬ、

〇禮　　越後　山田濱子

抑々禮は人間すべての行の本なり、禮は心の儀を外にあらはすものなれば、例ひ禽獸器具の取扱に至るまで、心を用ひ、何事も靜肅にすべし、若萬物の靈たる人にして、禮なければ禽獸と異なる事なし、國に文明野蠻の別あるも、又禮の存否による、若禮なければ、君臣父子夫婦等の關係はなかるべし、斯の如き國は、如何に富み如何に強く、又如何に怜悧なるとも、禮を知らざるは沐猴の頭に冠をつけたるが如しと、各人も之を言ひたり、それ綺羅を身に飾るも、禮を知らざる者は輕しまれ、襤褸を纏ふも禮正しきは敬まはる、されば人たる者は禮を深く重ぜざるべからず、

〇雨後の郊外　　東京　平塚白百合子

雨がすツかり上つて、天地は蘇つたやうな清々しい朝、後園にゆくと何の影もない、きら〳〵光る雫は、葩から搬め、搬めから葉、葉から楕へ傳つて、スルリと若草に消えた。東を流る旭は金色をゆらめかし、夢は青々とやわらかである、こんな朝育つのであらう、

新體詩

地賞

〇行く春　　越後　丸山孝子

其の暖き春風の、
榮華の夢に遊びしを、
すみれの床にねむりつゝ、
胡蝶やあはれ今いづこ

其長閑なる春風の、送る梅が香さえ〴〵と、
平和唱ひし鶯の、今は老いたりその聲も
其清らけき春風の、櫻花吹く岡の上に
袖ふりかへして女子も、世の荒波にやがて今
行き暮しけり今日も亦 かをり滿たる春の野に
鐘のひゞきは治まりて 火影三ッ四ッ見えそめぬ
今はとばかりつれ立て 煙る小川にうちそひつ
かへり行手の花の上に いつしか出てし朧月

○若菜少　　肥後　友永常子

春立しより今日いくか 野邊またさむき朝風に
袂ふかせて來て見れば また白雪も消えやらで
もゆる若菜は中々に いまた少しさりながら
家に待ますたらちねに 見せまつらむと二つ三つ
辛くもから菜は摘にけり

人賞

ゝゝ里の小川　　播磨　横田春枝子

小蝶の舞にこゝろ浮き 病わすれてまよひ出ぬ
一とせぶりの春のかぜ 吹きこむ袂かきあはせ
綠のくさで緣とりし 土橋の上より川のなか
のぞきて寫すわが姿 見れば見る程かはりつる
やつれし景の悲しうて 落すなみだの底にきえ
なげしリボンの紫も あとに色なく流れゆく
里の小川のみづの面に 日の輪寫りて魚とびぬ
淋しき春よ友もなく 昔をしのぶこのあたり

ゝゝ○落花　　常陸　岡田萬子

隅田河原の花吹雪 ちりて流るゝ水の上
春のとまりや何處そと 問へと答へぬ都鳥
都の人の夢のせて 波のまに〳〵浮きて遊べる

ゝゝ○山の乙女　　下野　井上尙子

俵のすみはくろけれと 妾の色は眞白よ
炭と同じはかみの毛よ みちの櫻をちよいと折つて
谷の淸みづに水かゞみ さした姿にほゝ笑まひ。
炭はかさ〳〵音すれど 妾の聲はよいこゑよ
駒のすゞにも劣らない みづの流に節合せ
とりと合せて歌ふのを しるは妾と山彦よ。

○○朧月　　木村春江子

四方の野山の雪とけて 暖く吹く春の風
花を尋ねて舞ふ蝶の 輕き羽袖に誘はれつ

「今ぞさかりの雲珠櫻。
おきても寐ても待れつる。
「雪のふる枝の枯てだに。
志賀の都はあれにしを。

、、○

、、○野尻湖

そのかみ湖の古海や
稲の緑の波わけて
芙蓉の湖は足もとに
清き微風にみだれ髪
舟にあつさを忘れつゝ
島は枝垂るゝ濃緑の
紅鳥居小ちさみや
しばしそむ神の額
聖きを冒すものもなし
姿ぞまろき斑尾の
遲きを喞つ夕ぐれや
会荒猛夫の沈みてし
雄波雌波の睦みごと
汀の人を啓示とか
鮭たゝく水音に
甕邊に生ひしものならば
山の挾間に育ちてし
嘸や神湖におどろかむ
山はうねりて嶽高う
北にひらくる一條の
洋々として今もなほ

、、○

神戸　足立わさ子

駕きし馬の鞍馬山。
使は來たり花の文」
花咲く春にあふ江なる。
昔しのぶか山さくら」

越後　大石ます子

庭を耕しつくりたる
小高き丘の上を行けば
漫々藍を湛へたり
髪をふかせて木の葉舟
吾れは行くなり辨天の島
天をさゝぐる杉の森
ひめの御姿胸に描き
沈默破らむ影もなく
實に靜寂の仙境かな
倒影をし上りゆく舟の
史に見る昔忠と義に
落日紅き縦かさき
絶えぬ小琴の音とひゞき
世にうらふれの身は獨り
昔しのびて氣もすゞろ…
たゞさゝやかの祠と見め
人の心のそこ忍へ
周圍三里餘千尋の…
鳳梨柴胡の信濃尻や
道……國道の東に
芙蓉の水は湛へたり。

神戸　足立ゑい子

「花は霞に包まれて
常にはうしと思ひつる
「雲に見なせし山櫻
ふり行く春と諸共に

、○春の夜

霞に眠る春の夜の
雲かとばかり咲き匂ふ
月の光の照りそひて
あはれ靜けき此夜中よ
あゝ此景色見るにつけ
共に手に手をとりかはし
こよひの如き月夜にて
花の木蔭に座をしめて
そよふく風も心地よき
月花共に輝けど
千とせまつとも歸りこず
何處にありて此夜中を
折しも聞ゆるつま琴の
千鳥の曲のなつかしく
かよふ音さへもしめやかに
更るもしらずたゝずめば
月はいたくもかたむきぬ

、○散る花

何處の里に咲出でし
波のまに〳〵流れ行く
流れよどみし其うちは
波うちさわぐ岩の瀬に
消えなむ花を思ひては
色さへわかぬあけぼのや
嵐吹せよ山の松
はや散り初る花の雲
こゝろの老を覺えけり」

越後　山田浪了

月にうかれてさまよへば
櫻は淸き其上に
いと美しくかゞやきぬ
あはれゆかしき此景色
過にし春に亡き友と
げにも樂しく語りしは
いとも靜けき夜中なりき
此世樂しう語りしも
此宵の空に似たるかな
あゝはかなしや我友は
あゝなつかしや逝し友
如何にや見つゝ在すらむ
たがてすさびかしらべさへ
霞をもれてきれ〳〵に
いとゞ昔の偲ばれて
み空に高く雁なきて

小樽　牧　君子

花のちりけむ此水の
花の行へぞあはれなる
まだ事なきも末つひに
打ちくだかれてはかなくも
花ばかりかは人の身も

うきふし繁きちりの世の　無情の風の吹きすさぶ
浮きにもまれて此花の　散り行それに似たる哉
ちるを習ひの花なれど　ちりて憂ひのいやまさる
末を思へばいと悲し　あゝ人の身もかくの如
この花のごと散りもせめ　瀬々にくたくる果敢さよ

、〇眠りしみどり兒　千葉　瀧口まつ子

まとふ衣はうすくとも　あつき情を身に浴ひて
罪なくれふろみとり兒の　心は清し神の如
折々もらすゑまひには　如何なる夢路たどるらん

、〇渡守　土佐　秋月廣江子

あゝ青春の花に醉ひ　紅の脣に狂ひたる
前半生を夢と見て　一葉の舟に身を委て
渡しのもりの樂しさよ
彼が歴史を流したる　川は清くも流れたり
彼が慰安をみとめたる　星は夜毎にきらめきて
聖なる天地を照す也
あはれ人の子煩悶の　むくろ抱きてけがれたる
罪の浮世に小地位を　求めて迷ふ事なかれ
渡しの守はほゝゑまむ

〇折にふれて　滋賀　坂里輪子

花の千種に移る世の　ふりにし宮の跡とへば
かれぬ小柴の露とめて　雲井の月こそ宿りけれ
しばしと宿る[illegible]　露の光も身にしむや
月影淡きこの夜に　一聲高くほとゝぎす
初音を殘して過にけり　あはれやいかに深からむ

〇雲雀　越後　松永しげ子

すみれ匂へる花床の　誘ふ胡蝶に夢さめて
羽風花の香たつあした　若草のべの甘き露
なめて打ち振る開の羽根　歌おもしろく霞立つ
雲井はるかのあけ雲雀　心にかゝる雲もなし
光うらゝか樂しみの　つきぬ思ひにおどるらむ

〇蝶　大和　栗山たか子

一日のどかに遊ばんと　すみれつむ子のふり袖に
めづるゝ蝶は道しるべ　しつゝ行らんあとやさき

、、、春の海　東京　小山芳子

霞たちかへる海原や　朝日輝く波の上
咲くや黄金の花ちりて　ゆたけき御代の影しるく
ほのかにかすむ眞帆片帆　舵艫の音を殘しつゝ
沖の小島に消えてゆく　かくと見る間に高潮も
ひきて清けきうらづたひ　岸邊の貝を拾はんと
乙女の群も遊ぶなり　あゝ樂しきや春の海
あゝのどけきや君が御代

、、、朝日出　日向　岸上はる子

東天今しあからみて　ぱつと破れし雲間より
現れいでぬ紅の玉　四方の雲霧はれ渡り
鳥の聲さへ勇ましく　太平の幕上おへど
暗々の裏に競爭の　いとゞはげしき世の波に
もまれむと人ほことりぬ

和歌兼題
- 五月　更衣　小野小町
- 六月　梅雨　撲螢
- 七月　池蓮　納涼

短歌

地賞

山家霞　千葉　瀧口まつ子

行すぎし少女のかけもおぼろなり
かすみにくるゝ小山田のさと

人賞

谷花　神奈川　鈴木まつ子

ふく風もさわらぬさまに谷かげの
花のさかりのしづけかりけり

國光社發行の家庭の鏡をよみて　肥後　友永常子

顔かたちうつす鏡はもたすとも
てのひとまきは見るべかりけり

○春風　肥後　友永常子

菜の花の匂ひさそひてとふ蝶の羽そでもかろくはるかぜぞふく

○同　信濃　井口きみ子

梅が香もうぐひすの音も吹きおくる風こそ春のたよりなりけれ

○春風　愛媛　井上種子

しつかなる庭の梅がえふきそめて匂ふもゆかし今朝のはるかぜ

○關路春月　常陸　岡田萬子

あふ坂の關のすぎ村越えかれてはなにいさよふはるの夜のつき

○歸雁　長野　今村章子

飛ひかよふつばさに花の香をそめて常世にいそぐかりがねの聲

○海邊歸雁　宇都宮　加藤菊子

はてしれぬ沖に消えゆくかりがねのこよひの宿は何れなるらむ

○夕ひばり　岐阜　安藤光代子

のとかなる心のはてやながるらむ暮るゝ麥生にひばりなくなり

○春雨　信濃　井口きみ子

海士が家の軒端のやなぎもえそめてけふるゆふへを春雨のふる

○同　群馬　吉田靜子

そよ〳〵と小簾うちゆらく竹椽にしめやかにふる春のあめかな

○同　東京　小山芳子

はな瓶の紅梅かをる小座しきに繪の具とく夜をはるさめの降る

○同　山梨　標武子

みぢか夜のしばしが夢をさまさじと音しめやかに春さめのふる

○野雉　播磨　横田春枝子

ゆきくれて野邊の芝生にたゝづめばおもひ淋しく雉子鳴くなり

○春烟　下野　井上倚子

何となう春はのとけし立のぼるけむりのすゑもうちかすみつゝ

○櫻花　長野　北澤千枝子

梢は高くこゝろは花の山さくらやまとなのこにたくへてぞみる

○瀧落花　東京　島村作子

山ひめのくりたす瀧のしらいとにもつるゝてふや花のちるなり

○殘花　陸前　大槻初音子

○遲櫻　宮城　大槻慶子

のこるともしらぬ深山の春風になびかぬくもやはなのひとむら

とふ人もあらぬみ山の遲さくらはなもこゝろな咲きのこしけん
ゝゝ○暮春川　兵庫　田淵ふじ子
おほ井川くだるいかだの花みれば春をのせても行くこゝちして
ゝゝ月にむかひて　日向　岸上はる子
たとへ身は物うる人とならむともこゝろはきよしかの月のごと
ゝゝゝ濱邊雪　三重　米奥とめ子
ふる雪に礒のまつばら埋もれてよるへをなみのあま小ふねかな
○寒椿　上野　綾子
ゆきにうへて雀さゞめく藪かげに紅きつばきのひそやかに笑む
○若水　長野　北澤千枝子
五十鈴川清きながれのわか水をくみてさゝげんとしのはじめに
○鶯　神戸　足立ゑい子
あを柳の糸により來て永き日をくりかへしつゝうぐひすの鳴く
○名所の鶯　常陸　堀　光子
なにはかた浪しづかなる春の日に苫屋のうめにうぐひすの鳴く
ゝゝゝ社頭梅　埼玉　横田秋子
ぬさとのゝ梅はさかりになりにけり朝まゐりするうぐひすの聲
○春雪　薩摩　松原みれ子
うぐひすのぬふてふ梅の花がさに降りかゝりけりはるのあわ雪
ゝゝゝ早春の月　北海道　牧　君子
まだあさき春をまちえて咲く梅をおほろにてらす春の夜のつき
○柳間月　東京　神田けい子
いつよりかかゝりそめけむ青柳のいとよりほそき三日月のかげ
○若草　相模　大谷津みれ子
やはらかき小川の水のさゝやきにゆめやさめにしのべの若くさ
ゝ○折にふれて　新潟　岩本よし子
此頃の夜寒のかぜを一人うけてやらしとぞ思ふ父母のあたりに
同　滋賀　坂里輪子

春わかく絲もゝ花さくひとつ家にあはれ詩よむをと女ゆかしも
○同　神戸　足立あさて
世のうさは夢にだも見ず假寐するおほろ月夜のうめのしたいほ
○同　東京　平塚いと子
まふてふの袖よりふるゝものもなしひと里とほきみやまちの花
○同　岩代　齋藤巴子
くれなゐの山門かけてほの〳〵とかすめこめけりふもと七むら
○同　大和　栗山たか子
あはゆきはふると見しまにきゆれどもなほはださむき二月の空
ゝゝゝ同　東京　平塚いと子
さくらちるはなのおばしま風もなくまたゝき遠きともし火の影
ゝゝゝ同　土佐　秋月廣江子
野に生ひし我や名もなき草なるにたぞやみやこの花うらやみし
ゝゝ○松永しげ子の君へ　越後　大石ます子
み顔知らでいとなつかしやふるさとの我園うちにすまふ君はも
ゝゝゝ師の恩　日向　江夏枝子
露ふかきめぐみを今にしみ〳〵と思ふたびごとに袖はぬれつゝ
ゝ○人心　神戸　今西操子
賴まれぬものと知りつゝ美はしきこと葉の花にまよひぬるかな
ゝ○夜學　岩代　岸野常子
おこたらぬまなびの窓のともし火はひとに光をそふるなりけり
ゝゝ○雨夜　東京　土田八重子
聞き方見かへりつゝも膝すゝむはるのあま夜のものかたりする
○雪埋山　埼玉　横田政子
みわたしの秩父さかみれあさ間山雪のとはりの立てぬきにして
○　マニラ　竹下とみ子
衣ふりて立ちまふ人の身をかろみ胡蝶飛ひかふこゝちこそすれ
ゝ○天　松山　田村たづ子
しら雲のむかふす見ればかぎりなき天つ空にもはてはありけり

○友なしのびて　大阪　木村春江子
さめてなほなつかしきかなうたゝねの夢路に通ふ花のおもかげ

○祝卒業　岩代　菅野和子
師の君のめぐみの露をふくみつゝめでしなでしこ花かくはしき

、、、柿本人丸　埼玉　横田やな子
千代かけてなほさやかなり石見野や高角やまのあきの夜のつき

俳句

天賞

春雨　東京　土岐ゆき子
春雨や歳事記なかは讀了へぬ

地賞

同　滋賀　坂里輪子
梅散るや伽藍静かに春のあめ

人賞

櫻　横須賀　高橋つね子
酒入れぬ寺にはをしき櫻かな

春四詠　東京　土田春惠子

、、○花ひらふ子の背に又も椿かな
○つばきちる音も耳だつ春のあめ
、○草餅や乳母の來たのを知られけり
○たくましき幹に似けなき梅の花

春五句　東京　中川ゑい子
○賣れのこる雛に春の日ざしかな
、○永き日の御札をひさぐ社務所哉
○流れ去る小さき色紙やはるの川
、、○紅皿をおとせし春のながれかな
○忠度は近江に入りぬはつさくら

、、、蝶舞ふや野川にうつる花の影　常陸　岡田風子
、、花實のぬれて來にけり春の雨
○阿房宮流す油やはるの水
、、、花咲くや繪日傘霞む春のみち
○木に懸る繪凧舞ふなり春の風
、、、煙突のけむりもかすむ都かな
、、、朧夜にさても床しや琴の主　千葉　瀧口まつ子
、、野の梅や往來の人のするが儘
○梅めでゝ歸る野路や月明り
、、、松かけに一本しろし梅のはな
、、、梅一枝領主の君にさゝけゝり
、、、日の本の曠や畝傍の山さくら　神戸　足立ゑい子
、、、久振りあけぼの冴えて散る櫻

ゝゝゝ手の届く枝は花なき野梅かな
ゝゝゝ梅活けて一間ははるの心かな
ゝゝゝ桃咲くや伏見のさとへ小牛道
ゝゝゝ御堂を折よく拜む櫻かな
岩代　岸野常子

ゝゝゝ山と山一つに見えて朝霞
ゝゝゝ朝かすみよふ人見えぬ田圃道
播磨　横田春枝子

ゝゝゝ松を引く力くらへの子の日哉
ゝゝゝ山の雪またかくさぬや初霞
○春風やみちへにやすろゆき佛
肥後　友永常子

ゝゝゝ摘草やまとゐたのしき蝶の宿
ゝゝゝ桃咲くや姉かはかへの長き道
越後　松永しげ子

○花明り程の月夜や鳴くかはづ
ゝゝゝ歌種に取られなはなの筏さし
ゝゝゝ行く雁や六字無音の片たより
安房　渡邊しん子

○積りたる詩債つくのふ雪の朝
○梅ちりて安堵かほなる翁かな
○鶯の聲もゝつろゝ醉ひごゝち
松山　上原のふ子

ゞゝゝ春風の渡る廣野や草嫩き
ゝゝゝ春風の渡る御園や緋の袴
東京　白井たか子

ゝゝゝ鐘つけばあなや櫓の櫻散る
大阪　木村春江子

○春雨のそほふる夜半に雁の聲
ゝゝゝ病むまとに鶯春を告けにけり
京都　高丘はる子

○馬子歌の消ゆる邊は霞みけり
○瓜彈の主は誰そや梅尾敷
東京　岸　常子

ゝゝゝ圓窓にリボンの人や春のかせ
ゝゝゝ春風や稲荷詣ての若き人
○春風や赤前垂の溢茶店
ゝゝゝ嫁菜摘むすそ暖き春のかせ
東京　高江笑子

○餅あらふ手先に一ツ梅の花
群馬　吉田しつ子

ゝゝゝ戻る氣はいつか忘れて花に月
ゝゝゝ身に包む香りもゆかし梅の主
ゝゝゝゆく雁につれし鴎や引かへす
ゝゝゝみくほには雪を殘して笑ふ山
神戸　足立あさ子

ゝゝゝ丸髷に朋髮ゆく菜種かな
○たてかけし物干竿に燕かな
大和　榮山麻子

○神園に蝴蝶ひれもす舞踏かな
坂里輪子

ゝゝゝ春淺く野茶やの普請未た終す
○古わらじ下つたまゝや梅の花
新潟　岩本翠涙子

○菜の花のなかより起る唱歌哉
○長閑けさや煙草燻らす舟の人
○菜の花のなか走ゆくリボン哉
大和　榮山利子

○洲へ寄て汐まつ船や朧月
和歌山　島田千代子

○陽炎に橋揺らくかと思ひけり
ゞゝゝ雨晴れて遠田の蛙聞く夜哉
ゝゝゝ山吹や清水滴たる崖の上
ゝゝゝ白きまて落花たゞよふ潴かな
ゝゝゝ荒れ果てし藁屋の垣や落椿
東京　岩撫ゆき子

ゝゝゝ白梅の一二輪咲いゝ社頭かな
東京　野中緒子

○春雨や被衣を召たる二位の尼
○行く春や浮世小路の伊豫簾
ゝゝゝ蝶飛ふや乳母の預る振つゝみ
ゝゝゝ青柳や女駕行く向河岸
ゝゝゝ嫁入の荷物つゞきけり春の夕
東京　杉江光子

ゝゝゝ花分けて手向け參らす無緣塚
ゝゝゝ春雨や遠く聞ゆる瀛車のふえ
ゝゝゝ蛙なく聲もあはれに春の行く
東京　高丘治子

ゝゝゝ枯芝に處またらや春の雪
東京　土岐ゆき子

諸友

、、、春の野に絹ハンケチの主は誰
、、、陽炎や小舟にほせる赤襦袢
、、、菜の花や機織る家の筬聞ゆ
○鄙婆の噺や昔し桃の花
、、、山吹の露に紅とく遊女かな
、、、桃咲くや椽に媼の糸つなぎ

横須賀 渡邊雪子

○世を忍ぶ編笠重き花の雨
○春雨や隣は琴の大さらひ
、、、女文字の表札白き桃小路
、、、落ち来る振面白き雲雀哉
、、、花咲いて嫁の村賑めけり
、、、蝶と蜂とちらも花の主哉
、、、絵双紙の講釈聞くや春の雨

横須賀 仲野幸子

○行春や読み残したる須磨の巻
○薄命の美人に似たり春の雪
、、、大和路へ入れば梅月香かな
、、、霧霞花と見まがう田子の浦

横須賀 佐藤きみ子

○紅梅や由ある人に嫁ぐ宵
、、、小謡や朧月夜の小酒盛
、、、孫連れて彼岸詣りや還歩き
、、、春寒き観音堂やたんな寺
、、、桃咲くや女子はかりの下屋敷

横須賀 藤野松子

○乙姫の化粧の水や春の海
、、、姫君の大事さうなる雛哉

横須賀 吉田染子

○幽燈にまはゆき春の小袖哉
○櫓拍子に明くれは三保の霞哉
○梅の酔ひ其日楽しく暮にけり
○思ふ事歌にも成らぬ夜長かな
○講かゝる日を追ふて行時鳥哉

横須賀 大久保はな子

○此地面貸すてふ札にとんほ哉
○公達の桃に集ひて歌の会
○池端の三尺桃や八重に咲く
○花さいて蝶のおとろく日和哉
、、、桜探る芝生の里の野薔薇かな
、、、花さいて花香妙なる志賀の園
、、、貴人の舞ひの手振や花ころも

横須賀 松下千里子

○菜の花や宵月行く馬の鈴の音
○行く雲も思ひの種の春のくれ
、、、幾十年信濃に住みて蚕飼かな
、、、春雨や京に移りて降り暮るゝ

東京 本橋つや子

○花の精抜け出て白き胡蝶かな
、、、桃の月に破鏡を歎く女かな
、、、されはとて我に歌なし西行忌
、、、初孫は女なりけり桃の宿
、、、小夜衣打かへしたる余寒哉
、、、雉子なくやかち〳〵山の裏表

横須賀 高橋つれ子

、、、野遊びに廻り道する上戸哉
○野遊びや常より早き夕日かげ
○野遊びや一群になるお針連れ
、、、野遊びや土産は重の土筆
、、、野遊びや蝶に馴染て日の暮るゝ
○心よや廣野遊びの雲天井
、、、桃日和かすむ小村は三十戸
○野遊びや草の戸に立つ茶の烟
○長閑なり妹は今日も菫つみ
○あげ凧の飛で行きけり淡路島
○馬ひける里の驛路の長閑なり

丹波谷 貝子

新刊紹介

咒はれたる女　元祿姉さん著　博文館發行

元祿姉さんの名に隱れて社會の裏面觀察に妙を得たる松原岫雲氏の執筆せられたるものなるべく、元祿姉さんの名戯に人の注意を引くに、咒はれたる女、とたきつけられて、女たるもの如何に咒はれたかと見たき心を起すなるべし、まづ目次を見ても踏付けられたる女お轉婆をつくりし社會、美人の立塲と醜婦の立塲、侮辱されたる女等計十六件いよ〳〵見逃がすこと能はず、我心一つにて咒はれたる女と思ふ人も多かるべければ、かゝる人は是非一讀して、咒はれざる女となるべし、人は人を咒はず、我は我を咒ふなり、定價三十五錢

日露海戰記　海軍勳功表彰會編纂

東鄕大將、鮫島、上村、坂本、三中將の題辭に始まれる尨大なる日露海戰記にして、諸英雄の面影を偲ぶべく、先づこの海戰に殊勳を樹てたる將校の小照を列べ、地圖を示し、日記をつくり、本文に入りてその日記を細叙し、之を讀みもて行けば、宛も從軍して、敵艦に對戰する如き思ひをなし、骨動き、肉躍るの感あり、建部博士の皮肉なる叙に曰く、日露海戰記は、征戰戰役の首尾を通じて、尤も不道德的なる臺戰大捷の正史なり、之を傳誦する者、之を謳歌する者、亦幾分不道德の徒ならむか、然れども後世國を誤る者、必ず道德者流より出でむ、國家の休戚を先にし、一身の榮辱を後にす、是社稷の臣なり、日露海戰記や、善く社稷の臣を傳へ、亦能く社稷の臣を易む云々と、よろしく社稷の臣の一讀を經べきもの、正價金貳圓

女鑑投稿規定

和歌兼題二、兼題外和歌、新體詩、短文、俳句、小說、隨筆、日記、及家事に關すること何にても投稿を歡迎す、

投稿は每月十日着迄の分にて締切る、字體は成るべく鮮明に願ひたし、

賞品は天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢、特に透逸なる作品に對しては、それ以上五圓以下の賞金を呈すまた入選の作にて特に佳作と認むるものには繪畫を挿入し、錦上更に花を點すべし

◎從來の投書にて歌文の側に姓名を記入せざりしものにて、掲載するを得ざるもの少からず、以來封皮には兎に角に、原稿の側には一々姓名を記入せられたきものである、實を申せば、大に見るに足るべき投書の、止むを得ず机底に納めて居るのがあるので、

猶每々記載する如く投稿は成るべく半紙にせられたく、或は考へられた積りで、短冊の如き形をしたるものなどは、却つて取扱に困る、

新刊紹介

趣味	第二巻第三號	東京 彩雲社
新公論	第廿二年第三號	同 新公論社
女子文壇	第二巻第四號	同 女子文壇社
婦人世界	第二巻第三號	同 實業の日本社
日本婦人	第九年第三號	同 帝國婦人協會
女學世界	第七巻第四號	同 博文館
時好	第五巻第二號	同 三越呉服店
慶應義塾學報	第百十五號	同 慶應義塾
中央公論	第廿二年第三號	同 反省社
成功	第十一巻第二號	同 成功雜誌社
六合雜誌	第三百十五號	同 ゆにてりあん弘道會
週報	毎號	同 櫻楓會
なでしこ	第七巻第六號	同 大日本女學會
流行	第四巻第二號	同 白木屋
裏錦	第百七十三號	同 尚絅社
婦人と子供	第七巻第三號	同 フンーベル會
日本の家庭	第五巻第三號	同 同文館
愛國婦人	毎號	同 愛國婦人發行所
教育實驗界	毎號	同 育成會
東京經濟雜誌	毎號	同 同雜誌社
婦女新聞	毎號	同 婦女新聞社
體育	第百五十九號	同 體育會
女醫界	第十一號	同 東京女醫學校

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊	前金五拾七錢
六冊	前金壹圓拾錢
拾貳冊	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行		金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割増の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に参錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番番國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年三月廿八日印刷
明治四十年四月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社
右代表者 東京市京橋區築地二丁目二十番地 橋本忠次郎
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 河本龜之助

發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

國光社發行

共立女子職業學校編物主任敎授　金原繁尾子女史編

編物敎科書

全一册

近刊　正價及送料未定

同校造花主任敎授　金子支江女子史編

造花敎科書

全一册

近刊　正價及送料未定

前共立女子職業學校刺繡主任敎授
學習院女學部敎授　木邨仲子女史編

刺繡敎科書

全一册

近刊　正價未定

女子職業に關する問題は世間既に定評あり上に列記する編物、造花、刺繡の如きは女子職業中の最も適應なるものにして復た現在及び將來に於て最も必要多きものたるは論を待たず從來此等の技藝に關する書籍少なからずと雖も未だ敎科書として完全なるもなきは眞に遺憾なき能はず此に於て本社は前記專門敎授に完全なる敎科書の編纂を請ひ既に脫稿したれば不日之を世に公にせんとす乞ふ發刊の曉之を繙いて其の必須缺ぐべからざる敎科書たるの價値を知られよ

國光社發行

東京美術學校長 正木直彦先生序文
同　校敎授 島田佳矣
同校卒業生 野口駿尾 兩先生共著

女子技藝 編物模樣圖按

全五冊 石版極彩色 大和綴美本

正價　松の巻 金四拾錢　櫻の巻 藤巻 各金五拾錢
菊の巻 梅の巻 各金五拾五錢 送料各金四錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて編模樣を編み或は刺繍するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなり從來此種の書籍歐米各國にて出版されしものなれども其意匠圖案の樣式風味は直ちに之を我が工藝に適應する事能はざるのみならず價格の點に於て不廉にして一般に普及すること能はず●本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を補ひしものなり●編物は貴賤都鄙の別なく本邦女子適當の手藝にして漸次發展しつゝありて將來大に海外輸出の望ありと雖も從來の意匠圖案は幼稚拙劣を免かれず

●本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字等の簡易なるものに始まり横模樣、連續模樣、角模樣、圓模樣、隅模樣、單獨模樣等の順序を經て漸次高尚優美なる繪畫的下繪に進み花卉、虫、魚、風景、人物を蒐集したり●本書は獨り斯道修學者の好敎科書なるのみならず技藝家の好參考書にして亦た麥稈細工織物等各種技藝の參考書たるの價値を有す

明治四十年四月一日發行　每月一回一日發行　第拾七年第四號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京鄉地株式會社國光社印刷